

Historical Library of Matsue City

# 松江市歴史叢書 8

2015年3月

## 松江市史研究 6号

19世紀中頃における松江・北堀町新橋の住人と空間構成

－「北堀町新橋町絵図」の分析を通して－ …………… 大矢幸雄・渡辺理絵（1）

史跡松江城の発掘調査（1）

－外曲輪（二之丸下ノ段）－ …………… 岡崎雄二郎（13）

大崎下屋敷の拡張・整備と建築に関する考察 …………… 和田嘉宥・安高尚毅（37）

松江城の屋根瓦－山陰で活躍した瓦工人と城郭整備－ …………… 乗岡 実（57）

遺跡から見た出雲府中…………… 西尾克己・廣江耕史（81）

松江平野北部の平野発達史と古環境変遷史

…………… 瀬戸浩二・渡辺正巳・山田和芳・高安克己（99）

松江の中世石塔訪問記…………… 狭川真一（117）

松江市史編纂日誌…………… 史料編纂室（123）



北堀町新橋町絵図 松江歴史館蔵

# 松江市

## はじめに

21世紀を迎え、社会の環境や文化が大きく変化しつつある今日、地域の未来を見通すことは困難な課題です。こうした中でこそ地域の歴史的考察と研究が求められているのではないのでしょうか。歴史の中に、私たちが住む松江とは何なのか、どのような特質をもっているのか、夢・未来とは何なのかを見つけていく必要があるのでしょうか。

近年、松江の歴史的考察と研究は『松江市史』の編纂などによって大きく深まっています。全国的な研究動向から刺激を受け、広い視点から松江の歴史を考えることが可能になってきています。また、松江の歴史を通して、地域の歴史や日本の歴史を捉えなおすことも出来るようになってきました。

さて、今号では中世史、近世史、歴史地理学、松江城に関する研究成果を掲載しています。

今後とも、この「歴史叢書」に対し、多くの地域史研究者のご参加をいただくことで、松江の歴史が一層明らかになるとともに、その成果が未来に向かって歩む人々の生き様に大きな示唆を与えてくれることを願ってやみません。

2015年3月

松江市長 松浦正敬

## 『松江市史』刊行計画

(平成 27 年 3 月 31 日現在)

発行年度 (平成)	巻のタイトル	本体価格 (税別)
23	史料編 5 「近世 I」	5,000 円
	史料編 2 「考古史料」	7,000 円
24	史料編 3 「古代・中世 I」	5,000 円
	史料編 6 「近世 II」	5,000 円
25	史料編 4 「中世 II」	5,000 円
	史料編 11 「絵図・地図」	7,000 円
26	通史編 1 「自然環境・原始・古代」	5,000 円
	史料編 7 「近世 III」	5,000 円
27	別編 2 「民俗」	未刊
	通史編 2 「中世」	未刊
	史料編 8 「近世 IV」	未刊
28	史料編 9 「近現代 I」	未刊
29	史料編 10 「近現代 II」	未刊
	別編 1 「松江城」	未刊
30	通史編 3 「近世 (一)」	未刊
	通史編 4 「近世 (二)」	未刊
31	通史編 5 「近現代」	未刊
	史料編 1 「地質・自然環境」	未刊

# 19世紀中頃における松江・北堀町新橋の住人と空間構成

— 「北堀町新橋町絵図」の分析を通して—

大矢幸雄・渡辺理絵

## はじめに

平成20年(2008)に松江市内の個人宅より松江郷土館に寄託された「北堀町新橋町絵図」は、これまでの松江城下の町人地研究に新たな知見をもたらす良質な資料であった。

松江城下の町人地の大部分は、宍道湖と大橋川の沿岸に集中して配置された。すなわち、宍道湖・大橋川と京橋川に挟まれた末次地区と大橋川以南の白潟地区である。両地区については、質・量の違いはあれ、近世の絵図資料が残されており、それらをもとに、これまで建築学・地理学などの視点からの研究がなされてきた(和田1991・1992・1993a・1993b、三木・安高2013a・2013b、大矢・渡辺2014)。

一方、これら両町とは面的な連続性を有さず、武家地の中に埋もれるように置かれたのが、松江城の北堀以北に位置する北堀町や石橋町である(図1参照)。両町は、末次・白潟両地区よりも後発的に成立し<sup>(1)</sup>、くわえて商業活動の中心が末次・白潟地区にあったことや資料的な制約などから、これらの町はいわば町人地の周縁として、分析の対象とされることは少なかった<sup>(2)</sup>。屋敷地の数や敷地内の土地利用は言うまでもなく、そこにどのような人々が居住していたのかといった基本的な情報でさえも知ることは難しい現況にある。

こうした中、2011年に「北堀町新橋町絵図」の発見が関係者に伝えられ、その概要が新庄(2011)によって報告された<sup>(3)</sup>。本図が描く範囲は、北堀町の飛び地のように位置する新橋である。保存状態も良好で、記載内容も豊富である。さらに白潟町人地を描いた「松江白潟町絵図」との類似点も多い。

以上のような背景にもとづき、本稿では「北堀町新橋町絵図」の資料的特徴について精緻に検討し、その上で新橋の屋敷地の空間構成や住人の特徴などについて言及することを目的とする。なお、「北堀町新橋町絵図」は、現時点では同町に関する唯一の詳細な絵図資料である。そこで、本稿では絵図全体のトレース図を作製し文末に提示した。本稿は、松江町人地研究の空白を埋め、総体的に町人地全域を捉えるための基礎的研究と位置づけられる。

## 1. 「北堀町新橋町絵図」の特徴と内容年代

### (1) 「北堀町新橋町絵図」の特徴

「北堀町新橋町絵図」(図2)は、先述のとおり、かつて北堀町で石屋を営んでいた個人より平成20

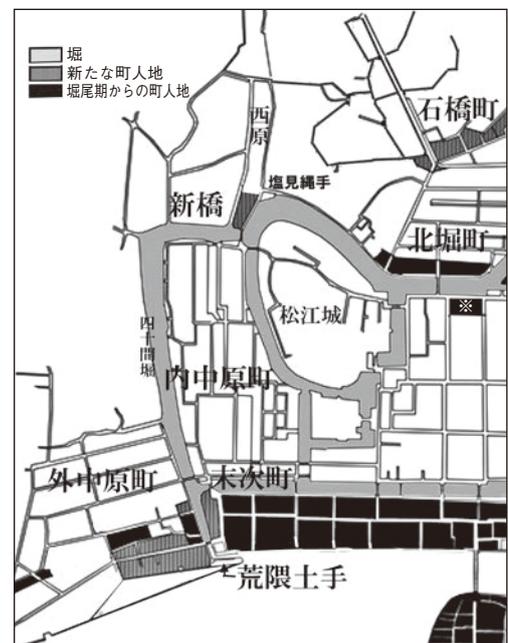


図1 北堀町新橋の町人地

下記の松江城下絵図より作製、※は②のみに描写あり

- ①「堀尾期松江城下町絵図」(1617~1633)頃  
(島根大学附属図書館所蔵)
- ②「寛永年間松江城家敷町之図」(1634~1639)頃  
(丸亀市立資料館所蔵)
- ③「松江城下絵図」天保年間(1830~1844)頃  
(松江歴史館所蔵)

年（2008）に松江郷土館に寄贈された絵図である。その際の経緯や本図の簡単な概要については、新庄（2011）にみるとおりである。

絵図のサイズは、横 169.0×縦 71.0 cmの横長で、そこに描かれている新橋の町屋は南北方向約 65 間（間口等を合計）、北側（西原側）の奥行 23 間 9 寸、南側（中原側）の奥行 14 間 1 尺で、面積はおおよそ 1000 坪である。

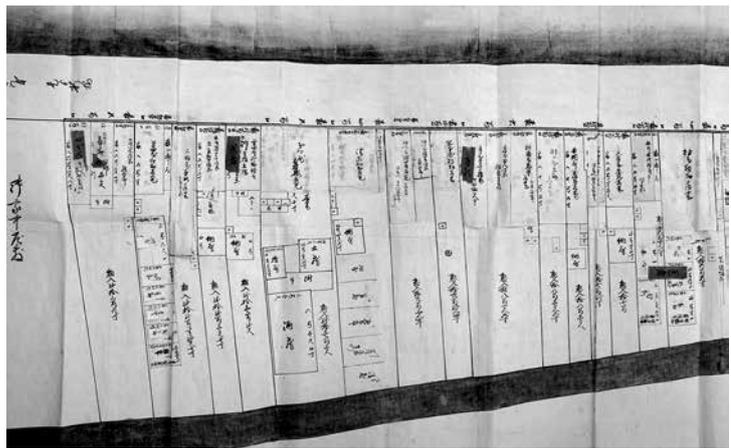


図2 北堀町新橋町絵図（松江歴史館所蔵）169.0×71.0cm

絵図裏には「北堀中島氏」と記された貼紙が付されている。新庄（2011:109）の指摘にあるように、「中島氏」が寄贈者のさらに前の絵図所蔵者であった可能性がある。この「中島」については、北堀町本町（北堀橋北側の角地）で呉服商を営んでいた中嶋屋と推測され、明治初期の当主は中嶋徳四郎であり、安政 4 年（1857）には北堀町の町年寄を勤めていた（「瀧川家公用控」）。

絵図には新橋の屋敷地 18 筆が見え、敷地内には居宅や借家が記載されている。居宅の場合は「～宅」あるいは「～居宅」と明記され、借家の場合はその借家の所有者と借主が「林家善次借家 借主勝五郎」のように記された。水帳に代表されるような町人地の絵図は、課税対象としての所有者名を書くことが多い。それゆえ、本図のように借家人の名前まで明記された絵図は貴重である。

また、本図は和紙に描かれた下図（原図）に、のちに増改築したと思われる建物や新所有者名などを記した紙片（貼図）が貼付されている。すなわち本図には一定の現用期間があったわけである。

屋敷については、間口・奥行が、屋敷内には竈、湯殿、付卸し<sup>(4)</sup>、井戸などが記されている。

このほか、絵図には内中原に続く橋（新橋）と屋敷裏の水路が描かれる。また屋敷前の通りには「是方新橋」（南方向）と「是方塩見縄手道」（北方向）と記される。新橋と接する武家地については「御家中屋敷」とのみ記されており、本図の主眼が新橋を対象としていることが明白である。

このような特徴から、本図は町役人が土地所有の町人に対して敷地に依拠して小間割（地子・役負担）を課する資料として、さらには新橋の住人を把握するものとして作製されたと考えられ、公図に近い性格を帯びている。本図以外にも同様の絵図は白濁においても作製されており（大矢・渡辺 2014:18）、本図の発見で、松江の町人地全域で町行政に関わる絵図が作製されていた可能性が高まった。

各屋敷地内は黄土色、堀は濃紺色、土地区画は黒線、屋敷内の区画は赤線で描かれ、顔料の著しい退色はなく、保存状態は良好である。

## (2) 「北堀町新橋町絵図」の内容年代

地図・絵図の「年代」は、図に描かれた「年代」と図が作製された「年代」とが異なる場合があり、一般的に前者を「内容年代」、後者を「作製年代」と称して、厳密には両者を区別する（杉本他 2011:16）。本図には「年代」に関する端書がないため、図中の人名から「内容年代」を推定したい。なお、本図は作製時の段階（原図とする）とその後、内容更新を記した貼紙（貼図とする）の段階がある。したがって、ここでは原図と貼図に分けて考察する。

原図において、年代推定の根拠となる人物は「伊藤（東）杏意老」と「田代元鑑老」の 2 名である。伊藤（東）は、7 代藩主松平治郷（1767～）、8 代同齋恒（1806～）、9 代同齋貴（1824～）、10 代

同定安（1853～）の「松平家々譜並御給帳写」（島根県立図書館所蔵）に記載があるため、在任期間は明和4年（1767）～明治元年（1868）である<sup>5)</sup>。一方、田代は、扶持醫坂本道益の二男で田代家の養子となり、文政10年（1827）、新番組十人扶持の給禄を授かった（『松江藩列士録 第3巻』:410）。安政2年（1855）の御給帳（『雲藩職制』:111）には「新番士醫師」10人の一人（一代士）として名を連ねる。安政5年（1858）には江戸へ移る政姫様に御供し、その翌年には「御醫師」を仰付られ、文久2年（1862）3月武蔵で死亡している（『松江藩列士録 第3巻』:410）。したがって、田代の在任期間は文政10年（1827）～文久2年（1862）となる。

以上、2名の在任期間の重複関係から、原図の内容年代は文政10年（1827）～文久2年（1862）と推定される<sup>6)</sup>。

つぎに貼図については、年代が確認できる人物に安達玄察がいる。安達玄察は鍼医として天保9年（1838）年「御目見被仰付」、天保13年（1842）「御家中病用就令出精三人扶持被下」をへて、元治元年（1864）には「御側醫格」に就任している（『松江藩列士録 第5巻』:367）。慶應3年（1867）3月8日に「玄察」から「瑞察」に改名した（『松江藩列士録 第5巻』:367）。貼図には「扶持醫 安達玄察」とあることから、貼図は元治元年（1864）～慶應3年（1867）頃の作製と考えられる。

## 2. 「北堀町新橋」町人地の成立

新橋は、松江城城郭の北西に位置し、北側は武家地、東・南側は堀川、西側は水路を挟んで低湿地に接している。

北堀町新橋の成立時期について、出雲の地誌資料「出雲歟 島根郡」（松江市史編集委員会編 2013：281所収）には次のように書かれている。

「古老伝ニ曰、元禄二己巳年冬、先君綱近公治世、是処切抜湖水ヲ内堀へ落シ、舟入津自由ニナシトイウ、此地民家軒ヲ並テ中原土手町ニ続在之故、代地今ノ新橋是也」

さらに、「松江城下武家屋敷明細帳」（広島大学附属図書館所蔵）によると

「新橋 懸ル比節新橋ノ町縄手也、元禄元戊辰十二月十一日荒隈釘貫外ニテ有之ヲ土橋、被仰付右ノ町比所へ引口屋口奉行田中儀口衛門、木崎五郎太夫打渡、大年寄平野屋九兵衛、大目代飯嶋屋介九郎、町手代次郎左衛門同安兵衛、土橋ヨリ余慶ノ地有之

一坪ニ付札銀三匁二分ニ厘五毛払銀、一貫三百二十二匁一分八厘也五ヶ年府ニ差上」

とある。

この2つの史料から、元禄元年（1688）12月11日舟の往来を可能にするために、荒隈土手（宍道湖岸の東西に伸びる土手。図1参照）を開削し、そこに居住していた町人を新橋へ移したことが読み取れる。その時の町役人は大年寄平野屋九兵衛、大目代飯嶋屋介九郎などである。荒隈土手の開削は、「度重なる洪水に手を焼いて、松江城下（末次地区）の水難を防止」するためであった（荒木英信 2012:455）。

図3は「出雲国松江城絵図」正保年間（1644～1647）（国立公文書館所蔵）と「松江城及城下古図」（1683～1692）（三谷健司氏所蔵）にみる荒隈土手の表現の違いを表している。正保期には、四十間

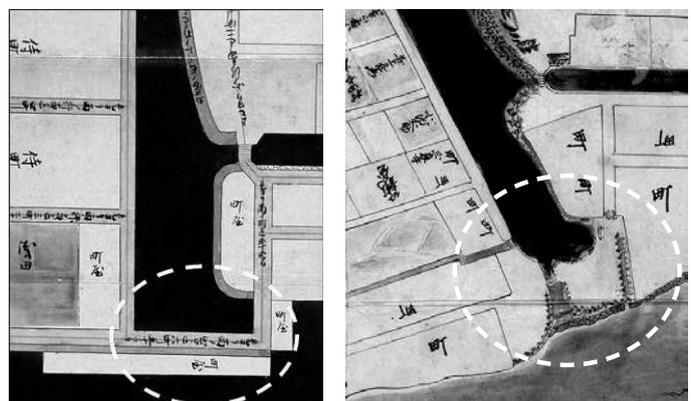


図3 絵図にみる荒隈土手の変化

左図：「出雲国松江城絵図」正保年間（1644～1647）（国立公文書館所蔵）  
右図：「松江城及城下古図」（1683～1692）（三谷健司氏所蔵）

堀に接する荒隈土手に東西方向から北に向かう町人地（L字型）が描かれている。一方、17世紀後期になると、町人地はなくなり、土手が開削されている様子うかがえる。

さらに図4は両図における新橋付近の表現の違いを表している。正保期には新橋付近は草地と「侍屋敷」が描かれるが、17世紀後半には町人地が描かれ、内中原に通じる橋が架けられている。新橋の成立は、内中原や奥谷の武家にとって生活上の利便性を高めたことが想像される。

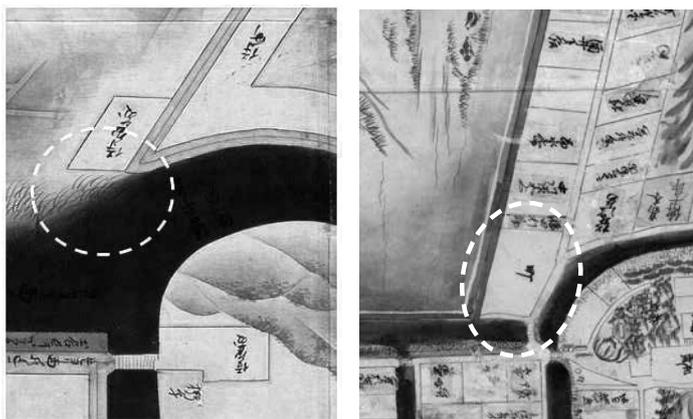


図4 絵図にみる北堀町新橋付近の変化

左図：「出雲国松江城絵図」正保年間(1644～1647)(国立公文書館所蔵)  
右図：「松江城及城下古図」(1683～1692)(三谷健司氏所蔵)

このように時代の異なる絵図の比較から見えてくる知見は、上記の2史料の記述内容と整合する。

表1は、町人地新橋と隣接する武家地奥谷町西原の武家屋敷数を絵図から経年的に比較したものである。新橋の町人地の成立時期と同じ頃に西原の武家地（道路西側）も拡大していることがわかる。西原の武家地は「(前略) 明暦の頃までハ西原家中割も正しからず、新に土地を得て屋作りの侍多し (後略)」(「雲陽大数録」(1655～1657)(松江市史編集委員会編 2013: 648)とあり、新橋の町割と平行して整備されていった様子うかがえる。

表1 絵図にみる新橋の表現の有無と西原の武家屋敷数

絵 図 名	所 蔵 館	年 代	新橋町人地	屋敷数 (西側)	屋敷数 (東側)
堀尾期松江城下町絵図	島根大学附属図書館	1620～1633	なし	1	10
寛永年間松江城家敷町之図	丸亀市立資料館	1634～1637	なし	1	10 (空地1)
出雲国松江城絵図(正保年間)	国立公文書館	1644～1647	なし	—	—
松江城及城下古図	三谷健司氏	1683～1692	あり	10(空地・的場4)	10 (空地3)
松江城下絵図	鳥取県立図書館	1705～1713	あり	9(堀・的場2)	10
松江城下絵図	島根県立図書館	1736～1748	あり	11(空地・的場3)	10
松江城下図	絲原家記念館	1854～1864	あり	12(的場1)	10

### 3. 「北堀町新橋町絵図」にみる新橋の屋敷地

新橋は、堀に面した18筆の屋敷地（土地割）からなり、各屋敷地の間口は1.5～6間までの差があり、平均は2.7間である。各屋敷地には、間口を分割するかたちで複数の居宅や借家が建てられている。原図では町全域で居宅が10軒、表借家が16軒、裏借家が12軒の合計38軒であり、貼図では居宅は15軒、表借家は10軒、裏借家19軒の合計44軒である。

居宅数や各借家数は、原図と貼図で増減がみられるが、表通りに面した居宅と表借家の合計は25～26で推移しており、合分筆などの大きな変化は見られない。居宅と表借家の間口は原図・貼図ともに表2に示したように2間がもっとも多い。

表借家・裏借家について詳細にみていくと、新橋の借屋率（全戸数に占める借家数）は、表3に示したとおり73.6%（原図）であり、天保12年（1841）頃の白潟町人地の平均借家率92%よりは低いことがわかる（大矢・渡辺 2014）。また貼図のほうでは借家率は

表2 居宅・表借屋及び屋敷地の間口

間口(間)	屋敷地(軒)	居宅・表借屋(軒)	
		原図	貼図
6.0	1		
5.5			
5.0	2		1
4.5	1		
4.0	2	1	1
3.5	1	1	1
3.0	2	2	1
2.5	1	2	2
2.0	7	13	12
1.5	1	7	7
1.0			
合計	18	26	25

65.9%とより一層低い値を示す。その背景には居宅の増加と表借家の減少が影響している。

例えば、原図の大畑平助の借家地は、貼図では秋鹿屋、太田屋、春日屋に3分割されて居宅や表借家となった。以前に表借屋を所有していた曾田屋卯助、神門屋勝四郎、林屋猪助の3名は、各自が所有する借屋を居宅としている。こうした例は新橋における借家の需要が漸減したことを示唆しており、事実、原図の頃には借家人がいた表借屋・裏借屋の5軒が貼図では「明家」となっている。このように、原図と貼図の間にもみる19世紀中ごろの新橋では表通りに面した屋敷については、供給過多の状態にあり、そのため、屋敷の利用を固定化するまでに至っておらず、流動的であった特徴を見出せる。

つぎに、屋敷地内の土地利用に注目したい。図2をみると、屋敷地内部の建物裏には、十分な空間が残されていることに気づく。18筆の屋敷地の中で、表通りに面する家屋の後方に複数の裏借家あるいは酒蔵や室(むろ)を有している屋敷地は合わせて6例である。それ以外の屋敷地の家屋裏については絵図上になにも描かれていない。自宅庭や遊休地とされたのか、あるいは耕作地として利用されていたのか定かではないが、少なくとも建築物の類はなかったと推測される。試みに新橋の各屋敷地の建蔽率と白潟町人地の本町、魚町、天神町のそれを比較してみたい。その算出方法については次の通りである。

新橋については原図において18筆すべてについて算出した。本町、魚町、天神町については、「松江白潟町絵図」(松江歴史館所蔵)の各町図における貼図(天保12年(1841))(大矢・渡辺2014)を資料とし、おおむね町の中心部で、表通りの両側より任意の20軒を抽出した。屋敷地内の建物が複数ある場合は合計値を建物の面積とした。建物面積が不明な場合は、近隣の建物を参考に面積を推定した。

図3は上述の方法で算出した各町の建蔽率である。白潟町人地の3町については全屋敷地ではなく、任意の代表値を対象としているため、新橋と比較することは厳密には難しいが、ここでは参考値として見ていきたい。

白潟本町・天神町では平均建蔽率が約65%であり、魚町はそれを超える73.2%である。

一方、新橋では、平均が38.2%と白潟3町と比較すると極端に低い。白潟3町の建蔽率の最低値が、本町48.9%、魚町54.9%、天神町39.7%であるが、新橋の平均は、それをも下回る。新橋では最高値でも66.4%であり、裏借家や室(むろ)などを持たない屋敷地では40%に満たない。

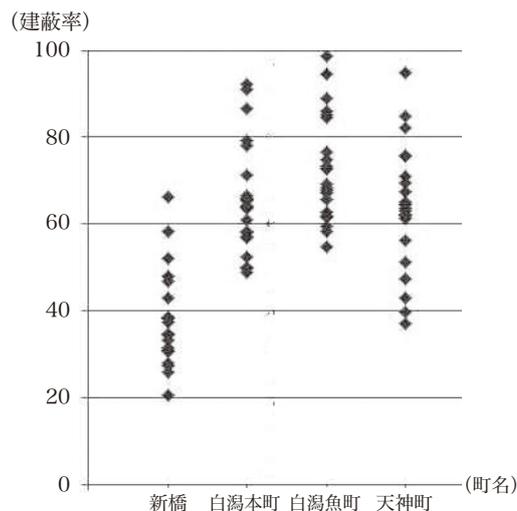
19世紀中ごろの白潟地区は末次地区と並んで商業機能の中核を担い、周辺地域からの人口流入や屋敷需要の高まりを伴った求心性の高い地域であった(大矢・渡辺2014)。

一方、新橋は原図および貼図、建蔽率の値を見る限り、屋敷需要の高まりを示す傾向は見られない。新橋は、近隣を武家地や堀に囲まれ、空間的拡大さえも難しく、また既存の商業地からも離れ、連担する可能性も低い。こうした背景が、低密度の屋敷利用という特徴をつくりだしたと考えられる。次章では、こうした屋敷地に居住していた住人に焦点をあて検討したい。

表3 居宅・借屋の屋敷数の変化

	原図	貼図
居宅	10	15
表借屋	16	10
裏借屋	12	19
新築	—	5
合計	38	44(49)
借家率	73.6%	65.9%

\*借家率は(表借家+裏借家)数÷全戸数  
但し、貼図の合計に新築数は含まない



	新橋	白潟本町	白潟魚町	天神町
平均(%)	38.2	65.9	73.2	63.7
標準偏差	12.0	13.4	12.7	15.1

図3 新橋・白潟3町の各屋敷地の建蔽率  
「北堀町新橋町絵図」(松江歴史館所蔵)および「松江白潟町絵図」(同)より算出。算出方法は本文参照。

#### 4. 「北堀町新橋町絵図」にみる新橋の住人構成

前章では、新橋の屋敷地について、その規模や土地利用、借家率や建蔽率に焦点をあて検討した。その結果、新橋は白潟地区ほど商業機能の集積をせず、屋敷需要の高まりをみることもなかったと考えられた。では、新橋は松江城下の中でどのような都市的機能を有していたのだろうか、本章では新橋に生きた住人に焦点をあて、この点にアプローチしたい。

「北堀町新橋町絵図」には各屋敷に所有者や借家人の氏名が「後家」や「同居人」などの文言を伴って記述されている。それらから、新橋の住人構成を見ていきたい。

表通りには、商家の居宅や借家が連なっている。その中には、近隣村落を出自とする商家が含まれている。たとえば、酒を扱う本郷屋は佐陀本郷村（現松江市）の出身であり、講武屋は城下より北北西に5～6km離れた講武村（現松江市）との関係が示唆される。また、吉岡屋は絵図自体に嶋根郡法吉村と記載され、新橋の西側水路で接する法吉村（現松江市）に出自をもつのであろう。こうした商家が新橋に立地する背景には、新橋が島根半島方面から城下へ入った際の最初の町人地であることも大きいと考えられる。

つぎに気づくのは借家の借主の性比である。（表4）原図では表通りには16軒の表借家があり、うち7軒は女性の氏名あるいは「女房」「母」と記されている。11軒ある裏借家については5軒が同様である。すなわち、借家28軒のうち女性の借主が12軒と、全体の42.8%を占める。これを天保年間の白潟町人地と比べると白潟本町9.2%、和多見町10.5%、横浜町11.5%となり<sup>(7)</sup>、新橋は突出して高いことがうかがえる。それには次のような一因がある。

表借家および裏借家の女性の借主うち、3軒については氏名の前に「○○奉公跡」という付言がある。たとえば「借主 甚十奉公跡 女房」や「借主 伊三郎奉公跡 姉 古と」といった例である。磯田道史（2002）が津山藩を事例にした中間・足軽奉公に関する論文によれば、中間・足軽といった下層家臣は、武家奉公として領内の町人百姓から供給されており、もし戸主が武家奉公に出る際には妻子を跡名請人（新戸主）にたてる制度があったという。この知見を本論にも当てはまれば、絵図に記されている「奉公跡」は、すなわち、戸主が奉公中で不在であり、その留守を女房や姉などの女性が預かっている状態を示すものと解釈される。

戸主たちの奉公先は不明であるが、貼図には「御小人 久助 奉公跡」や「権蔵跡 御小人是之事」のように、武家奉公先が御小人方であることを示唆する記述が目立つ。御小人<sup>(8)</sup>は、身分的には足軽の下に位置し、仲間（中間）とともに軽卒である。城内外御花畑、堀などの清掃とともに災害時には土木作業などにも従事し、時には江戸屋敷勤めなど多様な仕事を担った。松江藩では「十郡町村に何人と割り当てて召集し、年期を定めて勤めさせた。北堀町御小人方の構内に御小人部屋があつて」（中略）「年期がくると独立して、松江に家を持ち小人役を務める者もおり定員があつた」という（雑賀郷土史編纂実行委員会編1991：110-111）。北堀町には御小人方が位置しており、新橋はもっとも近い奉公人供給先だったのかもしれない。

一方、新橋の住人には、前章で登場した田代元鑑のように武士も含まれている。田代は列士録に記載されている「御醫師」であり、ほかに「町医」<sup>(9)</sup>を務めた伊藤（東）杏意<sup>(10)</sup>の記載もある。両者の氏名末尾には「老」の字が付されている。年配者に対する敬意が込められているのか、あるいは隠居中の

表4 居住者の特色

	原図(軒)	貼図(軒)	
商家	8	14	
医師(武士)	1	2	
御小人	1	3	
医者・灸・あんま	2	2	
借主の女性	氏名のみ	5	3
	後家	3	3
	奉公跡	3	0
	母親	1	0
居宅の女性	1	2	
女性の合計	13	8	

身であることを指すのか、絵図のみでは判断できないが、仮に後者であるならば「隠居慣行が成立していた地域で、家産に余裕のある上層の家では隠居夫婦が家産のなかから隠居料、隠居免、隠居分などといわれる固有の財産を確保し、家督夫婦の家から独立した隠居屋で暮らす」（柳谷 2013：049）事例が他地域で報告されており、退任した医師の住まいであった可能性も否定できない。

以上が絵図から読み取れる住人の特徴であるが、近世の日記史料にも新橋の住人に関連する記述がある。白潟和多見町の商家である新屋（あたらしや）手代太助が残した「日記大宝得」（信楽寺所蔵）には、太助と新橋住人との関わりが読み取れて興味深い。

例えば原図の頃では、嘉永2年（1849）6月15日の条には「新橋是忠ト申ス者ヲ古津へ飛脚ニ遣ス」とあり、新橋の是忠を飛脚に雇っている。また、同年11月15日付には、日頃から付き合いのある100石取の堀市郎右衛門の屋敷替に、新橋の慶蔵とともに引っ越しの手伝いに出かける。さらに武士や町人が相互に金を融通し合う「志儀」（頼母子講に近い）の場には、末次・白潟両町の町人とともに新橋の町人も参加しているという。また、嘉永4年（1851）10月11日付には太助は夜食用としてシイラ焼と砂糖を新橋の店で購入した。

このように、新橋は 近隣村落に出自をもつ商家や砂糖や酒を扱う商家、日雇層、御醫者、御小人奉公人、後家といった多様な住人によって構成されていたことがうかがえる。その背景には新橋が南北を武家地に挟まれ、御小人長屋や松江城郭に近いこと、また法吉村の玄関口にあたることなどが、こうした新橋の町の特性を生み出したと推測される。

## まとめ

本稿は、これまで研究対象にされてこなかった北堀町新橋をとりあげ、その土地利用と住人の特徴にアプローチした。その中心資料が「北堀町新橋町絵図」であり、本稿の分析で、原図の内容年代は1827～1862と推定され、貼図は1860年頃と推定された。本図には借家の所有者名と借家人の両者が記述されていた。公図に近い性格を帯びており、地子や役負担の関係資料として、さらに町内の居住者を把握する資料として作製された絵図と思われる。

こうした絵図の分析をふまえて、本稿では北堀町新橋の成立を概観し、その上で町の土地利用と住人構成に着目した。

まず、新橋の成立は複数の史料が示すように、元禄元年（1688）の宍道湖岸荒隈土手の開削を契機にしていた。さらに時代の異なる絵図の比較から、新橋の成立はその北側に位置する西原の武家地の整備をも誘発していたことが明らかになった。

19世紀中頃にみる新橋は屋敷地が18筆存在し、各敷地は居宅や借家が複数置かれている様相であった。敷地内の土地利用は、表通りに居宅や借家が置かれ、その裏に裏借家が置かれる場合もあったが、それは少数であった。すなわち、新橋の屋敷地の大半は、表通りに面した建築物の後背部に一定の余剰空間があり、このため、各敷地の建蔽率の平均は38.2%と低い値をみせた。これは、白潟本町・天神町の約65%、魚町の73.2%と比較すると大きく異なる。19世紀の白潟町人地は、近隣農村からの流入人口などによって屋敷需要の高まりをみせていたが、新橋ではそのような傾向はみられず、借家が空き家になっていることなどから、逆に屋敷は供給過多に近い状況であったと推測される。

こうした新橋には、多様な住人が生きていた。近隣の村に関係した商家や日雇層、藩医、下層家臣の御小人などである。さらに住人について特筆すべきは、女性の戸主が白潟町人地よりも多いことである。その背景には、戸主の武家奉公が関係していた。戸主不在になった家は、その妻や姉などが跡名請（新戸主）として戸主の留守を預かっていた。新橋は、北堀町にある御小人方に近く、新橋の町人と御小人

奉公との関わりの強さが示唆される。

新橋は、松江の町人地の中では、ほんの一角にすぎないが、以上のように他の町とは異なる特性が見出され、松江町人地の地域差が指摘できる。

最後に、松江城下という都市の中で新橋はどのような都市的性格を帯びていたのかについて言及したい。

武家地に囲まれた新橋は、近世末期にもかかわらず、武士と町人の混在化現象は顕著には確認できない。また、周辺地域からの流入人口の受け皿として無秩序に拡大する町場のような特徴もみられない。むしろ、新橋は一定の商業機能を維持した町人地であったと理解される。無論、その中心性は末次や白瀉よりは格段に低い。しかし、松江城以北の武家地の中には、もっとも低次の町場として都市機能を担い、存在感を持ち続けたのではないだろうか。この特性は、石橋町や北堀町も同様に有すると推測されるが、新たな資料の発見を期待しながら、今後の課題としたい。

〔付記〕 本研究に際して、松江市史料編纂室の北村久美子氏には絵図の翻刻作製にご指導をいただくとともに、中村徹夫氏には私的な史料の閲覧を許可していただき厚く感謝する次第である。

表5 「北堀町新橋町絵図」の基礎データ

原図					貼図				
間口数	所有者	屋敷種類	住人/利用状況	備考	間口数	所有者	屋敷種類	住人/利用状況	備考
1.50	中嶋屋助九郎	表借家	志げ		1.50	来濟や万兵衛	不明		
1.50	中嶋屋助九郎	表借家	喜三太	赤色貼紙喚諸口杯・諸役同口	2.50	勘兵衛	不明		嶋根郡法吉村
2.00	中嶋屋助九郎	表借家	甚十奉公跡女房	赤色貼紙御小人	2.00	神門屋龜助	不明		
2.00	吉岡屋和藏	裏借屋	六太郎		3.00	林屋猪助	不明		
2.50	吉岡屋和藏	表借家	為藏	嶋根郡法吉村吉岡屋	3.00	大工平助	不明		
	吉岡屋和藏	表借家	卯助	通路	1.50	中嶋屋満四郎	表借屋	熊太郎	
	吉岡屋和藏	裏借屋	きん		1.50	中嶋屋満四郎	表借屋	平助事長之助	
	吉岡屋和藏	裏借屋	わき		2.00	中嶋屋満四郎	表借屋	久助	貼紙御小人奉公跡
	吉岡屋和藏	裏借屋	林太郎		2.50	曾田屋卯助	居宅		納屋1、通路
	吉岡屋和藏	裏借屋	勘次郎後家			吉岡屋和藏	裏借屋	明家	
	吉岡屋和藏	裏借屋	菊松奉公跡女房			吉岡屋和藏	裏借屋	豊助	
	吉岡屋和藏	裏借屋	伊三郎	奉公跡姉古と		吉岡屋和藏	裏借屋	そで	
2.00	神門屋正助	居宅		納屋1		吉岡屋和藏	裏借屋	庄之助	
2.50	曾田屋卯助	表借屋	田代元鑑老	納屋1、ユトノ1		吉岡屋和藏	裏借屋	松太郎	
3.00	本郷屋吉助	居宅		土蔵1、搦屋1、酒蔵1	2.00	三好屋兼松	居宅	とめ	
2.00	本郷屋吉助	表借家	明家		2.00	東津田村すて	表借家	貼紙原良哲後家 同居人あんま益徳	納屋1
2.00	林屋磯之助	居宅		納屋1、ロウカ	2.50	曾田屋卯助	表借家	高橋玄瑞	同居人扶持醫安達玄察、ユトノ1、 納屋1、貼紙土列医者・医者
2.00	林屋磯之助	表借屋	良恭	鍼醫	5.00	本郷屋太右衛門	居宅		土蔵1、搦屋1、酒蔵1
3.50	神門屋勝四郎	表借屋	いわ		4.00	清原和助	居宅		納屋1、通路
2.00	常松屋安助	居宅		通路		清原和助	裏借屋	納屋	
2.00	大畑屋平助	表借屋	利助後家	納屋1		清原和助	裏借屋	富蔵	
2.00	大畑屋平助	表借屋	忠助			清原和助	裏借屋	惣太郎	
2.00	大畑屋平助	表借屋	登よ			清原和助	裏借屋	岩次郎後家さの	
2.00	荒布屋庄藏	表借屋	新助後家			清原和助	裏借屋	浅蔵	
1.50	吉岡屋和太郎	居宅		納屋1	1.50	神門屋勝四郎	表借家	兼五郎	
2.00	北垣屋源三郎	表借屋	為三郎母	通路	2.00	神門屋勝四郎	居宅	本人慶次郎	同居人・御小人忠太郎・家内3人
2.00	北垣屋源三郎	裏借屋	為三郎	内仕切奥住居為三郎	2.00	岡本屋樽松	居宅		貼紙座頭和田城久方也
2.00	講武屋以登	居宅		納屋1	2.00	春日屋ます	居宅		
2.00	林屋善次	表借屋	勝五郎	座敷1、通路	2.00	太田屋平八	表借家	脇藏奉公跡	
	林屋善次	裏借屋	忠左衛門		2.00	秋鹿屋藏市	居宅	本名亀太郎	
4.00	林屋喜助	居宅		貼紙林屋伝助・借屋茂助・通路	2.00	勝部屋久助	居宅	本人つま也	
	林屋猪助	裏借屋	武一郎		1.50	吉岡屋萬次郎	居宅		納屋1
	林屋猪助	裏借屋	納屋		2.00	北垣屋榮三郎	居宅		貼紙同居人牧原兼太郎
	林屋猪助	裏借屋	茂平		2.00	大谷屋巴藏	居宅		納屋1
1.50	安立屋兼太郎	表借屋	惣七		2.00	林屋善次	表借家	明家	通路
1.50	安立屋兼太郎	居宅		納屋1	2.00	林屋善次	裏借屋	明家	
3.00	伊藤杏意老	居宅		ユトノ1	2.00	林屋善次	裏借屋	むろ	
2.00	林屋善次	居宅		土蔵1	4.00	林屋猪助	居宅		通路
						林屋猪助	裏借屋	明家	
						林屋猪助	裏借屋	杉山栄之進	貼紙医者
						林屋猪助	裏借屋	寿助	
					3.00	安立屋兼次郎	居宅		
						安立屋兼次郎	裏借屋	明家	
						安立屋兼次郎	裏借屋	栄太後家	
						安立屋兼次郎	裏借屋	庄市	
					1.50	伊勢屋宗太郎	表借家	津田太助	
					1.50	伊勢屋宗太郎	表借家	津田屋佐蔵	
						伊勢屋宗太郎	裏借屋	権蔵跡	御小人是之事
					2.00	林屋善次	居宅		土蔵1

## 注

- (1) 松江城下絵図でもっとも古く、堀尾吉晴の統治期に作製されたと言われる「堀尾期松江城下町絵図」（島根大学附属図書館所蔵）や京極期の「寛永年間松江城家敷町之図」（丸亀市立博物館所蔵）には、これらの町についての描写はなく、開府後に新たに設けられた可能性が示唆される。
- (2) 管見では現在の石橋町は、末次・白潟よりも後発的な成立であったことを分析した三木・安高（2012）が数少ない例である。
- (3) 本図には絵図の表題が記されていない。新庄（2011）は本図を「松江新橋町絵図」と命名したが、新橋町は北堀町の一部であることや松江歴史館所蔵の「松江白潟町絵図」を構成する8葉との対応関係から、本稿では「北堀町新橋町絵図」とする。なお、この点は現在の所蔵機関である松江歴史館の了解を得ている。
- (4) 「付卸し」とは、建築用語の下屋（げや）と同意であり、本屋の外壁に接して設けられた片流れの屋根またはその下にある空間を意味する。単なる庇で吹放ちになっている場合と壁で囲われて本屋に囲われている場合とがある（彰国社編 1993：479）。
- (5) 在任期間の長さから、後継者への氏名の踏襲を經ていると考えられる。
- (6) 原図の内容年代は本文のとおり、文政10年（1827）～文久2年（1862）と、35年の幅が生じる。ただし、根拠とした2名の家臣の氏名にはいずれも「老」が付与されている。これは松江藩固有の表記であり、どのような場合に「老」が付くのかについては史料では確認できない。ただし、仙台藩では宗門人別改において65歳以上の男子を「老男」、60歳以上の女子を「老女」としている（高木 2013:85）。上記2名についても年齢に考慮され「老」が付与されたとすれば、原図の内容年代は田代の在任期間の後半にあたるとも考えられる。
- (7) 「松江白潟町絵図」により独自に算出。
- (8) 「土工記」（松江市史編集委員会編 2012:698-699）の小人定には「大役小人往来古九百人有、中古六百人有、貞享三寅三百人有（中略）大役小人壹年切ニテ新抱之法ナリ、十一月入代有、奉行見分之事」とあり、御小人の人数は年代によって大きな違いがあり、さらに、基本的には一年間の勤務であった。
- (9) 給帳によれば「御側医」、「御側医格」、「御医師」、「町医」の格がある。
- (10) 7代治郷（1767～）、8代斎恒（1806～）、9代斎貴（1824～）、10代定安（1853～）の給帳にその名を確認できる（年代は家督を相続した年）。これらの給帳に出てくる伊藤（東）は藩医として名は世代をまたいでいると思われる。

## 参考文献

- 荒木英信編 2012.『新編 松江八百八町町内物語』ハーベスト出版.
- 磯田道史 2002.「津山藩領山北村の足軽・中間奉公」『日本研究 24』87-109.
- 大矢幸雄・渡辺理絵 2014.「白潟町屋の商人と町人地の変容－「松江白潟町絵図」の分析を中心に－ 松江市史研究 5号『松江市歴史叢書 7』17-32.
- 雑賀郷土史編纂実行委員会編 1991.『雑賀の今昔』、雑賀郷土史編纂実行委員会.
- 島根県立図書館郷土資料編 2005.『松江藩列士録 第3巻』島根県立図書館.
- 島根県立図書館郷土資料編 2006.『松江藩列士録 第5巻』島根県立図書館.
- 彰国社編 1993.『建築大辞典』第2版 彰国社.
- 新庄正典 2011.「松江新橋町絵図」について『松江歴史館研究紀要』第1号 109-110.
- 杉本史子他 2011.『絵図学入門』東京大学出版会.

- 高木正朗 2013. 「江戸時代の超高齢者—仙台藩 1737 - 1866 年史料に見る (上) —」立命館産業社会論集 49 巻第 2 号, 81-104.
- 「瀧川家公用控 (総称)」瀧川家蔵.
- 「土工記」松江市史編集委員会編 2012 : 698-699.
- 「日記大宝得」信楽寺所蔵.
- 正井儀之丞・早川仲編 1979. 『雲藩職制』歴史図書社.
- 松江市史編集委員会編 2012. 『松江市史』史料編 5 「近世 I」松江市.
- 松江市史編集委員会編 2013. 『松江市史』史料編 6 「近世 II」松江市.
- 「松江城下武家屋敷明細帳」奥谷 3 「西原ヨリ赤山ノ下北堀町エ南頼」広島大学附属図書館所蔵 : 7-32.
- 「松平家々譜並御給帳写」島根県立図書館蔵 : 092.8B.
- 三木旬平・安高尚毅 2012. 松江・石橋町の伝統的景観要素と町家について : 松江城下町における町人地の基礎的研究 その 1. 『学術講演梗概集 2012 (建築歴史・意匠)』779-780.
- 三木旬平・安高尚毅 2013a. 松江城下町人地の空間構造と設計手法—松江城下町における町人地の基礎的研究 その 3. 『日本建築学会・中国支部研究報告』843-846.
- 三木旬平・安高尚毅 2013b. 天保期の橋南地区の町人地における空間構造—松江城下町における町人地の基礎的研究 その 4. 『日本建築学会・中国支部研究報告』847-850.
- 柳谷慶子 2013. 『江戸時代の老いと看取り』山川出版社.
- 和田嘉宥 1991. 町人町末次の構造的特性 城下町松江の研究 4. 『日本建築学会大会学術講演梗概集 (東北)』1027-1028.
- 和田嘉宥 1992. 町人町白潟の構造的特性 城下町松江の研究 6. 『日本建築学会大会学術講演梗概集 (中国)』1023-1024.
- 和田嘉宥 1993a. 町人地の表通りと裏通り—城下町松江の研究 7. 『日本建築学会中国・九州支部研究報告』421-424.
- 和田嘉宥 1993b. 町人地に見られる居宅と借家 天神町の場合—城下町松江の研究 8. 『日本建築学会学術講演梗概集 (関東)』1393-1394.

(おおやゆきお 前松江市立中央図書館長)  
(わたなべりえ 山形大学准教授)

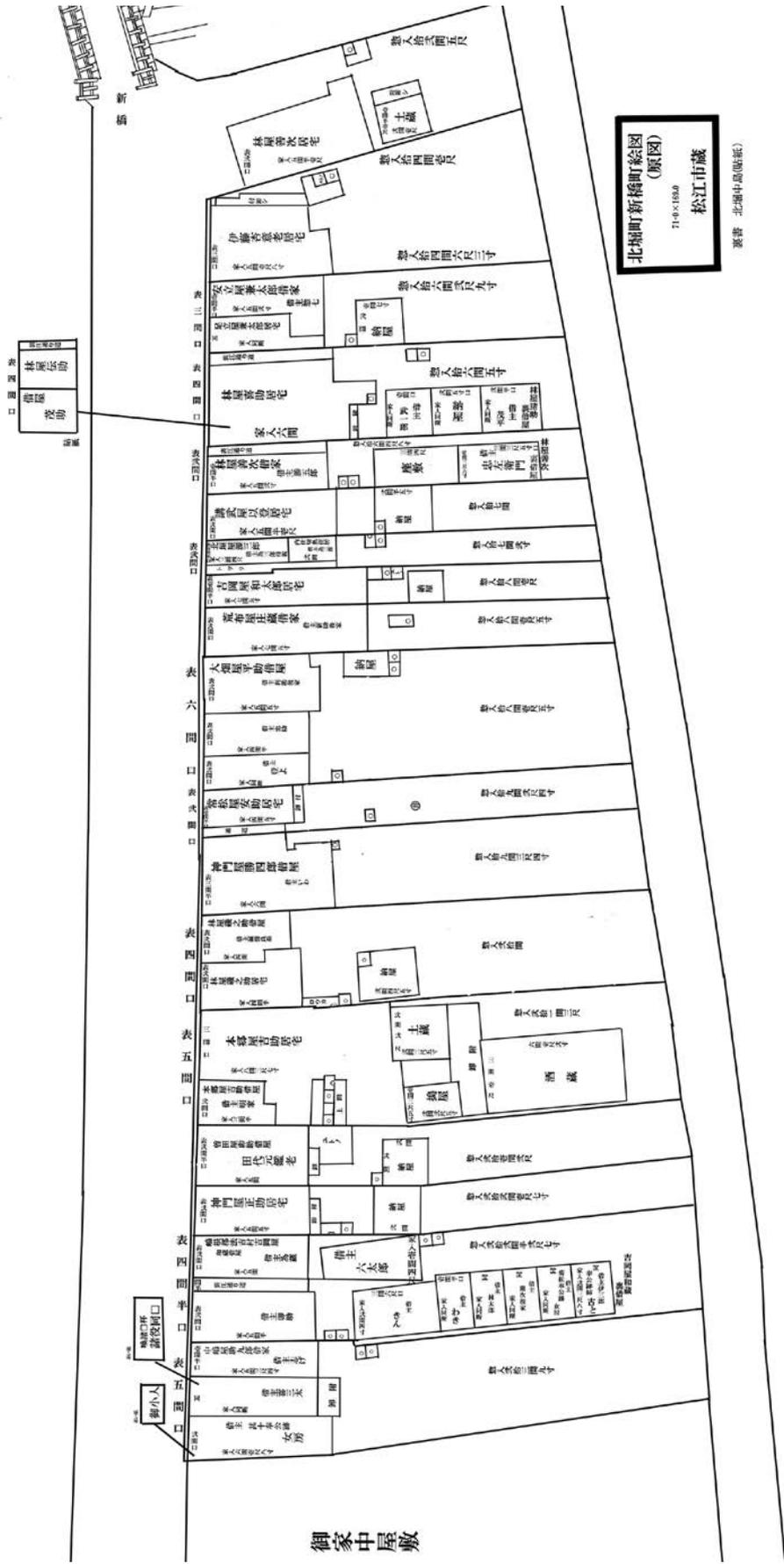


図4 北堀町新橋町絵図のトレース図 (原図)

\* 一部余白を削除

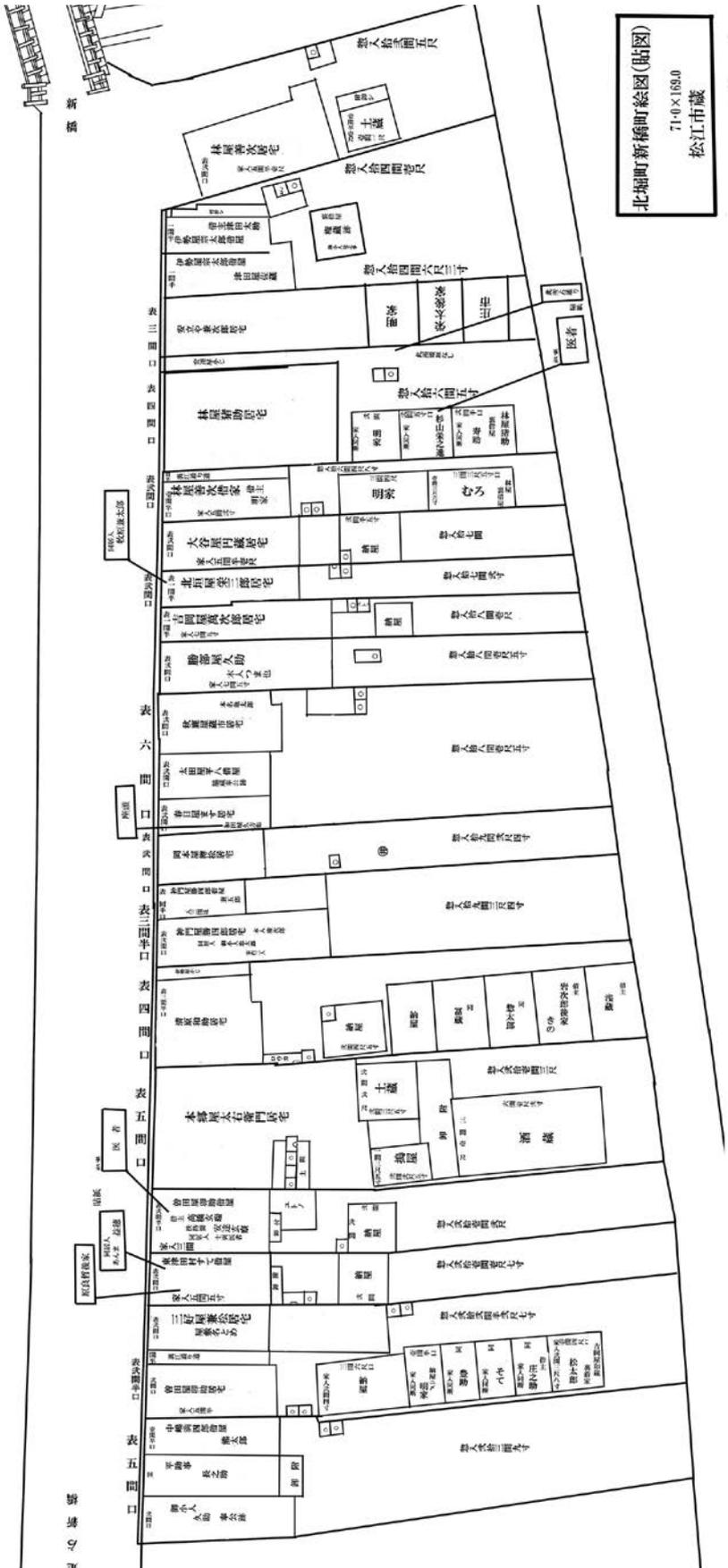
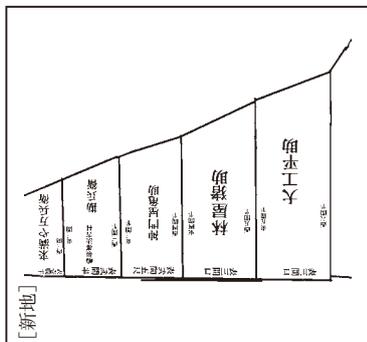


図5 北堀町新橋町絵図のトレース図(貼図)  
\* 新地を余白に表示

# 史跡松江城の発掘調査（1）

## －外曲輪（二之丸下ノ段）－

岡崎雄二郎

### 1. 調査に至る経緯

史跡松江城には、本丸の東方に外曲輪（二之丸下ノ段）<sup>そとくるわ</sup>と呼ばれている<sup>(1)</sup>東西 90 m、南北 190 m の広大な平坦地がある。現在は史跡や都市公園として整備され、松江城大茶会が催されるなどイベント広場として市民や観光客の行楽・散策の場として親しまれている。

一方、江戸時代には古絵図や文献などの史料により、米蔵や様々な建物施設のあったことが知られている。しかし、長らく考古学的な発掘調査は実施されてこなかった。

昭和 45（1970）年度に至り松江市では文化庁、県教委の指導により「史跡松江城環境整備事業 5 ヶ年計画」を策定し、本格的に発掘調査と史跡の整備に着手した。

二之丸下ノ段一帯には昭和 21 年以来、島根県自治会館、島根県立図書館があったが、調査の直前に城外へ移転していた。しかし、まだ当時、武徳殿（明治 44 年 10 月建設）、軟式テニスコート（昭和 24 年設置）、弓道場（昭和 23 年設置）、民家 3 軒 4 世帯（明治時代以降）があった。それらを撤去、或いは移転し、跡地を発掘調査して江戸時代の遺構を確認し、その後の整備に活かすことになった（図 1）。

そこで、昭和 47 から同 49 年度（1972～1974）にかけて発掘調査を実施した。調査は環境整備事業計画に従い文化財サイドで計画的に進められるべきであったが、急遽、昭和 48 から同 49 年度にかけて建設省所管の城山公園整備事業が実施されることになり、調査体制が弱かったことや時間不足もあり、その計画に合わせるような形で遺構群の平面位置と深さを確認するに留まった。詳細な実測図を作成できなかったのは、まことに遺憾なことである。これまでは調査の中間概要が報告されているだけだが<sup>(2)</sup>、松江城の城郭施設を知る上で貴重な内容であるので、以下当時の調査資料及び記録写真、出土遺物を中心に概要を述べるものである。

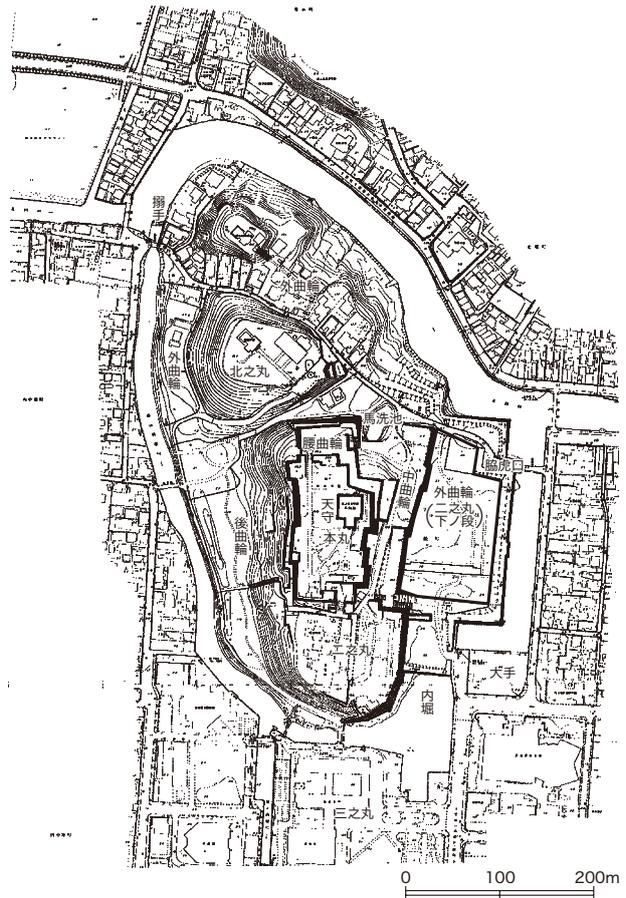


図 1 外曲輪（二之丸下ノ段）遺構発掘調査位置図

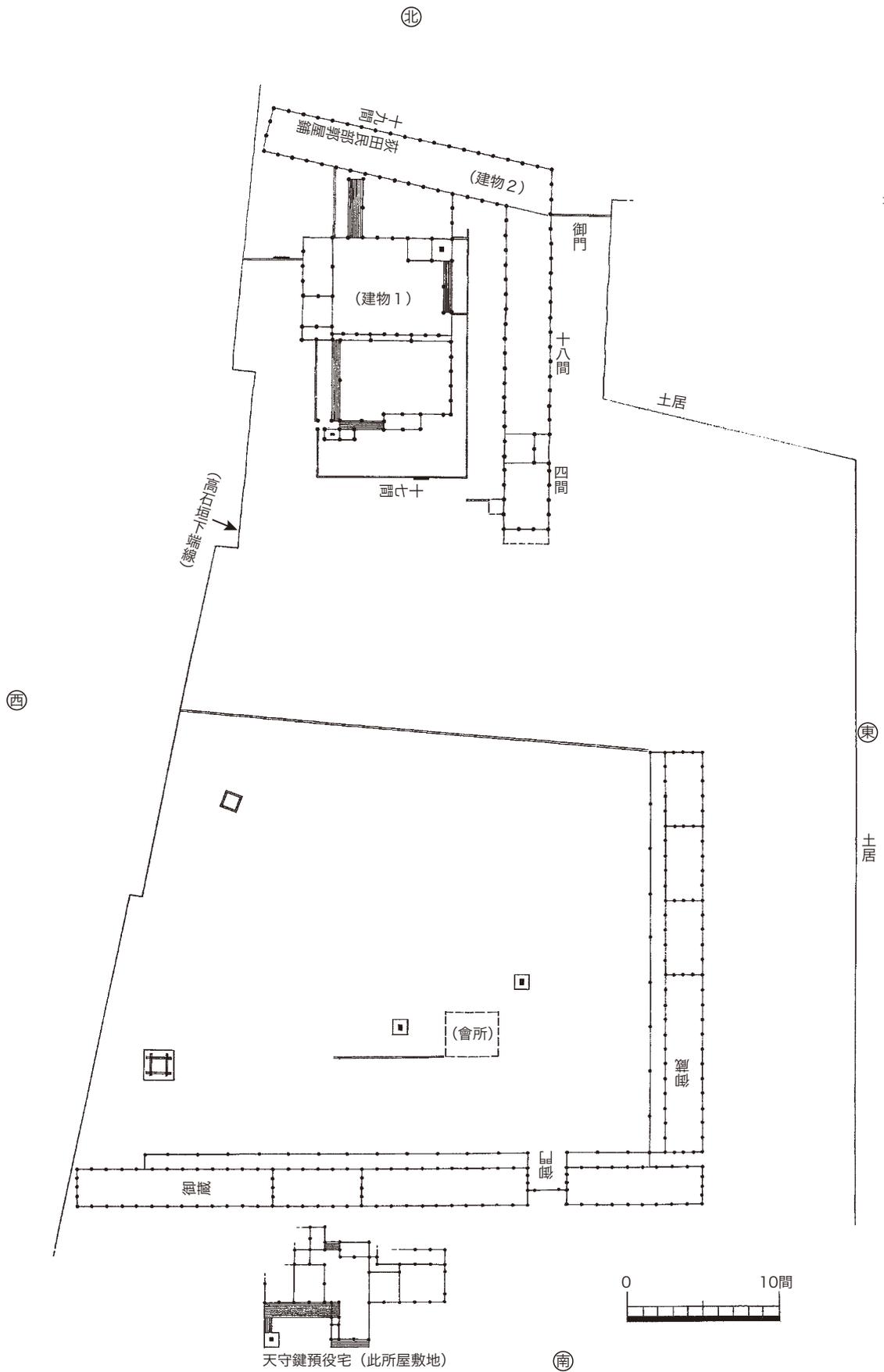


図2 『松江城縄張図』に見える二之丸下ノ段の建物施設  
(原図よりトレースしたもの)

## 2. 史料にみえる二之丸下ノ段の建物施設

### (1) 建物が記載された関係史料

発掘調査の実施や遺構の検討に当っては、米蔵など建造物群の平面位置や規模、特徴が記載又は描かれている下記の史料を参考にした。

#### ① 竹内右兵衛書つけ（17世紀末、松江市蔵）

藩のお抱え大工頭、竹内家の城郭建造物の備忘録。寸法などが記載され特徴がよく分かる。名称として東米蔵、南米蔵、会所、荻田表長屋、小門が記載される。

#### ② 松江城縄張図（17世紀末、松江市蔵）

1間が三分四方の墨書方眼が引かれ、その上に本丸、二之丸周辺の建造物、石垣などを貼紙で表現した詳細な平面図。御小人長屋、此所屋敷地（天守鍵預役宅）、御蔵、荻田民部郭屋鋪が記載される。

#### ③ 御本丸二之御丸三ノ丸共三枚ノ内（17世紀末、国立史料館蔵）

墨で1間を三分の方眼で引き、石垣、建物などの色紙を貼り付ける。御小人長屋、御蔵、荻田民部居所が記載される。

#### ④ 御城内惣間敷（明和3年（1766）、国立史料館蔵）

建造物、石垣の寸法がよく分かる。名称として南御蔵、東御蔵、会所、御小人長屋が記載される。

#### ⑤ 御本・二・三丸御花畑共略絵図面扣（19世紀頃、個人蔵）

名称として御破損方構、御鍵預役宅、御土蔵7棟（新造の5棟を含む）、中御門、荻田長屋、稲荷社が記載される。

#### ⑥ 松平家二ノ丸内米倉及荻田屋敷之図（幕末～明治初期、個人蔵）

『出雲栞』の挿図の一つ。天保年中新造の米蔵や荻田屋敷の内容がよく分かる。

#### ⑦ 御城内絵図面（享保4年（1719）成立、幕末頃一部加筆、国立史料館蔵）

へうで方眼を引き、その上に外曲輪の主要建物、石垣、樹木が著色されている。松田七左衛門居宅（天守鍵預役宅）、米蔵（新造5棟加筆）、米蔵会所、北御長屋、口御門、御破損方寺社修理方会所（加筆）、御小使長屋（加筆）が記載される。荻田居所部分は、間取りの上に貼紙が張られている。

#### ⑧ 松江亀田千鳥城図（明治42年（1909）、松江市蔵）

斜め東上空から見た鳥瞰図。幕末～維新直後の頃の二之丸下ノ段の米蔵をはじめとする建物配置と外観が立体的によく分かる。

#### ⑨ 旧藩事蹟（大正前期、国立史料館蔵）

幕末の松江藩軍用方書役を務めた重村俊介が、絵図や記憶に基づいて松江城内や城下町の江戸から明治にかけての変遷・様子を広範多岐に亘り細密に記述している。

二之丸下ノ段では、客舎、荻田長屋、中門、長屋門、荻田稲荷、米倉、天守鍵預役宅、破損方修理方役所、柳多井などの施設が記載される。

### (2) 主な史料に記載された関係建物

この内、主な3つの史料に記載される関係建物について内容を掲げておく。

#### ① 御小人長屋

〔竹内右兵衛書つけ〕 一御小人小や、貳間はり八間、瓦ふき

〔松江城縄張図〕 土居の南東隅にある。貼り紙の下に南北棟の柱間3間×8間の紙が貼り付けられ、中央に「御小人長屋」と墨書されている。

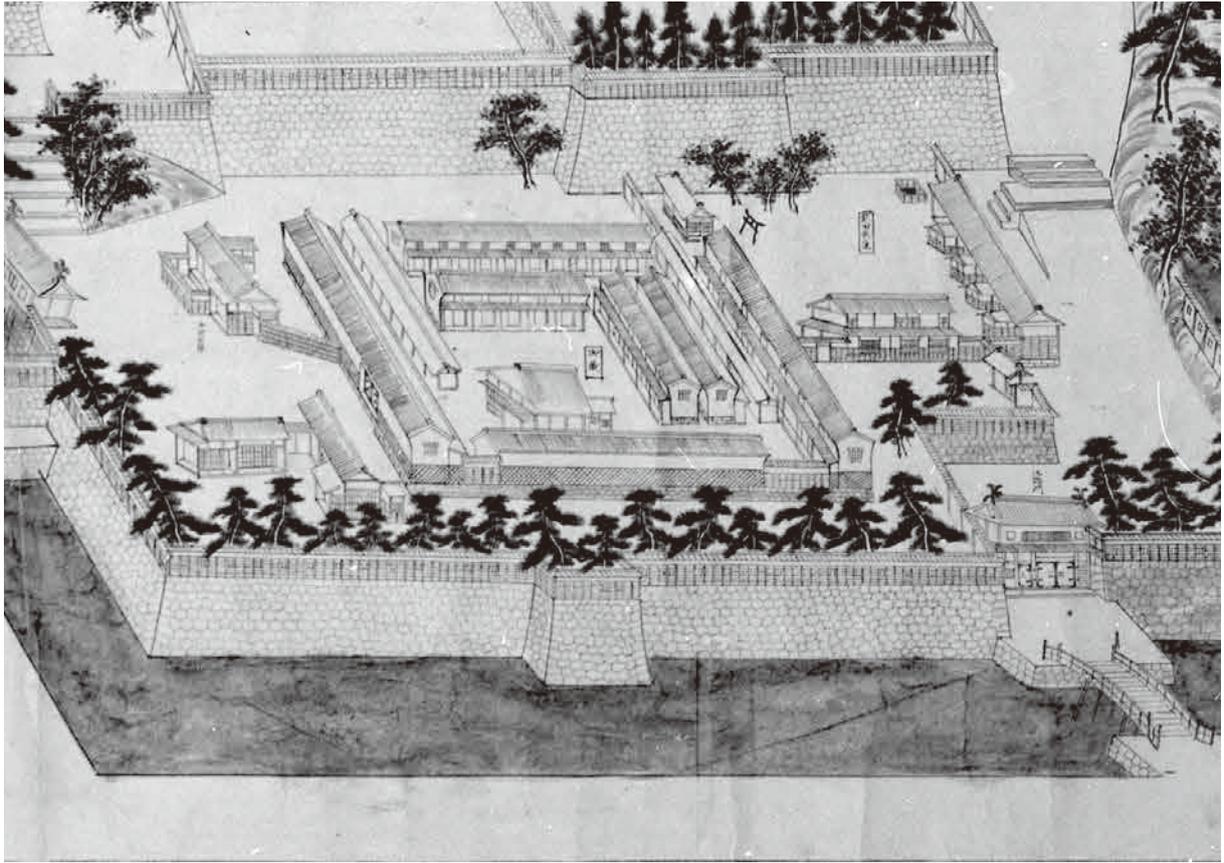


図3 『松江亀田千鳥城図』に見る二之丸下ノ段のようす

〔御城内惣間数〕

一、御小人長屋式間梁桁行拾壹間半  
同所笹板塀覆拾四間半

② 天守鍵預役宅

〔竹内右兵衛書つけ〕

一源蔵居所貳間半はり、拾貳間南へ貳間半はりニ三間ノ中門有、同方ニ五尺ニ五間之ひさし有、北ニ貳間ニ三間半ノ中門有、同方ニ壹間ニ三間ノひさし、壹間半ニ貳間ノひさし、貳間ニ貳間ノ庇、三尺ニ三間ノひさし、ノ分ハこけら也、同所西ニ壹間半ニ四間半ノ瓦ふき有、下湯との貳間四方ハ右雪隠貳つ、惣坪数び／こけら屋根、六拾坪／瓦ふき屋根、拾坪七合五尺／塀、貳拾八間貳尺也／三拾貳間五尺

〔松江城縄張図〕

天守鍵預役宅のこと。南蔵の中央南部に貼紙あり。墨で書いた長方形の枠内に墨書で「此所屋敷地」と記されている。貼紙の下には「神谷勘左衛門居所」と書いてあり、複雑な建物の平面図が記してある。

〔御城内惣間数〕

記載なし。

③ 南蔵

〔竹内右兵衛書つけ〕

一御米蔵貳間半はり東西四拾貳間、北ニ壹間ニ貳拾五間半ノひさし、西四間半明て取付、同方ニ壹間五間半ノ庇、東三間半明て取付、ひさしハこけら也、

〔松江城縄張図〕

「御蔵」と記される。柱間は東部9間、「御門」と記されその幅「二間二尺二寸」の記載。その西部へ11間目に仕切り壁、さらに西へ6間で仕切り壁、さらに西へ13間を数える。仕切り壁部分は、柱間4間。計

41 間 2 尺 2 寸となる。北側に黄色の紙で庇部分が貼り付けてある。幅は 1 間、御門東で長さ 7 間、同西で 25 間ある。

〔御城内惣間数〕

一、御米蔵式カ所

南御蔵式間半梁桁行四拾式間半／内式間半御門 但此分宝曆五亥八月御修復／三拾九間成ル西ニ而三間口

④ 東蔵

〔竹内右兵衛書つけ〕

一同貳間半はりニ南北貳拾七間也、西方ニ壹間ニ廿七間ノ庇有、

〔松江城縄張図〕

「御蔵」と記される。南端から柱間で北へ 12 間、さらに北へ 5 間、さらに北へ 5 間で各仕切り壁、さらに北へ 5 間あり、長さ計 27 間。仕切り壁の柱間は 4 間。西側に幅 1 間の庇あり。長さは身舎と同じ。

〔御城内惣間数〕

東御蔵式間半梁桁行式拾七間

⑤ 會所

〔竹内右兵衛書つけ〕

一會所、三間ニ三間半、東ニ壹間半四方之中門共ニ、

〔松江城縄張図〕

荻田居所東西米蔵から北へ建物北端まで 6 間 5 寸と記す。東西長、南北幅共に 2 間半か。

〔御城内惣間数〕

会所二間梁桁行五間／同所斗家式間梁桁行三間／同所井戸四ツ

⑥ 荻田居所

〔竹内右兵衛書つけ〕

記載なし。

〔松江城縄張図〕

大きな 2 つの部屋からなる。

〔御城内惣間数〕

記載なし。

⑦ 荻田表長屋

〔竹内右兵衛書つけ〕

一荻田表長や、三間はりニ東ハ貳拾貳間、南北同内かわにてハ、北ニ壹間ノ延有、北ハ拾八間之内ノ方にてハ、壹間余ノ延有、此長ヤハ辰巳ニ當て棟立、棟が南北方向から北西斜めに折れ廻る長屋。「荻田民部郭屋鋪」と記される。

〔松江城縄張図〕

〔御城内惣間数〕

一、北ノ御長屋三間折廻シ三拾七間

一、右同所内御長屋三間梁七間同所井土壹ツ石井側

一、右同所取付中御門式間半

3. 調査の組織と経過

調査の体制は、「史跡松江城二之丸下の段遺構発掘調査団」を結成し、団長に山本清、考古学班（山本清、近藤正）と文献班（島田成矩）の 2 班を設け<sup>(3)</sup>、県教委文化課の指導のもとに進められた。調査の方法は、30 m 四方の大グリッドを設定し、その中を 100 分の 1 の 3 m 四方の小グリッドに分けた。小グリッドは東西方向を A、B、C・・・、南北方向を 1、2、3・・・として組み合わせ調査区の個別番号とした。

各年度の調査箇所などについては下表の通りである。

年 度	調査箇所	調査期間	経 費
昭和 47 年度 (1972)	A、B、C、D、F、K 地区（南蔵跡、東蔵跡）	昭和 48 年（1973） 3 月 12 日～3 月 31 日	500 千円 (松江市単独)
昭和 48 年度 (1973)	南蔵跡（一部）、東蔵跡（一部）、 その他の米蔵跡（一部）	昭和 48 年 5 月中、 12 月 15 日～12 月 27 日 昭和 49 年 1 月 7 日～1 月 20 日	500 千円 (松江市単独)
昭和 49 年度 (1974)	テニスコート跡（南蔵跡、天守鍵 預役宅跡） 武徳殿跡（その他の米蔵跡） 民家跡（荻田長屋跡）	昭和 49 年 7 月 11 日～9 月 4 日	971 千円 (松江市単独)

## 4. 発掘調査の概要

### (1) 第1年度

表土から 30cm までは、明治以降の瓦などの廃棄物のごみ穴や溝跡に横方向に堆積しており、スコップでは掘れず、急遽鶴嘴に替えて掘った。17 世紀末には存在していたと考えられる米蔵遺構の 1 部と東南隅の「御小人長屋」推定地を調査した。米蔵の石積基壇と排水溝を検出し、溝中から多量の瓦類を発見し、絵図どおりの位置に遺構の存在することが確認された。石積基壇は予想以上に良好な状態で遺存していた。

#### ① A 地区

1 × 3 m のトレンチを 2 本設定し (T1, T2)、御小人長屋推定地の南北両端を調査した。

遺構は確認できなかったが、AC1 区、AB1 区で西北から東南方向に走る幅約 2 尺 (60cm) の排水溝 (SD02) を検出した。



T1 SD02 (排水溝)

#### ② B 地区

BJ12 区で石積の上面を、BE12 区で石積基壇の東南角石を検出し、『縄張図』記載の南蔵 (東西に長い米蔵: SB01) の東南部の石積基壇であることを確認した。(T4)

BE13、同 14 区は、元島根県立自治会館の跡地で、基礎コンクリート、水道管、便所などでかなり攪乱されていた。石積み基壇も根石のほかはかなり抜き取られていた。

BE11 区では、南蔵と東蔵の排水溝が直交し (SD01 と SD02)、南蔵の排水溝 (SD01) はさらに東へ延び、土居下の南北方向に走る排水溝 (SD03) と三叉路を形成している。(T3)

BH14 区では、南蔵と東蔵が接する場所で、内幅 20cm の来待石製排水溝 (SD08) が検出された。(T5)

#### ③ C 地区

CE24 区で石積み基壇 (SB02) と排水溝 (SD02) が検出された。CF24 区、CG24 区、CH24 区で上部が平坦な礎石が検出された。東蔵 (南北に長い米蔵: SB02) の一部と思われる。(T6) CH24 区では、来待石製排水溝 (SD07) が検出された。



T6 SB02 (東蔵跡)

#### ④ D 地区

東蔵 (SB02) の北端部を確認するため、旧武徳殿の南部、DE30, DE31, DF31 区を調査した (T7)。DE30, DE31 区で SB02 の石積み基壇を検出した。SB02 の北端部及び対岸の護岸石は攪乱されており確認できなかった。

#### ⑤ F 地区

『縄張図』記載の「御門」と推定される箇所を調査した (T8)。記載どおり、幅二間二尺三寸 (約 4 m 50cm) の門跡を検出した。南寄りの両側に御門の扉の親柱を据えた礎石が検出された。心々距離は、約 3 m 余である。

御門東側と南蔵の境は、幅 1 尺 (30cm、SD04) の排水溝で区切られていたが、西側の境には排水溝

はなかった。御門東側の排水溝（SD04）は北部のトレンチ調査（T9）では、南蔵内側の来待石製排水溝（SD06）と直交し、さらに北側の会所があった方向に延びている。

SD04 から近代の土瓶や火鉢（図7-23、25）が出土した。

#### ⑥ K地区

東西溝（SD01）の西端部を確認するため、高石垣の直下にトレンチを設けて調査した（T10）。K地区の東面石垣の直下で北側へ直角に折れていた。石垣の根石と続いており、溝底はかなり浅い。



T8 南蔵御門跡東部  
右：門扉親柱礎石、SD04（排水溝）

#### (2) 第2年度

前年度調査の米蔵跡の全面発掘と他の米蔵について部分調査を実施し、米蔵御門跡や来待石製排水溝などを確認した。遺物の内、瓦類では、壁塼（図4-1、2）が出土した。三角形と正方形の2種があり、一辺26cm余を測り、各隅に釘穴が通る。米蔵の外壁下部を構成するものである。

#### ① F地区（SB01の御門周辺）

御門床面は、砂と粘土の互層の下が硬くしまった粘土層になっていた。扉の親柱礎石の間に直径30cmほどの上部が平坦な大海崎石（薄桃色の安山岩）3個が配列されており、この粘土層の上面が当時の御門の床面と考えられる。

#### ② 来待石製内側排水溝（SD06）

高さ20cm、厚み6cm、内法24cmを測る。この排水溝と米蔵外側の排水溝のレベル差は、10から15cm、御門付近では20～25cmの落差となる。底面のレベルは、東蔵では、北から南へゆるい下り勾配となり、南蔵については、西側から御門方面へ下り勾配となっている。

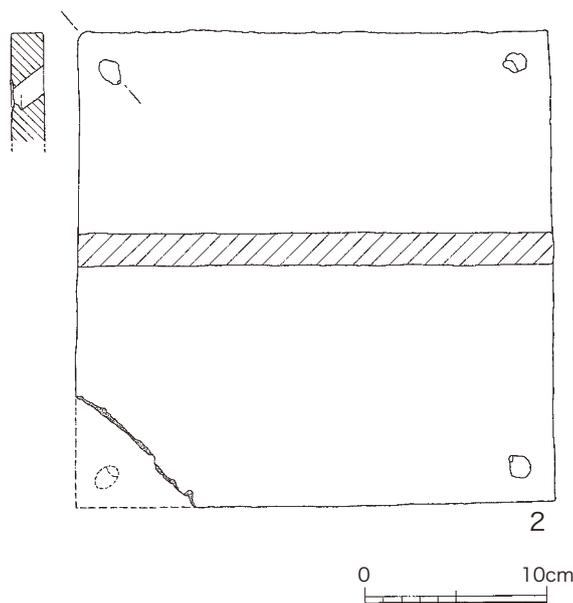
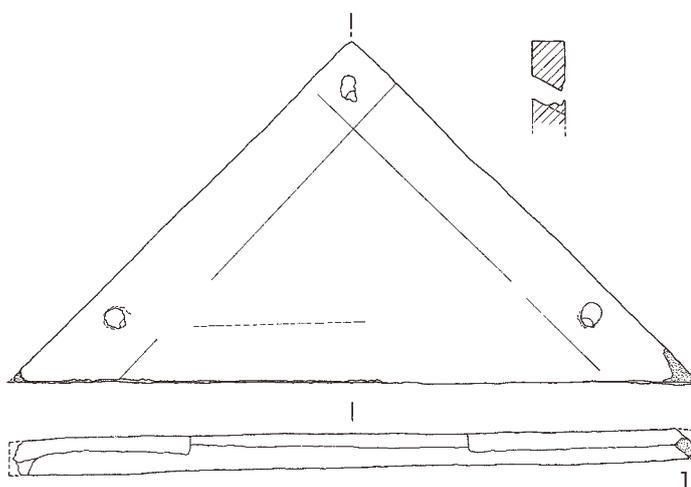


図4 壁塼瓦実測図

雨水は、御門東側で一段落ちて南北方向の排水溝(SD02)に合流し、南蔵と東蔵の交差点を南へ通過し、29 m南で斜め東方向に折れ曲がり、二之丸下ノ段南東角の土塁の暗渠に入り、東側の内堀に排水される仕組みである。CH23区(SD09)とDH28区(SD10)の2か所で西側へ分岐している。会所やほかの米蔵からの雨水を排水するためのものであろう。南北に走る内側排水溝は、DH29区で西方向に直角に折れまがり(SD11)、そのまま北へは続かなかつた。

#### ③外側排水溝(SD01, 02)

底のレベルは、南蔵の溝(SD01)は西から東へ、東蔵の溝(SD02)は北から南へ下がっている。SD01周辺から、布志名焼鉢、輪花小皿、白磁坏、磁器中皿(図7-18)、陶器小瓶(御神酒徳利、図7-19、-20)、磁器蓋が、SD02(BE12区)溝中から布志名焼中碗、青磁大皿(図6-10)、磁器蓋(図6-15)、同(AB0区)から磁器小皿、同(DE33、34区)から陶器中碗が出土した。

#### ④御門東側の排水溝(SD04)

御門北側の延長線上にトレンチを設定した(T11)。GK19区、GL19区では、大海崎石の間に加工した来待石の石材を二次的に使用していた。

#### ⑤元屋敷地(SB04)

『縄張図』記載の「元屋敷地」、「源蔵居所」、江戸末の『松江城郭図』記載の「天守鍵預役宅」の建物跡を確認するため、FR8~同10区にトレンチを設定し調査した(T12)。道路に利用されていた関係で、固くつき固められ、予定の面積を掘りきれなかつた。2×5mの調査範囲で、直径50cmの上部が平坦な石を5個検出した。建物の礎石と考えられる。

#### ⑥M区の排水溝(SD12、13)

東西に長いトレンチ2本(T13、T14)を設定して調査した。調査の結果、表土下50cmで、来待石製排水溝を2本検出した。東側の排水溝(SD12)は、南北長38.6m、石の厚み6.5cm、内法17cmを測る。北端部は、警察官忠魂碑の現在の排水溝に交錯する地点で自然石により塞がれている。南端は、トレンチ南壁で直角に東へ折れ、2m先で消滅していた。西側の排水溝(SD13)は、石垣に並行しており、長さ11.6m、北端部は、自然石で塞いでいる。

#### ⑦H、I区の米蔵遺構(SB03)

最北端の米蔵跡を確認するため、T15、T16を設定して調査した。その結果、T15では礎石らしき石は2個あつたが、いずれも動かされた状態であつた。T16では南部と北部で石積基壇が検出された。その幅は、8.6mである。

#### ⑧D区の溝と基壇

SB02の北端ライン付近を確認するために、T17(DE35、36区)を設定して調査した。相当攪乱を受けており、北端ラインやSD02の延長は確認できなかつたが、中央部から石製狐像の破片24点が集中的に投棄された状態で出土した。本体の破片16点、本体・台座共が6点、台座のみが2点である。(図11)その他、磁器仏飯器、磁器猪口、段重、小碗、中皿が出土した。

### (3) 第3年度

旧テニスコート部分、旧武徳殿部分の米蔵跡及び荻田長屋跡を調査した。

#### ①E区のSB03

SB03の東部を確認するため、旧武徳殿跡にT18からT21を設定して調査した。

T18 SB03の南側の基壇石を検出した。排水溝は確認出来なかつた。

T19 SB03の南側の基壇石を検出した。排水溝は確認出来なかつたが、基壇石の外南側は青灰色シ

ルト質砂層の上に褐色シルト土（厚み 10cm）が堆積していた。

T20 SD02 を検出した。SB03 の南東角の基壇石は確認出来なかった。

T21 SD02 を検出した。

## ②D区のSB02

東蔵の北端ラインを確認するため弓道場南西部に T22 を設定して調査した。東側に SD02 が検出された。基壇上では礎石と思われる大石が検出されたが、不揃いの感があり、明確な区画ラインは確認できなかった。陶器中碗(図6-1)が出土した。-



T21 SB03（新造米蔵跡）東端

SB02 の北端は、文献資料から桁行き 27 間とあるので、1 間＝6 尺 5 寸（1.95 m）で換算すれば南北長 52.65 m となり、DE31～DH31 区付近にあるものと推定される。

## ③S B 05（荻田長屋跡）

越後騒動の処分の結果、首謀者荻田本繁（主馬）とその長男民部、次男久米之助の 3 名が松江藩預かりとなり、17 世紀末から 18 世紀初めまで松江城二之丸下ノ段の北部に住居を与えられ居住していた<sup>(4)</sup>。その住居を「荻田居所」「荻田長屋」という。推定地の中心部は、民有地で民家が建ち並んでいたため、その南東部に T23、南西部に T24 を設けて調査した。

調査の結果、T23 では、民家の南側において長さ 16.5 m、幅 6.5 m の建物基壇を検出した。基壇内側は約 1 m 間隔で多孔質の黒色玄武岩<sup>(5)</sup> の礎石が配列されていた。これは建物の間仕切り部分と思われる。磁器中碗が出土した。基壇東側には幅約 60cm の排水溝 (SD14) があり、基壇側は高さ約 70cm の石垣が積まれていた。対岸には石垣は無く、棧瓦をほぼ垂直に立てて土手を作っている。排水溝のほぼ中間部分には、溝中の両側に石が 5 個せりだして配置されていた。この部分に石橋があったのかも知れない。この排水溝は、南端でほぼ直角に東側へ折れ曲がっているようである。その先は、東蔵の外側排水溝 (SD02) と合流し、さらに東へ延びて土居と石垣の下の暗渠から内堀に排水する、二之丸下ノ段の北半部の雨水を集める基幹水路となっていたと考えられる。基壇西側には、幅約 70cm、深さ 14cm の素掘りの溝 (SD15) が検出された。溝中には直径約 10～20cm のやや角ばった石が落ち込んでいた。

この溝を挟んだ T24 では礎石らしきものはいくつか検出されたが、動かされており建物の規模を復元するまでには至らなかった。基壇上面は直径 5cm 前後の円礫を含んだ明褐色の硬い粘土で固められ、しっかりとした地業が行われていた。SD14 から焼塩壺、白磁小杯が出土した。

## ④SW01

民家の西側、石垣手前に T 字型に掘った T25 から、南北方向に走る石列が検出された。石列付近から鞆<sup>かじご</sup>の羽口の破片 1 点とまじないに使用したと思われる土師器皿が 2 枚（1 合、図 7-27-1、-2）出土した。

## ⑤SB01（南蔵跡）

南蔵のほぼ西半部を検出するため、テニスコートとして使用されていた部分を調査。調査の結果、南蔵は長さ約 82.5 m、横幅は底部分を含めて 7.8 m の規模をもつものであることが分かった。内訳は高石垣際の西端部から御門跡西端部までは長さ約 58 m、御門跡の長さ約 4.5 m、御門跡東端部から南蔵東端角部までの長さ 19 m を測る。基壇内側は、南側排水溝の端から北へ約 5.20 m の区間において、

約 1 m 間隔で根石が密に配列されていた。この上に米蔵の身舎が建っていた。根石群から磁器中碗が出土した。

根石群の北端からさらに北側にある来待石製排水溝までの幅は約 2.6 m を測る。この区間には礎石は全く無かったが、絵図などでは庇が突き出ている区間である。北側の来待石製排水溝 (SD06) は、前回調査部分から約 10 m ほど延長して確認できたが、以西には無かった。磁器輪花中皿、白磁小坏 (紅猪口、図 6-11)、布志名焼皿、同碗 (図 7-21)、磁器中碗 (広東碗)、陶器壺か瓶、磁器小皿、インク壺が出土した。

基壇の外側を走る幅 70 cm の排水溝 (SD01) は殆ど残存していたが、対岸の石垣は厚さ約 30 cm の瓦混じりの間層を挟んで上下 2 段の石垣となっていた。これは下段だけの石垣の時期に、急激に土砂が堆積して排水機能が低下したため、堆積土の上段に石を積んだためか、或るいは、すぐ南側に隣接していた「天守鍵預役宅」の地盤を強化するために嵩上げしたことが考えられる。SD01 からは陶器中碗 (図 6-2)、磁器中碗が出土した。

#### ⑥ SB04 (T26)

南蔵のすぐ南側にあった天守鍵預役宅屋敷跡である。調査の結果、約 1 m 間隔の礎石が多数検出された。実測していないので、平面規模や間取りは不明である。陶器蓋、陶胎染付 (図 6-6)、磁器中碗広東碗 (図 6-12)、磁器中皿、磁器皿、磁器坏、焼塩壺 (図 7-28)、素焼き人形、さなが出土した。

## 5. 遺構の検討

### ① SB01 (南蔵跡)

調査の結果、旧テニスコート部分 (西部) は比較的保存状態が良好で東西方向約 1 m 間隔で根石が検出された。柱又は東を受ける石と考えられる。建造物の構造を知る上で貴重である。身舎は東西長さ約 82.5 m を確認、石積基壇南端から北端の根石中心まで南北幅約 5.20 m で、その北側は根石など全く無く来待石製排水溝まで約 2.60 m を測る。庇の取り付いていた部分であろう。東蔵との接点付近の庇の無い部分は、石積基壇から来待石製排水溝まで約 5.84 m、庇のある部分は約 7.80 m を測る。

以上の結果から、心々距離の幅 5.05 m の身舎の一部北側に 2 m 余の庇が付設されていたと考えられ



SB01 南蔵跡西部



SB01 調査状況



米蔵跡全景 右：東蔵跡 左：南蔵跡

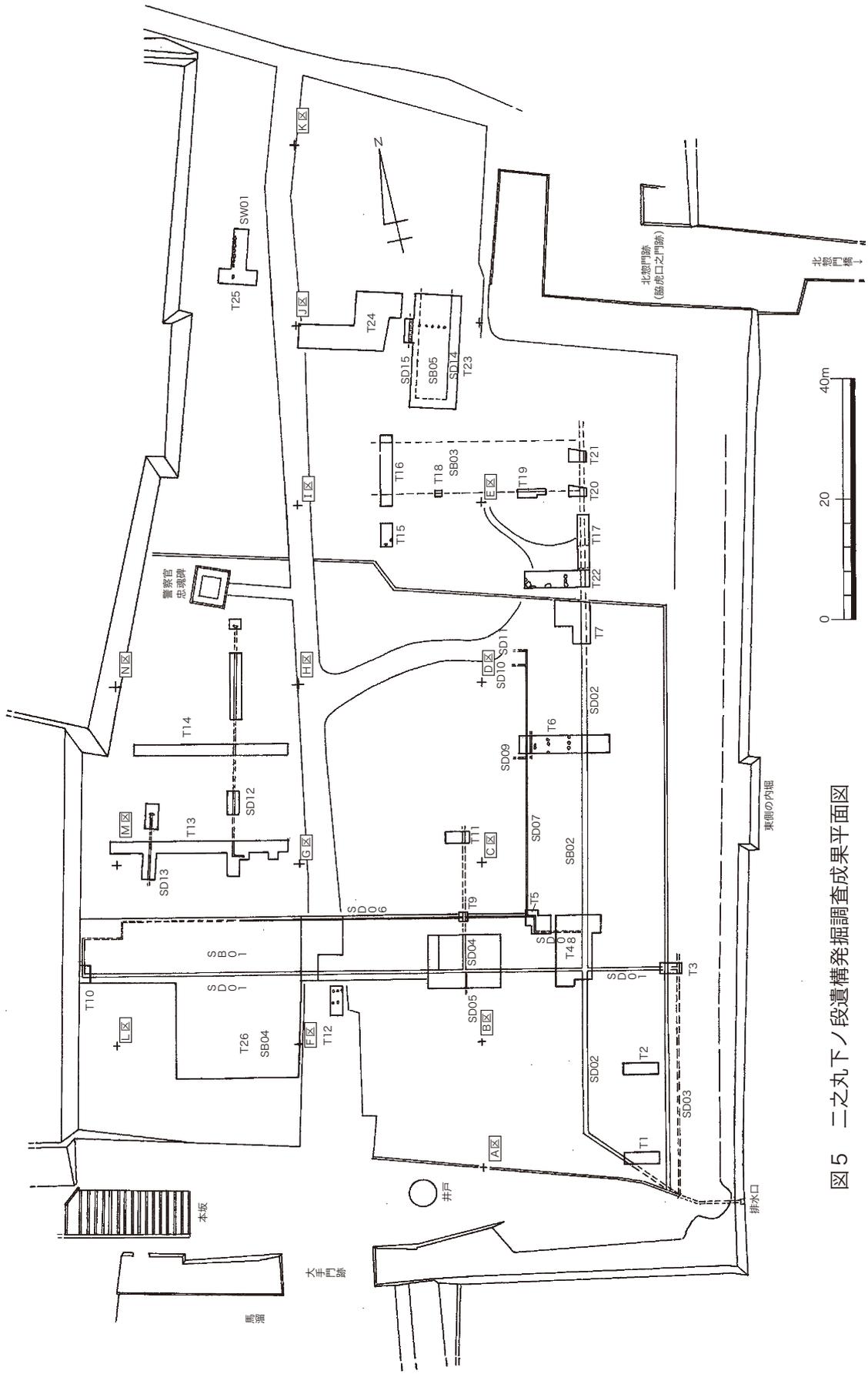


図5 二之丸下ノ段遺構発掘調査成果平面図

る。このことから基準尺度は1間が6尺5寸=1.968 mまたは6尺7寸=2.028 mであった可能性が高い。

やや東に偏ったところに絵図等記載の「御門」跡が検出された。幅4 m 20cm余りで、東側に幅30cmの排水溝がある。総幅4.5 mの門である。1間=6尺3寸=1.908 mとした場合、「松江城縄張図」記載の2間2尺3寸とよく附合する。御門内両側には扉の礎石と考えられる平坦な石が発見された。御門跡床面は、東側の米蔵石積基壇天端より約30cm低い。

#### ② SB02 (東蔵跡)

調査の結果、長さは約51 mまで確認できたが北端部は攪乱により不明。幅は石積基壇東端から根石西端まで6.52 mさらにその西側来待石製排水溝まで2.35 mを測る。しかし、『竹内右兵衛書つけ』などの史料から、当初の幅は南蔵と同じと思われる。後の改築時に半間程度拡幅されたようだ。T6トレンチ内では、根石が3列にわたって検出されたが、動いている可能性もあり判然としない。しかし、石積基壇東端から約8 m西方向のやや深い位置から素掘りの排水溝が検出されており、このことから当初の幅は短く南蔵と同じであったと言える。

以上の結果から、改築後の南蔵は、身舎の西側に2 m余の庇が付設されていたと考えられる。このことから基準尺度は1間が6尺7寸であった可能性が高い。

基壇東側を走る幅約70cmの排水溝中からは、多量の瓦類が出土し、中でも米蔵の白壁下部に取り付けられた壁塼は絵図⑧に描かれた様子ともよく合致するものである。又、一部の平瓦に「大坂瓦屋左右衛門」という刻印の押しあてられているものがBE13区及びFF14区から出土し、補充瓦の購入先、時期(18世紀後半～19世紀代)などを考える上で興味深いものである(図9 10、11)<sup>(6)</sup>。

南、東蔵ともに、外側の排水溝沿いに高さ60～80cmほどの石積基壇を造り、その上に身舎を建てた。内部の構造は不明だが、絵図や出土遺物から判断するならば、外観は下半部に方形や三角形の壁塼を斜め格子に釘で固定した壁であったと思われる。しかし、継ぎ目に漆喰をかまぼこ状に塗り固めたいわゆる「なまこ壁」の痕跡は確認出来なかった。その上半部は漆喰を塗り込めた白壁であったと思われる。屋根は、軒丸瓦や軒平瓦が出土していることから本瓦葺きと考えられる。外側排水溝の対岸は、高さ30～50cmの自然石の割り石を積んで護岸としている。

#### ③ SB03 (米蔵跡)

T16の調査結果から、梁間は8.6 m(約4間半)を測る。T20、T21で検出されたSD02の石積基壇が南端になる。長さは、東西方向に32 m以上を測る。絵図⑥では、「大北新蔵」に該当する。天保年中新造のものである。

#### ④ SB04 (天守鍵預役宅跡)

『松江城縄張図』では、当初「神谷勘左衛門居所」→貼紙「元屋敷地」となっている。『列士録』によれば、初代の神谷勘左衛門は元禄11年(1698)7月25日御天守鍵預役に任ぜられ宝永7年(1710)月日不明に御役御免となった、勤之年数13ヶ年であったことが知られる。『竹内右兵衛書つけ』に記される「源蔵居所」の源蔵なる人物は、『列士録』によれば、2代目松下源蔵のことで、「寛文11年(1671)月日不知御天守鍵預之」とある。期限は記載されていない。



T26 SB04 (天守鍵預役宅跡) 礎石

享保4年(1719)成立の『御城内絵図面』によれば、この場所は「松田七左衛門居宅」と墨書されている。この松田七左衛門は、『列士録』によれば、2代目七左衛門が享保4年7月12日付で、御天守鍵預仰せ付けられ、同5年2月4日御役御免となっている。

以上の住居人の変遷から、この屋敷地は江戸時代を通して天守鍵預役の居宅であったことが分かる(7)。検出した礎石は、後世の攪乱により大部分が無秩序に配列されていたが、東西4本、南北2本がほぼ半間間隔で並んでおり、このことから複雑な礎石建物があったことが知られる。実測をしていないので、詳細は不明だが、天守鍵預役宅の建物礎石と考えられる。

#### ⑤ SB05 (荻田居所・長屋)

『松江城縄張図』にみる居所・長屋

17世紀末頃に成立した『松江城縄張図』によれば、図2の(建物1)は、標記が無いので誰が住んでいたのか分からない。しかし、その規模や部屋の広さから父荻田本繁の居所であったと思われる。一方、斜めL字型に接続した長屋は、「荻田民部郭屋舗」と表記してあるので、長男の荻田民部の居所だったと思われる。次男の久米之助の居所は分からないが、「荻田民部郭屋舗」の表記に含まれていると解釈するならば、図2



T23 SB05(荻田長屋跡)石積基壇と礎石

の(建物2)の長屋は、長男民部と次男久米之助の住まいであったと推測される。

それにしても、父荻田本繁の表記が無いのはなぜだろうか。将軍綱吉の裁決によれば父のほうは、子たちより先に、天和元年(1681)6月22日に八丈島流罪が下されており、子たちは元禄15年(1702)まで松江藩預かりだった。子みみの表記や時間的な推移から考えると、『松江城縄張図』成立時には、子たちだけが住んでいたのではないか。このように仮定するならば、『松江城縄張図』の成立は、従来17世紀末頃と言われてきたが、17世紀末から18世紀初めとするのが、より正確な年代観ではないかと考えられる。

#### ⑥ SD01

二之丸下ノ段南半部の南蔵や居所の雨水等を集めて、SD02とSD03へ繋ぐ幹線の排水溝である。幅は70cm、米蔵沿いで83m、SD02とSD03の間が15m、総延長98mとなる。

#### ⑦ SD02

東蔵(SB02)に沿う排水溝である。北側のSB03東端部でも、SB02の延長線に確認されているので、T6の北まで延びていることが分かる。SB05の調査で、SD14はその南東角から東へ折れていくことが確認されているので、恐らくはその先で、南からきたSD02と合流してさらに南へ行き、南東方向に折れ曲がって、土居の下を通過して、東内堀に排水されていたものと考えられる。

#### ⑧ SD03

SD01が東の土居の裾に当たる箇所、南北方向に走る排水溝と三叉路を形成している。この溝をSD03という。土居の土留めも兼ねており、その後の土居のトレンチ調査でも検出されている。土居の裾をぐるっと廻っているようだ。

#### ⑨ SD04

SB01の御門跡東側で、南北方向に設けられた溝。護岸は割石積みで幅30cm。トレンチ調査によれば、御門の北端で来待石製排水溝(SD06)と立体交差する。SD04がより深いレベルにある。さらに12m

～14 m北でも確認されているので、恐らくその北にあった「会所」まで延びていたものと思われる。

⑩ SD05

SD04のSD01を隔てた対岸で南北方向に走る溝。幅は約20cm(約7寸)。SB01の東南部一帯の排水を集める溝。来待石や雑石を転用して護岸を形成している。

⑪ SD06

SB01の北側、底の先端部に当たる来待石製排水溝。内幅24cm、石の厚み6cm、深さ20cmを測る。現存長49m。

⑫ SD07、09、10、11

SB02の西側、底の先端部直下の来待石製排水溝。南端はSD06と合流し、北方向へは合流点から26mと41m先で西方向へ排水溝が分岐している(SD09、同10)。さらに44m先では西へ直角に折れ、それ以上まっすぐ北には行かない(SD11)。恐らく西奥にある米蔵周辺からの排水溝になるだろう。

⑬ SD08

SD06とSD07が合流した所からわずかに東方で南に約2.5m折れ、さらに直角に東へ折れて、SB02の南端をとおりSD02に排水されたと考えられる。

⑭ SD12

SB01の北方にある排水溝。南北の長さ38.6m、石の厚み6.5cm、内幅17cm。最北端は自然石で塞がれている。南端は直角に東へ折れ、2m先で消滅していた。西側の高石垣の方向に左右されているようだ。絵図⑥に表現される「中新蔵」や「米たい場」の西側に走る溝と考えられる。

⑮ SD13

SB01の北方にある排水溝。南北の長さ11.6m。最北端は自然石で塞がれている。絵図⑥に表現される「大蔵」と高石垣の間に走る溝と考えられる。

## 6. 遺物の検討

### (1) 陶磁器・土師器の変遷について(第6、7図)<sup>(8)</sup>

九陶Ⅰ期(1580～1610年代)及びⅡ期(1610～1650年代)に該当するものは見当たらない。米蔵や会所などの建物遺構の一部は、松江城始築時の17世紀前半から建築されていたので、少しでも遺物が出土してもおかしくはないが、その理由は不明である。

九陶Ⅲ期(1650～1690年代)以降或いはⅣ期の可能性のあるものには、内外面ともに藁灰釉のかかった肥前系陶器中碗(図6-1)、白濁釉の平行線文の上から透明釉を掛けた刷毛目塗りの肥前陶器中碗(図6-2)、見込みに山水図を描き、底部は蛇の目高台で釉はぎ部分に鉄漿を塗る肥前系青磁大皿(天守鍵預役宅跡出土、図6-3)がある。

九陶Ⅳ期(1690～1780年代)のものは、図6-4～6-10は肥前系のもので胴部が著しく内反する陶器中碗(図6-4)、18世紀前半の陶胎染付の磁器中碗(図6-5、6-6)、磁器染付中皿(図6-7)、見込みに五弁花文のある輪花染付中皿(図6-8)、磁器染付草花文鉢類(図6-9)、見込みに幾何学文を型で押し、蛇の目凹型高台で釉はぎ部分に鉄漿を塗る18世紀代の青磁大皿(図6-10)がある。18世紀代の焼塩壺(図7-28)も特筆すべきものである<sup>(9)</sup>。

九陶Ⅴ期(1780～1860年代)のものでは、型物で胴部に鐫文を付ける19世紀代の瀬戸磁器の紅猪口(図6-11)、見込みに鷲文等を描き、高台高さ1.8から2.0cmを測る肥前系磁器広東碗(図6-12～14)、肥前系磁器の蓋(図6-15)、端反の肥前系磁器小碗(図6-16)、素書きで龍や波文を描く肥前系磁器の中碗(図6-17)、蛇目凹型高台をもつ肥前系磁器中皿(図7-18)、肥前系

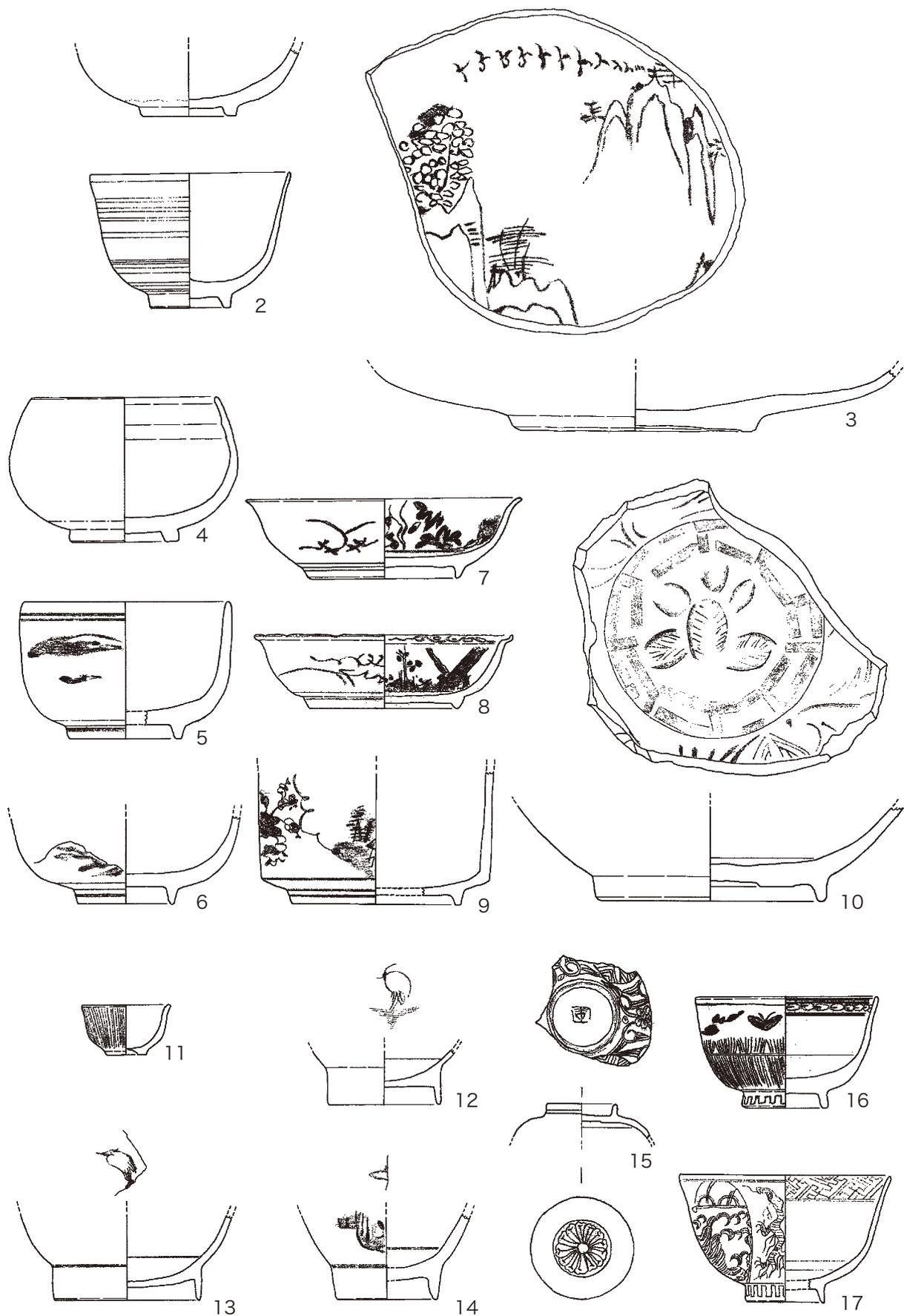


图6 陶磁器実測図 (1) S=1/3

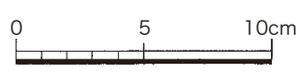
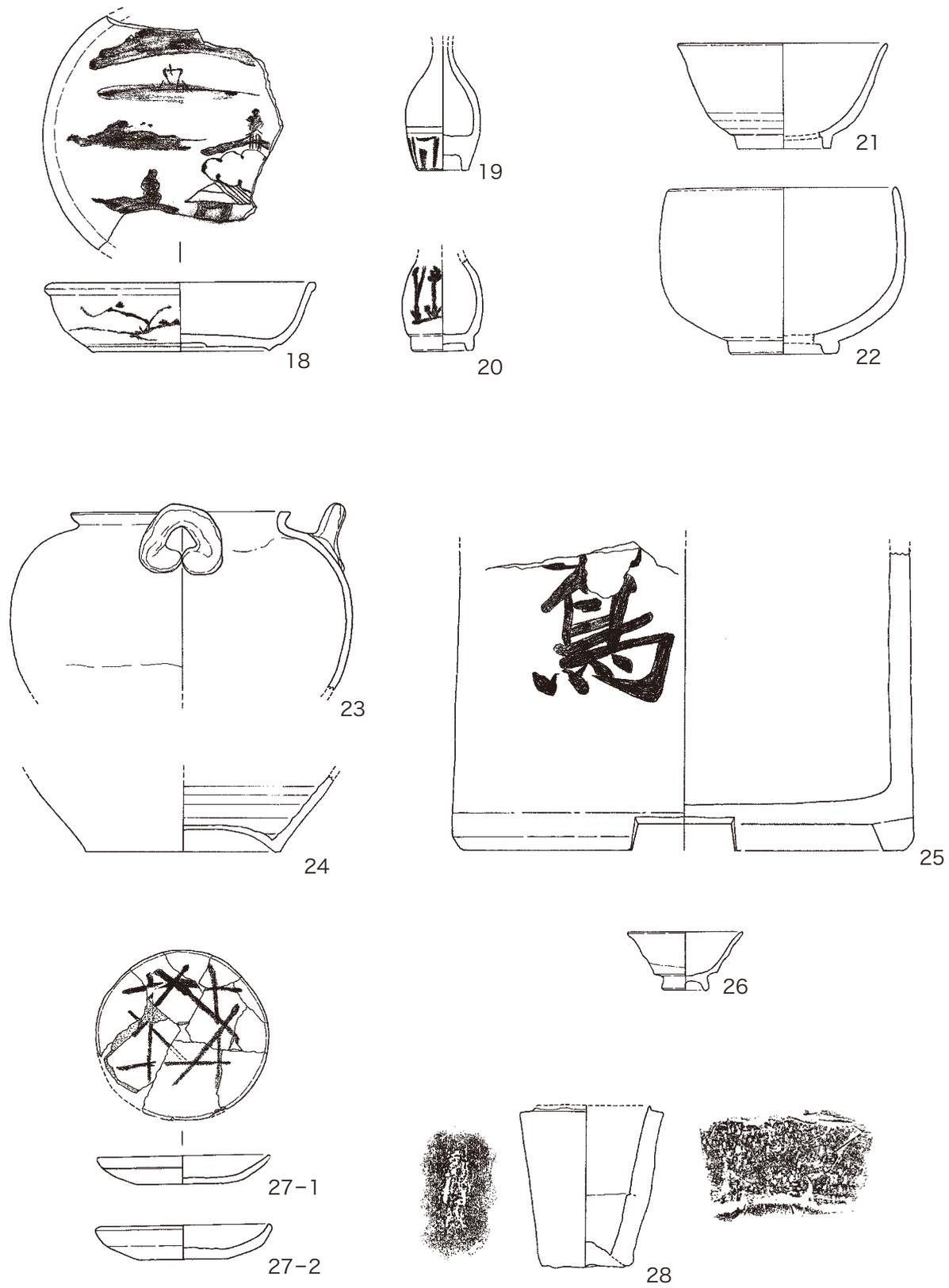


图7 陶磁器・土師器類実測図 (S=1/3)

磁器の御神酒徳利（図7-19、20）のほか、在地の陶器布志名焼の黄色釉の碗（図7-21）、青地釉のぼてぼて茶碗（米蔵跡出土、図7-22）、皿、鉢類がある<sup>(10)</sup>。

近代のものでは、白色系の釉薬が全体に掛けられた上に、コバルトブルー釉で「嶋」「根」「縣」或いは「廳」と文字の書かれた陶器の土瓶や火鉢などがある（図7-23、25）。これらは、明治時代以降に二之丸下ノ段に設置された島根県関係の一連の建物施設で使用された特注品と考えられる<sup>(11)</sup>。著しく内湾した底外面に「議事所／モ口／キリケ利」と3行に文字が墨書された瓶（図7-24）は、独特の器形をしている。殿町の修道館内にあった議事所で使用された瓶が城山内に廃棄されたものと考えられる<sup>(12)</sup>。楽山焼の陶器酒坏（図7-26）は、胴部外面に「忠魂碑除幕式記念」と朱書きされ「楽山」の印銘を押している。大正13年（1924）9月に建立された「警察官忠魂碑」の完成記念として配られたものである。<sup>(13)</sup>。

土師器の灯明皿は、底部に回転糸切痕があり在地のものである。小皿1合（図7-27-1、-27-2）は、一方の小皿の内面に「卍」の記号が角度を45度変え、重ねて書かれており邪気払いの呪具（地鎮具）として使われたのであろう。「九字」の簡略化、記号化が図られた段階のものと推測される。これらの焼き物は、殆どが米蔵跡の外側排水溝や内側の来待石製排水溝から出土しており、幕末から近代にかけてのものが大半である。

## (2) 瓦類について

### ① 軒丸瓦（図8）、軒平瓦について（図9）

松江城出土の軒瓦については、軒丸瓦、軒平瓦の形式分類が成されている<sup>(14)</sup>。軒丸瓦については、

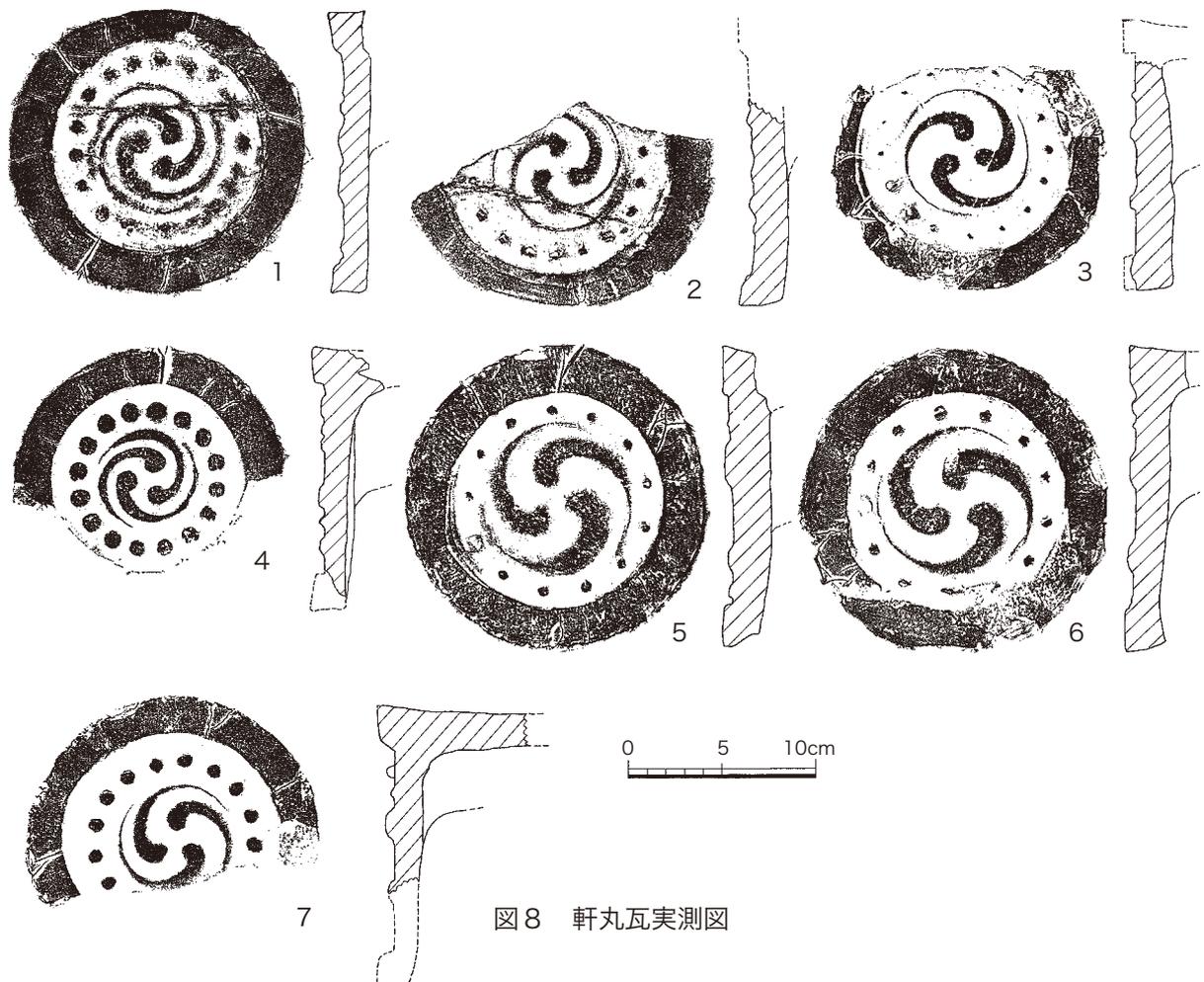


図8 軒丸瓦実測図

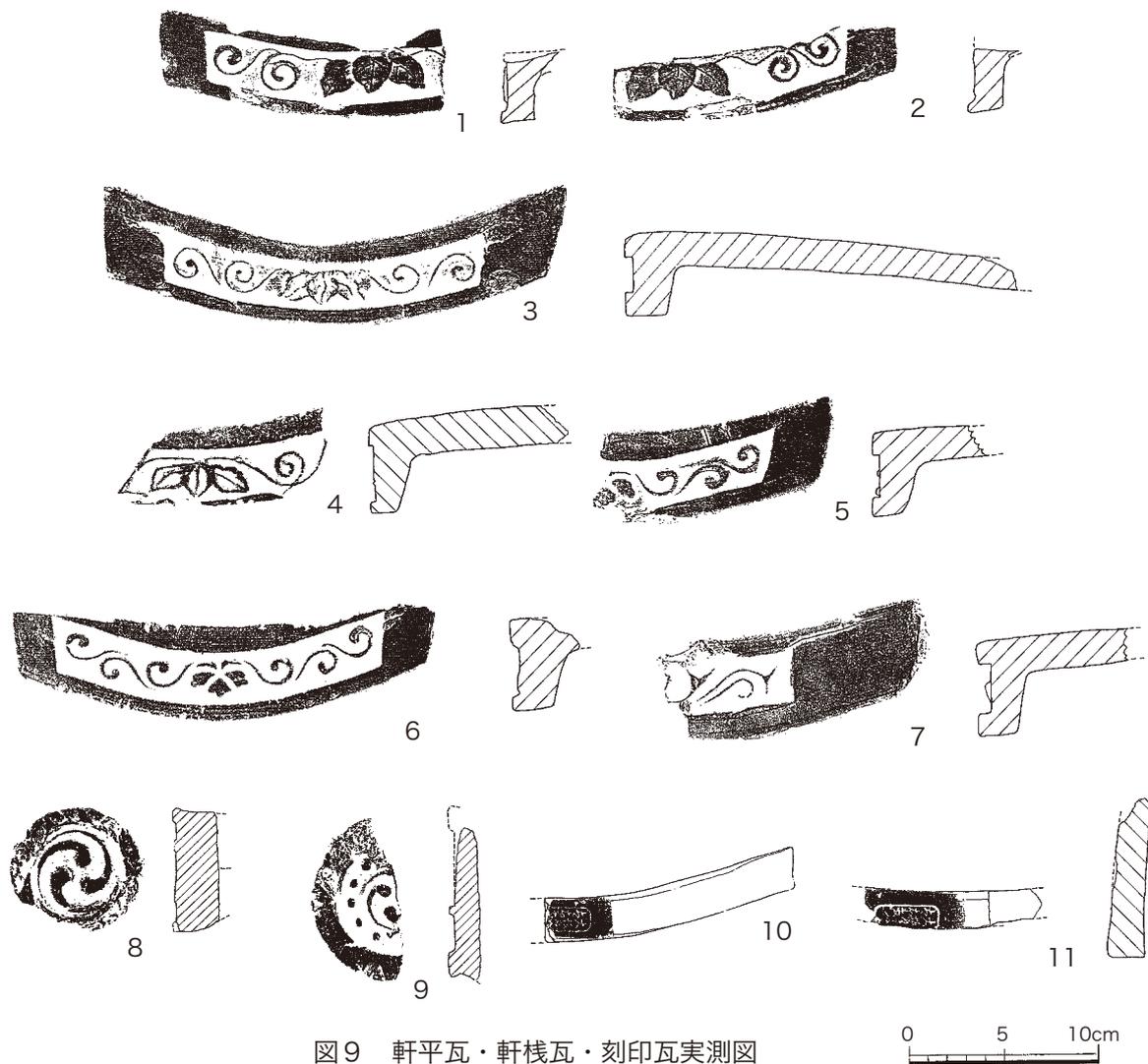


図9 軒平瓦・軒棧瓦・刻印瓦実測図

主として瓦当面の大きさ、圏線の有無、珠文の数、巴文の向きと形状を比較している。軒平瓦については、中心飾りや唐草文などの文様構成と表現を比較している。いずれも編年を確立するまでには至っていない。しかし、大筋の年代観は分かる。

軒丸瓦 (図8)・・・1、2は同汎瓦で松江A-2類、3は松江A-3b類、4は松江A-5類、5、6は松江B-1類、7は松江B-3類である。圏線をもつものは無いが、1～3は、近世Ⅲ-2期 (1600～1615) のものである。<sup>(15)</sup>

軒平瓦 (図9)・・・1、2は松江a-1a類、3は松江a-2類、4は松江a-3類、5、6は松江b-1a類、7は松江b-2類である。1～4は、近世Ⅲ-2期、5、6は近世Ⅶ期 (1724～1765) のものである。

② 軒棧瓦について (図9-8、9)

大小2種ある。松江城下町遺跡では、松江歴史館の北屋敷の第1遺構面で検出されたSK03から2点出土している。第1遺構面の年代観は、陶磁器の編年から18世紀代から明治時代初頭という。

③ 刻印瓦について (図9-10・11、図10)

図9-10・11は、平瓦の瓦当中央部に横方向に刻印を押す。刻印は幅1.3cm、長さ3.5cmの隅丸長方形枠内に2行に亘り「大阪瓦屋／左右衛門」と刻字するものと考えられる。

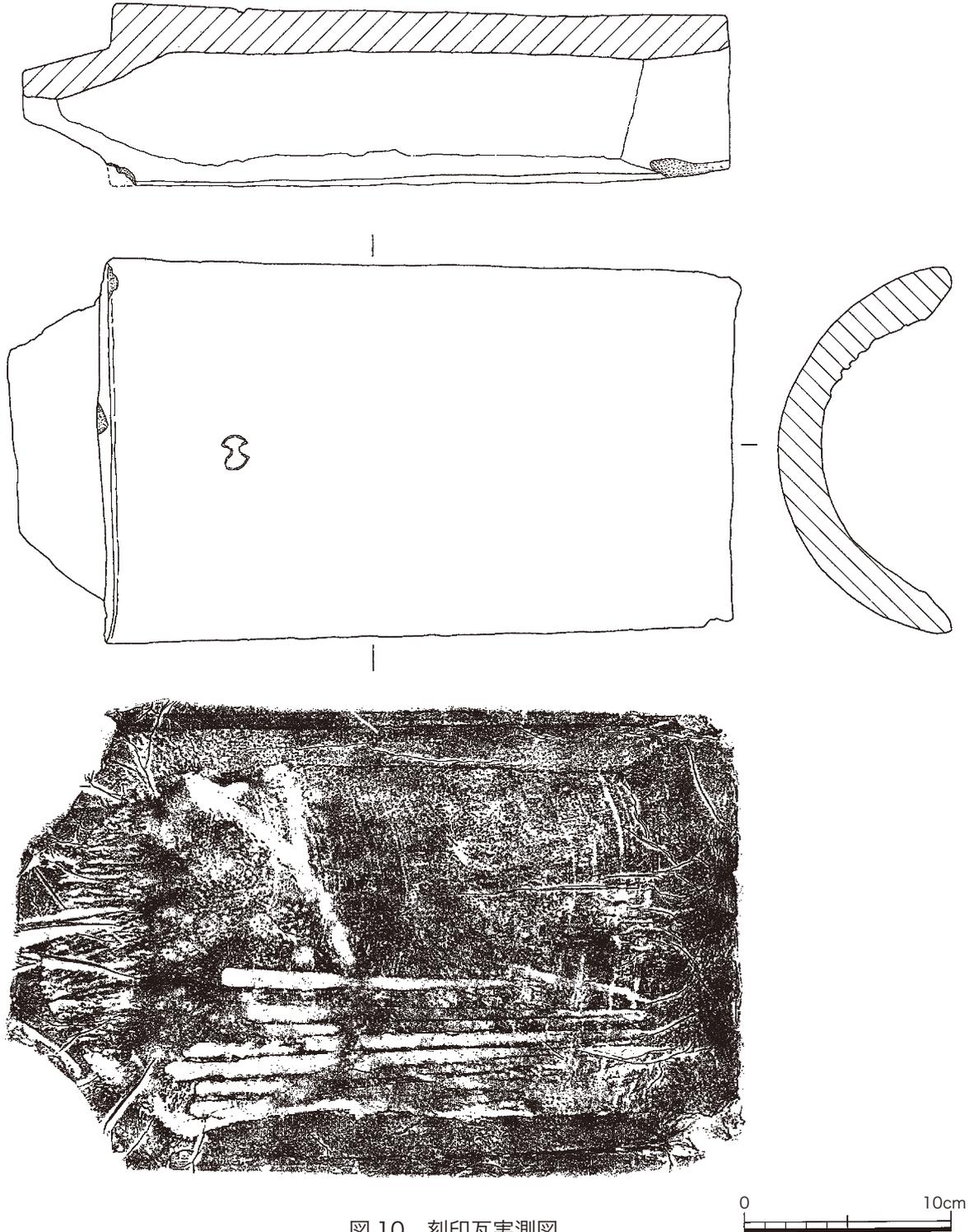


図 10 刻印瓦実測図

図 10 は、長 34.8cm の玉縁式丸瓦の上面中央部に、長さ 1.6 × 幅 1.3cm の分銅型の刻印が押してある。内面はコビキ B である。分銅紋は堀尾氏の代表的な家紋であるので、堀尾期製作の瓦である。

(3) 石製狐像について (図 11)

大きさから 3 種 (大型、中型、小型) に区分できる。1 は頭部である。2 は頭部を欠く胴部と台部で、6.4 × 12.2cm を測る。右側面に男カほか 3 文字が陰刻されている。3 は像を欠く台部で、9.0 × 12.9cm を

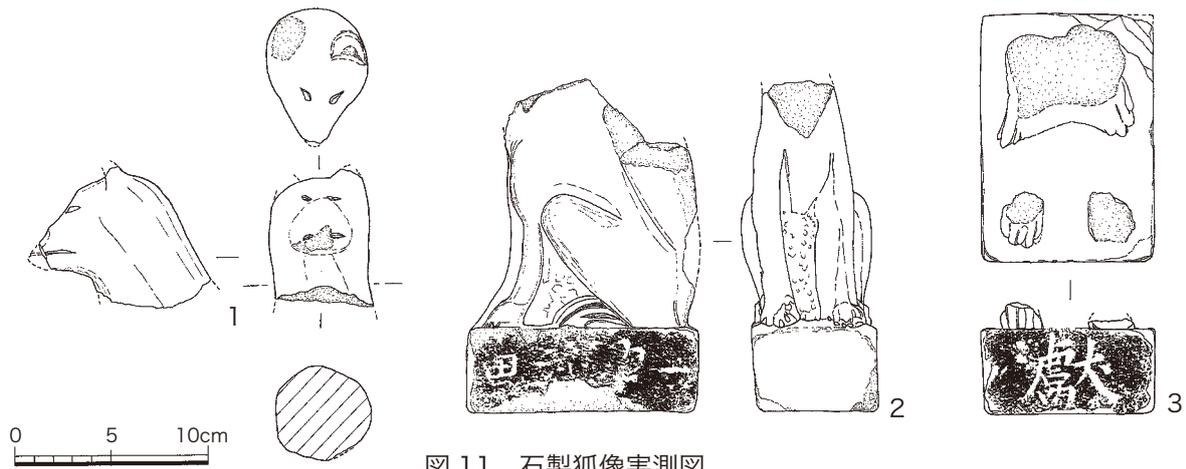


図 11 石製狐像実測図

測る。前面に「獻」の字を刻む。二之丸下ノ段の北半部には、17世紀末、越後騒動で松江藩預かりとなった荻田主馬とその子民部、久米之助が住んでいた屋敷地があった。親子は稲荷信仰に篤かったのであろう。絵図によれば、その西側の高石垣に近く「荻田稲荷社」があったことが知られる。今の「島根県警察官忠魂碑」の辺りで、近くの高石垣の築石の隙間や地面に石製狐像の破片が見受けられる。調査でも、DE35, 36区から集中的に石製狐像の破片が出土した。「荻田稲荷社」に奉献されたものであろう。荻田稲荷社は、明治時代末頃に同じ城山内にある「城山稲荷神社」に合祀されたことが分かっている。<sup>(16)</sup> その折、大半の石製狐像は持って行き場がなくなった。土坑は確認されていないが、全て狭い範囲から出土しているので穴を掘って埋められたのではないだろうか。

## 7. 小結

### (1) 遺構について

まず、絵図・文献史料から分かる二之丸下ノ段全体の建物施設の変遷と特徴について、簡単にまとめておく。

二之丸下ノ段は、機能的には堀尾期以来、基本的には「米蔵」を設けるだけの用地であったが、松平期になると、「御小人長屋」、「御天守鍵預役居所」、越後騒動に起因する「荻田居所」、「荻田長屋」、「荻田稲荷社」が、そして幕末になると天保年中に飢饉対策のため米蔵が5棟も新造される。また、南蔵の南東部に「御破損方」「寺社修理方」が設けられた。

調査結果からは、実測図が無い中、残された当時の野帳、調査日誌、記録写真、関係書類を見ながら、各遺構について可能な限り検討を加えた。

- ① 御小人長屋跡 トレンチの範囲では礎石などは全く確認できなかった。
- ② 天守鍵預役宅跡 多数の礎石が検出されたが、実測していないため、絵図との比較検討が出来ない。
- ③ 南蔵、東蔵 中核をなす南と東の米蔵については、絵図や文献史料に記載される規模のと通りの遺構が検出された。すなわち南蔵 (SB01) は長さ約 82.5 m、幅は庇部分を含めて 7.8 m を測る。多数の根石が置かれ、入念な基礎工事が行われたことが分かる。東蔵 (SB02) は長さ約 51 m を確認したがその北端については攪乱を受け不明瞭であった。幅は庇を含めて 8.87 m を測る。南蔵に比べ拡幅されたようである。排水溝に沿う石積基壇は、石垣の加工の仕方とは異なり、外面はノミで丁寧な整形を施している。石積基壇の両外側には幅 60～70cm、深さ 60cm の排水溝 (SD01、同 02) があり、対岸にも低い石積護岸が廻る。庇の先端部には、来待石製の排水溝 (SD06、同 07) が廻る。
- ④ 新造の米蔵 SB03 (大北新蔵か) については、石積み基壇を確認した。西部の米蔵跡 (大蔵、中新蔵)

については、周囲の来待石製排水溝の検出によってその存在を推定できた。

- ⑤ 荻田居所 民家がありその周囲のトレンチ調査に留まった。礎石などは検出出来なかった。
- ⑥ 荻田長屋 南部の石積み基壇と礎石群を検出した。しかし、民家があり全容は把握出来なかった。
- ⑦ 荻田稲荷社 社殿など建物跡は確認できなかったが、別の場所から多量に出土した石製狐像からその存在が伺われる。
- ⑧ 排水路 絵図でははっきり分からなかったものに排水路の施設がある。米蔵などの建物には必ず排水路が設けられているが、トレンチ調査などによってある程度追跡できた。これらを概観するならば、二之丸下ノ段の排水系統は、基本的に南路線と北路線に分けてあったと思われる。

以上の建物施設は、これまで絵図や文献資料である程度存在が知られていたが、3次に亘る考古学的な調査によって、部分的ではあるが初めてその平面位置や規模が確認された。

また、二之丸下ノ段の造成にあたってどのような基礎地業が行われたのか興味深いところである。米蔵跡などの調査では確認していないが、大手門跡東側取付石垣にかかる土居<sup>(17)</sup>、二之丸下ノ段の東側堀石垣にかかる土居<sup>(18)</sup>、北惣門跡南側取付石垣にかかる土居<sup>(19)</sup>で、それぞれ断面調査が行われている。その結果、全て黄色の砂質土が分厚く約4mも盛土されていることが知られる。北惣門橋跡の調査では、橋台部分は地元で「ナメラ」と呼ぶ青灰や黄色の軟砂岩層を地盤としていることが分かった<sup>(20)</sup>。二之丸下ノ段の西側高石垣のラインが亀田山の丘陵裾と思われ、米蔵を設けた主要部は、東方へ向けて低平な遠浅な地形であったと考えられる。従って、山土の黄色砂質土を盛った可能性があるとしても中心部分は薄く、むしろ周囲の土居に分厚く盛られたものと考えられる。今後は土層断面調査を行い確認する必要がある。

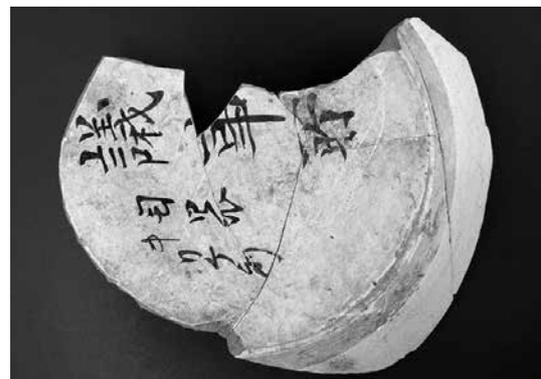
## (2) 遺物について

米蔵の外周に確認された排水溝(SD01, 02)から、正方形や三角形の壁塼が出土した。これは、絵図と比較すると米蔵の外壁の下部に設けられていたことが分かり、外観が復元できた。また、軒丸瓦や軒平瓦が出土しており、米蔵は本瓦葺きの建物であったことが知られる。

石製狐像が集中的に多数出土した。江戸時代には、北側の独立した尾根上に「城内稲荷神社」があったが、遠すぎる。絵図を見ると、米蔵と荻田居所間の高石垣寄りに「荻田稲荷社」が図示してある。これは、17世紀末、松江藩に配流された荻田氏が篤く信仰していたため建造された稲荷神社であるという。この稲荷社は、明治時代末頃に至り、前述の「城山稲荷神社」に合祀されているので、その折、いくらか廃棄されたのではないだろうか。しかし、重たいものなのに、どうして離れた場所に埋めたのだろうか疑問が残る。



「大坂瓦…」の刻印が押された平瓦



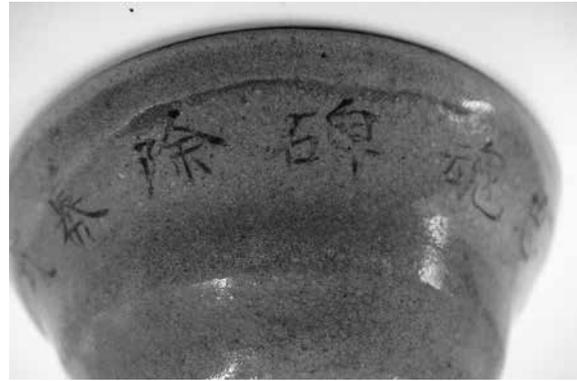
「議事所…」の墨書が書かれた瓶

江戸時代の陶磁器の変遷を見ても、殆んどが18世紀以降、幕末頃のものが多い。松江城始築時のものは見当たらなかった。このことをどう評価するのかは、今後の課題である。

幕末のものも多いが、それにも増して目に付いたのが、近代の陶磁器類である。すなわち、武徳殿など県の施設が設置された関係で、火鉢や土瓶に島根県御用達のものが多い。また、殿町にあった「議事所」関係の瓶などが出土しており、城山周辺の施設で使用された後、城山内の空き地に穴を掘って埋められたようである。いわゆる「廃棄土坑」が無数にあったと考えられる。



「縣廳」と書かれた土瓶



「忠魂碑除幕式記念」と朱書きされた酒杯

以上のように近世の絵図・文献史料に見られる建物施設が部分的ではあるが発掘調査によって確認できたことには大きな意義がある。また、近代になってからは公共施設として利用されたことも、出土遺物から裏付けられたところである。

こうした成果に基づいて、築城当初から設けられたと考えられる南蔵と東蔵については、昭和50年度（1975）に平面整備を行い見学に供している。米蔵の外観を模した説明板も設置した。全体的には都市公園の整備として浅い盛り土と張芝を施し、寄付を受けた松の若木が植樹された。

史跡松江城の曲輪の一つとしての理解と維持・活用のため、今後も多くの方に散策していただきたいものである。

#### 注

- (1) 松江城の城郭図では「外曲輪」の呼称が複数地区に記載したものが多いが、唯一『竹内右兵衛書つけ』では「二丸下ノ段」と呼ばれており、現在地区を特定する上からこの呼称、二之丸下ノ段が一般的に使用されているので、外曲輪（二之丸下ノ段）とした。
- (2) 岡崎雄二郎「松江城二の丸米蔵跡の発掘」（『季刊文化財第21号』1973年7月刊所収）、岡崎雄二郎「史跡松江城二之丸下の段遺構調査」（『季刊文化財第23号』1974年3月刊所収）
- (3) 山本清は当時国立島根大学文理学部教授、近藤正は当時島根県教育委員会社会教育課文化財保護主事、島田成矩は当時国立松江高専教授であった。
- (4) 越後騒動とは、延宝2年（1674）、越後高田藩の藩主松平光長の世継をめぐる、家老荻田本繁（主馬）と筆頭家老小栗正矩が意見対立し騒動となった。延宝7年（1679）10月、幕府の評定により本繁は子の民部、久米之助と共に松江・松平家三代藩主綱近のもとへお預けとなった。その後天和元年（1681）6月、5代将軍綱吉の裁決により、本繁は八丈島に流罪、子の民部、久米之助は元禄15年（1702）に赦免され母の住む武蔵国に引っ越した。
- (5) 松江市の東方、中海に浮かぶ火山島で今からおよそ19万年前に噴出した「大根島」を構成する火山岩で通称「島石」と呼んでいる。江戸時代以降、石垣や礎石に使用された。
- (6) 二之丸下ノ段では2点出土しているが、天守使用瓦でも複数確認された。いずれも平瓦の瓦当面中央部に

横方向に押印されている。大阪の難波宮跡調査事務所の黒田慶一氏のご教示によれば、手書きではなく刻印なので18世紀後半～19世紀代に製作されたものであるという。大阪市中央区の瓦屋町遺跡では同種のものが3点出土しているが、字体の太さが米蔵出土例のほうが細いので、別個体の刻印であろう。幕府の御用瓦師であった寺島家が瓦屋町に居を構え、膨大な量の瓦を生産していた。米蔵例は、大坂寺島家の中枢あるいは配下の瓦工の刻印であり、松江城城郭の瓦の修理・補充用に購入したものと考えられる。なお、「松江城天守修理工事報告書」では「大坂瓦屋太右衛門」とし、翻刻に違いがある。

- (7) 「松江城城郭施設の推移について」和田嘉宥（松江城研究2、2013年3月、松江市教育委員会所収）及び国立米子高専名誉教授の和田嘉宥氏のご教示による。
- (8) 出土した近世陶磁器の編年観は、「九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—」（2000年2月、九州陶磁学会）に拠る。具体的には、大田市教育委員会石見銀山課特任講師西尾克己氏、財団法人米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室主任調査員佐伯純也氏、公益財団法人松江市スポーツ振興財団埋蔵文化財課調査員の徳永桃代氏のご教示による。
- (9) 輪積み成形の袋形や筒型（円柱状）のいずれも見られない。板作り成形のコップ形（円錐台状）のものが2点出土している。底部は外側から粘土塊を充填している。小川望氏編年表（「松江城下町遺跡（殿町287番地・279番地外）出土の焼塩壺について」阿部賢次〈松江城下町遺跡（殿町287番地・279番地外）発掘調査書〉中掲載）によれば、Ⅲ期に該当し、Ⅱ-1bに分類され、18世紀後半頃の制作になる。
- (10) 寛延3年（1750）に開窯した布志名窯は、茶陶で有名だが窯によっては日常雑器も焼いた。雲善窯は茶陶器を焼いているが、雲寅窯は雑器も焼いている。出土品には、幕末から明治にかけての黄色釉をかけた中碗、皿、鉢、浅鉢、植木鉢、土瓶の蓋、火鉢が認められる。
- (11) 二之丸下ノ段に所在した島根県関係の建物施設には、武徳殿（明治44～昭和44）、島根県自治会館（昭和21～昭和36）、島根県立図書館（昭和21～昭和43）があった。「鳴根縣廳」や、上記の武徳殿などの施設で使用されたものが廃棄されたものであろう。
- (12) 『松江市誌』（1941年、松江市刊）の維新以後768、769頁によれば、明治2年（1869）5月2日、松江藩は近代的な新制度の導入に当り、末次本町の三好屋の湖亭に「議事所」を建てて毎月16の日を定めて（後5と10日に変更）会議を開き、何事にも用捨なく建言することを許した。明治3年2月、議事所は殿町の県庁前にあった修道館に移し、ひたすら下情の上達を図ったという。議事所としての機能はおそらく明治4年の廃藩置県まで存続していたと思われる。修道館の建物は、明治40年3月には南田町へ移転したので、建物の整理に際して近隣の城山内にごみ穴を掘って廃棄されたものと考えられる。
- (13) 二之丸下ノ段に警察官忠魂碑が建立されたのは、大正13年（1924）のことである。その除幕式が行われた9月（日付は不明）に記念品として楽山焼の酒杯が配られたと考えられるが、完形品が同地で出土した理由は不明である。なお、忠魂碑は現在もある。
- (14) 『史跡松江城整備事業報告書』（第2分冊：調査編）2001年3月、松江市教育委員会
- (15) 『近世瓦の研究』山崎信二、2008年11月、同成社刊
- (16) ⑧の『雑社荻田稻荷神社修繕目論見及入費支出方法書』（明治時代、城山稻荷神社蔵）に拠る。
- (17) 『史跡松江城整備事業報告書』（第3分冊：石垣修理）2001年3月、松江市教育委員会
- (18) 『史跡松江城石垣修理報告書』2007年3月、松江市教育委員会
- (19) 『史跡松江城 昭和60年度—保存修理事業報告書—1986年3月、松江市教育委員会
- (20) 『史跡松江城公園周辺整備事業 北惣門橋復元工事概要』1994年11月、松江市、松江市教育委員会

（おかざき ゆうじろう 松江城部会専門委員）



# 大崎下屋敷の拡張・整備と建築に関する考察

和田嘉宥・安高尚毅

## はじめに

松江藩七代藩主松平治郷は文化2年(1805)、55歳になって杜甫の詩を引用しながら、人生最終の目標のために隠居を決意し、不昧を号し大崎に下屋敷を営み、茶苑を設け、以来、茶禅一味を楽しみ、文政元年(1818)に没した。大崎下屋敷の茶苑は「東都随一の楽園」と称されてはいたが、嘉永6年(1853)に幕府が公収し、鳥取藩(池田家)が拝領(抱地は引続き松江藩が所有)した。鳥取藩は品川沖の台場構築に伴いこの下屋敷を陣屋として使用し、鉄砲角場を設けたりして、文久元年(1861)には幕府に返上する。こうした変化の中で、住居並びに独楽庵を始めてとする茶室などの建物も取り払われてしまった。大崎下屋敷の推移や拡張・整備については、その概要を既に報告<sup>(1)</sup>しているが、大崎下屋敷の拡張・整備の具体的な内容及び住居部分の構成については詳らかにされていなく、大崎下屋敷の全体構成、広大な屋敷の中の建築群及び個々の建築の特色などについても、あまり明らかにされていなかった。

本稿では、まず、歴史史料を通して大崎下屋敷がどのように拡張・整備され、また、維持されていたか、その動向を確認し、つづいて、絵図・建物図などの史料を通して大崎下屋敷にどのような建物が設けられていたか確認し、特に西館、東館と称される不昧と正室彰姫の住居部分ではどのような建物が作られ、拡張・整備が具体的にどのように行われていたか考察する。特に、大崎下屋敷の配置構成、西館の平面構成、西館及び東館周辺の建築物については、「大崎御屋敷分間惣絵図面」(天保9年)を通して考察し、大崎下屋敷の建築的特徴を明らかにしたい。さらに、大崎下屋敷の結末についても言及しておく。

## 1. 大崎下屋敷の拡張・整備について

### (1) 歴史史料を通してみる大崎下屋敷の推移

敷地の取得並びに普請に関する事柄を上げてみる。

松平出羽守(治郷)は、享和3年(1803)12月28日に、5年前の寛政10年(1798)に拝領した戸越下屋敷3,525坪と、大崎の出羽上山藩松平山城守の拝領屋敷8,437坪と相対替<sup>(2)</sup>している。

『列士録』『矢嶋専七』<sup>(3)</sup>には「文化元年六月 大崎御屋敷御普請地平均元方御用懸被仰付割方兼勤之心得を以相勤旨被仰渡之」とあり、「馬場佐々右衛門/代々年数書」<sup>(4)</sup>には「文化元年十一月十六日大崎御屋敷普請御用被仰付候」とあるが、文化元年(1804)には土地の造成が行われ、住居などが造られ始めていることがわかる。

『松江藩出入捷覧』<sup>(5)</sup>には「大崎御普請御入用/文化一子ヨリ同四卯マデ 四所務メ/金23,341両此分御蔵払」と記されているが、これによって、文化元年(1804)より同4年(1807)にかけて、松平山城守と相対替した屋敷地で建築や庭園の整備が行われたことが確認できる。

文化5年(1808)閏6月29日には旗本大久保家の大崎拝領下屋敷3,535坪と四ツ谷仲町の拝領下屋敷500坪を相対替<sup>(6)</sup>して大崎下屋敷が拡張されているが、これは、享和3年(1803)に得た屋敷地の南に隣接する土地である。大崎拝領屋敷は四ツ谷仲町拝領屋敷の7倍の広さである。『松江藩出入捷覧』には「大崎御隣屋敷四ツ谷御中屋敷ト御替地御間金其外板塀朝鮮垣カラ堀番小屋下水出来等御入用

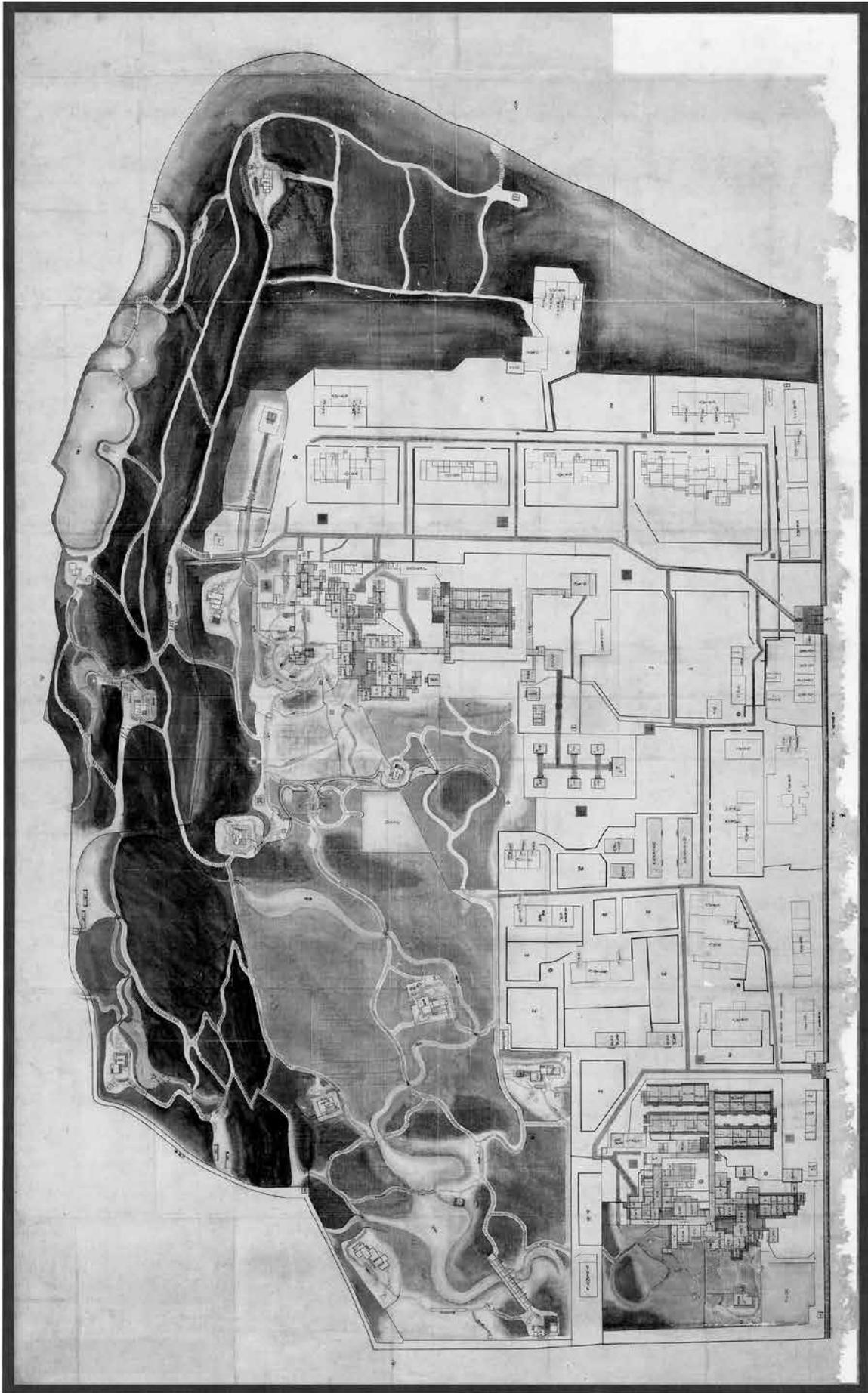


図1 「大崎御屋敷分間惣御絵図面」(『松江市史』史料編11「絵図・地図」折図(図38)参照)

／908両」(文化5～6年)とあるところから、この時は相対替とはいいながらも藩金が抛出されていることが確認できる。

また『松江藩出入捷覧』には「大崎御屋敷御殿向御修復長局并御土蔵新建／1,129両」(文化6～7年)、「大崎御屋敷御殿向御修復 御土蔵新建／463両」(文化7～8年)とある。当時、屋敷地の拡張に伴い住居部分は修復され、長局並びに土蔵などの附属施設も新しく建てられていることが確認できる。

文化8年(1811)5月2日には赤坂御門外の400坪を4者5ヶ所で相対替<sup>(7)</sup>し、品川大崎の保科下総守下屋敷3,000坪を取得している。これらを併せると大崎下屋敷は14,972坪、これに北西廻りの抱地4,966坪余を加えると、総坪数は凡そ2万坪となる。『松江藩出入捷覧』には「大崎御隣屋敷買上ヶ代／1,100両」(文化7～8年)とあるので、この時も相対替とはいいながらも藩金が抛出されていることがわかる。

『列士録』『岡重左衛門』には「文化八年六月九日 大崎御屋敷 大御前様御殿御普請御用被仰付」とあり、また、『松江藩出入捷覧』には「大崎御屋敷エ大御前様御引移ニ付大奥御殿其外所々新建御入用／4,632両」(文化8～9年)、「右同断御御殿向所々修復」(同年)とある。このことから、当時、下屋敷の拡張が完了した後、御前様(正室彰姫)の大崎下屋敷の引越に併せて東館の建築工事が行われていることがわかる。

その後、『列士録』『安藤傳六』(御大工)には「(文化11年9月6日)大崎御屋敷御用格別心配就相勤為御褒美従御隠居様銀二両被下之」とあり、『松江藩出入捷覧』には「大崎御屋敷内所々御住居替御修復等御入用／316両」(文化13～14年)とある。この頃も、住居廻りの修復等が行われていることがわかる。

『松江藩出入捷覧』には、その後も「御仕立所御住居替且大崎御屋敷所々御修理／295両」(文政2～3年)「大崎御屋敷内御殿長局所々御修理／233両」、(文政4～5年)「彰楽院様御殿屋根瓦置ニ相成候御入用／270両」(文政5～6年)、「彰楽院様御寝所新建長局新建御入用／872両」(文政7～8年)、「大崎御屋敷御武具方御土蔵出来御入用／220両」(同年)などと記載されている。また、『列士録』『安田重右衛門』には「文政八年二月廿五日 大崎御屋敷彰楽院様御殿御普請御用精出相勤ニ付為御褒美御目録百疋被下之」とある。不昧が歿したのは文政元年(1818)4月であるが、不昧歿後も住居部分の修復は行われていることがわかる。それは主として正室彰姫の住居(東館)の修理や屋根の葺替え等であったが、武具用の土蔵等も新しく建てられていることがわかる。

ところで、『松江藩出入捷覧』では「大崎御屋敷西御殿御寝所新建御入用 386両」(文政8～9年)を最後に大崎下屋敷に関する記述は見られないが、一閑庵堀丹波が大崎園を訪れた文政12年3月に園を案内した坂本雄峰は、『列士録』を見ると、当時、「御茶頭之心得」で「御庭御用向」を勤めている。庭園や茶室等の維持管理は引続き行われていたことがわかる。

彰楽院(彰姫)が歿した文政12年(1829)後も、不昧が集めた道具類を保管する宝蔵には守護職が置かれ、道具類の虫干しも天保4年(1833)までは毎年行われていたことが松江藩士の『列士録』をつぶさに見ることによって確認できるし、大崎下屋敷は、嘉永6年(1853)に幕府に公収されるまで、建物の維持管理は継続されていたと思われる。<sup>(8)</sup>

## (2) 絵図・建築図面を通して見る大崎下屋敷の変化

大崎下屋敷を描いた絵図や図面には「大崎御屋敷分間惣御絵図面」<sup>(9)</sup>、「大崎御屋敷明御殿住居絵図面」<sup>(10)</sup>、「江戸大崎御絵図」<sup>(11)</sup>、「御姫様御殿」<sup>(12)</sup>、「江戸大崎御屋鋪絵図」<sup>(13)</sup>、「品川領下大崎屋敷之図」<sup>(14)</sup>などがあるが、ここでは「大崎御屋敷分間惣御絵図面」、「大崎御屋敷明御殿住居絵図面」、「江戸大崎御絵図」、

「御姫様御殿」を主として取り上げる。

「大崎御屋敷分間惣御絵図面」(図1)は全体図で大崎下屋敷の全容をよく伝える図面である。この図については3項で詳細に考察するので、その概要を述べるだけにしておく。

北から西にかけて回遊式の庭園が描かれており、庭園には「紅葉台」「御稽古所」「独楽庵」「清水茶屋」「一方庵」「富士見台」「眠雲」「窺原」「蔭々閣」「為楽庵」「松暝」といわゆる11の茶屋、そして「稲荷社」「御像堂」「仲(沖)天橋」「四阿家」などが描かれている。

住居は、中央部分が西館で、不昧の住いと附属の建物、宝蔵(7棟)、虫干所(2棟)などがあり、東南部分が東館で、正室彰姫の住いと附属の建物がある。そして西館と東館の周辺には御貸長屋や土蔵などが建ち並び、花壇や畑もある。東面は表通りに面し、北には西館に通じる表御門、南には東館に通じる御裏門がある。

なお、本図には「天保九戊戌年」と記されているが、貼紙に記された名前「板倉喜右衛門」「小倉源左衛門」も『列士録』で確認できる<sup>(15)</sup>ので、本図が天保9年(1838)頃に描かれたものであることがわかる。

「大崎御屋敷明御殿住居絵図面」(図2)は西館の土蔵、虫干所を除いた住居部分を描いた図である。不昧の御居間と独楽庵が敷瓦の廊でつながっており居間の横には御常汁(幽月軒)も描かれているが、その他の建物配置は図1の西館部分と同じである。本図は「明御殿」と明記されているところから、不昧歿後に描かれたものと見られる。

「江戸大崎御絵図」(図3)は西館の施設全体を描いたものである。御居間や台所廻り、土蔵7棟、虫干所2棟は図1とほぼ同じであるが、御居間の南東部分、御寝室を含む御座敷廻りは異なっている。また、玄関の東には、複数の建物が描かれているが、長局以外は薄紙が貼られている。

薄紙の下をよく見ると、長局の南には御座敷を中心とする建物が、また、北東には御台所、御居間を中心とする建物が描かれている。

御居間の東側にも貼紙があり、その下には、独楽庵(朱書)、御敷かわら、物置が描かれている。

この図の貼紙から、西館は度々増改築が行われていたとわかる。この図の制作年は不明であるが、不昧が西館に住み始めた当時のものと考えられる。<sup>(16)</sup>

「御姫様御殿」(図4)は図面中央部に貼紙「御姫様御殿」があるところからこの図名になっているが、図面の南端には「此方保科屋布」、東端には「表御門通り」と記されている。また、図面に描かれている建物の配置構成は図1の「大崎御屋敷分間惣御絵図面」の東館部分と極めて類似している。これらのことから、本図は大崎下屋敷の東館を描いた図であることが確認できる。ただ、「大崎御屋敷分間惣御絵図面」と異なる部分が所々に見られるし、貼紙「御姫様御殿」がある東側の建物の間取りは基本的に同じだが、向きが90度回転している。

なお、「御姫様御殿」の「御姫様」は不昧の最後の子である四女幾千姫を指していると思われるが、幾千姫が国元から大崎下屋敷に移るのは不昧が屋敷で生活を始めた文化3年(1806)3月11日からほぼ1ヶ月後の4月23日である。<sup>(17)</sup>

松江藩が保科下総守下屋敷を取得したのは文化8年(1811)であり、御前様(正室彰姫)が下屋敷に移り、東館の整備されるのは文化8~9年(1811~12)であるところから、本図は東館整備当初の間取りを伝える図面と推察できる。

「江戸大崎御屋敷鋪絵図」と「品川領下大崎屋敷之図」は同じ内容の絵図面で、これらには共に、大崎苑の茶室及び不昧が居間にしていた建物等は描かれていない。

「江戸大崎御屋敷鋪絵図」には「嘉永六丑年被召上候節之扣」と記されているが、松江藩の大崎下屋敷が幕府に公収されて鳥取藩に移ったのは嘉永6年(1853)である。「品川領下大崎屋敷之図」には制作

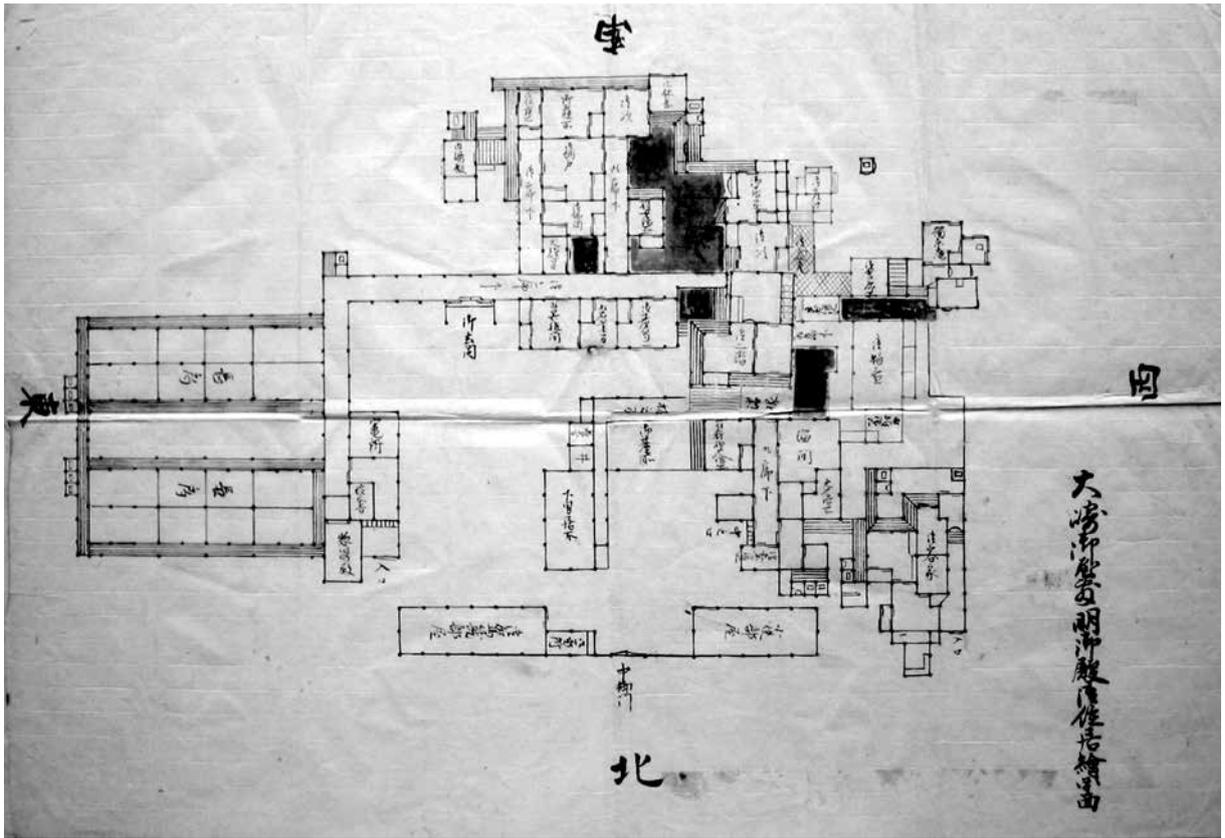


図2 「大崎御屋敷明御殿住居絵図面」(野津敏夫家蔵)

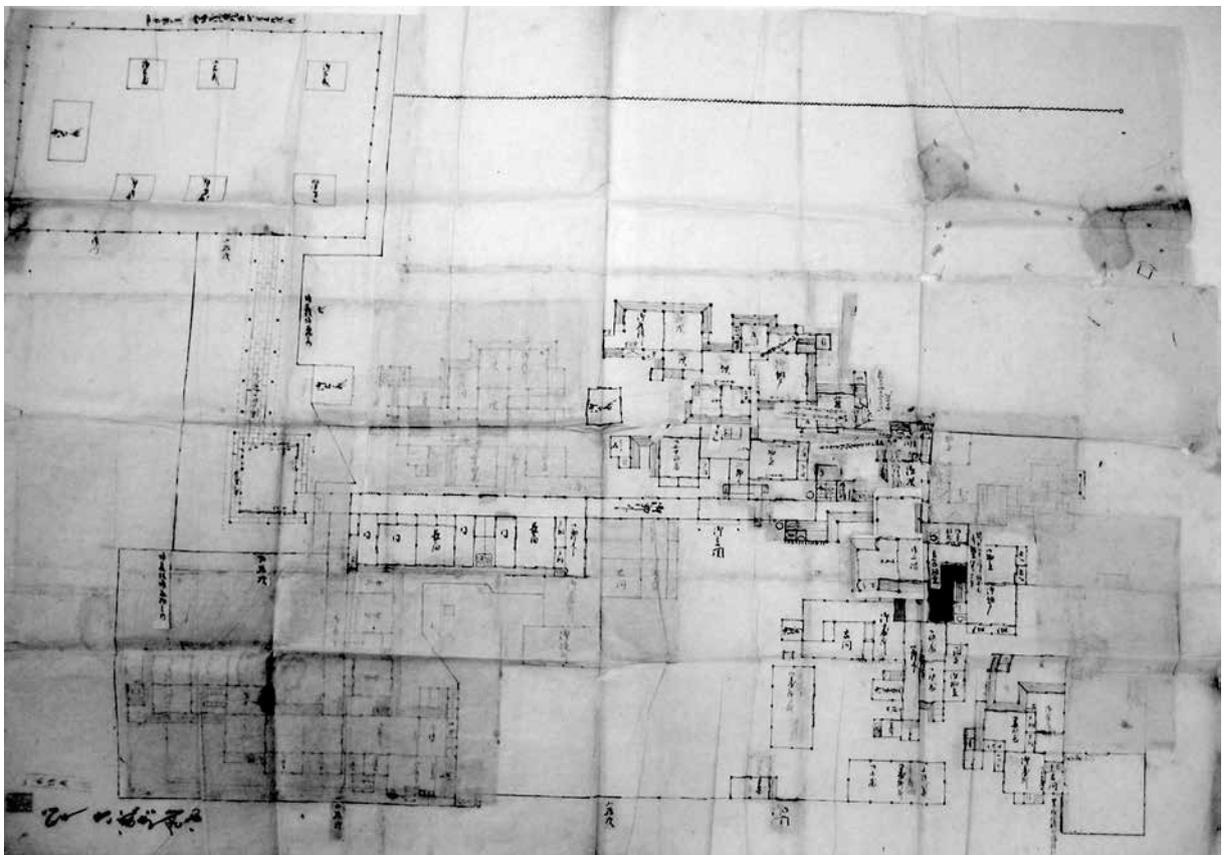


図3 「江戸大崎御絵図」(島根県立図書館蔵)

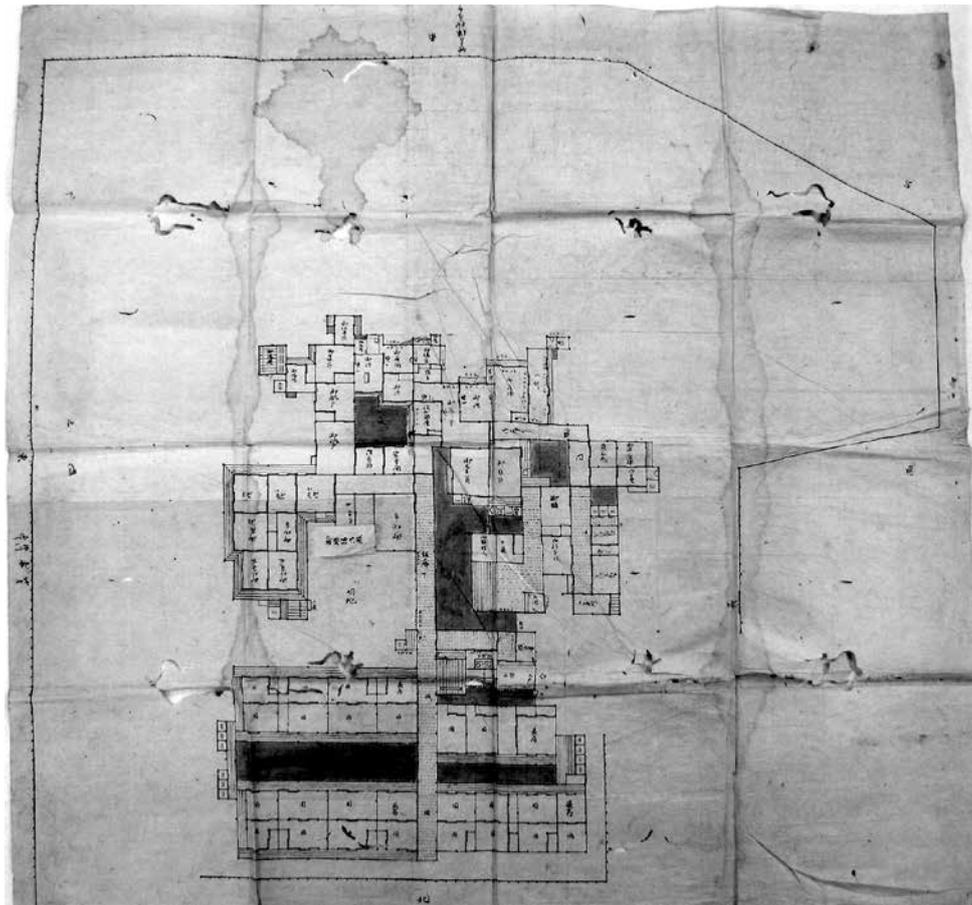


図4 「御姫様御殿」(島根県立図書館蔵)

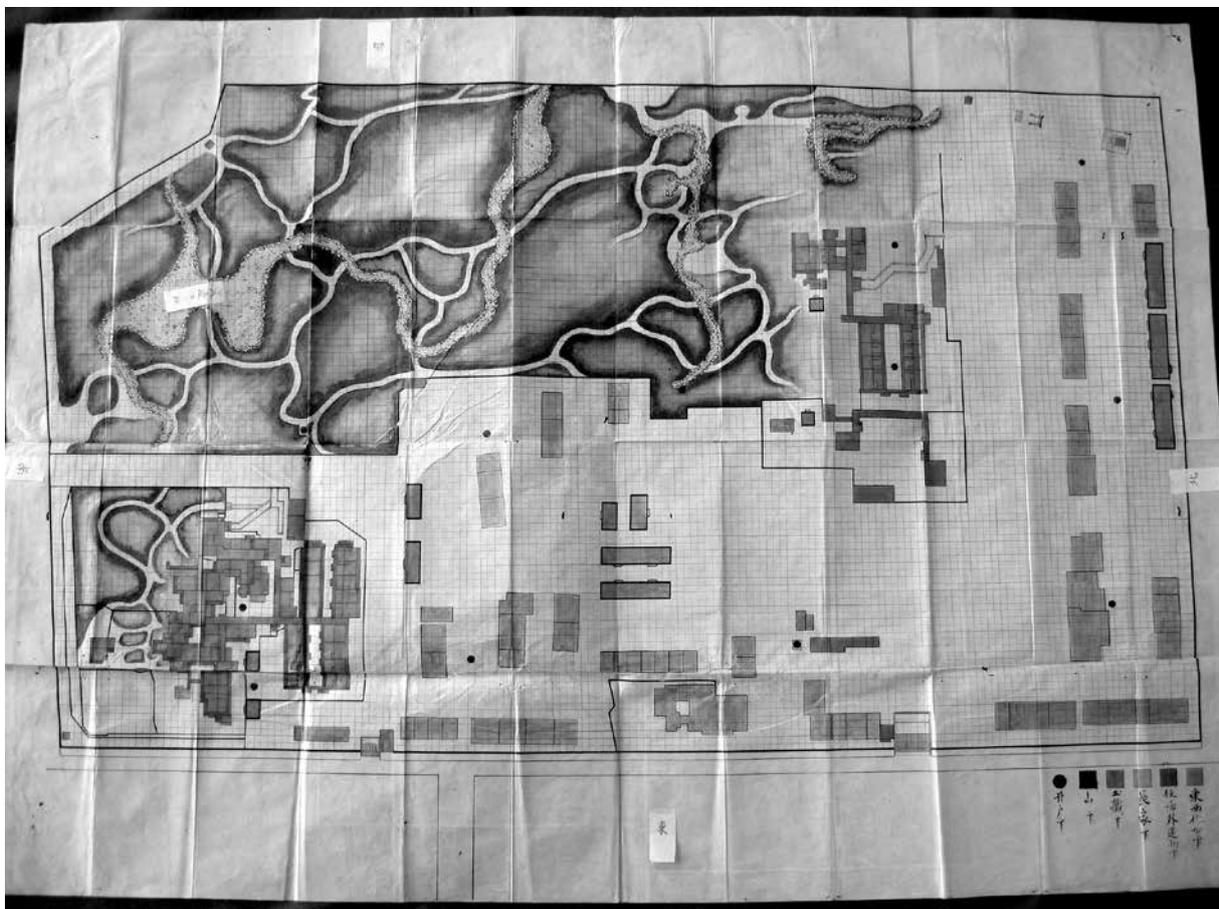


図5 「品川領下 大崎屋敷之図」(鳥取県立博物館蔵)

年は明記してないが、図の内容が全く同じところから、これら二つの図は共に引き渡しの際に描かれた絵図であると見なされる。ここでは「品川領下大崎屋敷之図」（図5）を添付しておいた。

### (3) 大崎下屋敷の拡張・整備に関する考察

不昧が営んだ大崎下屋敷は御抱地を含めた約2万坪の敷地であるが、松山山城守拝領屋敷を始め3度（享和3年、文化5年、同8年）の相對替によって松平出羽守が順次取得し拡張された屋敷地である。

図6は『御府内場末往還其外沿革図書』<sup>(18)</sup>に記載されている図面を元に制作した大崎下屋敷の拡張図を「大崎御屋敷分間惣御絵図面」に重ねた図である。これによって、大崎下屋敷の住居部分と庭園等が屋敷地の拡張に伴い、段階的に整備されたことが、おおよそ確認できるだろう。

文化元年（1804）には土地の造成が始まり、同2年（1805）には「御屋鋪普請」が行われているが、不昧は同3年（1806）3月13日に大崎に移っているため、この時には西館の普請もほぼ完了していただろう。同年5月15日には「三畳台目 船越好」と「四畳半」で席開きの茶会<sup>(19)</sup>が催されているから、この時には、不昧が最も好んで使用した独楽庵も出来ていたはずである。<sup>(20)</sup>

なお、同年4月23日には、松江で誕生した不昧の四女幾千姫（文化2年6月13日誕生、生母侍女阿勝）が早くも下屋敷に移っているが、幾千姫が下屋敷に住みはじめる文化3年（1806）には、下屋敷の南側の敷地は、まだ大久保家拝領屋敷であり、保科下総守の屋敷地であって、東館はまだ出来ていない。このことから、1歳にもならない幾千姫は、まずは西館に入り、ここで育てられることになったと思われる。<sup>(21)</sup>

下屋敷の普請は引続き行われているが、『松江藩出入捷覧』及び『列士録』の記録を通してみると下屋敷の整備は文化4年（1807）には一先ず終わったと考えられる。ただ、これは享和3年（1803）に取得した屋敷地（北側三分の二、松平山城守旧地分）及び御抱地に限られているから、この時点では、西館を中心とする施設及び庭園の整備であったことが確認できる。

図3の東北部分の貼紙下の住棟と図4の貼紙「御姫様御

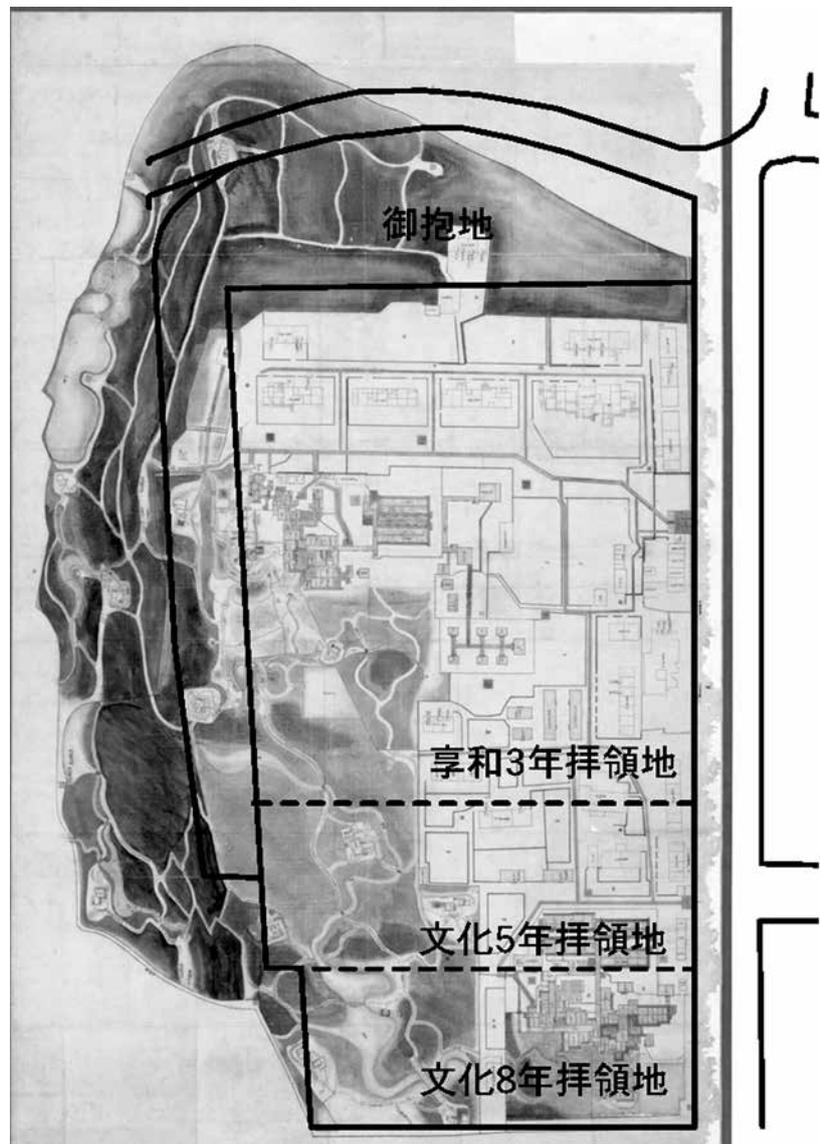


図6 大崎下屋敷拡張図

殿」の東の住棟が同じ間取りであることからみて、図4の貼紙「御姫様御殿」の東の住棟は、はじめ、西館の北東部分にあった住棟と見られる。このことから、当時、幾千姫にあてがわれた住居は西館の東北部にある「御居間」を中心とする住棟であったと見なしてよいだろう。<sup>(22)</sup>

文化5年(1808)年9月17日には「清水妙喜庵」で名残の茶会<sup>(23)</sup>が行われているので、この頃には、御抱地を含む庭園の整備も相当進行していたと思われる。

同年閏6月29日には旗本大久保家拝領屋敷を取得しているが、これで大崎下屋敷は全体の5分の4程度となる。この拡張後、同6～7年(1809～10)に西館では住居部分の修復や長局、土蔵の新築が行われていると推察できる。

文化8年(1811)には1月19日から3月11日までに「還暦賀茶」が16会も催されている<sup>(24)</sup>が、この頃には、茶室の増設を含めた庭園の整備は相当進行していたと推察できる。

「還暦茶会」を終った後、同年5月2日には南に隣接する保科下総守下屋敷が取得されているが、御前様(彰姫)が同年中に大崎東館に引っ越している<sup>(25)</sup>ところから、東館の普請は、この頃、本格的に行われていたと推測できる。幾千姫が東館に移り共に生活するようになったのもこの頃だろう。図4はこの頃の東館の姿を表わしたものである。記録はないが、この頃、東館西側の庭苑の整備に併せて茶室「松暝」「為楽庵」や「仲天(冲天橋)」の普請も行われたと思われる。

文化11年(1814)11月27日には西館の不昧の居間に隣接する「幽月軒」の席開き<sup>(26)</sup>が行われている。この頃も住居の修復に併せて茶室や庭園の整備も引き続き行われていたようである。

文政元年(1818)に不昧は逝去するが、その後も『松江藩出入捷覧』等から長局の修復、武具方土蔵の新築、西館の改修が行われていることが確認できるし、また、不昧が蒐集した茶器道具類は宝蔵に納められ、虫干しも毎年行われ、大切に保存されていたことも『列士録』等によって確認できる。<sup>(27)</sup>

### 3. 大崎下屋敷の配置構成及び建築に関する考察

大崎下屋敷は松平不昧の隠居にあわせ文化4年(1807)にひとまず整備を終えるが、その後も大規模な建て替えが行われていることが知られている。ここでは、敷地全体が描かれる「大崎御屋敷分間惣御絵図面」(図1)をもとに大崎下屋敷の建築構成を述べていきたい。この絵図は大崎下屋敷の全容を表した平面図で、御殿の西館と東館、および、11の茶室の平面も描く。これら以外にも「御貸長屋」や「畑」などの配置がわかる。庭園が詳細に描かれており、池・路地・石の配置・橋・空堀などが把握される。4色の色が使用され、緑色が植栽、青色が水、灰色が石畳を表すが、黄色が何を表すかは凡例が示されないため不明である。天保9年(1838)は不昧没後20年を経えており、不昧の理想をそのまま示しているとは考えにくい。本絵図が最も敷地全体の詳細の知ることが出来ることから本絵図をもとに考察を行う。

#### (1) 大崎下屋敷の配置構成

絵図からは屋敷地周辺の状況を知ることが出来ないが、『御府内場末往還其外沿革図書拾六下』所収の「當時之形」(弘化3年(1846)) (図7)により知ることが出来る。これによると北側は道路に接し、南側は上下大崎村北品川宿入会の畑となっており、西側は上下大崎村北品川宿入会畑と北品川宿百姓屋敷が接し、その西側に道路が通される。東側は道路を挟んで北品川宿の畑が広がる。

敷地の入口は東側北に表門、南に裏門を設ける。この他に北側に1ヶ所、西の道路に接する場所に1ヶ所、南側の上下大崎村北品川宿入会の畑に向けて1ヶ所の門を設ける。敷地周囲は塀で囲われていたと考えられ、東側は練塀と考えられる表現で描かれ、北側は茶色の線で描かれる。西側は「朝鮮垣」と

記され、南側は黒線に等間隔に点を打つ表現で描かれる。

主となる入口は「表御門」である。道路からは3段の石段を登ると棟行4.5間の門があり、北側に1.5間の開き戸が2ヶ所設けられる。正面左手には「御門番所」が設けられ、長屋が付属する。敷地内には主要建物として西館と東館があり、西館で不昧が生活をし、東館で正室彰姫と幾千姫が生活した。

「表御門」からは幅広の石畳が延びており、これがメインの動線として計画されたと解釈される。幅広の石畳は「表御門」から生垣で囲われた空間を西に突き抜け、西館の入口である「中御門」に至る。西館と幅広の石畳とは敷地南を囲う塀と同じ表現で描かれた塀で仕切られる。さらに幅広の石畳は「稻荷社」と回遊式庭園に接する場所まで続く。また、西館の「御客家」とその裏口にも幅広の石畳は延びる。東館へは西館へ向かう途中の「畑」の間に幅広の石畳が通され、二度、鍵の手に折れて、「裏御門」から西に延びる幅広の石畳に繋がる。そこから西に曲がると東館入口の門に至る。西館と東館を繋ぐ南北に走る石畳の両脇には「御貸長屋」「畑」「御土蔵」「御畳蔵」「御供待・御馬建」「御厩」「御武具方御土蔵」「御納戸御土蔵」「御武具方会所・同所細工所・御貸長屋」「仕込蔵」「東御殿御土蔵」等が配置される。畑と長屋は生垣により囲われている。また、「表御門」から西館へ延びる石畳の北側にも生垣により囲われた畑と長屋が配置され、中央辺りに「豆腐屋」と記載される建物が配置されていることが注目される。敷地の西側は回遊式庭園となっており、敷地のおよそ半分を占める。回遊式庭園は塀によって大きく北と南の2ゾーンに分けられている(図8)。北のゾーンには「紅葉台」「清水」「四阿家」が配置され、蓮池が大きく取られている。南のゾーンには「御稽古所(直入舎)」「独楽庵」「一方庵」「富士見台」「四阿家」「窺原」「蒨(簇)々閣」「眠雲」「御像堂」「為楽庵」「松暝」「冲天(冲天橋)」が配置される。回遊式庭園の緑色は濃い色と薄い色で表現され、北のゾーンは濃い緑がほとんどである。南のゾーンは東側が薄い緑色となっている。濃い緑は樹木が密集していたことを表していると考えられ、敷地西側が鬱蒼とした森であったと考えられる。また、東側の道路から東館に直接通じる「裏御門」脇には「馬建・御供待・御駕籠部屋」が配置される。

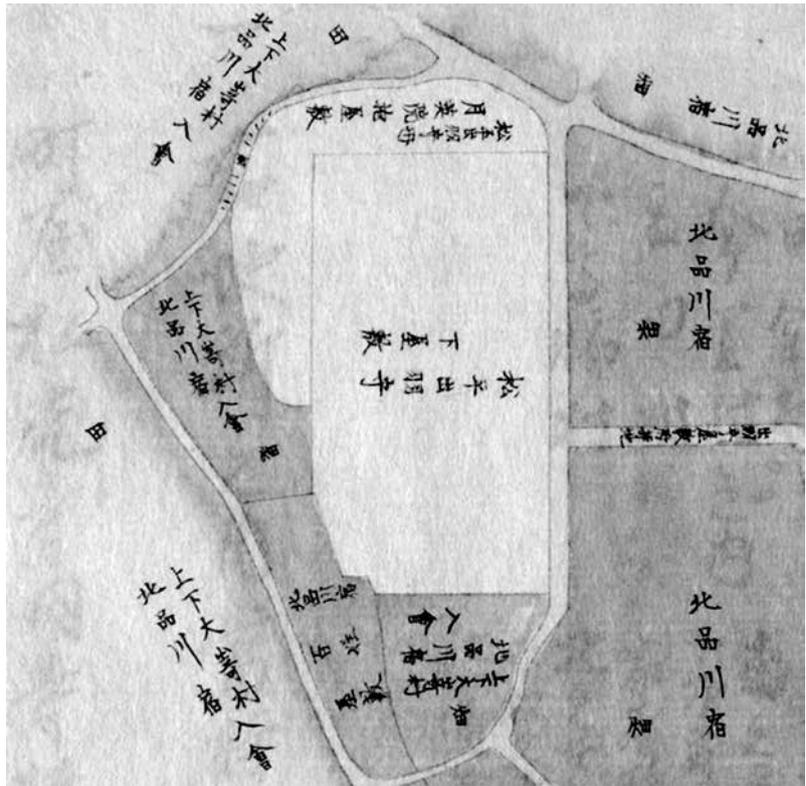


図7 「當時之形」(部分) (国立国会図書館蔵)

敷地南を囲う塀と同じ表現で描かれた塀で仕切られる。さらに幅広の石畳は「稻荷社」と回遊式庭園に接する場所まで続く。また、西館の「御客家」とその裏口にも幅広の石畳は延びる。東館へは西館へ向かう途中の「畑」の間に幅広の石畳が通され、二度、鍵の手に折れて、「裏御門」から西に延びる幅広の石畳に繋がる。そこから西に曲がると東館入口の門に至る。西館と東館を繋ぐ南北に走る石畳の両脇には「御貸長屋」「畑」「御土蔵」「御畳蔵」「御供待・御馬建」「御厩」「御武具方御土蔵」「御納戸御土蔵」「御武具方会所・同所細工所・御貸長屋」「仕込蔵」「東御殿御土蔵」等が配置される。畑と長屋は生垣により囲われている。また、「表御門」から西館へ延びる石畳の北側にも生垣により囲われた畑と長屋が配置され、中央辺りに「豆腐屋」と記載される建物が配置されていることが注目される。敷地の西側は回遊式庭園となっており、敷地のおよそ半分を占める。回遊式庭園は塀によって大きく北と南の2ゾーンに分けられている(図8)。北のゾーンには「紅葉台」「清水」「四阿家」が配置され、蓮池が大きく取られている。南のゾーンには「御稽古所(直入舎)」「独楽庵」「一方庵」「富士見台」「四阿家」「窺原」「蒨(簇)々閣」「眠雲」「御像堂」「為楽庵」「松暝」「冲天(冲天橋)」が配置される。回遊式庭園の緑色は濃い色と薄い色で表現され、北のゾーンは濃い緑がほとんどである。南のゾーンは東側が薄い緑色となっている。濃い緑は樹木が密集していたことを表していると考えられ、敷地西側が鬱蒼とした森であったと考えられる。また、東側の道路から東館に直接通じる「裏御門」脇には「馬建・御供待・御駕籠部屋」が配置される。

## (2) 大崎下屋敷の西館の平面構成

西館は「中御門」を潜ると前庭が拡がり、左手には「御門御番所」と「御駕籠部屋」が、右手には「小夫御番小屋」「御物置」が配置される。石畳を進むと「御玄関」に繋がる。「御玄関」は式台玄関となっており、それを上がると東西に延びる廊下が走る。廊下西側南に「御寝所」「御仏間」「御休息」「御湯殿」が配置される。これらに伴い「御物置」「役女詰所」「女中休息所」が付随する。これらの廊下を挟

んだ反対側に「御服之間」「御右筆ノ間」「御臺筥」が配置される。私的 inward の空間が配置されていることが把握される。廊下の西の突き当たりには「御居間」「御次」が配置される。「御次」には階段が描かれていることから2階建であったことがわかる。また、「御次」の西面は独楽庵に通じている。「御次」の北側には「御膳所」「御末」「御料理人」「下男」「中通部屋」「仕込蔵」が配置される。「仕込蔵」には階段が描かれていることからこちらも2階建であったことがわかる。部屋名が記載されていないが、竈が描かれている部屋が台所であると考えられる。さらに北側に「溜り」「元々詰所」「溜り」「小使居所」「錠前番」「行燈部屋」が広がる。「溜り」「小使居所」の間に階段が描かれていることからこちらも2階建であったことがわかる。奥向きの空間が配置されていることが把握される。一方、「御玄関」が付く御廊下南には「長局」の長屋があり、こちらにも奥向きの空間が配置される。

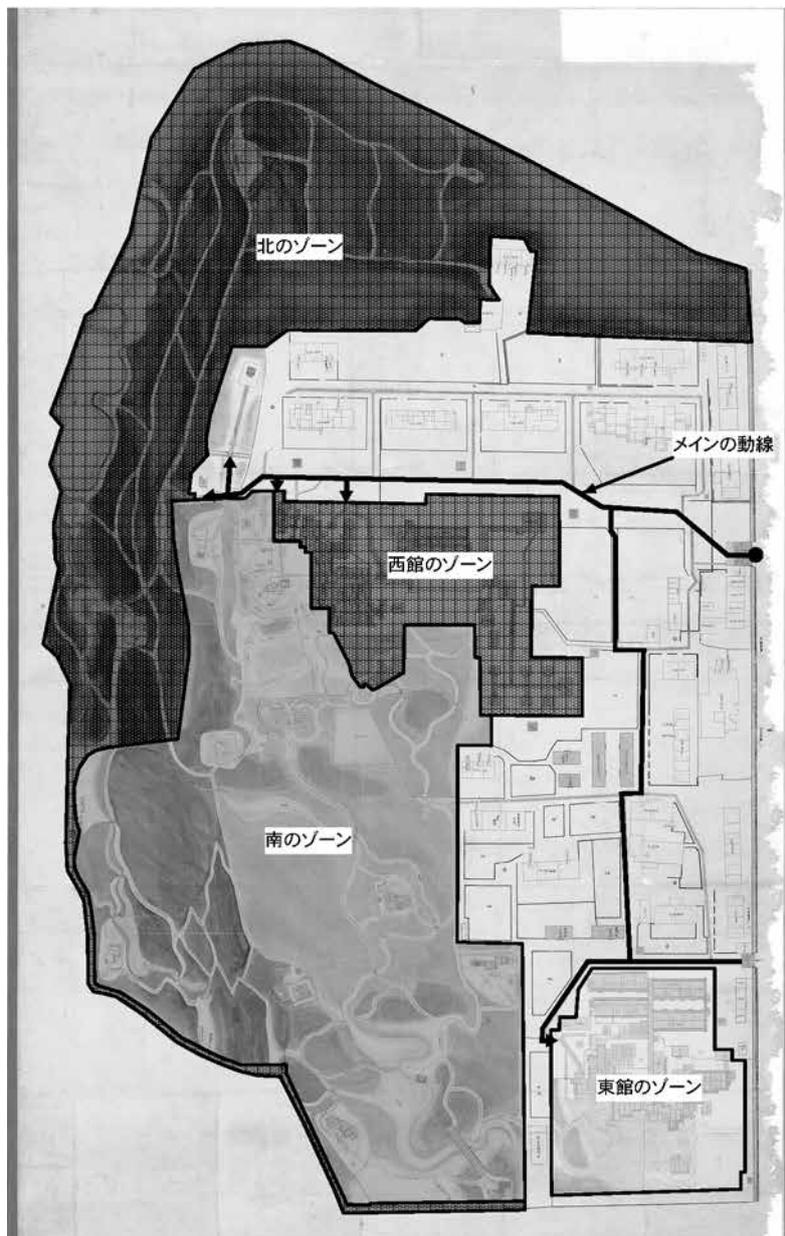


図8 大崎下屋敷ゾーニング図

### (3) 大崎下屋敷の東館の平面構成

東館は裏御門から通じる中門を潜ると前庭が広がり、左手には番所と「御駕籠部屋」「小使非番部屋」が配置され、石畳を進み「御玄関」に至る。「御玄関」は式台玄関となっており、西館よりも式台を広くとる。「御玄関」に接して「御使者ノ間」「御賄詰所」があり、それらに接し「奥御家老詰所」がある。その向こうに「御廊下」が通される。「御廊下」を南に進むと、「入側」付きの「御座敷」と「御次」「役女詰所」が配置され、公的表向きの空間が配置されていることが把握される。これらの廊下を挟んだ反対側に「御詰所」「御臺筥」「三畳」が配置される。これらの北側に「御末」「御廣間詰所」「中通」「御料理人」「町人溜り」「下男部屋」「元々詰所」「行燈部屋」「小使當番部屋」が配置され、さらに「土間」を隔てて「錠前番」「炭部屋」が配置される。部屋名が記載されていないが、竈が描かれている部屋が台所であると考えられる。奥向きの空間が配置されていることが把握される。「御座敷」の東には「御休息」「御居間」「御物置」「御次」「御水家」「御囲(茶室)」「御新座敷」が配置され、さらに東に「御寝所」「御新座敷」「御上り場」「御湯殿」「御仕舞所」が配置され、私的 inward の空間が配置されている

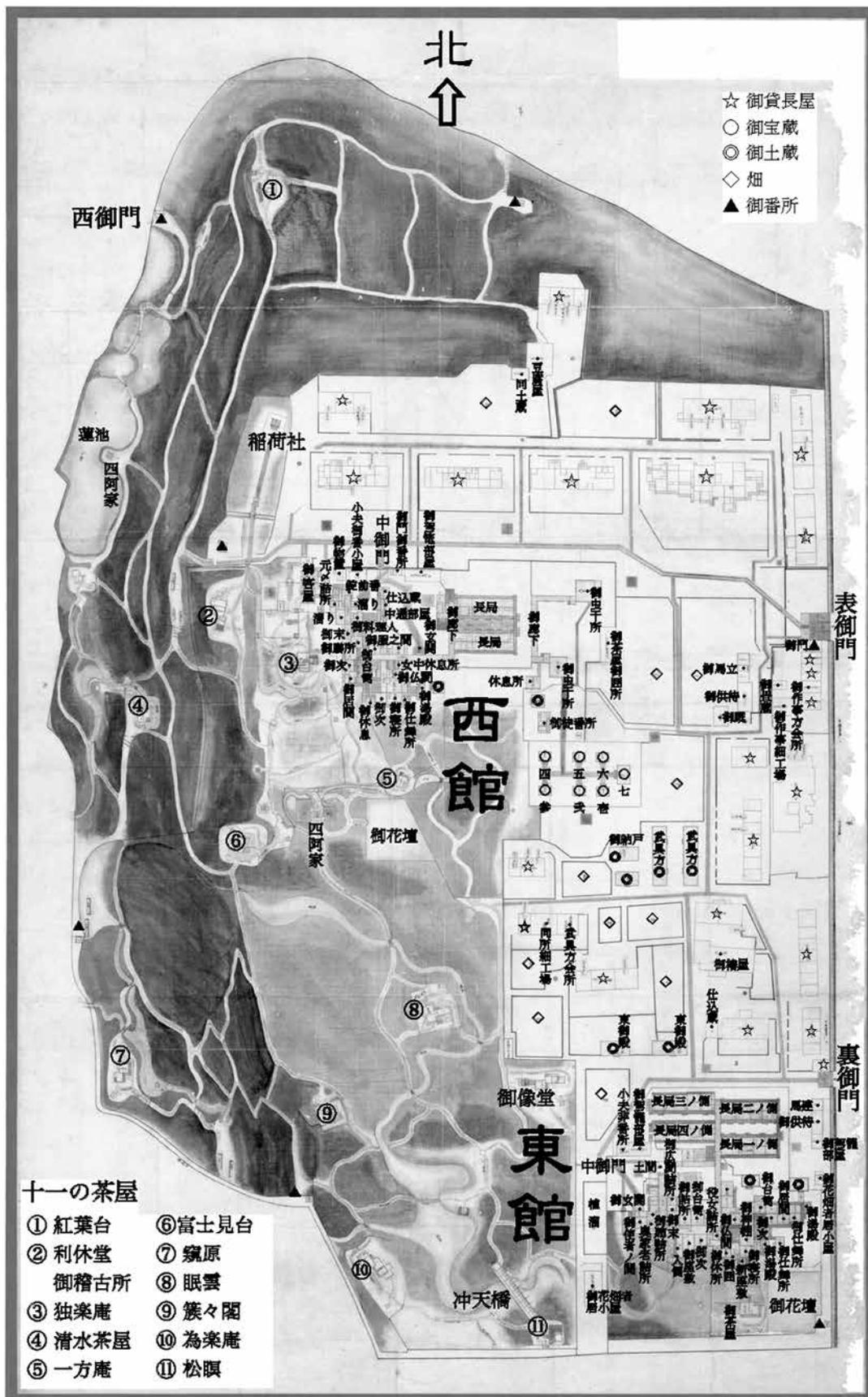


図9 大崎下屋敷の施設名及び東館・西館の室名図

ことが把握される。「御寝所」の北側には「長爐ノ間」「御神棚」「御仏間」「御右筆間」が配置される。これらに「御廊下」が取り付き、南側に「御物置」「御臺筥」「御次」「御居間」「御物置」「御仕舞所」「御仕立ノ間」「御湯殿」が配置される。さらに廊下によって「御土蔵」に繋がる。「御居間」「御臺筥」「御物置」「御仕舞所」「御湯殿」などが2つあることから、幾千姫用と正室彰姫用の空間が用意されていたことが把握される。「御右筆ノ間」東には「御仕立ノ間」「女中参上ノ間」が配置される。これらの東には長局の長屋があり、「長局一ノ側」「長局二ノ側」「長局三ノ側」「長局四ノ側」が配置される。廊下により台所と繋がり、台所とともに奥向きの空間が配置されていることが把握される。

#### (4) 西館と東館周辺の建築物

ここでは西館と東館の周辺の建築物と主屋との関係性を考察したい。西館に最も近い茶室が独楽庵である。西館から独楽庵へは「御居間」に面して沓脱石が置かれ、そこから近づくこととなる。縁側から沓脱石に降りた場所は塀で囲われた空間となっており、ここから独楽庵と一方庵へ結ばれる園路を通じる。右手に折れると独楽庵で、路地門を潜ると手水鉢が配置され、飛石伝いに水屋に近い入口に繋がる。また、西館に付属する「御客家」からも近づくことができるようになっている。「御客家」からは3つの路地門と中潜を潜ると独楽庵にたどり着く。最初の路地門を潜ると「御稽古所（直入舎）」と繋がった空間に出る。さらに、塀で囲われた矩形の空間が2つ用意され、それを通り過ぎると独楽庵の空間にたどり着く。いわゆる三関三露の露地である。独楽庵に出る中潜の左手には腰掛待合が設置されている。そこからは飛石・延段・唐堀・石橋により形成された美しい茶庭を眺めることが出来るようになっている。また、「御客家」の庭からも近づくことが出来、露地門を潜り進むと、独楽庵の水屋に通じる。これらの空間的操作は接客を考えてのことであると考えられる。「御居間」「御客家」「独楽庵」の配置、これを繋ぐ園路が絶妙に計画されていると言えよう。

この他に、西館周辺には「御虫干所」の建築物が並ぶ区画とその奥にある「御宝蔵」の建築物が並ぶ区画がある。「御虫干所」の区画には西館と東館を繋ぐ前述の幅広の石畳の鍵型路から延びる通路からの入口、表門から西館の「中御門」に延びる通路からの入口、一方庵に繋がる園路からの入口の三ヶ所がある。西館と東館を繋ぐ幅広の石畳の鍵型路から延びる通路には石畳が記されるが、他の入口には石畳が記されていないことから、この入口がメインの入口と言うことが出来る。この入口から「御虫干所」の区画にも石畳が配され、「御虫干所」および「休息所」の前に通じ、「御宝蔵」の建築物が並ぶ区画へと通じている。この区画には「御虫干所」の2部屋と「休息所」が廊下で繋がれた棟と「御茶屋御囲所」「御土蔵」「御徒番所」「箱番所」の棟がある。「御宝蔵」の建築物が並ぶ区画は「御虫干所」の区画からしか出入り出来ないことになっている。この区画には「御宝蔵壺番」「同式番」「同三番」「同四番」「同五番」「同六番」「同七番」が左右対称に建つ。これらを石畳が繋ぐ。

先述したように、『列士録』からも不昧が蒐集した茶器道具類が宝蔵に納められ、虫干しも毎年行われていたことが確認されるが、これらの空間が大きな面積を占めていることもこの屋敷の特色と言えよう。

一方、東館の周辺を見ると、東館に最も近い茶室が「御像堂」である。東館を一旦出て、露地門よりアプローチする。西館とは違い回遊式庭園と一体的に考えられていないと言える。一体的に計画されていないため個別に庭が4つ用意されている。一つ目は「御玄関」の前庭から入ることの出来る矩形の庭である。二つ目は「御座敷」が面する庭である。「御座敷」「入側」に面して沓脱石が置かれ、そこから庭へ出ることが出来る。三つ目は「御居間」「御新座敷」が面する庭である。こちらは「御居間」「御新座敷」に面して沓脱石が置かれ、そこから庭へ出ることが出来る。この庭には「御茶屋」が設けられ

ている。四つ目はこの庭のさらに奥の「御花壇」である。また、回遊式庭園と東館の間には「御花畑者居小屋」が配置されている。

#### (5) 大崎下屋敷の建築的特徴

以上をまとめると、大崎下屋敷の建築的特徴として、敷地の約半分を回遊式庭園としていること、そこに11余の茶室が設けられていること、西館は通常の書院造に存在する公的な対面・接客の空間がないこと、御客家と茶屋の動線計画から対面・接客の場が茶室で行われたと考えられること、虫干所と宝蔵が大きく取られていること、東館は西館と違い対面・接客の空間が用意されていること、御居間が2部屋用意されていること、回遊式庭園との関係性が特に考慮されていないこと、独自の庭が用意されていることがあげられる。

以上から大崎下屋敷は不昧が生活した西館を中心に計画されたと言え、配置・平面計画からも不昧茶道の集大成であることが読み取れる。

### 4. 大崎下屋敷の結末

大崎下屋敷は、不昧の居所である西館と独楽庵をはじめとする茶室や茶亭を備えた庭園が主体で、それに付随する諸施設が設けられていたが、拡張・整備が進むなかで、南側は正室彰姫と四女幾千姫の居所である東館とそれを取り囲むように大崎苑とは異なる庭園が整備されていることもわかってきた。

不昧が亡くなった文政元年（1818）以降も、『松江藩出入捷覧』に「御仕立所御住居替且大崎御屋敷所々御修理」（文政2年）、「大崎御屋敷内御殿長局所々御修理」（同3年）、「彰楽院様御寝所新建、長局新建」（同7年）、「御武具方御土蔵出来」（同年）、「西御殿御寝所新建」（同8年）とあるように、建築の普請工事がよく行われていたことがわかったが、文政12年（1829）に彰楽院が歿すると、改築や新



図10 「不昧侯大崎別業図并亭樹明細図(写)」の内「独楽庵の跡」図(国立国会図書館蔵)

築はあまり行われなくなり、庭苑の茶室も取り壊され、「不昧侯大崎別業図并亭樹明細図（写）」<sup>(28)</sup>（図9）より、嘉永元年（1848）には、独楽庵も取り壊されてしまっていることがわかる。そして、嘉永6年（1853）10月22日に大崎下屋敷は松平相模守（鳥取藩主池田慶徳）に引渡される。<sup>(29)</sup>鳥取藩は、ここに鉄砲角場を設置するため、建物を取り壊すことになるが、安政の大地震によって上屋敷が損壊し焼亡した際には、藩公と正室宝隆院は、この下屋敷に移り住んでいる。

大崎下屋敷は、不昧が隠居した当初は、茶の湯を主体とする下屋敷として西館と庭園が整備されたが、正室彰姫を迎えることになって、家族の住まいとして東館を新たに増設することになる。

不昧や正室彰姫が大崎下屋敷に居住していた時、西館は、不昧が茶の湯を嗜むために整備された領域であり、虫干し所や宝蔵などの付随施設も整えられていった。それに対して、東館とその周辺は、正室彰姫と愛娘幾千姫の住いとして整備されたが、それにあわせて対面・接客の空間も重用され、併設されていたのである。

大崎下屋敷は嘉永6年（1853）に松平定安（松江藩）から池田慶徳（鳥取藩）に移った時にどのような姿であったかは、松江藩によって描かれた「江戸大崎御屋鋪絵圖」によってわかる。これには「嘉永六丑年被召上候節之」とあるが、この図を見ると、独楽庵をはじめとる庭園の茶室はいずれも描かれておらず、西館は、居間や台所部分、そして宝蔵7棟は既になく、「御寝所」廻りと長局2棟、その東の虫干し所2棟だけが描かれている（これは先に紹介した鳥取県立博物館所蔵の「品川領下大崎屋敷之図」と同じである）。一方、東館とその周辺は、天保9年の「大崎御屋敷分間惣御絵図面」に描かれている東館とほとんど同じである。

鳥取藩は、安政元年（1854）の大地震によって上屋敷を失った際に、藩公及び正室宝隆院は大崎下屋敷に移り住むことになるが、この時、西館の建物は主要部分がなくなっている。江戸藩邸としては東館が代用されることになる。このことは、「品川領下大崎屋敷之図」に東館の建物だけが描かれていることから確認できる。

その後、松平越前守（鳥取藩）は文久元年（1861）9月15日に、この大崎邸を幕府に返し、替わりに元の柴金杉邸を拝領している。これ以後、大崎下屋敷はフランス通弁官（ミニストル）の公館としてしばらく利用されることになる。この辺の事情については鳥取藩の「御日記」は「文久元年西九月十五日江戸表ヨリ御飛脚ヲ以て左之趣申来ル」として「此處品川御殿山邊江異國人御差置之館御取立可被成筈ニ付翌廿七日大崎御屋敷為一見異人等可相越旨御達シ有之候段罷帰申達候」「下大崎村下屋敷御用ニ付可差上相達候得共急速引拂候ニハ不及候尤頃合之趣追テ可相事」「品川御殿山邊ニテミニストル館御取立可相成筈」等と記している。『松平定安公伝』にも「（文久元年9月15日）水野閣老より、外国ミニストル邸需要の為、我下大崎邸を上納せしめ、手當三百両を下賜すと達す。」とある。以後、下屋敷は外国人公館となり明治の新時代を迎える。

## おわりに

本稿では、大崎下屋敷の拡張・整備についてその推移を検証し、さらに屋敷内の建築群について「大崎御屋敷分間惣御絵図面」によって考察を行い、続いて、この下屋敷が以後どのような経緯をたどって消失することになったか、その結末を追跡してみた。

大崎下屋敷は、文化3年（1803）以来、段階的に整備され、不昧とその家族の住まいとして整えられた。西館及び庭園は隠居した不昧が茶三昧の生活をおくるだけでなく、四女幾千姫を大崎下屋敷に迎えるために整えられたと思われるし、東館は、しばらく経てから正室彰姫を大崎下屋敷に迎えるために新たに整備されたことも確認できた。

これら大崎下屋敷も、不昧歿後、主人のいなくなった西館は「明屋敷」となり、次第に縮小されていった。東館は正室彰楽院（彰姫）が歿した文政12年（1829）以後も維持され、併せて宝蔵に収蔵されていた茶道具の虫干し等は継続されていた。しかし、主人（不昧と彰楽院）を亡くした大崎下屋敷は次第に使われるなくなり、庭園の茶室も取り壊されたり、移設されたりすることになった。そして、嘉永6年（1853）には鳥取藩池田家の屋敷となり、抱地だけが松江藩松平家の所持地として残っていたが、享和3年（1863）には、これも幕府に公収され、下屋敷全域は外国人の公館へと移り変わっていくのである。

不昧が営んだ大崎下屋敷は、江戸末期という時代が大きく変わろうとする中で、半世紀あまりで消失することになったが、不昧とその家族が営んだ大崎下屋敷は、一閑庵堀丹波が「大崎名園の記」<sup>(30)</sup>で記しているように、茶苑としては「東都随一の楽園」であったことは間違いなく、下屋敷としても特筆すべきものであった。

「大崎御屋敷分間惣御絵図面」は主人のいなくなった時代の姿ではあるが、それでも住居と茶苑の全容がよくわかり、西館と東館とそれらを取りまく附属施設などを一つひとつ確認してみると、改めて、大崎下屋敷の配置構成の巧みに驚かされたし、それらが、どのように整備されていたかも、概ね理解できた。

ただ、本稿では、西館、東館及びそれらを取りまく附属施設については、その大要を明らかにするだけで、個々の建物の詳細並びに大崎下屋敷の庭園と茶室及び茶亭については、頁数の関係で書けなかった。稿を改めて考察したい。

大崎下屋敷関連連年表

西暦	和暦	月日	事項	文献	引用	出典
1767	明和 4	11	治郷(7代)、家督相続			『松江藩松平氏系譜』
1799	寛政 11	5 21	品川戸越の別野(3,525坪)を拝領			『相對替拔書 巻8』
1801	享和 1					『藩主事蹟頭書』
1803		12 28	品川大崎の松山山城守拝領屋敷を所得	この年、弧蓬庵の遠州遺構の忘筵席・山雲茶席の再建なる		『藩主事蹟頭書』
1804	文化 1	6	この年、大崎下屋敷の土地造成始まる	品川大崎の別野は享和3年金3000両にて買上げしが、表向きは戸越屋敷と相替ふを充たされしことゝす。		『茶禪不昧公』
1805	文化 2	11 16		大崎御屋敷普通請御用被仰付候		『列士録』 矢嶋専七
		4 11		大崎御屋敷御普通請御用被仰付		馬場佐々右衛門『代々年教書』
		6 13	幾千姫、松江に生まれる	幾千李姫生ル(親母侍女阿勝)		『列士録』 岡重左衛門
		6 13		幾千姫御誕生ニ付御仕立所江相詰元メ可相助旨被仰渡之		『治郷年譜』
		7 10		君夫人幾千李姫ヲ養テ子ト為ス		『列士録』 和田儀助
		8 28		大崎御屋敷普通請御用被仰付		『治郷年譜』
		間 8 4		幾千姫縁御抱守并御相役兼勤被仰付		『列士録』 池田夫八
1806	文化 3	3 7	この年より大崎下屋敷(松山山城守拝領屋敷分)普通請始まる	御隠居縁御納戸役被仰付役組外是迄之御足高三拾表御役料ニ被下之		『列士録』 庄司郡平
		8		御隠居縁御納付主被仰付		『列士録』 坂本雄峰
		11	治郷、大崎に入る	公品川大崎下邸ニ老ス 襲封大円公五十七歳公十九歳(実年十六歳)		『治郷年譜』 『齊恒年譜』
		19	治郷、不昧と号す	老公官ニ請フ髪ヲ削リ号ヲ不昧ト 更ニ公改メテ出羽守ト号ス		『治郷年譜』
		4 23	幾千姫、大崎下屋敷に入る	(四月)二十三日妹姫(幾千姫)邦ヨリ至大崎ノ下邸ニ入		『齊恒年譜』
		5 15	下屋敷に出来た茶室の席開きが船越席等で行われる	文化三年五月十五日大崎屋鋪披露會記 三豊大目船越好、四豊半		『茶禪不昧公』
1807		4 5		大崎御屋敷御普通請御用精出就相助御養美金壹両被下之		『列士録』 岡重左衛門
		4 23		大崎御屋敷御普通請中精出相助付而御養美金百疋被下之		『列士録』 矢嶋専七
		4 24		幾千姫縁江戸表江御引越之節御供ニ而龍越之処直 幾千姫縁之方可相助旨被仰渡之同7年五月婦		『列士録』 和田儀助
		9 8		大崎御屋敷逗留所御普通請御用精出就相助為御養美金百疋被下之		『列士録』 岡重左衛門
		9 9		(馬場此八)大崎御屋敷御用掛被仰付候		馬場佐々右衛門『代々年教書』
		11		就同断徒 御隠居縁式百疋下之		『列士録』 岡重左衛門
		12 8		(馬場此八)大崎御用掛り精出相助候旨ニ付御隠居縁ヨリ御養美金百疋被下置候		馬場佐々右衛門『代々年教書』
				大崎御普通請御普通請出精につき御養美として金1両下さる		『列士録』 内藤野八
1808	5 閏 6 29		この年、大崎下屋敷(松平山城守田地方)の普通請なる	大崎御屋敷大御前様御殿御普通請御用出精相助ついで御上下一具銀1枚下さる		『列士録』 内藤野八
		閏 6 29	この年、旗本大久保家拝領屋敷を取得	大崎御普通請御用/文化一子ヨリ同四月マダ 四所務ベ/金23,341両 此分御蔵私		『松江藩出入捷覽』
		12 21		旗本大久保家の大崎拝領下屋敷(3535坪)と四ツ谷仲町の拝領下屋敷(500坪)を相對替		『相對替拔書 巻9』
				御取立 新番組江組入 幾千姫縁御抱守被仰付干時在江戸		『列士録』 和田儀助
1809		12 27		大崎御隣屋敷四ツ谷御中屋敷ト御替地御間金其外板塀朝鮮瓦カラ堀番小屋下水出来等御入用/908両		『列士録』 坂本雄峰
				御前様大崎御屋敷江被為入之節度々御用相助付為御養美金百疋被下之		『松江藩出入捷覽』
1810				大崎御屋敷御殿向御修復長局并御土蔵新建/1,129両		『松江藩出入捷覽』
				大崎御隣屋敷買上ヶ代/1,100両		『松江藩出入捷覽』
				大崎御屋敷御殿向御修復 御土蔵新建(463両)		『松江藩出入捷覽』
		1 19	不昧公選曆の茶会始まる(以後15回)	文化八年正月十九日 客 本多駿河守 柳澤澤 河内屋喜兵衛 三豊大目(船越)		『茶禪不昧公』
1811	8	5 2	この年、松江藩大崎下屋敷拡張完了	品川大崎の保科下総守下屋敷(3000坪)と赤坂御門外を4ヶヶ所の相對替		『相對替拔書 巻10』
		6 9	この年、東館の建築	大崎御屋敷 大御前様御殿御普通請御用被仰付		『列士録』 岡重左衛門

西暦	和暦	月日	事項	文獻	引用	出典
		29		大崎御屋敷 大御前様御殿御普請御用被仰付		『列土録』岡重左衛門
				大崎御屋敷エ大御前様御引移ニ付大奥御殿其外所々新建御入用ノ4,632両		『松江藩出入捷覧』
				右同断御殿向き所々御修復ノ429両		『松江藩出入捷覧』
			この年、御前様(正室彰姫)大崎(東館)に入る			
1812	9	6:11		大崎御屋敷 大御前様御殿御普請御用精出就相助徒 同人様為御褒美式百疋被下之		『列土録』岡重左衛門
		9:9		大崎御屋敷 大御前様御殿御普請御用精出就相助為御褒美金壹両被下之		
		12:25		大御前様御庭御用并御茶御用向相勤付而為御褒美式百疋被下之		『列土録』坂本雄峰
1813	10	12:朔		御隠居様御納戸役頭取被仰付		『列土録』庄司郡平
1814	11	9:6		大崎御屋敷御用格別心配就相勤御褒美徒 御隠居様銀二両被下之		『列土録』安藤傳録
1816	13			大崎御屋敷内所々御住居替御修復等御入用		『松江藩出入捷覧』
1818	文政	1		(1月13日)大崎御普請中話切御用被仰付 (2月朔日)御作事御大工頭被仰付		『列土録』安藤傳録
		4:24	不味、大崎にて逝去	老公疾革ス		『拾郷年譜』
		7:29		大門口様御納戸頭取御免 格式御使番 幾千姫様御附頭取大崎御屋敷宝蔵守護兼勤		『列土録』庄司郡平
1819	2	3:20		彰楽院様御附御老被仰付大崎御屋敷御宝蔵守護是迄之通且又 幾千姫様之方懸り相被仰付		『列土録』庄司郡平
				御仕立所御住居替且大崎御屋敷所々御修理ノ295両		『松江藩出入捷覧』
1820	3	6:9		幾千姫様御禮札御用懸被仰付		『列土録』庄司郡平
		10:18		大崎御普請御用精出就相勤為御褒美銀一枚被下之		『列土録』安藤傳録
1821	4			大崎御屋敷内御殿長局所々御修理ノ233両		『松江藩出入捷覧』
1822	5	6:7		御茶器御道具預被仰付右御道具御台所道具類虫干之節可能相改旨被仰付渡之		『列土録』大河原五郎右衛門
		12:25	御茶器の虫干し等行われる	御茶器御虫干御用精出相勤付而於御式百疋被下之		『列土録』大河原五郎右衛門
		12:25	以後、茶器虫干しは毎年、この時節に行われる	当年中御茶器御虫干御用精出相勤付而為御褒美於御次百疋被下之		『列土録』坂本雄峰
				彰楽院様御殿御屋根瓦置ニ相成御入用ノ270両		『松江藩出入捷覧』
1824	7		この頃、東館の御寝所、長局、建て直される	彰楽院様御寝所新建 長局新建御入用ノ878両		『松江藩出入捷覧』
				大崎御屋敷御武具方御土蔵出来御入用ノ220両		『松江藩出入捷覧』
1825	8	2:25		大崎御屋敷 彰楽院様御殿御普請御用精出相勤ニ付為御褒美目録百疋被下之		『列土録』安田重右衛門
				大崎御屋敷西御殿御寝所新建御入用ノ386両		『松江藩出入捷覧』
1829	12	3:18	一閨庵堀丹波、白川兼翁公、大崎庭園を見学			『茶禪不昧公』
		10:10	彰楽院(より子)逝去	彰楽大夫夫人伊達氏至 本月十日ニ逝ス		『齊齋年譜』
1838	天保	9	この年「大崎御屋敷分間惣御陰図面」描かれる	此度砂村屋敷江一方庵御茶屋組建ニ付為横目日々相詰様被仰渡之		松江歴史館蔵の陰図面
1847	弘化	4	この頃、茶室一方庵、砂村に移築される	大崎御屋敷 御殿御普請御用懸り被仰付日々相詰見廻可申旨被仰渡之		『列土録』岡千蔵
1848	嘉永	1	この年、独楽庵は既に取壊されている	「不味候大崎別業図」には「嘉永元年申十一月写(中略)独楽庵の跡」とある。		『列土録』岡千蔵
		6	下屋敷、池田慶徳(鳥取藩主)に引渡す	品川領下大崎村松平清三郎上ヶ屋敷壹万四千貳百八拾貳坪奈家作共相模守殿被致致群領候ニ付引渡		『江戸御留守居日記』
1854	安政	1	下屋敷に鉄砲角場設置される	「大崎村相模守下屋敷内鉄砲角場式ヶ所出来		『池田慶徳公御伝記』
		3:6	下屋敷、大風雨洪水で被害を受ける	江戸に大風雨・洪水。(鳥取藩)大崎下屋敷も「住居向所々損し」外被害あり。		『池田慶徳公御伝記』
			下屋敷御抱地、幕府に上納	(松平定安)外国ミニストル邸需要のため、下大崎邸を上納せしめ、手当300両を下賜すと達す		『松平定安公』
1861	文久	1	9:15			

## 注

- (1) 日本建築学会大会（2007）に「大崎下屋敷の推移について」と題して、日本建築学会中国支部研究発表会（2013/3）に「大崎下屋敷とその拡張・整備に関する考察」と題して発表している。
- (2) 国立国会図書館所蔵「相对替書抜巻8／享和8. 12. 28」.
- (3) 島根県立図書館所蔵.
- (4) 松江市歴史館所蔵.
- (5) 安澤秀一編；原書房，平成11年11月27日.
- (6) 国立国会図書館所蔵「相对替書抜巻9／文化5. 閏6. 29」.
- (7) 国立国会図書館所蔵「相对替書抜巻10／文化8. 5. 2」.
- (8) 『列士録』「5代目 河合観之助」には、「同（嘉永6年）九月十八日大崎御屋敷御引弘御用諸事奉行之心得を以て懸引御屋敷内取殿り等厚可心付旨被仰渡之」とあり、さらに「同十一月七日此度大崎御屋敷被差上ニ付右御用向心配相勤ニ付為御褒美式百疋被下之」と記されている。
- (9) 松江市歴史館所蔵。（『松江市史』史料編11「絵図・地図」所収）
- (10) 野津家所有（松江市寄託）史料の一.
- (11) 島根県立図書館所蔵。「山村氏寄贈」資料の一.
- (12) 島根県立図書館所蔵。「山村氏寄贈」資料の一.
- (13) 島根県立図書館所蔵。「山村氏寄贈」資料の一.
- (14) 鳥取県立博物館所蔵。なお、鳥取県立博物館のHPでは本図は「浜町御屋敷惣絵図面」として掲載されてる。
- (15) 『列士録』によって、天保9年当時、板倉喜右衛門（三代目）は「大崎御屋敷御宝蔵守護」、小倉源左衛門（七代目）は「御番頭格大崎御屋敷御宝蔵守護」であったことが確認できる。
- (16) 幽月軒（幽月軒御披の茶事は「大円庵会記」によると文化10年11月29日）の建つ位置（御居間の西）が物置となっていてるところから本図が作成されたのは幽月軒が建つ前の図面であることがわかる。
- (17) 『治郷年譜』によると、幾千姫は文化2年（1805）6月13日に侍女阿勝（於勝）を母に松江に生まれ、同年7月10日に君夫人（正室彰姫）の養子になっている。しばらく松江で過ごすか、『斎恒年譜』には「（文化3年4月23日）妹姫（幾千姫）邦ヨリ至大崎ノ下邸ニ入」とある。この時、幾千姫は大崎に移り住んだことになる。不味が隠居して大崎下屋敷に移って（文化3年3月11日）ほぼ1ヶ月後のことである。先に生まれた姫達はいずれも幼くして亡くなっていたこともあり、不味は幾千姫をできるだけ早く手元に置きたかったのだろう。
- (18) 国会図書館所蔵.
- (19) 『松平不味傳』には「文化三寅年五月十五日大崎屋鋪席披會記」とあり「三畳大目 船越好」「四畳半」が茶席となっている。なお、この席開きの茶会は、引続き「同（文化三年）五月十八日、同二十二日、同二十五日」にも開かれている。
- (20) 『大円庵会記』（慶応大学附属図書館所蔵）では「文化三寅十二月三日 正午 独楽庵にて」が最初に記されている。
- (21) 幾千姫は大崎下屋敷に入った時、まだ1歳にもなっていない。幾千姫は、生後間もなく正室彰姫の養女と認知されているが、この時、正室彰姫はまだ大崎には移っていない。松江で奥女中（侍女の於縫、於勝）の世話をし、玉造温泉にも同行している米村和右衛門を『列士録』を見ると「同（享和3年）七月廿四日御仕立所賄方内改并御次廻御儉約方勤被付け」とあり、また「文化二乙丑年十二月五日大崎御仕立所女中附兼勤被仰付翌寅年三月十三日大崎御屋敷江引越」とある。於勝（生母阿勝）が大崎下屋敷に住んでいたことは逸話にもなっている。以上から、幾千姫が大崎下屋敷に入った当座は、生母阿勝（於勝）も大崎下屋敷に移り、

幾千姫の傍にいたと考えられる。

- (22) 図3「江戸大崎御絵図」の左下の張紙が付されている部分の内、左端の間取り図は、図4「御姫様御殿」の張紙の右の間取り図と全く同じである。
- (23) 『大円庵会記』に「同（文化5年）九月十七日 名残 清水妙喜庵にて」と記されている。
- (24) 『大円庵会記』には「文化八未三月十一日正午 賀茶 船越」と記され、『茶禅不昧公』には1月19日に続いて2月10日、同14日、同19日、同22日、27日、同閏2月2日、同7日、同9日、同12日、同22日、同25日、3月5日、7日、11日、同日跡見と計16会、出席者の名前が記されている。
- (25) 『松江藩出入捷覧』には文化8年（1811）の欄に「大崎御屋敷エ大御前様御引移ニ付大奥御殿其外所々新建御入用」と記されている。
- (26) 『大円庵会記』には「（文化10年）十一月廿九日 夜会 幽月軒」とあるが、今一つの茶会記『不昧公御一代茶会記』（島根県立図書館所蔵）には「酉十一月廿九日 御常汁 幽月軒御披夜会」と記されている。
- (27) 国会図書館所蔵。本図の右上には「嘉永元年申十一月写 雲州候品川大崎御屋敷御庭 独楽庵の跡」と記されている。
- (28) 『江戸御留守居日記』（鳥取県立博物館所蔵）には「品川領下大崎村松平濟三郎上ヶ屋敷壹万四千貳百八拾貳坪余家作共相模守殿被致拝領候ニ付引渡」とある。
- (29) 「2. 大崎下屋敷の拡張・整備について」の「2」「絵図・建築図面を通して見る大崎下屋敷の変化」でも述べているが、文化元年、国元松江で侍女阿勝を母として誕生した幾千姫は、文化3年に大崎下屋敷に移っている。この時は、東館はまだ出来ておらず、西館の一面で生母阿勝とともに暮らし、東館が完成する文化8年に東館に移り、以来、文政3年に佐倉侯堀田正愛に嫁ぐまで、正室彰姫と共に東館で過ごしていたと思われる。
- (30) 越後国中浦原村松の藩主一閑庵堀丹波による松平不昧の大崎別業見学記「大崎名園の記」は『松平不昧傳』に掲載されている。また、この時、一緒に大崎名園を訪れた松平定信も「大崎別業遊覧記」（国文学研究資料館所蔵）を記している。

（わだ よしひろ 米子工業高等専門学校名誉教授）

（あたか なおき 島根大学総合理工学部助教）



# 松江城の屋根瓦

## —山陰で活躍した瓦工人と城郭整備—

乗岡 実

### はじめに

織豊期以降の近世城郭を発掘すると決まって大量の瓦が出土する。これを考古資料と位置付けて歴史の舞台上で発言させていく必要がある。編年の問題は、築城や城郭整備また各建造物の新築・修理の時期と密接に関わるし、瓦のありかたは、その城郭の性格とも深い関係をもつ。製作技法の検討は瓦工人の生産技術の究明に繋がるし、さらに他の城郭や寺社の瓦との比較・検討を行っていけば、居城移転や支城整備といった当時の城郭政策、また瓦工人の存在形態、商工体制や物流体制にもアプローチができる。

松江城の瓦の研究は、60年近くも昔の天守解体修理時を嚆矢とする。瓦当文様や刻印の採拓・資料化という基本作業が行われているし、工務から学芸にわたる担当者であった須田主殿氏は建築木部や石垣といった他の項目と同様に、相当な目的意識をもって瓦を調査し分析を行っている。同氏は、他城では案外と少ない鬼面の鬼瓦について、表情豊かな独自の作風であることにも着目したが、堀尾氏の家紋である分銅文の刻印をもつ瓦や五七桐文鳥衾を築城期のものと判断したり、大坂瓦屋の刻印瓦を確認し、さらに松江近隣の瓦生産地についての史料調査までも行った<sup>(1)</sup>。

その後は松江城の瓦はあまり注目された形跡がないが、城郭部の発掘調査で出土品が蓄積され、2001年には出土瓦の分類が初めて行われた。また城郭出土瓦の集成<sup>(2)</sup>や山崎信二氏による全国視野での近世瓦の体系的な研究<sup>(3)</sup>でも松江城の瓦が取り上げられた。さらに近年では城下の武家屋敷地跡に当たる松江歴史館用地で発掘調査が行われ<sup>(4)</sup>、出土層位に基づいて瓦の年代を考える途が開けてきた。いっぽう堀尾氏の松江城前段の居城である富田城を始めとする出雲・伯耆の他の城郭や遺跡から出土した瓦も蓄積と報告・分析が行われ、比較検討を共同研究として進める環境も整いつつある。

市史松江城編の刊行に向け、松江城の歴史究明を広域的視点で多面的に進める機運が高まる中で、瓦について現状での課題の整理と展望を行い、次の研究の叩き台することが本稿の目的である。

## 1. 松江城の瓦の分類とおよその年代

### (1) 軒丸瓦

図1は瓦当文様に基づく飯塚康行氏による分類<sup>(5)</sup>で、城郭中枢部で行われた一連の史跡整備に伴って出土した瓦が対象である。三巴文のうち内側の頭部に対して外の尾部が右に巻くものがA類、三巴で左に巻くものがB類、巴文以外の文様＝分銅文をもつものがC類とされた。A類・B類は瓦当面の大きさや、珠文の大きさや数、それに彫りの深さなどによって細分されている。分銅文は寛永10年(1633)を下限とする堀尾家の家紋であることからC類は堀尾期のものと判断され、またA-1～4類は17世紀初頭の遺構とみられる太鼓櫓西方SK01から出土したことから古いタイプとされた。

確かにA類、うちでも細分番号が小さいものは、三巴文軒丸瓦の一般的な編年観に照らしても、頭部が小さく尾部が長い、珠文が小さく数が多いなど古い特徴をもつ。特にA-1類の様な圏線をもつものは古式で保守性が窺えるが、とって16世紀のものではない。図示された個体と範キズが一致する同範品が17世紀前半～中頃の城下(歴史館)北屋敷第3面から出土している(11・12)。またA類と近

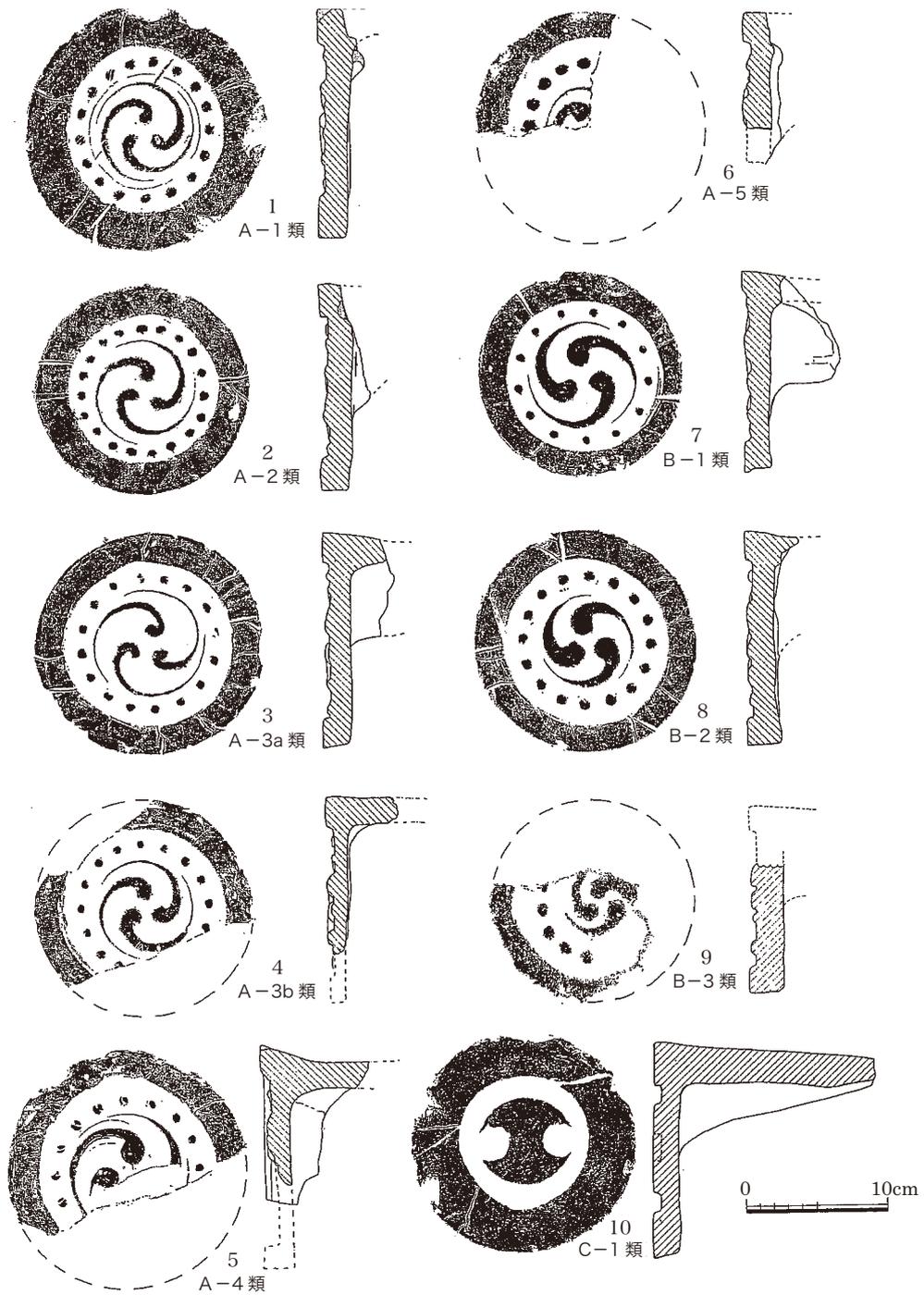


図1 松江城城郭部出土の軒丸瓦の分類（1 / 5） 飯塚2001による

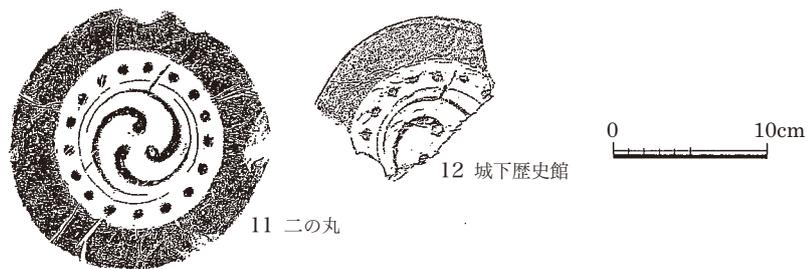


図2 松江城城郭部と城下町出土の同範軒丸瓦（1 / 5）

似する文様・製作技法・焼成の瓦は、堀尾氏松江移転の慶長 16 年（1611）もしくは元和 1 年（1615）前後を下限とする富田城（安来市）の城郭部、あるいは他地域の併行期の城館や遺跡で確認されていることも、A 類を築城期ないしは堀尾期の製品が中心と考えることを支持する。例えば、A 類の丸瓦内面に残された粘土板切断時に生じるコビキ痕<sup>(6)</sup>は、横方向に条線が残る B 技法でも目が粗いもので富田城の瓦と共通するし、他地域の城郭に伴う慶長頃（＝斜め方向に粗い条線が残るコビキ A から B への変換直後）の瓦とも共通する。珠文数 16～17 は備前岡山城の編年<sup>(7)</sup>に照らすと岡山城 4 式、正に慶長中葉から後半の特徴で、珠文の大きさや巴の形態などについても同様である。

逆に B 類は、およそ 18 世紀以降の特徴をもつものを中心とする。瓦範の剥離剤としてキラコ（雲母粉）を用いるもの、外器面や文様面が極めて平滑なもの、焼成が極めて良好なもの、炭素分の吸着を極めて良く器面が銀化したものを含むし、文様自体も巴の頭部が大きく尾部が短い、文様区全体の中で巴部が狭いものも、一般論として新しい様相である。

確かに松江城では 18・19 世紀に左巻きが多いという特徴は指摘できるが、他地域の城郭では 16 世紀末から 17 世紀でも左巻きはあるし、18・19 世紀でも右巻きがあり、松江城の軒丸瓦全体として、右巻きは必ず 17 世紀の製品で、左巻きなら 18・19 世紀と言い切れるかどうかはまだ分からない。また、例えば岡山城では 18 世紀に入ると珠文は 12 個で定式化し、18 世紀後半には粗大化するのに対し、松江城では遅くまで珠文数が多いものや珠文が小さいもの、したがって珠文帯の余白が広いものも残るのも特徴である。

文様分類は最終的には個々の瓦範を念頭におく必要がある。後述の軒平瓦で想定される瓦範数は現状でも 40 近いから、軒丸瓦も相当数の種類＝瓦範数があったはずで、まずは集成・分類作業が必要である。さらに、文様だけでなく、製作技法や調整技法、胎土・焼成、刻印などの属性を含めて、松江城の瓦全体として型式・様式認識を行い、編年を進めていくことが今後の課題である。

## (2) 軒平瓦

軒平瓦は、松江城全体に関わる瓦を現状で可能な限り見渡し、瓦範レベルを念頭に文様種の暫定的な集成を行い、図 3・4 として 39 種を掲げた。21・23 は同範で 1 種と数える。先ず中心飾りから、下向三葉、五葉、橘、宝珠に大別する。

下向三葉は、葉が丸みを持った幅広で葉脈表現を伴う。これは、花をもたないか省略した桐を表現した可能性があり、同様の文様を桐葉・蔦葉と記述する研究者もある。左右の唐草は全て二転である。A 類は中心飾りの葉脈表現が支脈まであり唐草が中心飾りから派生するように蔓状に展開し、内が下、外が上に巻くものである。A 1 類（飯塚 a-1 a・a-1 b）に対して、葉が大きく中心飾りの脇で蔓が下に窪まないものを A 2 類とする。B 類は唐草の内が上、外が下に巻くもので、29 を除けば各々が独立して蔓状にならない。中心飾りの葉脈表現が主脈のみで、三葉全体としては彫りが深く立体的で、左右の葉が外開き、文様区高が高いものを B 1 類（飯塚 a-2）、やはり中心飾りの葉脈表現が主脈のみであるが、三葉全体として彫りが浅く、左右の葉が横に開き、文様区高が低いものを B 2 類（飯塚 a-3）、中心飾りの葉脈表現が支脈まであるものを B 3 類とする。B 3 類も、中心飾りの彫りが深く左右の葉が斜め下に開く 32（飯塚 a-4）などと、彫りが浅くて横に開くもの（飯塚 a-5）に細分できる。

中心飾り五葉は下向三葉の上に眉毛状の二葉が付加された形で、葉脈表現がなく、全体がベタで盛り上がる。やはり桐葉を表現した可能性があるが、五葉蔦葉、割蔦と呼ぶむきもある。同じ文様を左右二重に配して特異な 40 を除いて唐草は三転で、内側から順に上・下・上と巻く。中心飾りの下の三葉に幅があり、上の二葉が横に伸びて流れが唐草に続き、唐草が個々に分離するものを A 類（飯塚 b-1 a・

下向三葉A1類

下向三葉A2類

下向三葉B1類

下向三葉B2類

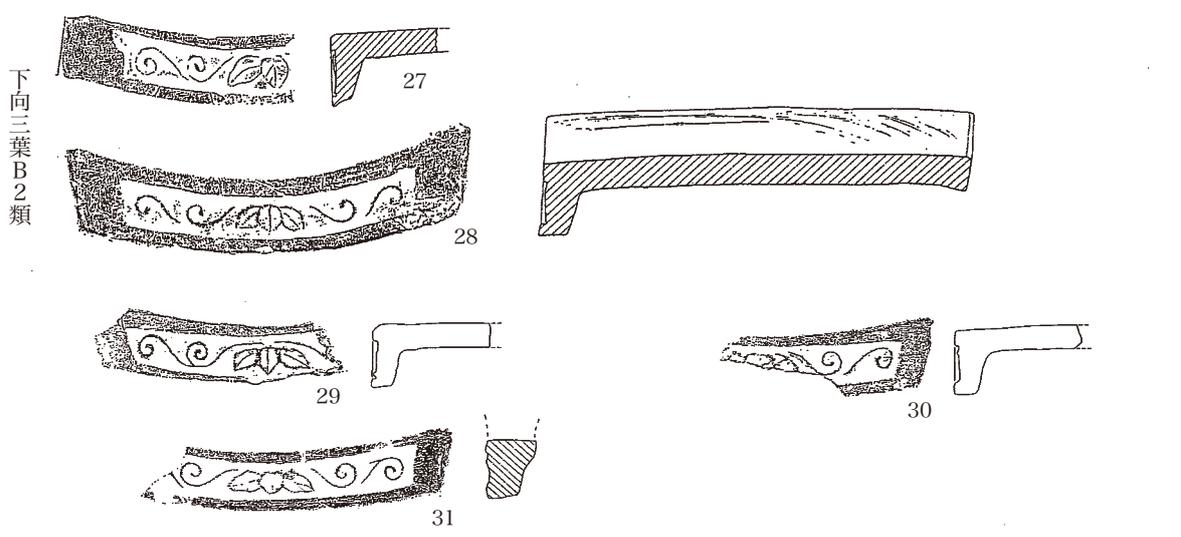
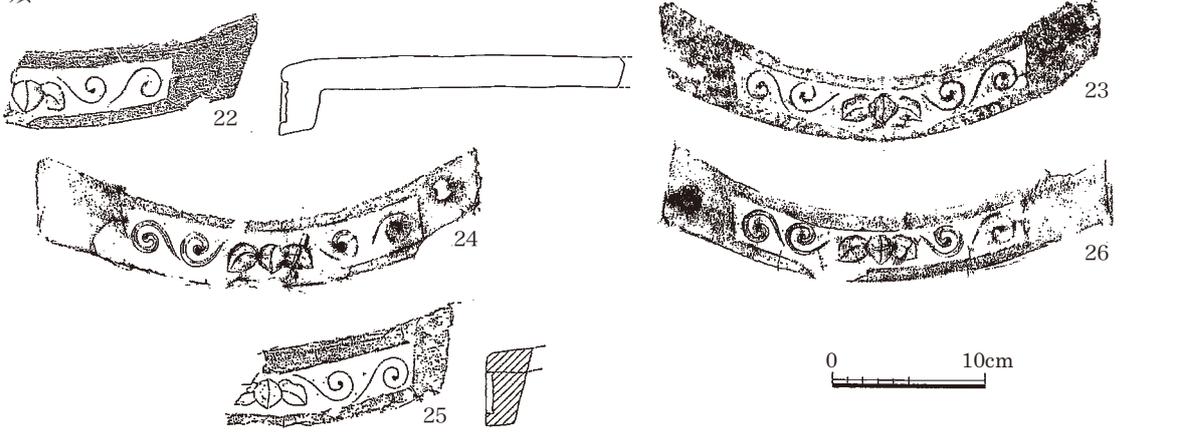
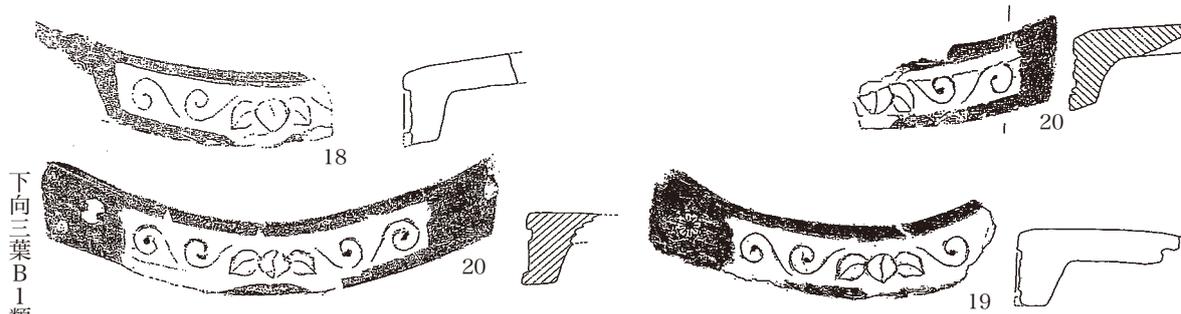
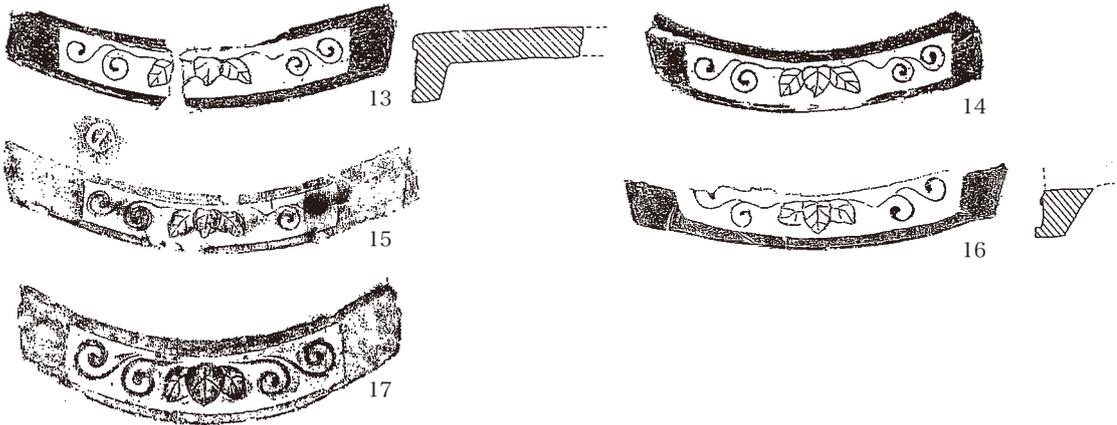
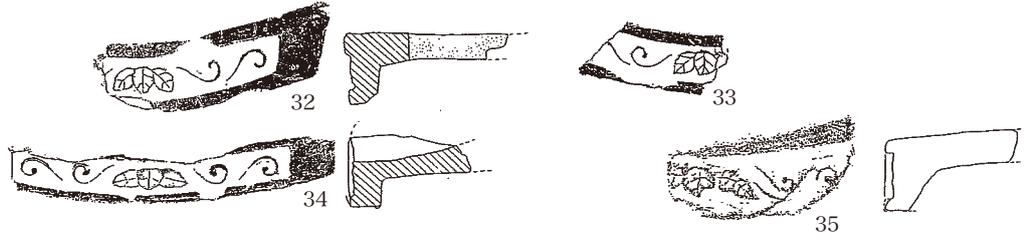
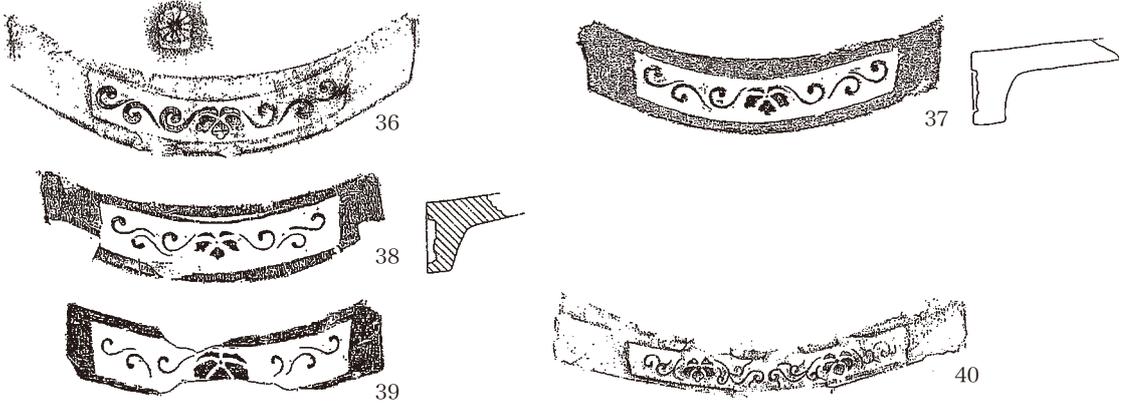


図3 松江城の軒平瓦I (1/5)

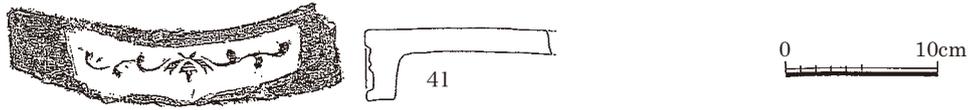
下向三葉B3類



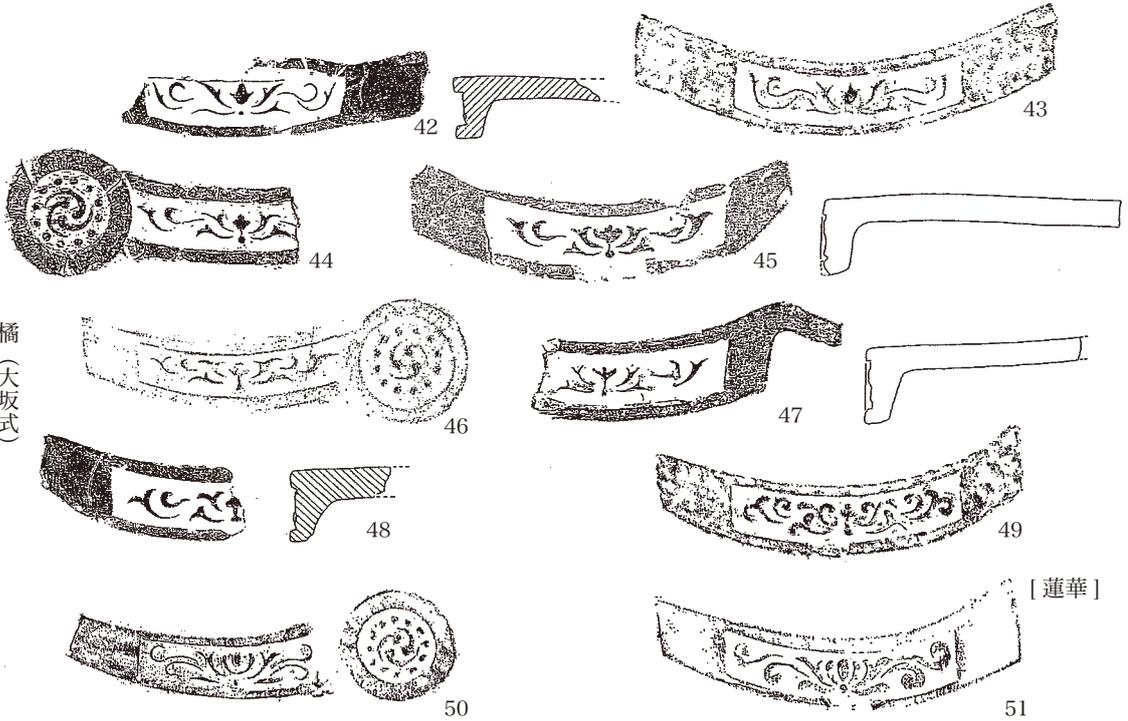
五葉A類



五葉B類



橘(大坂式)



宝珠A類



宝珠B類



[蓮華]



図4 松江城の軒平瓦Ⅱ (1/5)

b-1b)、中心飾りの下の三葉が狭くて先端が割れ、上の二葉が線状で斜め上に伸び、唐草が連結するものをB類とする。

中心飾り橘は、橘ないしは柿実形～宝珠形を真ん中に据え、左右で斜め上に伸びる錨の先端や下から横に伸びるガクの先端が二股に分かれるという特徴をもち、大坂式<sup>(8)</sup>と呼ばれるものである。定型的な大坂式とみられる42～48(飯塚b-2・3を含む)とその亜流とみられる残りに細分できる。50・51、特に51は、全体の文様構成としては錨の割れなどを含めて同類であるが、中心飾りだけを取り出せば蓮華文と呼ぶべきものである。橘文類は将来もっと明確な基準で細分を行っていく必要がある。

中心飾り宝珠は、宝珠が立体感のある三段表現で、唐草が内から下・上・下に連結して長く伸びるのが特徴的なA類と、宝珠が平板で先の大坂式と近似する二股に割れたガクを配するB類がある。

松江城全体として、最も量が多いのは下向三葉B類である。次に五葉A類、橘と続き、この三種は城郭部各地点から城下(歴史館)まで普遍性をもって及んでいる。下向三葉A類は城郭部で一定量が確認できる。五葉B類は城下(歴史館)で数個体が出土したが、他地点にまで普遍性を持つかどうかは判らない。宝珠A類は本丸で、宝珠B類は城下(歴史館)で各1点が確認されているのみである。

下向三葉の中心飾りを持つものは、17世紀前葉の築城時を中心とし、全体としても17世紀の製品と判断できる。他種に比べて製作技法や文様構成が古相で、大量に存在することも築城期のものを含むと考えるに相応しい。他地域の瓦と対比して、全般的な製作技法、側区の短いものを含む点や焼成の特徴なども同時期の特徴をもつ。また松江城では五葉・橘の中心飾りをもつものがそうであるように、江戸後半期に流行る棧瓦やキラコ使用のものも含まない。B1類には堀尾家家紋の分銅文の刻印をもつものを含むし、城下の松江歴史館出土の瓦の内、堀尾期であることが確実な第4面を含めて、17世紀代の層位に伴うものは悉く下向三葉のB類各種から構成されることは決定的である。後述するようにA、B1類は同文で同じ製作技法上の特徴を持つものが富田城で重きをなすということも大きな根拠となる。逆に五葉・橘の中心飾りをもつものは18・19世紀の製品と判断できる。宝珠A類は製作技法、富田城や江美城(鳥取県江府町)に同範とみられる瓦があることなどから16世紀後葉～17世紀前葉の製品、宝珠B類は文様構図が中心飾り橘＝大坂式との類似や出土層位から18世紀後半以降の製品と判断できる。

## 2. 16世紀末～17世紀前葉の瓦の検討

### (1) 軒丸瓦

丸瓦部内面を中心に観察できるコビキ痕は16世紀後葉から17世紀前葉の瓦の製作年代を考える上で重要な視点であるが、その変換年代は地域ないしは瓦工人によって若干の時期差がある<sup>(9)</sup>。早い地域では天正10年代後半にコビキBが出現するが、備前岡山城の瓦では、宇喜多期ほぼいっぱいコビキAに終始し、慶長2年(1597)以後、慶長5年(1600)前後に変換する<sup>(10)</sup>。また、山陰では、伊藤創氏が伯耆の城郭瓦について、B技法は文禄から慶長のごく初め(1595～1600)に出現し、1600～1602年にAからの転換をほぼ終えたと考える<sup>(11)</sup>。慶長12年(1607)に築城が始まる松江城で実際に確認される瓦は圧倒的多数がコビキBである。古相の瓦でも瓦当が残るもの、堀尾氏の分銅文の刻印を伴う瓦も総てがBで、松江城築城時の膨大量あったとみられる新調瓦はコビキB主体で、圧倒的多数の全国の他地域、また隣接する伯耆の状況と整合する。しかし、松江城ではごく少量ながらもコビキAの瓦がある。古瓦流用の結果であるのか、少数派ながらも慶長後半までA技法を温存する瓦工人も参画したのかは今後の検討課題である。前者の可能性では、堀尾氏の前段の居城で、コビキAの瓦も確認できる富田城からの搬入品の可能性も視野におくべきで、胎土分析も有効な手段になるだろう。同じ視点は当然に軒平瓦やその他の種類の瓦にも求められる。

天守所用の鳥衾瓦には、須田氏が堀尾期と考えた五七桐文や、松平期と考えられる葵文を瓦当にもつものがある。そのほか家紋類を瓦当文とする瓦として、城郭中枢部で散見できる分銅文のもの、城下の歴史館用地で数個体が出土した桔梗文のものがある。前者は城主の堀尾家、後者は重臣の堀尾采女家・右近家 [= 揖斐氏] の家紋瓦と考えて良い<sup>(12)</sup>。いずれも瓦当が軒丸瓦と同大であるが全て棟込瓦である。家紋瓦は慶長という早い時期から家臣屋敷にまで及ぶこと、軒丸瓦ではなく棟瓦で家紋を主張している点が、同時期の他地域の城郭瓦に対する特徴である。天守の鬼瓦は鬼面としても、その他の建物の鬼瓦はどんなデザインで、家紋が含まれないのかが気になるところである。

図2に示した堀尾期とみられる二の丸と城下歴史館用地に跨がる実例のような、城内の異なる地点間、あるいは松江城以外の瓦との同範関係の抽出作業も今後の課題である。

## (2) 中心飾り幅広下向三葉の軒平瓦

### a) 文様系譜

松江城で堀尾期の軒平瓦にメインで採用された文様は、全国的な視野でどのような位置づけのものであろうか。図5は各地で確認されている16世紀後葉から17世紀前半の軒平瓦で類似文様をもつものを集めた。その大半は松江城築城に先行、遅くとも同時期のものである。後述の富田城、米子城を除けば、下向三葉A類・B類とも同範あるいは同範的同文のものは確認されておらず、細かくみると富田城・松江城を中心とするこの文様の瓦は個別性が強いといえる。

しかし、大局とすれば類似文様は、東北から九州にわたる全国各地に分布する。出土地の多くは秀吉の居城であった大坂城、聚楽第を含めて、織豊系城郭とされるものである。唐草の巻きは内が上、外が下でB類と同じものが多く、また葉は支脈まで表現したものが圧倒し、その意味ではB3類に近いものが多い。B1・B2類の大きな特徴として葉脈表現が主脈だけという点があるが、類例は全くの少数派で、58 摂津大坂城例、68 安芸不動院例がある。蔓状の唐草が特徴的なA類も唐草に着目すれば少数派であるが、天正一桁代に播磨英賀の瓦工人が作った瓦90から松江城の94といった系譜（単一の瓦工人の系列としてこの順に変化したという意味ではない）も想定できなくはない。その際、90と同範の瓦は備前・美作の城郭や寺院でも数多く知られ、播磨から出雲への接近という点でも興味深い。いっぽうで先の58大坂城城例や93筑前観世音寺例と94松江城例の類似性は注目される。

次の視点として、各城郭で幅広で下向三葉、あるいは桐を含めて中心飾りとするものが、松江城のように主体を占めてそれへの斉一性が強いのか、多種の中の一部に過ぎないのかということがある。その点では、大坂城、聚楽第、岡山城、広島城、肥前名護屋城などでは多種の中の一部、またはごく少数派でしかない。17世紀前葉で、こうした文様が主体を占める、あるいは目立った存在をなす城郭が集中するのが山陰である。具体的には、鳥取城、米子城、津和野城、隣接する美作津山城を含めて幅広下向き三葉の中心飾りが優位な圏域があり、富田城・松江城はその中核をなす。いっぽう東北の会津若松城でも松江城のB3類にかなり近似した瓦が量の重きをなし、この城の築城時の瓦は文禄2年（1593）に播磨から工人を呼び寄せて焼いたと伝わること<sup>(13)</sup>と合わせて注目される。

富田城・松江城にこの文様の瓦を供給した工人の出自は直ちには特定できない。しかし、この文様を生み出す土壌は、畿内から山陽、あるいは北部九州にあったといえよう。織豊期の瓦工人は頻繁な移動や系統の分岐、地域内での二次変容もありえて複雑である。ちなみに、堀尾氏が前任地である浜松城やその支城の二股城で用いた瓦は、中心飾り三葉も含むが葉は上向きで幅が狭いもので唐草も異なり、遠江で活躍した瓦工人が堀尾氏とともに出雲に来て富田城・松江城の瓦を焼いたという可能性は薄い。



図5 各地の中心飾り下向三葉・桐・蔦葉の16世紀後葉から17世紀前半の軒平瓦（1／6）



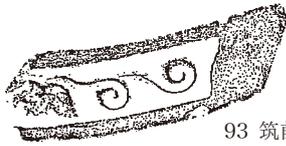
90 淡路妙京寺



91 播磨円教寺



92 肥前名護屋城



93 筑前観世音寺

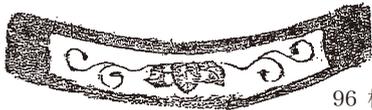


94 松江城

下向三葉A1類関連



95 富田川河床



96 松江城

下向三葉A1類関連



97 富田城



98 富田城



99 富田城



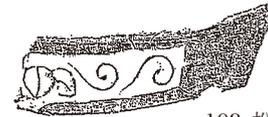
100 松江城



101 松江城下

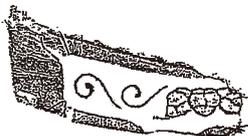


102 米子城



103 松江城下

下向三葉B1類関連



104 富田城



105 江美城



106 米子城



107 米子城



108 米子城



109 米子城



110 松江城



111 松江城



112 米子城



113 米子城

下向三葉B3類関連

図6 山陰諸城を廻る 16世紀葉~17世紀前葉の中心飾り下向三葉の軒平瓦 (1/5)

b) 出雲・伯耆諸城の松江城下向三葉A類・B類の同文瓦

松江城B1類と同文の瓦は富田城で大量に確認でき、米子城でも一定量が確認できる。

富田城の同文瓦(A-1類)<sup>(14)</sup>は軒平瓦の量の主体を占め、月山山上の本丸・二の丸・三の丸をはじめ、山中御殿や千畳平、それに城下の富田川河床遺跡などでも出土し、その分布状況や想定されるコビキBの丸瓦との共存関係などから、慶長年間、すなわち堀尾期の製品と判断できる<sup>(15)</sup>。今のところ松江城B1類と同範関係が確認されたものはない。細かな検討を行えば同範品が確認される可能性が多分にあるように思えるが、中心飾りの中心葉の主脈の微妙なカーブが左右逆になっている場合が多い。大枠として比較すると、中心飾りは、富田城の方(97～99)が肉厚で、葉の外形の微妙なカーブが変化に富んでリアルであるのに、松江城の方(100・101・103)は単調、つまり様式化が進行しているし、富田城は側区が狭いのに対して松江城では広がっている。これらのことは、松江城築城期の瓦が富田城で主体となる瓦よりも新しい事を示し、堀尾氏は先ず富田城に入って瓦葺建物の建造を伴う城郭整備を行い、その後に松江城を築城したという歴史的事実に対応する。松江城にはB1類に対して中心飾りがさらに単調化したり、唐草の巻きが小さくなった同文新相のB2類がある。大筋では富田城(A-1類)→松江城・下向三葉B1類→松江城・下向三葉B2類と変遷したものと考えられる。つまり、富田城、恐らくその最終段階の瓦製作で中心的な役割を果たした工人集団が、松江城築城時にも中心的な役割を果たし、その後も一定期間は松江城に瓦を供給したという図式が読み取れる。彼らは先ず富田で編成され、堀尾氏に伴って松江に移動し、松江に定着した。

同文の米子城の軒平瓦(A群1類の一部)<sup>(16)</sup>は17世紀前葉の軒平瓦の主力を占めるわけではないが、図示した102のほかにも山陰歴史館展示品などを含めて複数の同文品を含んでおり、富田城や松江城との同範品が将来確認される可能性がある。先述の変遷観に照らせば、松江城より富田城に近いものが目に付く。いずれにせよ同文品の分布の重心は出雲側にあり、出雲に定着しつつあった瓦工人の出張製作もしくは製品搬入があったと見通せる。

松江城のA1類(96)についても、少なくとも同文、あるいは同範の可能性ももつ瓦(95)が富田城下の河床遺跡で出土し、これも両城共通の瓦といえる。

さらに松江城B3類の類似品(104～113)は出雲では富田城、伯耆では米子城・江美城で確認できる。うちでも、104・107・110、109・111はそれぞれ同一の文様系譜と理解されるし、105・108は同範品の可能性を検討すべき組み合わせである。

(3) 出雲・伯耆諸城を廻るその他の種類の軒平瓦の同範・同文関係

○肉彫宝珠唐草三転(116～118)

松江城宝珠A類と同範と判断されるものが、富田城(B-1類)、佐太前遺跡(松江市鹿島町)<sup>(17)</sup>で出土し、その可能性が高いとみられるものが江美城八幡丸でも出土している。富田城では月山山上部を中心に山中御殿でも確認されるが、山上部ではコビキBだけでなくコビキAの丸瓦を伴うことなどから、先述の下向三葉類よりも古い製品の可能性もある。松江城では現状1点だけの確認であるが、平瓦部凹面の二次調整が甘く、コビキB痕とみられる条痕が観察できる。

中心飾りが肉彫りでないが同じ宝珠で、唐草が近似する瓦が姫路城(114)や大坂城(115)で確認されている。姫路城例は慶長6年(1601)の池田輝政による大改修以前のもので、天正8年(1580)の秀吉による織豊系城郭への改造時に伴う可能性があり、大坂城例は天正11年(1583)に秀吉によって築城される大坂城の瓦の内でも比較的早い段階のものともみられ、両者は同範で、播磨の姫路系の瓦工人による製品とみられる<sup>(18)</sup>。この天正半ば頃の播磨姫路の工人による瓦をモデルに松江城宝珠A類が



図7 山陰諸城を廻る 16世紀後葉～17世紀前葉の同範・同文の軒平瓦 (1/5)

成立した可能性が考えられるが、製品としての特徴は両者間に断絶があるようにも感じられる。

○凸面宝珠2+木槌 (119～121)

富田城山上曲輪 (B-3類) と米子城 (F群) で同範品が確認されている<sup>(19)</sup>。特に米子城飯山地区では軒平瓦の主体を占め、コビキBの丸瓦と共存している<sup>(20)</sup>。これらと同文異範の製品が、備前岡山城で出土している。その121は、平瓦部凹面にコビキA痕を残し、岡山城2式=宇喜多秀家期に属するものである。また唐草に着目すると富田城・米子城のものが、岡山城例より硬直化している。つまり、岡山城→富田城・米子城の時期変遷が読み取れる。

○線形宝珠蔓状平行唐草 (122・123)

富田城の山上曲輪 (B-2類) と同文系の瓦が備前岡山城で確認されている。岡山城ではこの文様の軒平瓦は、岡山城2式を中心に多種あって大量に出土する。全国的にみても個性的な文様で、分布の中心は明らかに宇喜多秀家期の岡山である。120は側区が狭く、文様区が高く岡山城2式でも古相のものであるが、岡山城→富田城の時間差・系統関係が見通せる。

○線形宝珠連結唐草 (124・125)

唐草が宝珠と接して始まり、数珠状に連結するのが特徴的な軒平瓦が打吹城 (倉吉市) と米子城 (B群の一部) で確認されている。打吹城ではコビキAの丸瓦と共存している。近似した文様は、鰐淵寺 (出雲市<sup>(21)</sup>) にもあり、出雲・伯耆の一定圏域に及んでいるとみられる。

○上向三葉状 (二葉+V) 唐草三転 (126・127)

中心飾りが特徴的である。富田城山上部の127と同範の可能性をもつものが、126備前岡山城で出土している。岡山城2式のもので、平瓦部凹面にコビキA痕が残る。同範で良ければ、範が潰れているぶん、富田城例は製作が新しい。

○幅狭上向三葉 (128～131)

幅狭で上向三葉の中心飾りの軒平瓦は全国各地にあるが、江美城本丸で量の主体を占める130は中央の葉脈が主脈のみで中空に見える特徴をもつ。それぞれ異範であるが、唐草の巻き方を含めて同文とみられるものを図示した。128は備前金山寺の天正3年 (1575) の再興時の瓦で、唐草は三転、当然にコビキAの瓦と共存している。この系譜は唐草二転となった岡山城129に引き継がれている。130は江美城本丸でコビキAの丸瓦と共存するが<sup>(22)</sup>、側区の広さや、中心飾り・唐草の矮小化に着目すると、備前の二例よりは新相である。

○下向三葉唐草三転 (132～132)

江美城と米子城 (A群2類) に跨がる同文の軒平瓦で、米子城湊山地区ではコビキBの丸瓦と共存する<sup>(23)</sup>が、瓦そのものは唐草数が多く、側区も狭いことから一見古く見える。米子城では複数の瓦範があり、そのうち133は132江美城例と同範の可能性を検討すべきである。いずれにせよ、この種の瓦の量の分布の中心は米子城にある。

#### (4) 瓦をめぐる諸問題

##### a) 松江城下の瓦工房

松江城の瓦が焼かれた場所を考古学的に特定することは、今のところ困難であるが、堀尾期の城下町絵図には、城郭部から内堀を挟んで北岸の屋敷区画の中に「瓦焼」の記載があり<sup>(24)</sup>、築城時にも瓦が焼かれた場所であった可能性が窺える。全国各地の城下町遺跡の最初期の屋敷地のさらに下層では鍛冶炉などがしばしば発見され、築城時には直後に城下町となる区域=城郭中枢部の最寄りに臨時の各種工房が形成されることが一般的であったとみられるから、松江城の場合も同様であり、ことによると複数

地にあった臨時の瓦工房が集約され、築城工事・城下町建設の一定の完成後に引き継がれた姿が絵図に示されているとの見方もできる。築城時に城郭部最寄りで焼かれた瓦は、メインで用いられた瓦、軒平瓦でいえば下向三葉の中心飾りをもつものに違いない。堀尾期に続く京極期（1634～37年）の絵図にも近隣別地点の屋敷区画に「瓦屋 忠左衛門」の記載があり、継続して生産されたことが判る。先述した下向三葉B2類と、B3類でも新相のものは、堀尾期の内でも築城後、あるいは京極期かそれ以降の製品であろう。17世紀前半の松江は市中に自前の瓦生産地を抱える都市であった。

ところで、築城時の松江城にメインで瓦を供給した工人集団は、堀尾氏によって先ず富田城で編成されたとみられるが、両城の製品の違いは刻印の有無にも表れる。松江城では堀尾期とみられる刻印には少なくとも分銅文と菊文があるが、富田城ではそうした図形刻印は確認されていない。松江城では100・101のように同範品でありながら異なる刻印をもつものがあり、単に瓦工人を示したとは考え難い。いま細かな解釈は難しいが、富田城段階と松江城段階とでは生産体制ないしは製品管理体制に何らかの違いがあり、そのことが刻印の有無の差に反映されているのであろう。大坂ブランドの屋号を主張する橘文軒平瓦の一部とセットとみられる瓦の刻印は別としても、菊一などの図形印は18世紀以降の在地系とみられる中心飾り五葉の軒平瓦などにも継続する。松江城の瓦を特徴づける刻印の集成と評価は今後取り組むべき課題である。

#### b) 16世紀末～17世紀前葉の出雲・伯耆の瓦供給ネットワーク（図8）

松江城の下向三葉B1類と同文の軒平瓦は、富田城・松江城・米子城の3城に及び、3城に共通の瓦工人があったと解釈できる。別の種類の軒平瓦でも、その3城に江美城を加えた4城、また佐太前遺跡に関わって同範・同文の組み合わせが複数確認できた。この時期の出雲東部から伯耆西部には、瓦工人集団の系統が複数あったが、各々の製品が複数の城・遺跡に及んでいて、全体として一つの瓦供給圏を成していたと言えそうである。

#### c) 諸城の瓦葺建物整備年代と瓦工人（図9）

富田城では堀尾期とみられる下向三葉A類・B類系統以外に、それより古相の5種程度の軒平瓦が山上部を中心に確認されているが、先の検討で3種までが岡山城2式の軒平瓦と深い関係を持つことが判った。これら3種は岡山城出土品より製作が新しいとみられ、宇喜多秀家による岡山城本丸での建物整備よりも遅れて建物整備（ないしは補修）があった可能性が高い。岡山城の瓦の年代観から、それは慶長5年（1600）を下限とする吉川広家期の内としても、天正19年（1591）の入城時ではなく、古くとも文禄年間と見通せる。3種の瓦を製作した工人は、引き続きコビキA技法を行っていても不思議でなく、山上部を中心にあるコビキA痕を残す丸瓦の担い手の少なくとも一部であったと考える。

問題は、富田城でそれ以前にも瓦葺建物があったかどうかである。松江城宝珠A類の同範品は、天正前半に遡る可能性も指摘されている<sup>(25)</sup>が、松江城の同範品はコビキB痕が残るものであるし、整備年代が新しい山中御殿でも出土する。また、先述の姫路城・大坂城の114・115に比べると、文様が委縮し側区も広めで、質感も新相である。天正後葉から慶長期の可能性が浮かび上がるが、これを播磨系工人の製品とすると、彼らは岡山の工人よりも早くにコビキの転換を終えており、富田城の製品が天正後葉としてもコビキBのものであっても良い。富田城では別に中心飾りがやはり肉厚宝珠で、脇にそれを包み込むガク状に立ち上がりながら下に巻く小唐草を配するのが特徴的な軒平瓦<sup>(26)</sup>がある。この文様も播磨系とみられ、姫路の阿賀本徳寺・御着城など播磨を中心に16世紀後半の瓦で散見できる<sup>(27)</sup>。岡山城と関連が深い瓦を用いた建物整備に先行して、播磨系のこの2種を用いて最初の建物整備があった可

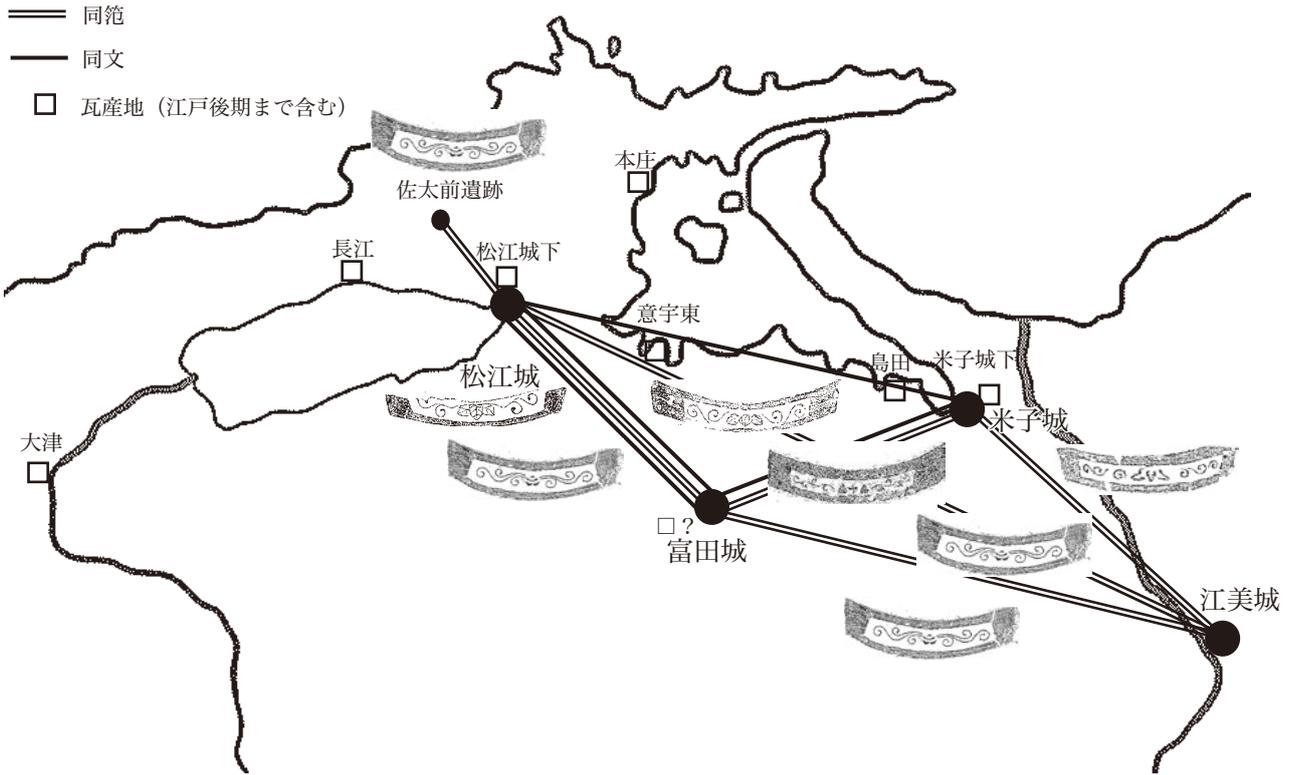


図8 16世紀末～17世紀前葉の同範・同文関係

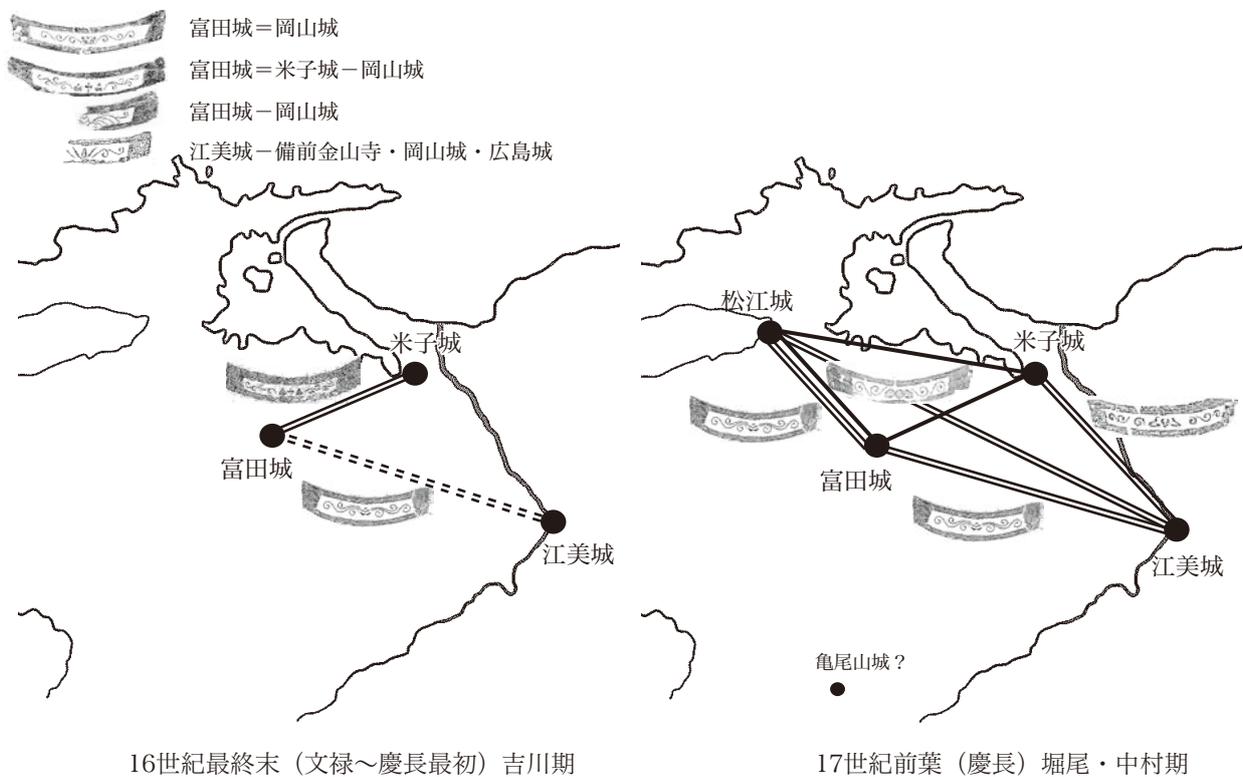


図9 出雲伯耆の諸城を廻る同範・同文関係

=同範 -同文

能性も浮かぶ。ただ、松江城宝珠A類同范品は細かな時期特定が現状では難しく、量や出土状況も踏まえつつ、堀尾期となる慶長前半の下向三葉と同時期の製品である可能性までも視野において検討すべき課題と考える。いずれにせよ、富田城山上部で瓦葺建物を伴う城郭整備が行われたのは天正19年(1591)の吉川広家入封以後で、その前の毛利期では瓦葺建物はなかったと判断できる。

米子城の飯山地区で主体を占める凸面宝珠2+木槌の軒平瓦も岡山城の瓦との同様の関係があり、しかもコビキBの丸瓦と共存するから、コビキの変換を経て富田城よりもさらに新しい。吉川広家期の内だとすれば、いよいよ下限間際と見通せて、慶長4年(1599)頃とする伊藤創氏の考えとも整合する。

江美城は、金箔瓦が確認されている山陰唯一の城郭である。今のところコビキAの瓦だけが確認され、吉川期に瓦葺き建物が整備された可能性が高い。しかし、本丸で主体を占める軒平瓦は唐草二転であるし、側区も広めである。やはり吉川期としても、そう古いものとは考え難い。この瓦も岡山をはじめとする山陽地方に類例が認められるのは先述の通りである。

以上、吉川期に瓦葺建物が整備された可能性がある城郭として富田城、米子城、江美城があるが、その年代は吉川期としても新しい時期が中心である。米子城に至っては下限間際とみられ、吉川領内での富田城→米子城の拠点移動ないしは支城整備が考古学的にも見えてくる。これらには、先に岡山城で活躍した工人が大きく関わっていた公算が強い。吉川氏が宇喜多氏の領域に居た瓦工人を招聘したということではないか。特に凸面宝珠2+木槌を作った工人は、製品量も多く、特に米子城湊山地区ではその主体を占めるから、しばらくは山陰に留まったと見通せる。また、播磨の工人もしくはその文様系譜を引き継ぐ工人の関与も垣間見え、岡山城で活躍した工人の波に先行するかも知れない。

次に、コビキB技法への転換を終えた堀尾期・中村期では、瓦葺き建物を伴う整備が行われた城郭として、疑いないのは富田城・松江城、米子城である。江美城もその可能性をもつ。

富田城では山上部でも下向三葉の軒平瓦が大量に出土するから、堀尾期での新たな建物整備も疑いなく、また山中御殿や富田川河床遺跡を含めて全域で出土し、瓦葺建物の量は相当に増大したと判断できる。まもなく、松江城の築城が始まり、さらに膨大な瓦葺建物が整備されたのである。堀尾期の堀尾領では、三刀屋城や瀬戸山城などの支城が整備されたと考えられるが、そうした支城では瓦は確認されていない。堀尾氏は本城に限って瓦葺建物を整備したとみられる。堀尾氏による瓦葺建物整備で中心的役割を果たした瓦工人は、軒平瓦では下向三葉B1の類の生産を専らとした。厳密な意味でのこの文様は、直結する先行形が他地域にも出雲・伯耆にもみられない特徴的なものであることから、堀尾氏の城郭整備に際して新たに創出されたものと評価できる。複数の瓦範がありながらも、この文様での斉一性が強く窺え、山陽地方をはじめとする他地域のこの時期の大規模城郭での瓦は雑多で多様な文様で構成され統一性に乏しいのと対照的といえる。それは、松江城とその城下町の瓦にも継続する。

一方、中村氏の城郭整備に伴って創出された文様として、米子城・江美城に共通する下向三葉唐草三転(132～134)が有力候補である。ただこれは、吉川期最終末の可能性もなお検討の余地があるように思う。松江城B3類の軒平瓦と近似する文様の瓦(104～113)を作った瓦工人は、出雲側に拠点があるのか、伯耆側にあるのか、あるいは双方に跨がるのかは判らないが、どちらにしても、総じて中村氏の城郭に葺かれた瓦も中心飾り下向三葉に重きをおいたのは確かである。

幅広下向三葉は、堀尾吉晴と中村一氏が秀吉恩顧の大名であったことの表象としての桐葉文<sup>(28)</sup>で、細部では各々の個性を發揮したものと評価もできる。松江城天守では五七桐文の鳥龕が掲げられ、少なくとも堀尾氏は分銅文とともに桐文に拘ったのは間違いない。また二人が秀吉家臣時代から同格・盟友という政治的土壌と地理的な距離の近さが、異なる領国でありながらも瓦供給体制の一部共有を実現させたのであろう<sup>(29)</sup>。関ヶ原直後の山陰・美作で下向三葉が目立つのも、池田・中村・堀尾・坂崎(浮

田)・毛利、森と旧秀吉恩顧(～羽柴名字)大名の配置を考えれば理解しやすい。

中村期に機能していたとみられる瓦葺建物を伴う城郭は、本城の米子城、支城の江美城で、本城・支城関係が同範～同文瓦の共有という形でも示される。また八橋城(琴浦町)や亀尾山城(日野町)でも瓦の存在が知られて、その可能性が注目される。支城にも瓦葺建物を有する点では、堀尾領とは異なる可能性が高い。ただし堀尾領では松江城築城後も富田城が機能していた可能性が強く、臨水地で本格的な城下町を形成した本城の松江城と内陸部の副城の富田城というセット関係が想定できる。

吉川期での瓦葺建物を認めるとしても、出雲・伯耆の城郭で瓦葺建物が本格的に林立するのは間違いなく関ヶ原直後の堀尾期・中村期である。この段階では東出雲・西伯耆を超える同範・同範的同文関係は確認されず圏域内で自己完結している。諸工人が複合しながらも活躍の舞台が小宇宙を形成しているように見えるのが前段との大きな違いで、徳川期の大名領国制の成立と連動した変化と評価できる。

なお、堀尾期の松江城下や中村期の米子城下では、城郭部と同じ瓦が出土するが、同時期の岡山城、広島城、讃岐高松城、小倉城など瀬戸内の各城下町と比べて著しく量や密度が少ない。この状況は、後の時代まで続く。山陰は寒冷地で霜害を受けやすい燻し瓦は風土として無理がある。そのことが、中世～豊臣期の瓦が乏しかったり、初期では山陽で活躍した工人に負う部分が大きかったり、城下町で瓦の普及度が低いことの大きな要因であろう。逆に言えば、それでも城郭中枢部では瓦葺き建物が建てられたのであり、その意味の重大さが判る。

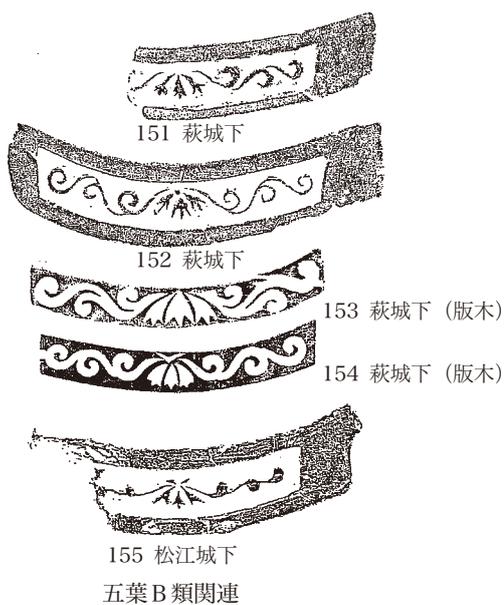
### 3. 松江城の18・19世紀の瓦の検討

#### (1) 中心飾り五葉の軒平瓦をめぐる

松江城の五葉A類の文様系譜を考える上で17世紀前～中葉の製品とみられる米子城140・141(A群3類の一部)の存在は気がかりである。まず16世紀後葉以降の各地の瓦を見わたすと、天正年間の播磨八正寺135から米子城140・141に至る系譜(単一の瓦工人の系列としてこの順に変化したという意味ではない)が浮かびあがる。いずれも中心飾りは葉脈表現がある幅広の三葉で、唐草の特徴が共通する。米子城140・141は慶長14年(1609)下限の中村期か、後の時期の製品かは判然としないが、この文様は米子で独自に創生されたというより、播磨起源の文様を引き継ぐ要素が強そうである。

次に米子城140・141と、明らかに新しい松江城五葉A類142を比べると、中心飾りは三葉と五葉、また線表現かベタ凸面かの違いはあるが、幅広の下向三葉が主体となるのは同じで、なにより唐草のパターンが類似する。工人集団としての連続性はともかくとして、松江城五葉A類は米子城例をモデルに創設された可能性があるのではないか。というのは、中心飾り五葉=割藁文は、18世紀代に入ると京都の宇治<sup>(30)</sup>などで出現するし、江戸後半期には全国で散見でき、メジャーではないが一部地域で流行する傾向がある。しかし、松江城のものとは唐草が各々なりに異なっている。松江城の五葉A類も独自性の強い文様として出雲で生み出されたもので、在地工人による製品と考えられる<sup>(31)</sup>。唐草の三転は、全国的には16世紀末から17世紀前葉を中心にあって、松江城では古い形態を残しているとも言えるが、例えば備前福田(岡山県備前市)では18世紀中葉でも三転唐草の軒平瓦を生産していた。

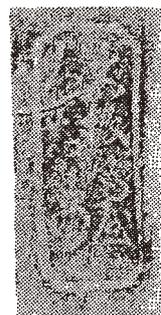
五葉A類は多くが棧瓦で、キラコを使用している。全国的にみると棧瓦は17世紀第4四半期には成立している<sup>(32)</sup>が、普及は18世紀中葉以降である地域が多い。岡山城下に至っては明治以後である。キラコの使用開始時期は特定できていない地域が多いが、例えば岡山城近隣では1753年から1796年の間に使用が始まる。この文様の瓦の内棧瓦成立やキラコ使用に先行する段階があった可能性もあるが、その細分と編年は今後の課題である。いずれにしても、昭和の解体修理時の記録から天守に相当量が葺かれていたことは明らかで、元文3年(1738)～寛保3年(1743)の大規模な天守修理を契機に



0 10cm



156 大坂瓦屋町



157 松江城



158 松江城



159 松江城

0 2cm

大坂瓦屋左右衛門印

図10 18・19世紀の松江城の廻る各地の瓦（156～159は実大、他は1/5）

成立したか、そうでなくともその際の補足瓦の主力として用いられた可能性が強い。

生産地は松江城近隣とみられるが、現状では考古学的には特定できない。堀尾期・京極期に瓦生産が行われていた内堀北岸を含めて城下では瓦生産を示す絵図記載は見当たらず、近隣郊外の可能性を視野におくべきである。例えば、岡山城下では16世紀末から瓦生産を行っていた瓦町に代わって、17世紀第4四半期に城下町内でもより縁辺部に新たな生産拠点が形成され、城内・城下はもとより近隣郊外の寺社などに用いる瓦を大量に生産し始めた。また、18世紀になると郊外農村部にも新たな生産地が形成され始め、19世紀にはそうした郊外の新興瓦産地が林立する<sup>(33)</sup>。こうしたことは、築城から暫く経っての城内・城下町の瓦需要の一段落、その後の城下町での瓦需要の再度の高まり、城下町での都市化の進行とあいまった敷地不足や煤煙・火事といった環境問題への対応、藩による瓦工人の施策的再編、瓦運搬に関わるインフラの充実、郊外部での瓦需要の高まりなどが複雑に絡んだ結果と考えている。松江城の場合も近似した動きの中で、17世紀の内に城下での生産が途絶え、18世紀に入って、あるいは遡っても17世紀末あたりに、松江城内や城下町にも瓦を供給する瓦産地が近隣郊外に成立し、中心飾り五葉B類の瓦を焼いたとの仮説を示しておきたい。城下での生産が途絶える点では、下向三葉B2・3類の下限時期と、五葉A類や橋文の開始時期の細かな検討が必要であるが、現状で製品を見る限り17世紀後半に瓦の量のうえでの空白期があるように思えてならない。

近代の瓦生産から遡ると江戸後期には本庄（松江市本庄町）<sup>(34)</sup>、意宇東（東出雲町意東）<sup>(35)</sup>、島田（安来市島田町）<sup>(36)</sup>、長江（松江市東長江町）<sup>(37)</sup>といった郊外農村部に瓦産地があった（図8）。いずれも臨水地で宍道湖・中海の水運と深く関わった立地に違いない。松江城との関係で最も注目されるのは本庄である。須田氏が確認したこの瓦工人に関する嘉永2年（1849）の嘆願書の冒頭には、工人の先祖は堀尾氏の代に名字帯刀を許されて瓦丁場として六畝の土地を拝領し、天守を始めとした松江城内の建物の瓦を造っていたが、松平氏の代に至って、工房の場所や瓦土を検討した上で、同面積の土地を本庄に貰い、天守補修用の瓦を作ったとの由緒記載がある。本庄は、先の仮説と重なって五葉A類生産地の有力候補といえる。さらに言えば、本庄での須田氏の聞き取りによると3軒あった瓦工人の家のうちの2軒は「家塚」の名字であるが、昭和の天守修理時に「元禄六癸酉年飯塚吉左衛門」と印した瓦が発見されている。須田氏は報告書では言及していないが、音からして「家塚」は「飯塚」が転化した可能性がある。元禄6年（1693）に飯塚吉左衛門が作った瓦、特にその文様の究明が大きな鍵を握っている。

なお、本庄の嘆願書には、先祖が出雲に来たのは寛永年間とし、先の堀尾期での瓦生産と矛盾もあるが、最先祖は「備前国瓦師八兵衛」としている。江戸後期の米子城下の大工町で城の瓦を焼いた「松原仁兵衛」も先祖は播磨から備前を経由して米子に来たとしており<sup>(38)</sup>、先述の富田城・米子城と岡山城の瓦の関係に照らして示唆的である。16世紀末～17世紀にかけて、岡山→出雲・伯耆の瓦工人の流れは複次的にあったのかも知れない。特に伯耆は池田領になることから、寛永9年（1632）の池田家一族間での国替時をピークに備前と因幡・伯耆の間で武士も商工民も相当に動いたのは間違いない。

文様が類似する五葉B類については、松江郊外農村部の瓦工人の製品ともみられるが、それ以上に151～155に示されるように19世紀の長門萩で作られた瓦との類似性が強く、萩の瓦工人かその系譜を引く工人による可能性を考えておきたい。

## (2) 橋文の軒平瓦を廻って

松江城の橋文の軒平瓦は図4 42～48の様に文様が既に定式化した大坂式を含んでおり、内ではそれらが古いものとみられる。そうしたものでも元禄以降の特徴とされる下のガクが二股に分かれたもの

が主体である。43の様に実が小さく古相のものから45の様に実が大きく柿実形となった新相のものまで含んでおり、大枠としては18世紀半ばから19世紀にかけての各時期のものが混合しているとみられる。

今のところ瓦当部を残す個体での確認例は見当たらないが、大坂の瓦工人自身が製作したことが確実な刻印をもつものは、42～48の様な定型的な大坂式に伴うものであろう。松江城で確認できるのは「大坂瓦屋太右衛門」（「太」はあるいは「左」）の1種のみである（157～159）が、大坂瓦屋町遺跡（大阪市中区）で同様の刻印をもつ瓦（156）が出土している。松江城で確認できている刻印と細かく比べると同形・同大・同字であるが印判は異なる。18世紀後半の土壙出土で144などの瓦と共伴するが、一帯で出土する瓦は幕府御用瓦師を務めた寺島家の配下の瓦工人の製品と判断される<sup>(39)</sup>。この刻印をもつ松江城の瓦を作ったのは寺島配下、いわば大坂式の本家本流の瓦工人であった。

松江城の定型的橋文の瓦は大坂で焼かれた搬入品か、大坂工人が松江へ出張して焼いたのかは検討課題であるが、46・47のように定型的な大坂式文様でも左棧瓦があるのは注目される。というのは、全国的にみると瓦当立面が「へ」形の右棧瓦が圧倒するのに対し、出雲を中心とした地域では左棧瓦が優位という事実<sup>(40)</sup>があり、そうであるなら46・47は出雲仕様であってオーダーメイド性が強い。

42～48に対して49～51は大坂式の垂流というか、大坂式の影響を受けながら土着化したという評価が相応しい文様である。

松江城の橋文の瓦は、大坂に本拠をおく工人によるものを確実に含みつつ、その系譜を引く、もしくは製品を介して模倣を行った在地工人の製品も含んでいると見通せる。後者が焼かれたのは先に示した宍道湖・中海沿岸の瓦産地が候補となる。もはや蓮華文といえる51は旧松江郷土館収蔵資料台帳<sup>(41)</sup>に写真添付された左棧瓦の内に近似する文様のものがあり、長江産かも知れない。

江戸後半期の大坂式橋文の軒平瓦は、関西と瀬戸内航路で繋がっている岡山や広島、高松では目立たないのに対し、かえって遠隔地の山陰の瓦（145～150）では萩における堺瓦<sup>(42)</sup>を初め、津和野、米子、鳥取など山陰では相当量が認められる。松江城の瓦もそうした関西系の分布圏の一面を占めるものとして理解できる。こうした状況は、瓦需要が多い瀬戸内では地場の瓦産地が豊富に形成されたのに対し、山陰では燻瓦の需要が低く、応じて瓦産地の形成が進まなかったことの裏返しであろう。関西の瓦工人・瓦商人からすれば、競争相手の少ない山陰は絶好の売り込み市場だったに違いない。松江はやや外れるが、山陰全体とすれば、そうした構図を一転させるのが、寒冷気候に適合した釉薬を掛けた石州瓦の登場・席卷という図式になるだろう。それは幕末、むしろ明治に入ってから話である。

## おわりに

出雲では松江城築城に先行する16世紀末に始まった城郭所用瓦は備前岡山との関連が濃厚に窺え、播磨の影もみえる。17世紀前葉には堀尾氏の出雲入国に伴って自前の瓦工人が編成され、下向三葉を中心飾りに据えた独自性の高い文様の軒平瓦が創出され、富田城に主力として葺かれて瓦文様の斉一性を高め、居城の移動に伴って、そのまま松江城の瓦に引き継がれた。この時期は、出雲東部から伯耆東部に跨る生産供給体制も垣間見える。そして地場での瓦生産がやや停滞したとも思える17世紀後半を経て、18世紀には在地様式の瓦が創出され、天守の修理などに用いられた。大坂の工人による製品の参入もあり、松江城周辺では五葉に象徴される在地出雲系と橋に象徴される外来関西系の二重構造で瓦が供給される段階に至った。19世紀になると、郊外農村部での新たな瓦産地の成立も想定できる。以上をまとめとして、松江城を廻る瓦の研究を次のステップに繋げたい。

本稿は、松江市史編纂に関連して行われた、平成26年2月9日の松江城出土瓦の検討会、ならびに

平成 26 年 8 月 25 日の出雲・伯耆地域の城郭・遺跡出土瓦の比較検討会の成果に多くを負っている。瓦の理解や評価の誤りは当然に筆者の責任であるが、開催にご尽力された方々ならびに参加者、対象資料の発掘や分析に長年関わってこられた皆さん全員の成果と思っている。とりわけ、市史編纂室の稲田信・福井将介、石塚晶子、同松江城部会の西尾克己・岡崎雄二郎、松江市埋蔵文化財調査室の川上昭一、出雲市教育委員会の花谷浩、安来市教育委員会の舟木聡、米子市教育文化事業団の佐伯純也、江津市教育委員会の伊藤創の各氏には有益なご助言をいただき、また多くの便宜を図っていただいた。

〔追記〕 本校脱稿後、18・19 世紀の松江城の瓦の生産地を探る手がかりを得るため意東、本庄、秋鹿・長江、出雲大津などの瓦産地を訪ね、寺社や民家に残る瓦の文様を点検する作業を行った。当地で使う瓦は創業中である限り当地産が卓越するに違いないからである。現況は多くの建物で近年製の石州瓦が葺かれているが、江戸末から明治・大正・昭和にかけての黒瓦＝左棧瓦がなお葺かれている建物や野積みされている場所がある。

そのうち本庄では、五葉 A 類とまったく同文の瓦が複数地点で確認でき、相対的に古いとみられる黒瓦の主体を占めることが判った。この文様は他の瓦産地では確認できていない。こうしたことから、松江城の五葉 A 類は本文で記した状況証拠と合わせて本庄の工人によることがほぼ確定的となった。

いっぽう、意東は大坂式の垂流が卓越するが、中心飾りの橘の実相当が小さく、それを皿形の図形で受け、その下に実と同大の凸丸を置くという特徴をもつ。出雲大津では、大坂式の崩れとみられるものは中心飾りの表現や唐草が松江城のものとは異なるし、中心飾りが蓮華風で唐草相当部が扁平で上方向にだけ延びるものが卓越する。

松江城で確認されている大坂式と近似した文様を含むのは秋鹿・長江である。ここでは、大坂式の垂流や中心飾りの橘が崩れたものを含むが、左右の鰹の先端をきちっと二股に割るという原則を昭和まで貫いている。真正の大坂式と言ってよいものも含んでおり、松江城の大坂式のうち、大坂瓦屋の刻印に伴うものを除いた残り、あるいは左棧瓦のものは、長江の工人による可能性が強そうである。実は、長江瓦の創業者とされる衣更源左衛門に関しては、20 歳の時に大坂の瓦所で修業し 5 年後に長江に帰って瓦焼いたという明和 2 年（1765）の文書があり、注 37 曳野書に紹介されている。この経緯は、長江が正統な大坂式文様を採用したことと見事に整合する。

以上の様に考えると、本文で考えた五葉在地系と橘外来系の二重構造とは、実体としては中海に臨む東の本庄と宍道湖に臨む西の長江の二産地の対峙ということなる。瓦産地としての廃絶は本庄の方が早い、双方とも創業以来長くに渡ってほぼ同じ文様の瓦を作り続けたことになる。なお、松江城 49・51 は秋鹿・長江産の可能性が強いが、明治の天守修理時の補足瓦の可能性もある。また、松江城五葉 B 類は産地特定には至らないが、平田の元石橋邸で確認できた。

#### 注

- (1) 須田主殿 1954 『城郭史から見た松江城天守と昭和の修理』（稿本・松江歴史館所蔵）
- (2) 織豊期城郭研究会 1994 『織豊期城郭の瓦』
- (3) 山崎信二 2008 『近世瓦の研究』 同成社
- (4) 松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団 2011 『松江城下町遺跡発掘調査報告書』
- (5) 飯塚康行 2001 「松江城出土軒瓦について」『史跡松江城整備事業報告書』調査編 松江市教育委員会
- (6) 森田克行 1984 「屋瓦」『摂津高槻城』高槻市教育委員会
- (7) 乗岡実 1997 「瓦について」『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』岡山市教育委員会、乗岡実 2001 「瓦

について』『史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告』岡山市教育委員会 以下、岡山城出土瓦についての記載は両書による。

- (8) 金子智 1996 「江戸遺跡出土資料に見る近世軒平瓦・軒棧瓦の地方色」『古代』第 101 号
- (9) 注 3 ほか
- (10) 注 7 と同じ
- (11) 伊藤創 2013 「伯耆におけるコビキ技法の転換期」『山陰中世土器研究』1 山陰中世土器研究会
- (12) 新庄正典 2012 「松江城下町遺跡出土の桔梗紋の瓦を使用した家について」『松江歴史館研究紀要』第二号 松江歴史館
- (13) 近藤真佐夫 1995 「若松城の黒瓦について」『織豊城郭』第 2 号 織豊期城郭研究会
- (14) 舟木聡 2003 『史跡富田城跡 環境事業報告書Ⅱ』広瀬町教育委員会 富田城の瓦分類は同書による
- (15) 中井均 1994 「織豊系城郭の特色について」『織豊城郭』創刊号 織豊期城郭研究会
- (16) 佐伯純也 2003 「米子城跡出土の近世瓦」『関西近世考古学研究』X I 関西近世考古学研究会 米子城の瓦分類は同書による
- (17) 岡山市教育委員会が発掘調査。岡崎雄二郎氏の便宜で同範関係を検討。花谷浩氏によるご教示も得た。
- (18) 田中幸夫 1994 「姫路城瓦と姫路系瓦工について」『織豊城郭』創刊号 織豊期城郭研究会、田中幸夫 2004 『播磨の中世瓦』
- (19) 注 3 と同じ。また平成 26 年 8 月 25 日の検討会で確認した。
- (20) 注 11 と同じ
- (21) 平成 26 年 8 月 25 日の検討会での出雲市教育委員会花谷浩氏による資料提示とご教示による
- (22) 注 11 と同じ
- (23) 注 11 と同じ
- (24) 堀尾・京極・松平の各期の松江城下町絵図での記載については市史編纂室の福井将介氏のご教示を得た。
- (25) 注 3 と同じ
- (26) 舟木聡氏の便宜で平成 26 年 8 月 25 日の検討会で実見
- (27) 注 18 の田中 2004
- (28) 木戸雅寿 1995 「織豊期城郭にみられる桐紋瓦・菊紋瓦について」『織豊城郭』第 2 号 織豊期城郭研究会
- (29) 加藤理文 2012 『織豊権力と城郭』高志書院
- (30) 杉本宏 2003 「棧瓦の成立過程と京瓦師の動向」『関西近世考古学研究』X I 関西近世考古学研究会
- (31) 注 3 と同じ
- (32) 注 30 と同じ
- (33) 乗岡実 1996 「岡山市近郊における近世瓦の生産と流通」『岡山市の近世寺社建築』岡山市教育委員会
- (34) 注 1 と同じ
- (35) 伊藤菊之輔 1948 『意東村史』東出雲町立意東公民館、東出雲町誌編纂委員会 1978 『東出雲町誌』
- (36) 注 1 と同じ
- (37) 須藤吉郎編 1968 『古江百年史』松江市古江公民館、曳野弥生 2010 「長江瓦について」『古江公民館報』第 214 号 松江市古江公民館
- (38) 注 16 と同じ
- (39) 黒田慶一ほか 2009 『瓦屋町遺跡発掘調査報告』大阪市文化財協会
- (40) 永田鉄雄 1990 『出雲大津窯業誌』
- (41) 岡崎雄二郎氏のご教示による

(42) 嶋谷和彦 2003「堺瓦の生産と流布」『関西近世考古学研究』X I 関西近世考古学研究会、柏本朝子 2003「萩における堺瓦の移入について」『関西近世考古学研究』X I 関西近世考古学研究会

図版についての注（本稿遺物番号：出土地・報告書掲載番号、＝報告書分類）

第1～4図＝松江城の瓦

1：二の丸太鼓櫓西SK01・50＝A-1類、2：二の丸太鼓櫓西SK01・51＝A-2類、3：大手門跡・189＝A-3a類、4：城郭内＝A-3b類、5：城郭内＝A-4類、6：城郭内＝A-5類、7：城郭内＝B-1類、8：本丸地区＝城郭内B-2類、9：城郭内＝B-3類、10：二の丸太鼓櫓西SK1・49＝C-1類、11：二の丸太鼓櫓西SK01・50、12：城下（歴史館）北屋敷第3面SD01・945、13：城郭部＝a-1a類、14：本丸北東隅調査区第3層・10、15：天守修理時調査瓦、16：城郭部＝a-1b類、17：天守修理時調査瓦、18：城下（歴史館）南屋敷第4面SD01・2309、19：馬溜地区・181、20：二の丸太鼓櫓西SK01・50＝a-2類、21：城下（歴史館）北屋敷第3遺構面SD01・955、22：城下（歴史館）南屋敷第3-1面SD8・2001、23：天守修理時調査瓦、24：天守修理時調査瓦、25：脇虎ノ口跡・6、26：天守修理時調査瓦、27：脇虎ノ口跡・7、28：脇虎ノ口跡・5、29：城下（歴史館）南屋敷第3面・1695、30：城下（歴史館）南屋敷第3面SK32・1606、31：城郭部＝a-3類、32：本丸地区・12＝a-4類、33：本丸北東隅第3層・12、34：城郭部＝a-5、35：城下（歴史館）南屋敷第3面・1694、36：天守修理時調査瓦、37：城下（歴史館）北屋敷第1面・526、38：脇虎ノ口跡・8、39：本丸北東隅第3層・15、40：天守修理時調査瓦、41：城下（歴史館）北屋敷第1面SK3・476、42：城郭部＝b-2類、43：天守修理時調査瓦、44：城下（歴史館）北屋敷第1面SK3・483、45：城下（歴史館）北屋敷第2面SK21、46：天守修理時調査瓦、47：城下（歴史館）北屋敷第1面SK3・481、48：城郭部＝b-3類、49：天守修理時調査瓦、50：天守修理時調査瓦、51：天守修理時調査瓦、52：本丸管理事務所西側土坑、53：城下（歴史館）北屋敷第1面SK3・482

第5～10図

54～56：京聚楽第龍前町・花立町、57：大和興福院本堂、58：摂津大坂城、59：播磨隋願寺、60：播磨鶴林寺、61：備前岡山城本丸中の段・67、62：備前岡山城本丸中の段・73、63：備前岡山城本丸中の段・66、64：美作津山城、65・66：因幡鳥取城初蔵跡、67：石見津和野城南出丸西側下、68：安芸不動院楼門、69：安芸厳島神社千畳閣、70 備後尾道浄土寺阿弥陀堂、71～75：安芸広島城大手郭武家屋敷地、76：長門串崎城、77：豊前小倉城桐葉文3類、78・79：筑前福岡城、80・81：肥前名護屋城、82：豊後府内城、83：肥前長崎奉行所跡、84～89：会津若松城、90：淡路妙京寺本堂、91：播磨円教寺、92：肥前名護屋城、93：筑前観世音寺、94：松江城城郭部＝a1-a類、95：富田川河床遺跡（富田城下）、96：松江城城郭部＝a1-b類、97：富田城三の丸南斜面・168＝A-1類、98：富田城、99：富田城三の丸地区第1トレンチ・20、100：松江城二の丸太鼓櫓西SK01・50＝a-2類、101：松江城下（歴史館）北屋敷第3面SD01・955、102：米子城湊山地区内膳丸＝A群1類、103：松江城下（歴史館）南屋敷第3-1面SD08・2002、104：富田城三の丸＝A-2類、105：江美城八幡丸・7、106：米子城＝A群1類、107：松江城本丸地区・12＝a-4類、108：米子城湊山地区内膳丸、109：伯耆米子城、110：松江城本丸北東隅第3層・12、111：松江城下（歴史館）南屋敷第3面・1694、112：米子城湊山地区、113：米子城湊山地区内膳丸、114：姫路城、115：大坂城、116：富田城三の丸＝B-1類、117：江美城八幡丸、118：松江城本丸管理事務所西側土坑、119：備前岡山城本丸中の段、120：富田城三の丸地区南斜面・169＝B-3類、121：備前岡山城本丸中の段・78、122：富田城三の丸帯曲輪石垣前面・126＝B-2類、123：米子城飯山地区＝F群、124：打吹城本丸付近、125：米

子城＝B群、126：備前岡山城本丸中の段・16、127：富田城本丸地区・183＝A－3類、128：備前金山寺、129：備前岡山本丸中の段・46、130：江美城本丸、131：安芸広島城大手郭武家屋敷地、132：江美城本丸、133：米子城、134：米子城＝A群2類、135：播磨八正寺、136：播磨朝光寺、137：日吉神社、138：撰津大坂城、139：播磨円教寺、140：米子城＝A群3類、141：米子城湊山内膳丸、142：松江城脇虎ノ口跡・8、143：大阪瓦屋町遺跡S K 45・72、144：大阪瓦屋町遺跡S K 86・85、145：松江城下（歴史館）北屋敷第1面S K 3・483、146：松江城下（歴史館）北屋敷第2面S K 21、147：鳥取城粉蔵跡、148：米子城下8次、149：津和野城南出丸西側下、150：萩城、151：萩城外堀・1698、152：萩城外堀・1715、153・154：旧萩阿川家所蔵版木拓本、155：松江城下（歴史館）北屋敷第1面S K 3・476、156：大阪瓦屋町遺跡S K 86、157：松江城天守修理時調査瓦、158・159：松江城二の丸下の段・米蔵跡など

図出典文献：本稿遺物番号

松江市教委 2001：1～11、13・16・31・19・20・31・32・34・42・48・100・107

松江市教委・事業団 2011：12・18・21・22・29・30・35・37・41・44・45・47・53・101・103・111・145・146・155

松江市教委 1986：25・27・28・38・142

松江市教委 2007：14・33・39・110

菊池 1953：15・17・23・24・26・36・40・43・46・49・50・51・157

岡崎雄二郎整理資料 2014：52・118・158・159

森島 1994：54～56

山崎 2008：57・59・60・68・69・76・78～89・92～94・96・99・106・109・114・133・150

佐藤 2003：77

大阪市文協 1984：58

黒田 1994：115・138

岡山市教委 1997：61～63・119・121・129

岡山市教委 2001：126・128

津山市教委 1995：64

鳥取市財団 2001：65・66・147

宮田 2012：67・149

広島市財団 2006：70～75・131

田中・土橋 1990：90・91・135～137・139

藤原資料研究会 2009：95

広瀬町教委 2003：97・98・104・116・120・122・127

佐伯 2006：102・125・134・140・148

伊藤 2013：105・108・112・113・117・121・123・124・130・132・141

大阪市文協 2009：143・144・156

山口県センター 2006：149・150

柏木 2003：151・152

図出展に関わる文献（掲載瓦に関する参考文献）

伊藤創 2013「伯耆におけるコビキ技法の転換期」『山陰中世土器研究』1 山陰中世土器研究会

大阪市文化財協会 1984 『難波宮址の研究』 第八  
大阪市文化財協会 2009 『瓦屋町遺跡発掘調査報告』  
岡山市教育委員会 1997 『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』  
岡山市教育委員会 2001 『史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告』  
柏本秋生・柏本朝子 2003 「改印のある瓦範型について」 『山口大学考古論集』 近藤喬一先生退官記念事業会  
菊池敏光 1953 『松江城天守瓦の拓本』・『松江城天守瓦の拓本』 壺・『松江城天守瓦の拓本』 貳、『松江城天守各種瓦刻印の摺本』・『平瓦刻印拓本』・『唐草瓦拓本』 ほか（松江歴史館所蔵）  
黒田慶一 1994 「大坂城跡」 『織豊期城郭の瓦』 織豊期城郭研究会  
佐伯純也 2006 「米子城の瓦」・「米子城跡」 『城郭瓦の変遷』 中国・四国城館遺跡検討会  
佐藤弘司 2003 「小倉城下の近世瓦」 『関西近世考古学研究』 X I 関西近世考古学会  
田中幸夫・土橋健二郎 1990 「妙京寺と播磨の瓦」 『妙京寺の古瓦』 一宮町教育委員会  
津山市教育委員会 2000 「津山城本丸二の丸確認調査報告」 『年報津山弥生の里』 第2号  
鳥取市文化財団 2011 『鳥取城跡初蔵跡（第20次調査）』  
広島市文化財団 2006 『広島城跡太田川河川事務所地点』  
広瀬町教育委員会 2003 『史跡富田城跡 環境事業報告書Ⅱ』  
藤原久良採集陶磁資料調査研究会 2009 「島根・富田川河床遺跡の研究」 『古代文化研究』 第17号 島根県古代文化センター  
松江市教育委員会 1986 『史跡松江城保存修理事業報告書』 昭和60年度  
松江市教育委員会 2001 『史跡松江城整備事業報告書』 第2分冊 遺構編  
松江市教育委員会 2007 『史跡松江城石垣修理報告書』  
松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団 2011 『松江城下町遺跡発掘調査報告書』  
宮田健一 2012 「津和野城跡外縁部の遺物をめぐると一考察」 『西国城館論集』 II 中国・四国地区城館調査検討会  
森島康雄 1994 「聚楽第跡」 『織豊期城郭の瓦』 織豊期城郭研究会  
山口県埋蔵文化財センター 2006 『米子城（外堀地区）Ⅲ』  
山崎信二 2008 『近世瓦の研究』 同成社

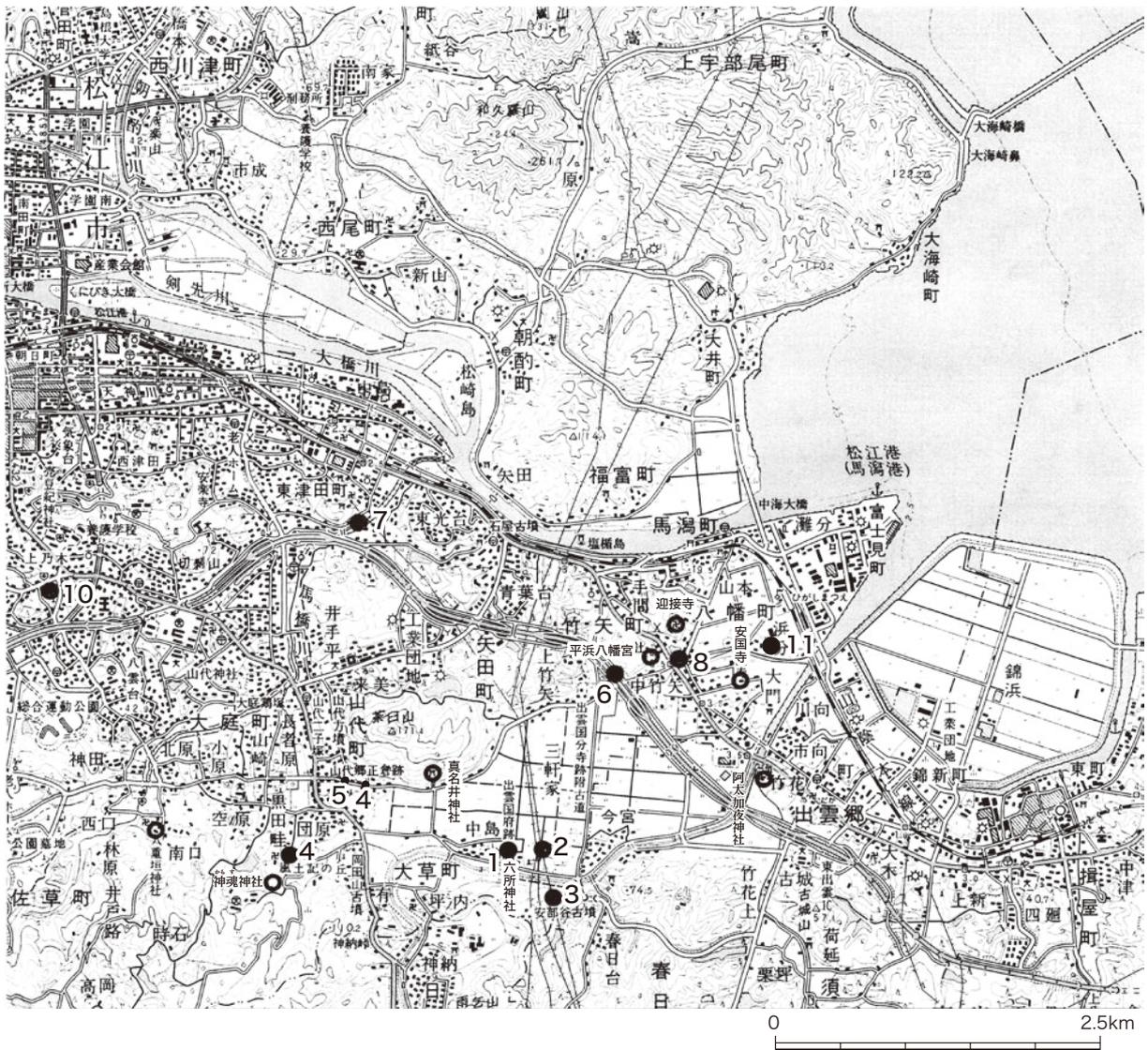
（のりおか みのる 岡山市教育委員会文化財課長）

# 遺跡から見た出雲府中

西尾克己・廣江耕史

## 1. 古代の国府から出雲府中へ

古代の出雲国府には、奈良時代に編纂された『出雲国風土記』によれば、国庁、意宇郡家、意宇軍団、黒田驛の四機関があり、意宇郡大草郷の同じ場所に存在していたとされる。これらの機関については、松江市大草町にある六所神社の周辺に比定され、昭和43年から発掘調査が実施されてきた。その結果、国庁の政庁や国司館などの建物跡をはじめ、道路跡や井戸跡等の遺構が多く検出され、遺物としては奈良時代から平安時代までの土器や瓦類などが大量に出土している。<sup>(1)</sup>しかし、10世紀後半以降になると、遺構、遺物とも減少してくる。また、各役所や役人の屋敷地も、意宇平野とその周辺部の広い範囲に分



1. 出雲国府跡
2. 大屋敷遺跡
3. 天満谷遺跡
4. 出雲国造館跡
5. 寺の前遺跡
6. 中竹矢遺跡
7. 石台遺跡
8. 的場遺跡
9. 小無田II遺跡
10. 乃木長廻遺跡
11. 浜分II遺跡

図1 出雲府中関連遺跡と社寺位置図

散していったと考えられる。その背景には、律令体制の変質に伴う国府機能の変化が想定される。(2)

奈良時代から平安時代前期の国府は、郡家を含む合同庁舎の様相をもち、意宇川沿いの微高地に存在していた。しかし、平安時代中頃の10世紀後半から11世紀前半にかけての建物などの遺構が、この場所ではほとんど検出されていない。また、遺物の出土量も僅かである。全国的にも、平安時代以降の国府の実態についてはよく分かっていない。

さて、古代末から中世にかけての国府は「府中」と呼ばれ、全国各地に地名として残っている。文献史料からは、出雲府中には留守所、田所、税所、案主所、公文所などの役所が存在したとされる。また、府中域には国内神社を統括した総社をはじめとする神社や寺院、さらには大橋川沿いの港も含んでいた。(3) これらの遺跡や現在まで続く神社、および府中に関係する地名は、現在の意宇平野周辺部の松江市大庭町、山代町、大草町、竹矢町、八幡町、東出雲町出雲郷一帯に点在している。

## 2. 出雲府中域の役所と屋敷地

出雲府中の範囲は大草郷、山代郷、竹矢郷を含む広範に及び、これまでの発掘調査において、国衙の役所跡や在庁官人と呼ばれた役人の屋敷に関わる遺跡などが少しずつ分かり始めている。その手がかりは、中国製の白磁や青磁、さらには国内各地で生産された陶器などの遺物の存在である。特に、中国の陶磁器は一般集落での出土数は限られるが、役所や寺院、館などの遺跡では多く認められる。陶磁器が多数出土する遺跡としては、大草町の出雲国府跡、天満谷遺跡、大庭町の出雲国造館跡、竹矢町の中竹矢遺跡、東津田町の石台遺跡などが挙げられる。出雲府中では、平安時代後半の11世紀後半から12世紀になると遺構や遺物が多く確認されている。(4)

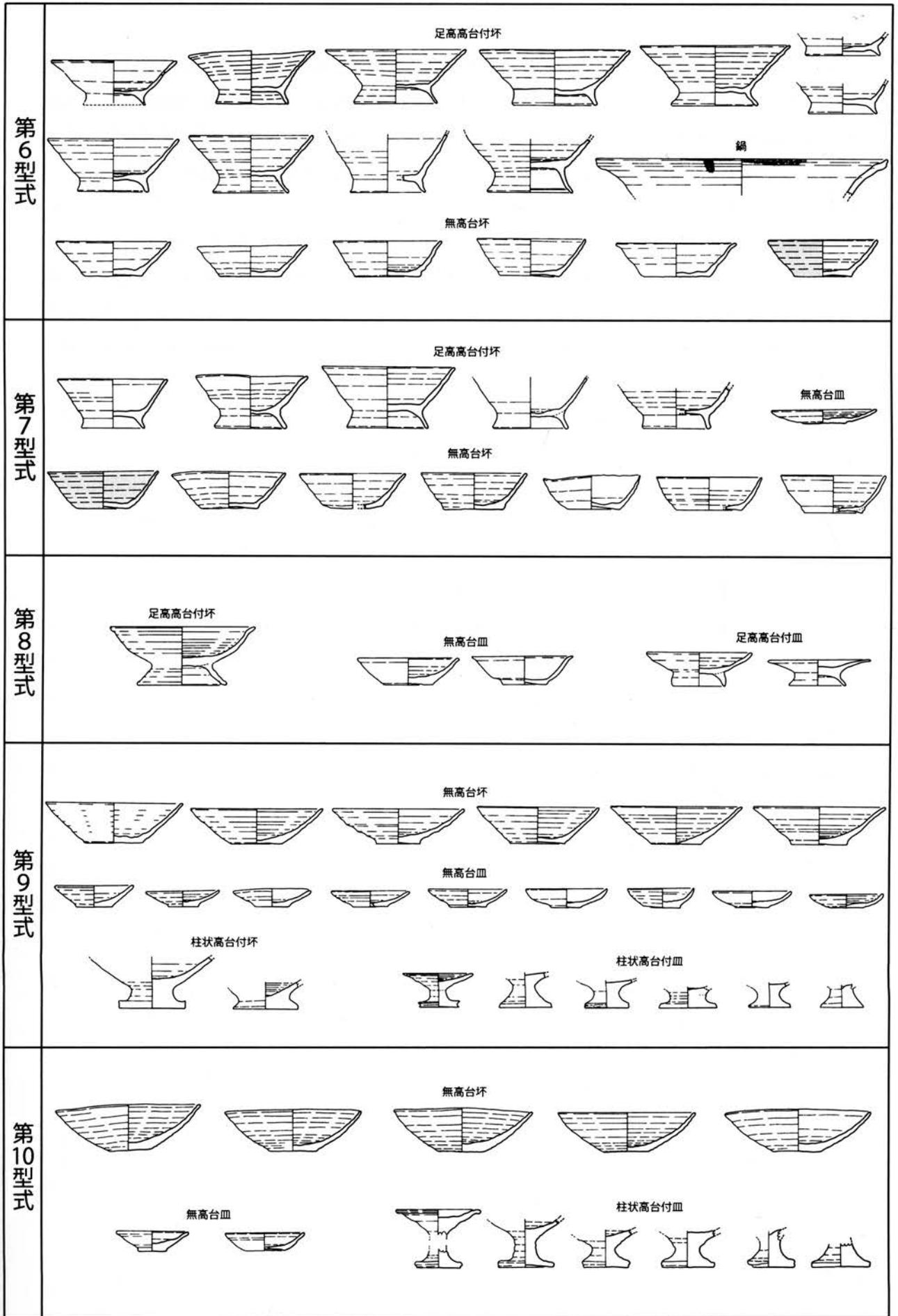
### (1) 出雲国府跡（大草町）

出雲国府跡では、遺跡の北東部にあたる日岸田地区<sup>ひがんで</sup>を中心として、掘立柱建物跡3棟が検出され、陶磁器を中心に遺物も多くなる。この地区の西側では南北道路も存在しており、検出されている建物跡の中には、桁行2間(3.7m)、梁行き3間以上で、二方に庇をもつ中心的な建物も存在する。遺物の陶磁器も他の遺跡と比較しても質量とも突出し、また、中国の青白磁や陶器の壺、盤などの特殊品も混じっ

表1 出雲国府跡遺構遺物変遷一覧図

年代	土器型式	出雲国府	六所脇地区	宮の後地区	大舎原地区	日岸田地区	樋ノ口地区
7世紀後葉	第1型式	I期	前身官衙	前身官衙	—	—	—
8世紀第1四半期	第2型式	II-1期	政庁カ (四面廂付建物)	曹司 (掘立柱建物、区画溝、木簡、墨書、玉作)	文書、工房、祭祀 (掘立柱建物、区画溝、祭祀土坑、墨書、玉作)	漆工房 (総柱建物、区画溝、漆、玉作)	金属器工房カ (竪穴、掘立、金属器)
8世紀第2四半期	第3型式	II-2期					—
8世紀第3四半期	第4型式	III-1期	政庁 (四面廂付建物)	曹司 (掘立柱建物、区画溝、木簡、墨書)	国司館 (礎石、掘立柱建物、区画溝、木簡、墨書)	(掘立柱建物、区画溝、緑釉陶器)	—
8世紀第4四半期		III-2期					—
9世紀前葉	第5型式	—	—	—	—	—	—
9世紀中葉	第6型式	IV期	(炉跡、土坑、緑釉・灰釉陶器)	(掘立柱建物、緑釉・灰釉陶器)	(礎石建物、溝、井戸、緑釉・灰釉陶器)	(礎石建物、溝、緑釉・灰釉陶器)	—
9世紀後葉							—
10世紀前半	第7型式	—	—	—	—	—	—
10世紀後半	第8型式	V期	—	(井戸、土坑、緑釉陶器)	—	—	—
11世紀前半			—	—	—		
11世紀後半	第9型式	VI期	—	(井戸、貿易陶磁器)	(井戸、柵列、溝)	(掘立柱建物、井戸、貿易陶磁器)	—
12世紀前半			—				—
12世紀後半			第10型式				—

『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 22 史跡出雲国府跡－9 総括編－』より)



土師器

図2 出雲国府跡の土器変遷図(4)(S=1:6)

(『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 22 史跡出雲国府跡-9 総括編-』第210図より転載)

ている。白磁をはじめとする陶磁器は出雲国府跡出土の56鉢を占めており、道路跡に隣接する日岸田地区堂田調査区<sup>どうでん</sup>が出雲府中を中心とした物資の集積地であったとされる。<sup>(5)</sup> 山陰において、大量の中国製陶磁器を出した遺跡としては、石見府中の古市遺跡（浜田市上府町）が知られ、同様な機能を有していたと考えられる。当時、中国製の陶磁器は博多を経由し、瀬戸内や日本海沿岸を介して全国に流通するといわれており、日本海側の様子が分かる事例である。また、「殿」の字が墨で書かれた白磁碗や、役人が使用した硯や檜扇、蝙蝠扇も数個分出土している。出雲国府跡<sup>ひ おうぎ</sup> 一带には、平安後期においても主要な政務を行った役所や国司や在庁官人の屋敷が少なからず残っていたことが窺える。鎌倉時代に入っても役所の機能は残っていたことは、13世紀代の遺物の量や多くの柱穴跡や井戸跡の検出から知れるものの、明確な建物跡が確認されておらず、詳細な様子が把握できていない。<sup>(6)</sup>

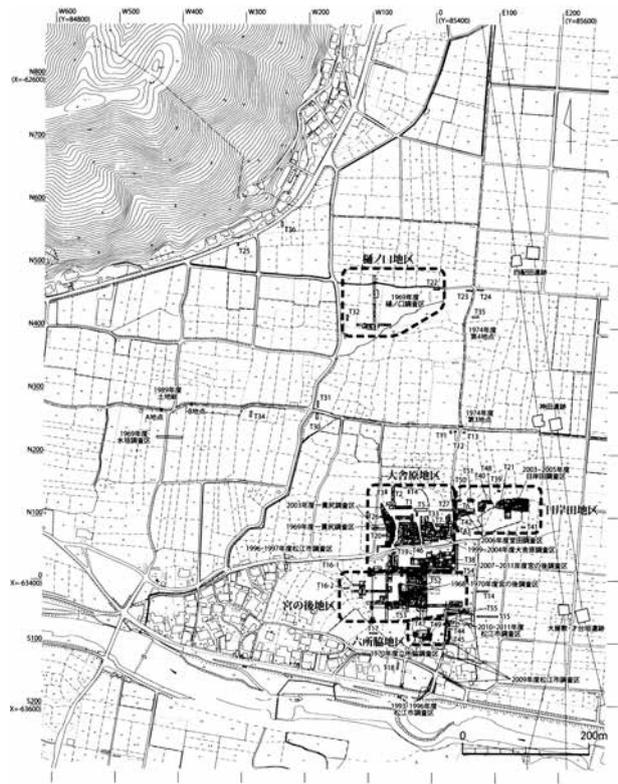


図3 史跡出雲国府跡調査区配置図  
 (『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 22 史跡出雲国府跡-9 総括編-』第8図より転載)

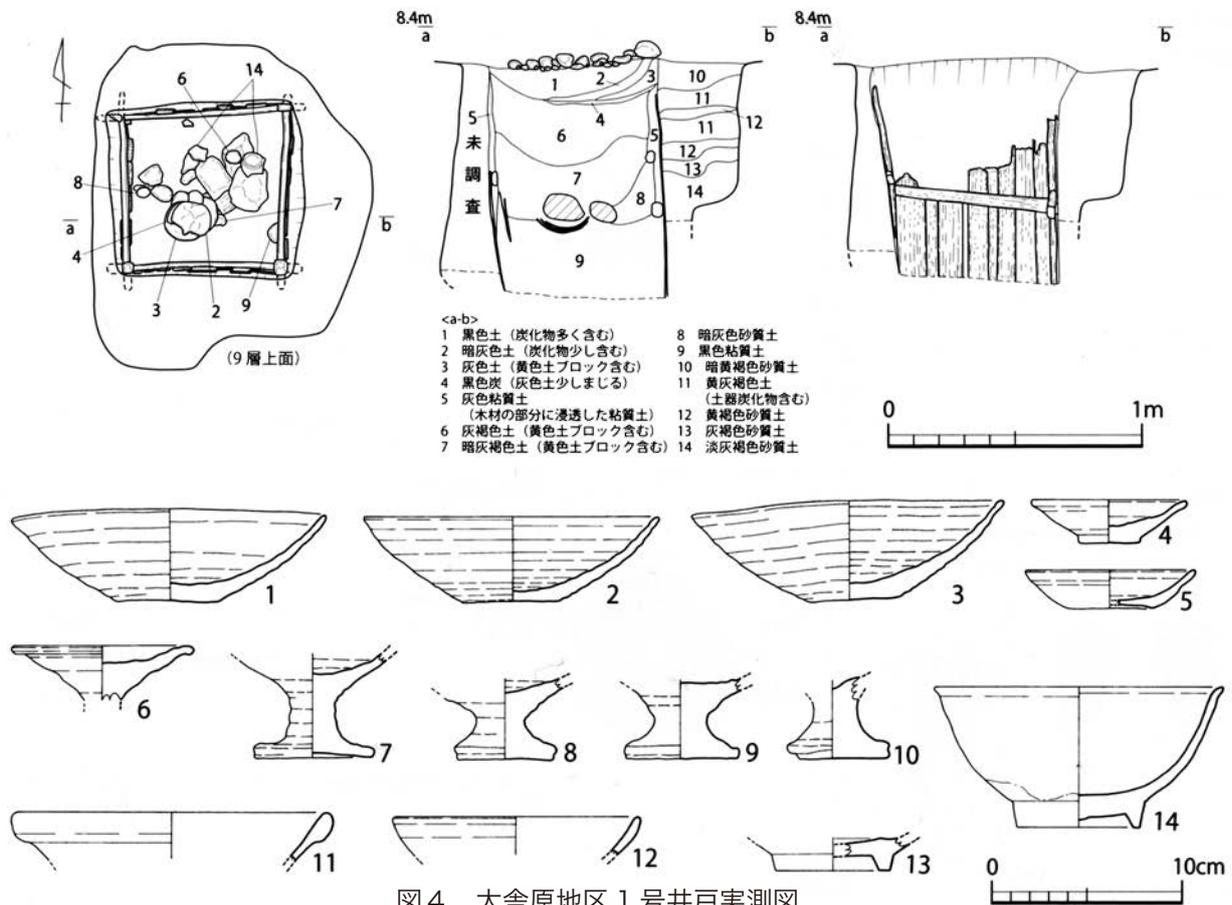


図4 大舎原地区1号井戸実測図

(『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 22 史跡出雲国府跡-9 総括編-』第106図より転載)

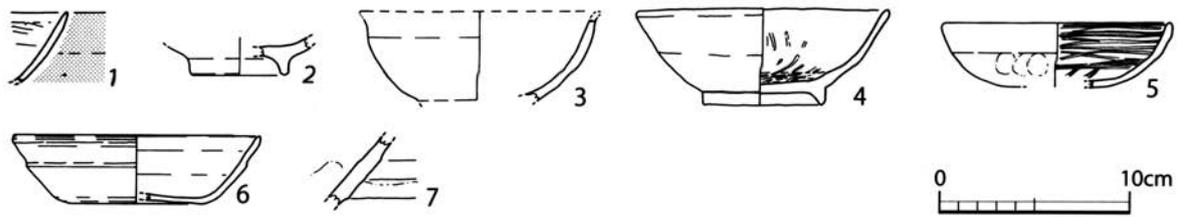


図5 六所脇・宮の後地区出土国産陶器・搬入土器実測図 (S=1:4)  
 (『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 22 史跡出雲国府跡-9 総括編-』第 215 図より転載)

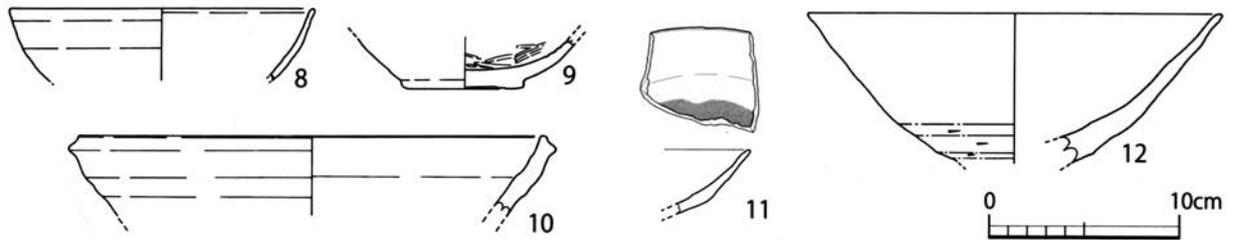


図6 大舎原地区出土国産陶器・搬入土器実測図 (S=1:4)  
 (『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 22 史跡出雲国府跡-9 総括編-』第 216 図より転載)

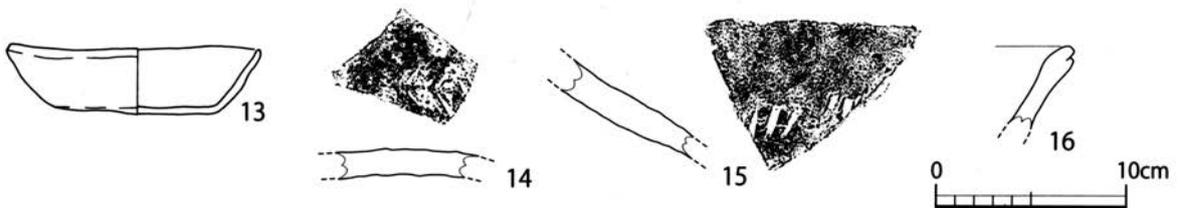


図7 日岸田地区出土国産陶器・搬入土器実測図 (S=1:4)  
 (『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 22 史跡出雲国府跡-9 総括編-』第 217 図より転載)

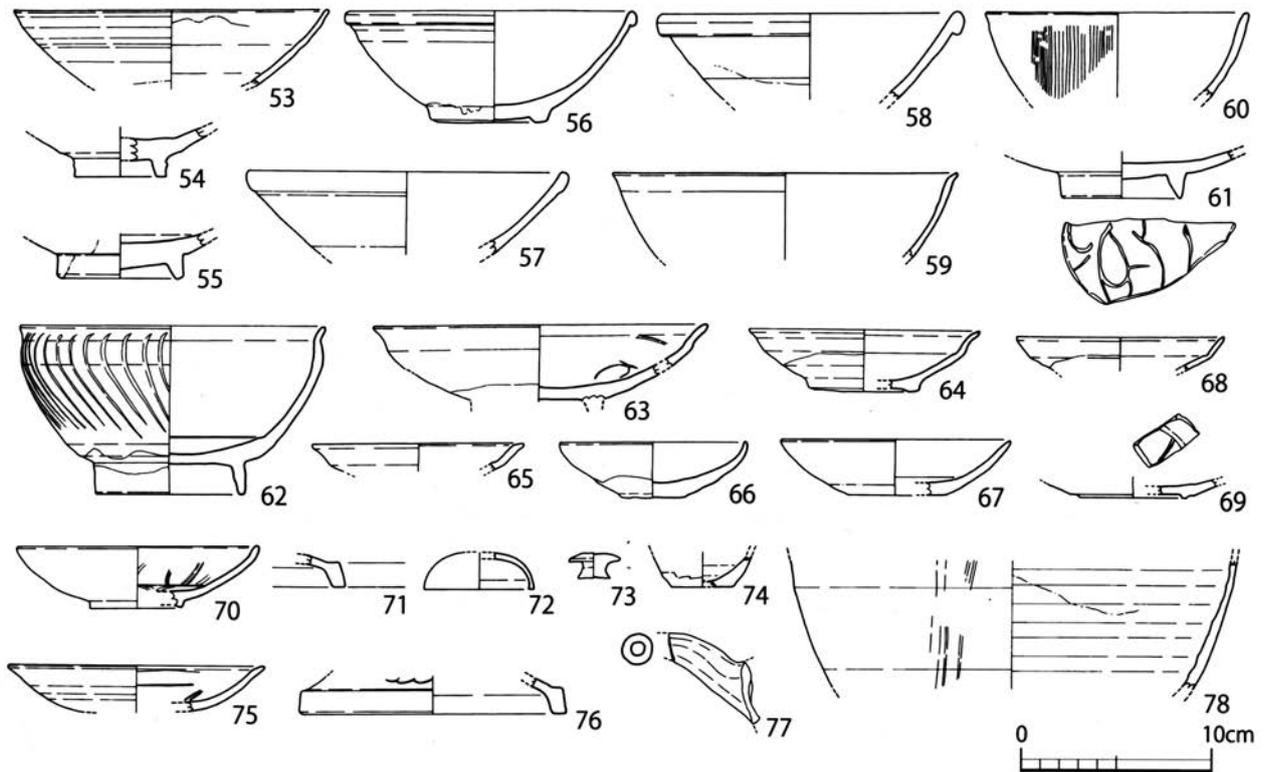


図8 日岸田地区出土貿易陶磁器実測図 (S=1:4)  
 (『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 22 史跡出雲国府跡-9 総括編-』第 220 図より転載)

## (2) 大屋敷遺跡 (大草町)

出雲国府跡上層の遺構面がある場所の東端に位置している。出雲国府とその上層の遺跡群は意宇川北側微高地上に立地している。その微高地は出雲国府跡より東に伸びており、大屋敷遺跡において、中世遺構(建物跡)の東端の広がりを確認している。発掘は、中国電力の鉄塔立替えに伴い実施したものであり、調査範囲は限られていた。遺構としては、掘立柱建物跡2棟、柵列2条で、柱穴も多く確認している。出土遺物としては、中国製の白磁碗Ⅰ類、Ⅳ類、Ⅴ類、青磁碗Ⅰ-5・b類、格子叩き目が付く須恵器甕、備前播鉢、土師器碗・皿がある。下限の時期は13世紀であり、国府上層遺構が意宇川の氾濫により礫層が覆い、遺構が断絶されると同様である。

なお、隣接する才台垣遺跡は意宇川の氾濫により遺構は残っていないが、中世の遺物が出土している。この場所から北側に向けても、農道の付替えの際の調査で、微高地の基盤層と小形の柱穴を確認していることから、国府跡の東には中世の出雲府中に関わる建物が広がっていたと推定される。

## (3) 天満谷遺跡 (大草町)

遺跡の位置は出雲国府跡の南東側、意宇川南側の東向きに開く幅20mの谷部である。丘陵斜面に溝を掘り込み、谷を厚さ50cmの盛土で造成を行い、平坦地を作り出している。掘立柱建物跡6棟、柵列2条、溝8本が確認されている。造成土から、越州窯青磁、須恵器の円面硯が出土していることから、国府跡周辺の土も運ばれたと考えられる。谷部の造成後に掘られた溝(SD-01)から白磁碗Ⅳ類、土師器碗、皿、柱状高台皿・杯が出土している。土師器碗の形態から12世紀後半と考えられる。

なお、土師器碗の形態は大きく2分され、体部の立ち上がりが強いものは13世紀前半の時期と考えられる。国内産の陶器として、瀬戸灰釉四耳壺、美濃系山茶碗、常滑壺、甕がみられる。須恵器は、甕の外面に格子状叩き目を有しており、亀山系、勝間田系、在地産が混在している。東播系須恵器鉢も出土している。中国陶磁器としては、白磁碗Ⅱ類、Ⅳ類、Ⅴ類、Ⅸ類、青磁は龍泉窯の劃花文碗、同安窯の碗、蓮弁

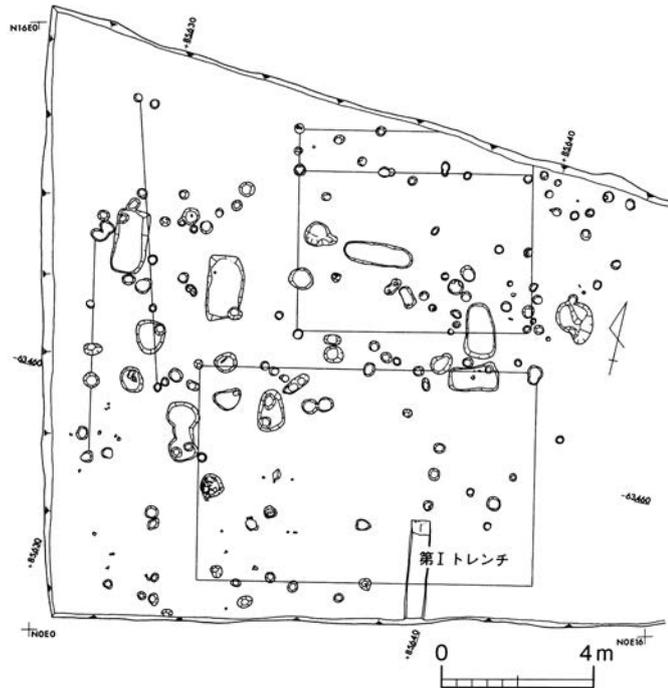


図9 大屋敷遺跡検出遺構実測図 (S=1:200)  
(『松江市史』史料編2「考古資料」大屋敷遺跡より転載)

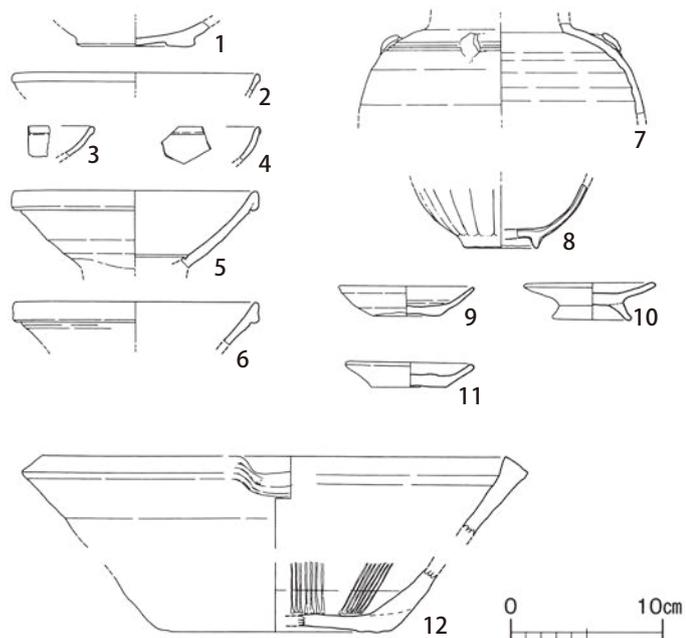


図10 大屋敷遺跡検出遺構実測図 (S=1:5)  
(『松江市史』史料編2「考古資料」大屋敷遺跡より転載)

文碗が出土している。

今回、遺物を再度確認したところ、京都系土師器の破片4(個体数3)点が存在した。(表2参照) 出雲国内における中世前期の京都系土師器碗・皿が出土する遺跡が4箇所となった。<sup>(7)</sup> 石台遺跡とともに、出雲国府との関連が強いものである。また、位置的にみて、意宇川で分断されているものの、国府上層との関連が極めて強いと考えられ、上層遺構の広がりとして捉えるべき遺跡である。中国製陶磁器類、国内産陶器、須恵器、京都系土師器等の種別の多さもさることながら、遺跡の範囲の狭さに比べ、出土遺物の量が多いことから国府への意宇川を介した水運の起点の一つと考えられよう。



図11 天満谷遺跡遺構検出状況実測図 (S=1:200)  
(『松江市史』史料編2「考古資料」「天満谷遺跡」より転載)

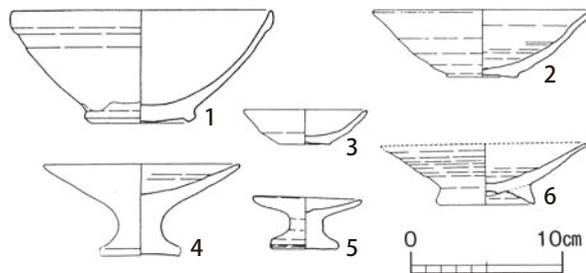


図12 天満谷遺跡出土遺物実測図(1) (S=1:5)  
(『松江市史』史料編2「考古資料」「天満谷遺跡」より転載)

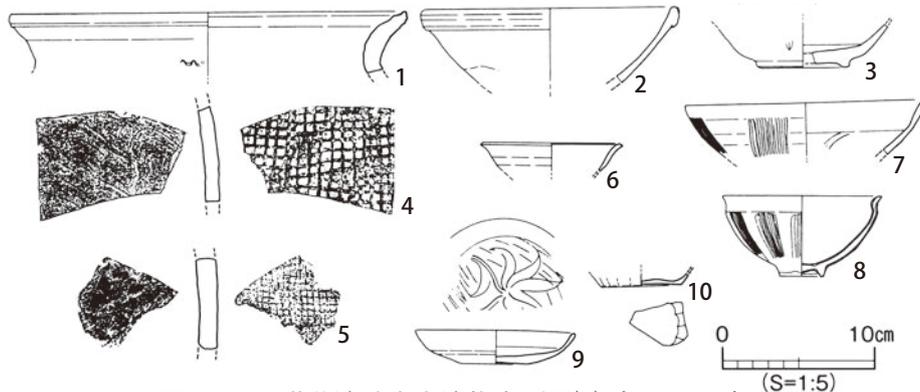


図13 天満谷遺跡出土遺物実測図(2) (S=1:5)  
(『松江市史』史料編2「考古資料」「天満谷遺跡」より転載)

表2 天満谷遺跡出土遺物数量表

種類	器種	破片数	合計	種類	器種	破片数	合計	
中国製品	青磁	碗	越州窯	1	日本製品	備前	甗・壺	
			龍I	4			搦鉢	
			同I	15			その他	
			同II				小計	0
			同III	16		常滑	壺	34
			B0				甗	43
			B1	24		小計	77	
			B2			越前	甗	1
			B3	1			搦鉢	
			B4	6		小計	1	
			C2	1		瓷器系	甗	6
			D				鉢	
			E			小計	6	
		不明	6	瀬戸		碗	10	
	皿・坏	同皿I	2			皿	1	
		同皿III				壺	8	
		龍皿				小計	19	
		稜花皿		中世須恵器		壺	104	
		小杯				甗	168	
		杯IV				鉢	74	
不明			小計	346				
小計		76	土師器	皿	122(京都系4)			
白磁	碗	II		5	碗	8,211		
		IV	70	土鍋	551			
		V	46	柱状高台	921			
		VII		不明(碗・皿)	1,447			
		VIII	1	小計	11,252			
		IX(A)	1	瓦質	鉢	12		
		B・C			搦鉢			
		D			鍋			
		E			火鉢			
	不明			不明				
	皿	IV	1	小計	12			
		VI	1	弥生土器				
		IX	6		土師器(古代)	456		
	E	3	須恵器		2,440			
不明		18	円面碗		1			
器種不明		123	緑釉陶器		1			
小計		275	灰釉陶器		1			
青花	碗	B			円筒埴輪	1		
		C	1		瓦	3		
		D			小計	2,450		
		E	1		生業関係	石製品	碗	1
不明		羽口	1					
皿・小杯		砥石	3					
小計		土錘	77					
小計		2	製塩土器	6				
褐釉	壺		19	その他	2			
		小計	19	小計	90			
		その他	青磁器台	2	朝鮮王朝	碗	1	
青白磁合子	1		皿					
青白磁壺梅瓶	3		甗					
小計	6	その他						
小計		1	小計					
貿易陶磁器合計		379						

#### (4) 出雲国造館跡（大庭町）

古代から中世にかけての屋敷としては、大庭町の神魂神社参道沿いの台地上にある出雲国造館跡が挙げられる。60 m四方ほどの畑地に、字名で「土居」が残り、江戸時代から明治初めにかけて北島国造の祭祀時の宿館が存在していたので、この名称が付けられている。発掘調査は台地上と西側の水田部において数次で行われ、遺構としては北側で屋敷を区画する東西の溝跡が検出され、井戸跡も確認されている。また、掘立柱建物に伴う柱跡が多く検出されている。調査面積が限られ、建物の規模や時期は把握されていない。遺物としては、400近い陶磁器片が出土している。その半数が中世前期のもので、平安時代末の中国製白磁が4割弱と多く、中には出土例の少ない白磁の水注や蓋付きの小型容器である合子が混じる。また、鎌倉時代の青磁も1割程ある。さらに、杵築大社の出雲国造が祭祀をする神魂神社が近くに存在することより、国衙の在庁官人でもある出雲氏の屋敷地の可能性が高い。なお、室町時代の遺物はほとんど出土していない。この時期には、屋敷地としては使用されなかったと考えられる。江戸時代に入ると、再びこの地に北島国造の宿館が造られ、明治の初めまで存在していたので、近世陶磁器も多く出土している。(8)

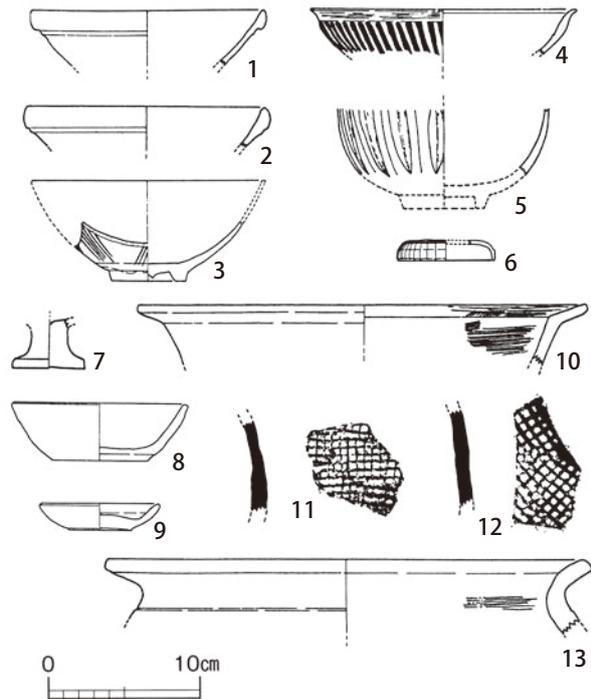
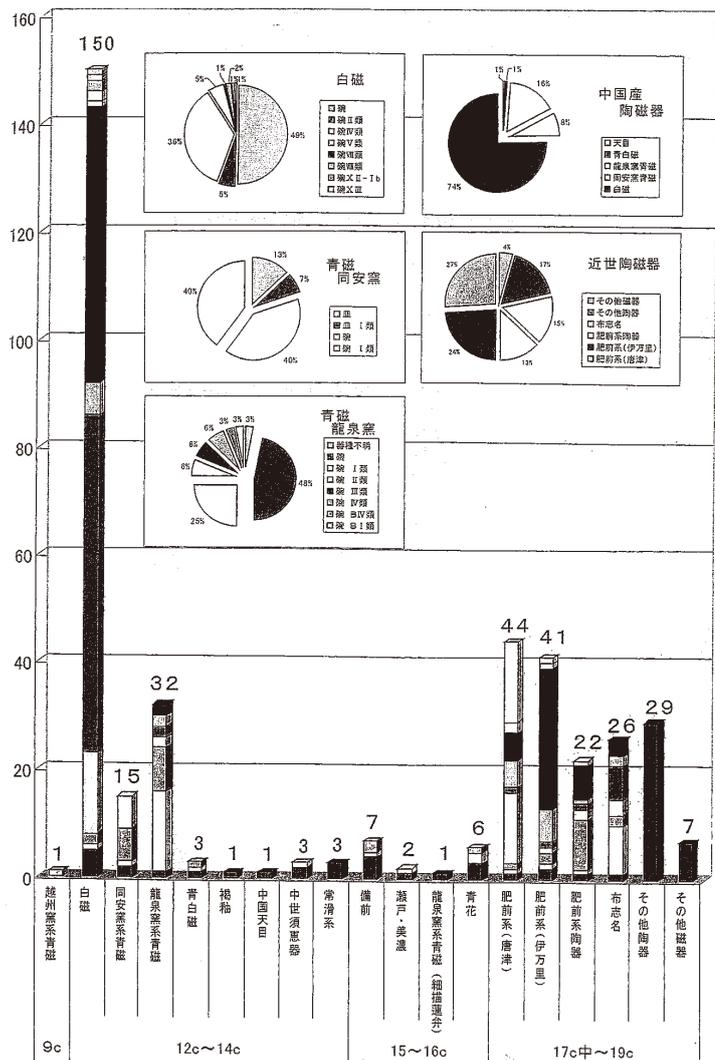


図 14 出雲国造館跡出土遺物実測図 (S=1:5)  
 (『松江市史』史料編3「考古資料」「出雲国造館跡」より転載)

#### (5) 中竹矢遺跡（竹矢町）

小規模な屋敷としては、意宇平野北東の丘陵北側斜面に存在する中竹矢遺跡がある。平坦地が狭く、掘立柱建物跡も数棟確認しただけであった。遺物には12世紀代の中国製白磁の碗や褐釉四耳壺、地元産の土器などが出土している。この遺跡は立地や出土品等から下級役人の住居と推定される。



グラフ 1 出雲国造館跡出土陶磁器分類表  
 (『八雲立つ風土記の丘』197より)

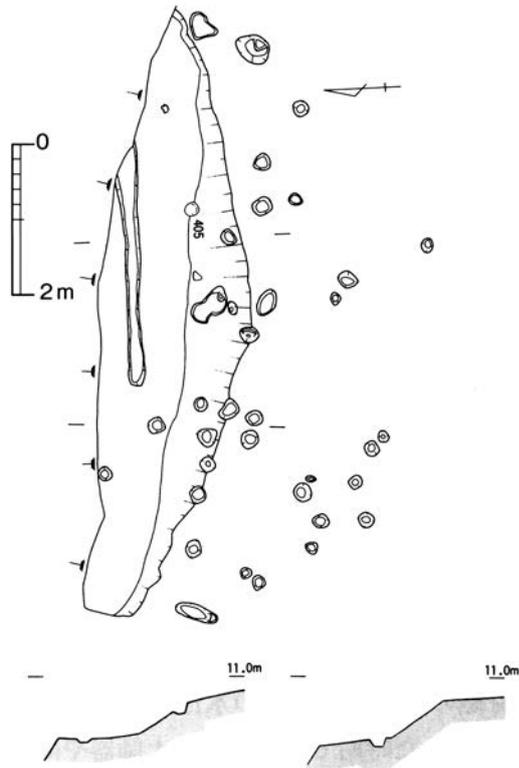


図15 中竹矢遺跡掘立柱建物跡実測図(S=1:100)  
 (『松江市史』史料編3「考古資料」中竹矢遺跡より転載)

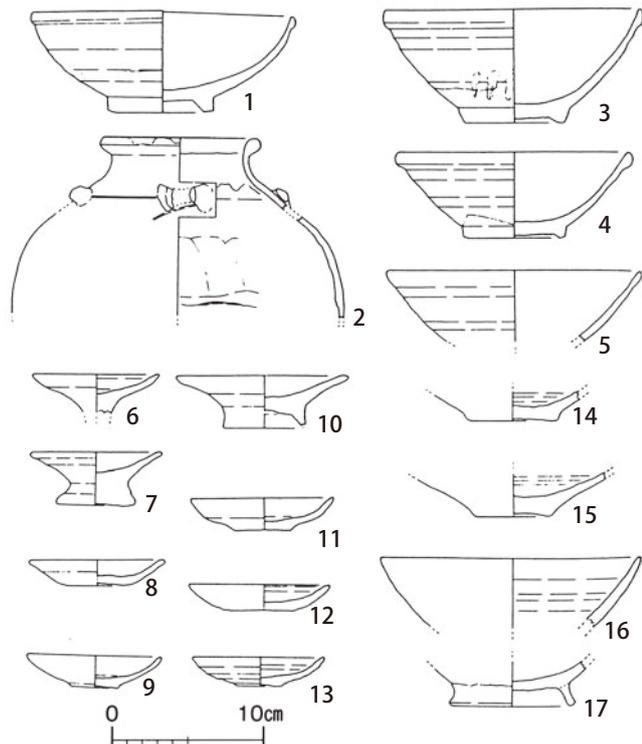


図16 中竹矢遺跡出土遺物実測図(S=1:5)  
 (『松江市史』史料編3「考古資料」中竹矢遺跡より転載)

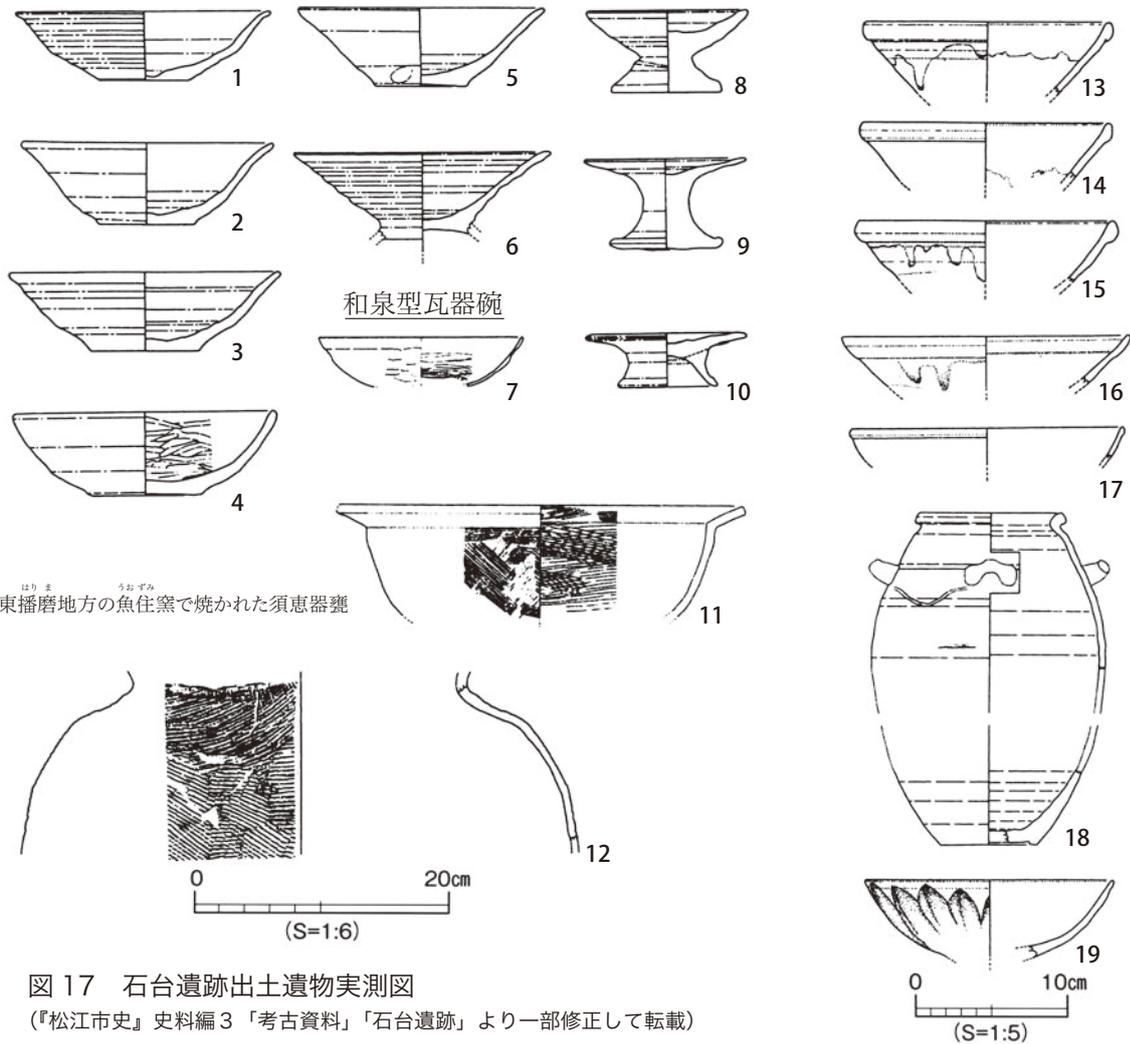


図17 石台遺跡出土遺物実測図  
 (『松江市史』史料編3「考古資料」石台遺跡より一部修正して転載)

(6) 石台遺跡（東津田）

神魂神社から北側に流れ、やや東に向きを変えて大橋川に流れる馬橋川の北側斜面に立地した遺跡である。川に流れ込む遺物包含層を確認し、明確な遺構は検出していない。出土した遺物は、中国製陶磁器の越州窯青磁碗、龍泉窯青磁、白磁Ⅱ類、Ⅳ類、Ⅴ類、褐釉陶器壺、東播系須恵器の魚住産甕、和泉型瓦器碗、京都系土師器皿が出土している。遺物の時期は11,12世紀が多くみられる。輸入陶磁器で、越州窯青磁碗の底部が出土しているが、県内でも出雲国府跡などの限られた遺跡から出土するものである。備前、越前等と国内の広域に流通する陶器、東播系須恵器の魚住窯の甕が出土している。今回、出土品の再整理をした結果、当時の輸入陶磁器、国産陶器、須恵器というバラエティーに富んだ遺物が相当量出土していることが知れた。（表3参照）調査した範囲が狭いことを考えると分布密度はかなり高いものである。

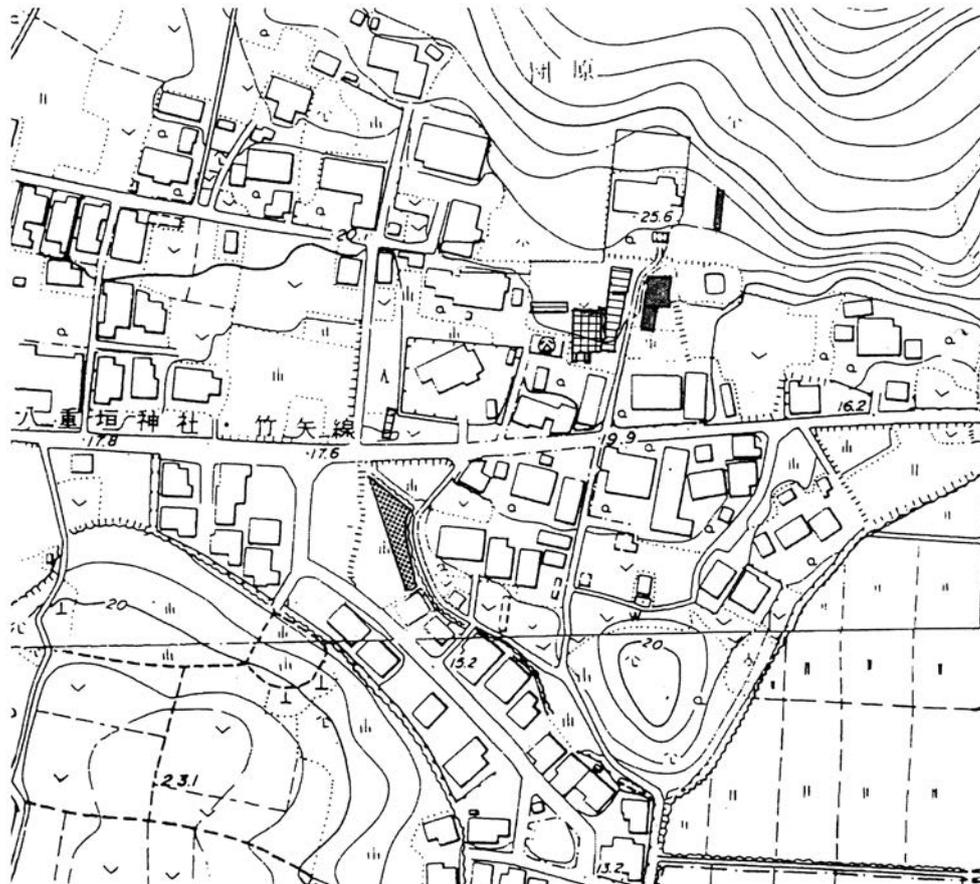
明確な遺構が検出されていないため、遺跡の性格を判断することは困難な状況である。遺跡の立地が大橋川から中海へ通じる馬橋川の河口部であることから、この付近が荷物を陸へ降ろす出雲府中の拠点的な場所で、それを管理する有力者の居館も近くにあったかもしれない。また、遺物の量や中国陶磁器、京都系土師器皿、瓦器碗から、出雲国内では、出雲国府上層と傾向が似ており、関連する遺跡と想定される。

表3 石台遺跡出土遺物数量表

種類	器種	破片数	合計	種類	器種	破片数	合計	
中国製品	青磁	越州窯(Ⅱ2)	1		日本製品	備前	鉢	2
		龍泉Ⅰ	2				小計	2
		同安	1		中世須恵器	壺	14	
		碗	B1			1	甕(格子)	64
		小計	5			東播系・魚住	1	
	白磁	Ⅱ	3	格子タタキ	5			
		Ⅳ	74	鉢(東播系)	2			
		Ⅴ	20	鉢(在地)	1			
		壺	Ⅲ	4	小計	87		
	小計	101	瓦器碗	和泉型	1			
小計	3	小計		1				
褐釉	壺	3	瓷器系	小計	27			
小計	3	小計		27				
その他	青白磁・皿	1	土師器	皿	154			
	小計	1		碗	6,293			
朝鮮王朝	碗?	1	土鍋	187				
	小計	1	柱状高台	257				
不明陶器	中国?	17	器種不明	4				
	小計	17	京都系	5				
	小計	17	黒色内黒	2				
貿易陶磁器合計		128	小計	6,902				
			瓦質	鍋	1			
			小計	1				
			古代須恵器	甕	429			
				壺	35			
				坏	24			
				小計	488			
			合計	7,636				
			弥生土器	1,264				
			唐津焼・皿	1				
			瓦	1				
			小計	1,266				

### (7) 寺の前遺跡 (山代町)

茶臼山の南麓の標高 20m の台地縁部に所在する。また、北東側に山代郷南新造院跡 (四王寺) が隣接する遺跡で、時期は平安時代末～鎌倉時代である。調査により自然流路跡とその埋土中から中国製の陶磁器が確認された。遺物は 12 世紀と考えられる白磁碗、皿、陶器壺が中心である。しかし少量であるが、14 世紀～16 世紀と思われる青磁盤も出土している。南新造院跡からの流れ込みとすれば、新造院や後の四王寺に関連する施設が 12 世紀代まで存続していたこととなる。



-  昭和 59 年度 山代郷南新造院 (四王寺) 跡島根県調査地
-  昭和 62 年度 //
-  平成 5 年度 //
-  平成 6 年度 寺の前遺跡 松江市調査地

図 18 寺の前遺跡調査地 位置図 (1:2500)  
(『寺の前遺跡発掘調査報告書』より、一部修正して転載)

## 3. 出雲府中の中世墓

中世府中の中世墓としては、遠江府中の一ノ谷遺跡 (静岡県磐田市) がよく知られている。見附府中の西北側に葬送の場が存在し、平安時代から近世までの 900 基近い墓が発見されている。<sup>(9)</sup> 一方、出雲府中において、中世墓はほとんど発見されていない。今のところ、意宇平野の北東部の低丘陵にある的場遺跡 (八幡町) と中竹矢遺跡 (竹矢町)、茶臼山南西麓の台地上にある小無田 II 遺跡 (大庭町) の三箇所で、小規模な墓が確認されているに過ぎない。

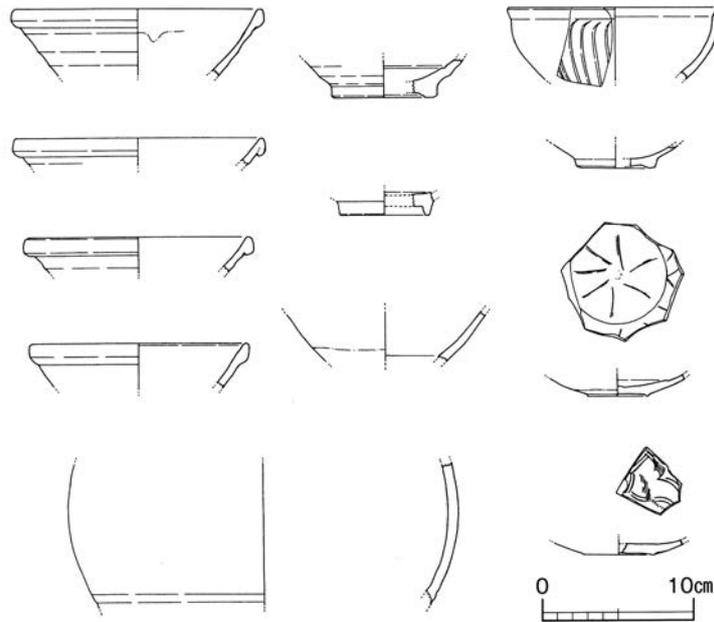


図 19 寺の前遺跡出土遺物実測図 (S=1:5)  
 (『松江市史』史料編3「考古資料」「寺の前遺跡」より転載)

(1) 的場遺跡 (八幡町)

的場遺跡は、中海に近い低丘陵に位置し、3基の中世墓が発見されている。1基は平安時代末から鎌倉時代にかけての火葬墓で、中国製の褐釉陶器の壺が骨蔵器に使用されていた。他の2基は土葬墓で、細長い穴に葬られていた。副葬品がないため、埋葬時期は分からない。

(2) 中竹矢遺跡 (竹矢町)

中竹矢遺跡は国分尼寺跡の背後の丘陵に位置し、中世墓が1基発見されている。一辺1m四方の小さな墓穴の底部より、小児の火葬骨と角釘が出土したが、副葬品は残っていなかった。埋葬時期は炭素14年代測定により14世紀代と推定されている。なお、前述した遺跡がのる丘陵では、室町時代以降も墓地として使用が続けられた。中竹矢遺跡と同じ丘陵にある社日遺跡では、室町時代前半の火葬墓が見つまっている。地元石材で造られた五輪塔が5基以上建てられていた。(島根県教育委員会 2000)

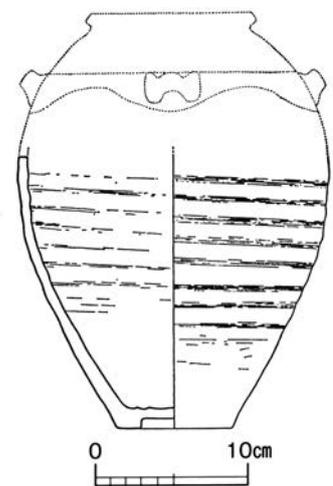


図 20 的場遺跡出土褐釉四耳壺実測図 (S=1:5)  
 (『松江市史』史料編3「考古資料」「的場遺跡」より転載)

(3) 小無田II遺跡 (大庭町)

小無田II遺跡は茶臼山の南西麓の台地上に所在する。土壇墓2基(SX01, 02)が接近して発見されており、埋土を同じくすることから同時のものと考えられる。SX01は、平面形が隅丸長方形であり、大きさは長さ1.4m、幅0.5mである。副葬品としては、土壇内から土師器碗、皿、鉄製紡錘車出土している。SX02も隅丸長方形で、大きさは長さ1.75m、幅0.75mである。副葬品としては、土壇内から土師器碗、皿、刀子、鉄釘が出土している。土師器碗の形態から12世紀代の墓と推定される。

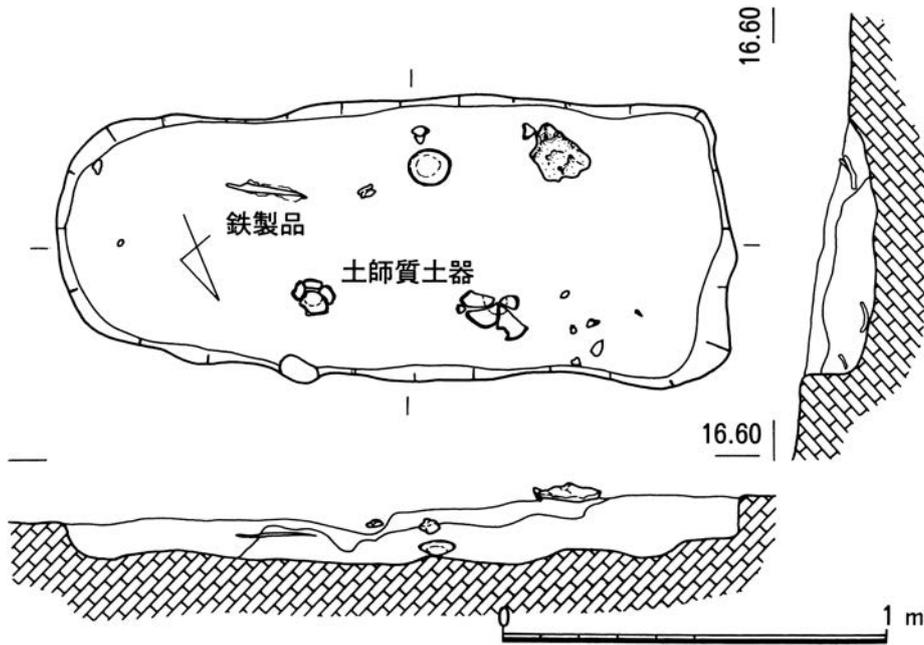


図 21 小無田Ⅱ遺跡 SX-02 遺構実測図  
 (『松江市文化財調査報告書 第75集』「小無田Ⅱ遺跡発掘調査概報」第24図より転載)

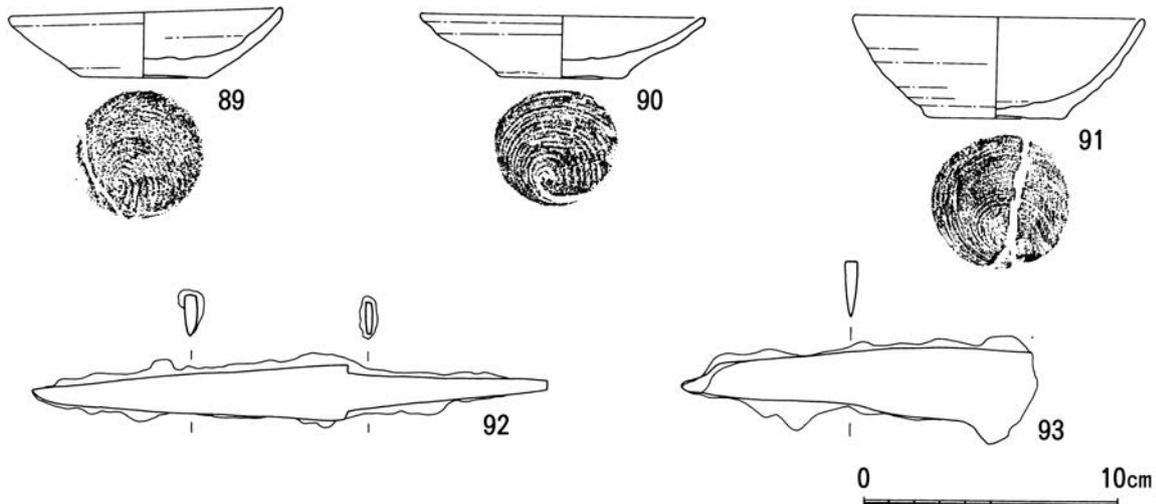


図 22 小無田Ⅱ遺跡 SX-02・03 出土遺物実測図  
 (『松江市文化財調査報告書 第75集』「小無田Ⅱ遺跡発掘調査概報」第25図より転載)

#### 4. 祭祀にかかわる遺跡

##### 乃木長廻遺跡 (上乃木)

府中の周辺部にあたる上乃木の台地上に乃木長廻遺跡がある。台地の東向きの斜面で、径1m程の穴が見つかり、底部には13世紀の土師器碗と皿がびっしりと敷き詰められていた。土器は72枚あり、轆轤で成形されたものではなく、手捏ねの土器である。また、その上に素焼きの土鍋1個載せられていた。この鍋の底部には煤が付着しており、穀物を煮て、碗や皿に盛ったものと推定される。さらに、この穴の底部の中央がさらに丸く掘り下げており、その中に中国製褐釉陶器の四耳壺1個が置かれていた。壺の口は石で塞がれていたため、内部は空洞であった。しかし、遺物は何も残っていなかった。山陰においては、建築時の地鎮めに、鉄鍋と土師器皿がセットで埋められたことが知られている。他の地方では、土鍋が使用されることが多く、これらの遺物も出雲府中付近に住む有力者の屋敷での地鎮時に使用

されたものと思われる。なお、土師器碗・皿は京都を中心とした畿内で流行していたものがある。中世前半期の手捏ね土器は、出雲部では出雲国府跡や石台遺跡など出雲府中周辺の数遺跡で僅かばかりしか出土してなく、これほどまとまって発見されたのは珍しい。京都の土器を真似たもので、地元で焼かれた土器と推定される。

## 5. まとめ

これまでに、出雲府中に関連する遺跡について、発掘調査成果を基に、かつ、出土品の一部の再整理も含めて記述してきた。しかし、発掘面積が限られたものであり、さらに遺跡数も少なく、十分な情報を得ていないが、考古資料から見える出雲府中の概観はある程度に示せたものと考えられる。以下、出雲府中の特徴を若干述べてまとめたい。

まず、遺跡の分布をみてみよう。前述したように、青磁、白磁や国産陶器がまとまって出土し、出雲府中にかかわる遺跡は意宇川下流域から茶臼山北麓一帯に点在している。これは古代の国府域に比べ、かなりの広範囲となっている。一方、意宇川河口付近や東出雲町出雲郷については、発掘調査がほとんど無く、現時点では、東や北側については明確に把握できていない。また、文献史料にみえる八幡津や平浜八幡の神宮寺等の寺院跡についても、地名等では場所が知れるものもあるが、遺跡上からはその実態は不明といわざるを得ない。今後の調査に待ちたい。

次に、各遺跡の性格については、館や屋敷地にかかるものが多い。規模の大きい出雲国府跡や出雲国造館跡は、意宇平野の微高地とその周辺部の台地上に位置する。これらの場所は、古くから集落や役所等に利用されてきた所でもある。

遺構としては、溝や掘立柱建物跡が確認され、さらに出土する貿易陶磁等から国司や在庁官人の屋敷跡と推定される。中でも、出雲国府跡から大屋敷遺跡にかけての一带は、複数の区画（屋敷地等）が存在していたと考えられ、多くの柱穴群や複数の井戸跡が発見されている。この地は古代から主要な場所であり、出雲府中においても中枢部に当たる。唯し、これまでに詳細な遺構の検討はされていないのであり、その作業は今後の課題といえる。なお、天満谷遺跡についても、今回再整理した出土品からも同様の性格をもつ遺跡といえる。狭い谷合を敷地に造成している点は他の遺跡では認められないことである。この地が前記した出雲国府跡に近いことが影響しての選地かと推定される。また、中竹矢遺跡のような丘陵の一角に位置し、小規模な屋敷地をもつ遺跡も存在する。今後、このような小規模遺跡で、建物も小規模で、出土品も少ない遺跡についても性格を明確にする必要がある。また、石台遺跡は、遺構は未検出であるが、川沿いに位置し、多くの貿易陶磁器が発見されている。大橋川から少し入った馬橋川の下流部にあたり、津的な性格を付随する遺跡が付近に存在すると推定される。

中世の社寺跡については、発掘調査がほとんどなく遺構等については不明である。ただし、寺の前遺跡から平安時代末の白磁等が出土しており、南新造院および四王寺との関連が考えられる。

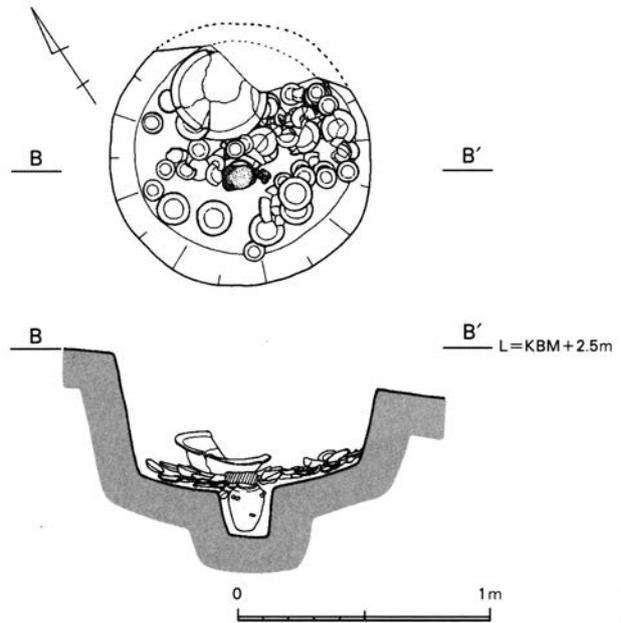


図 23 乃木西廻遺跡 SK01 遺物出土状況実測図  
 (『埋蔵文化財課年報IX』「平成19年度調査概要報告乃木西廻遺跡」  
 第5図より転載)

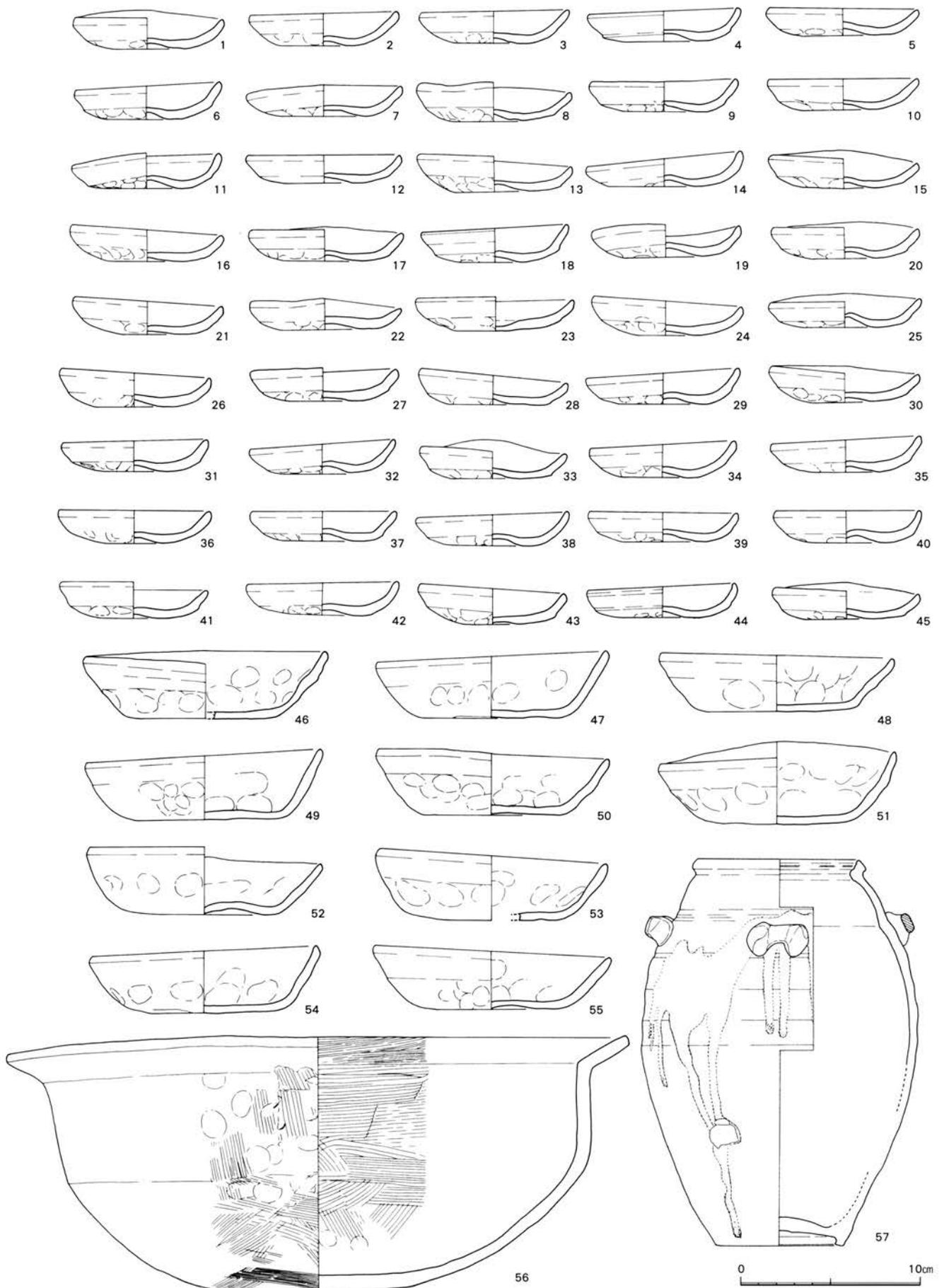


図 24 乃木西廻遺跡 SK01 出土遺物実測図  
 (『埋蔵文化財課年報IX』「平成19年度調査概要報告乃木西廻遺跡」第5図より転載)

中世墓については、中海沿いの竹矢町などの丘陵に土壙墓や火葬墓があるが、発掘調査例が少なく、出雲府中との関連については言及できていない。出雲国内の墓との比較しつつ、今後の調査例の増加を待って論じたい。なお、14世紀以降においては、細粒凝灰岩の白粉石製五輪塔が造立され始める。出雲府中内にも、石塔が点在しており、これらの石塔の時期や造塔者の階層等も今後検討する必要がある。<sup>(10)</sup>

遺物の中で出土量の多いは土師器である。大部分は糸切底をもつ碗、皿であるが、手捏ねで成形された京都系土師器も出雲国府跡や石台遺跡、天満谷遺跡で少量出土している。一方、乃木長廻遺跡からは碗と皿が一括出土している。今後、前述の3遺跡のものと、形態や技法について詳細に検討する必要がある。陶磁器においては、貿易陶磁器の出土割合が異常に高い。出雲国府跡では総数5,319片、天満谷遺跡379片、出雲国造館跡203片、石台遺跡129片である。また、中国産白磁が大部分を占める。時期では、A期からG期にわたり、ほとんどが中世前期までの遺跡である。特に、C期とD期に集中している。<sup>(11)</sup> 出雲国府跡日岸田地区の場合、9割を超す。中でも、日岸田地区の堂田調査区では100㎡あたり327点と高い比率である。この調査区では広東系白磁や青白磁、中国産陶器盤・壺などの特殊品も混じり、前記したように「陶磁器のストックなどの場、蔵などの存在」が指摘されている。<sup>(12)</sup> また、出雲国府跡では、出雲の他地域では出土がほとんどない常滑や備前の古いものも少量混じる。<sup>(13)</sup> なお、山陰において同様に貿易陶磁の比率が高く、特殊品をもつ遺跡としては、石見府中の古市遺跡（浜田市上府町）が知られている。<sup>(14)</sup>

最後に、出雲府中の終焉期についてみてみたい。文献史料からは南北朝以降も、前述したように、八幡町や竹矢町の中海沿い地域を中心として、15世紀代までは存続していることが窺える。<sup>(15)</sup> しかし、茶白山周辺部の発掘調査においては、出雲国府関連遺跡は出雲国府跡をはじめとして、G期の南北朝期まで存続したものが多い。室町時代まで継続する遺跡は今のところ存在しない。今後、中海沿岸部の竹矢地区や東出雲町出雲郷等において新たな中世遺跡が発見されることに期待したい。



写真1 出雲中世府中城  
（『松江市史』史料編3「考古資料」口絵8より転載）

## 注

- (1) 『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 22 - 史跡出雲国府跡 9 総括編一』 島根県教育委員会 2013
- (2) 井上寛司 1999 「出雲国府と中世出雲府中」 『季刊文化財』 92
- (3) 注 2 に同じ。
- (4) 廣江耕史・西尾克己 2012 「出雲中世府中関連遺跡」 『松江市史 考古資料』
- (5) 山本信夫・山本麻里子 2007 「山陰の出土貿易陶磁と傾向」 『下関市文化財調査報告書 25』
- (6) 注 1 に同じ。
- (7) 出雲国府跡、天満谷遺跡、乃木長廻遺跡、石台遺跡で出土している。
- (8) 西尾克己・高屋茂男 2009 「文献・考古資料からみた出雲国造館」 『八雲立つ風土記の丘』 197
- (9) 『一の谷中世墳墓群遺跡』 1993 磐田市教育委員会
- (10) 狭川真一 「松江の中世石塔訪問記」 2015 『松江市史研究 6』
- (11) 山本信夫 「中世前期の貿易陶磁」 『概説中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会 眞陽社 1995
- (12) 注 5 に同じ。
- (13) 出雲国内では青木遺跡（出雲市東林木町）で出土が知られている。（『国道 431 号道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—青木遺跡—（中近世編）』 島根県教育委員会 2004）
- (14) 『伊甘土地区画整理事業に伴う古市遺跡発掘調査概報』 浜田市教育委員会 1995  
榊原博英 「石見」 『中世府中』 山陰中世土器検討会 2014
- (15) 原慶三 「第 2 編歴史第 2 章中世」 『竹矢郷土史』 1989

## 発掘調査報告書

山本清 「松江・的場古墳群」 1971 『島根県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』 島根県教育委員会  
松江市教育委員会 1983 『出雲国造館跡発掘調査報告書』  
島根県教育委員会 1986 『石台遺跡』  
島根県教育委員会他 1987 『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』  
島根県教育委員会 1992 『中竹矢遺跡発掘調査報告書』  
島根県教育委員会 2003～2008 『出雲国府跡 1～6』  
島根県教育委員会 2000 『社日古墳—一般国道 9 号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 12』  
松江市教育委員会 1995 『寺の前遺跡発掘調査報告書』  
松江市教育委員会 2008 「平成 19 年度調査概報報告—乃木長廻遺跡—」 『財団法人松江市教育文化振興事業団埋蔵文化財課年報Ⅸ—平成 18 年度—』  
松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 1997 『小無田Ⅱ遺跡発掘調査概報』

## < 付記 >

本稿執筆後、松江市まちづくり文化財課により八幡町浜分において浜分Ⅱ遺跡の試掘調査が行われた。以下は同課から教示頂いた内容である。

遺跡の場所は平浜八幡宮の東に位置する浜分集落内である。地表下約 2 m に、基盤層の砂層があり、この層に多量の本杭がランダムに打ち込まれていた。砂層と有機物層がラミナ状に堆積し、遺物包含層は砂層の上であり、中世前半期の土器、陶磁器、木製品がまとまって出土した。中世土師器には京都系土師器を含む椀、柱状高台、土鍋が、中世須恵器には外面に格子状叩きをもつ甕がある。陶磁器には、中国産の同安窯青磁皿、龍泉窯青磁碗が、国産のものには肩部に押印をもつ甍系陶磁甕が出土している。また、低湿地遺跡のため木製品の箸や下駄なども含まれる。遺物には、白磁が少なく、青磁が中心であり、遺物は鎌倉時代から南北朝にかけてのものと考えられる。

遺跡周辺部では、発掘調査が全くなく、浜分Ⅱ遺跡は中海湖岸の中世前半の津的性格を有す事例として貴重な資料を提供したといえる。

(にしお かつみ 大田市教育委員会石見銀山課)

(ひろえ こうじ 島根県教育庁埋蔵文化調査センター)

# 松江平野北部の平野発達史と古環境変遷史

瀬戸浩二・渡辺正巳・山田和芳・高安克己

## はじめに

松江平野は、一般に大橋川流域の低地（東は朝酌川流域、西は比津川流域、南は国道9号線南方の丘陵まで、北は北山山地の縁辺まで）の数km四方を示す。この松江平野の形成発達史は、地形学的視点からまとめられており、この地域にあった過去の水域を「古松江湖」と呼んでいる（林、1991）。一方で、松江平野中部では、ジオスライサーを用いたコアを解析して、古環境の変遷史を検討している（渡辺・瀬戸、2012；2013；2014）。それによると、「弥生小海退」などによって、浸食面があることを指摘している。一方で、近世の松江平野を記した松江城下絵図などでは、松江平野北部に水域が描かれており、北部には近世まで水域が存在してことが知られている。この水域が存在していたと思われる松江市学園1丁目（13Mt01G）と菅田町（13Mt02G）の2カ所でジオスライサーを用いて柱状に地層を採取した。本研究では、このコアについて詳細な記載と共に地球化学的手法を用いて古環境変遷史を明らかにし、松江平野北部の平野発達史を検討することを目的としている。それによって近世に見られる水域の古環境とその形成過程についての議論を行った。

## 1. ジオスライサーコアの概要と試料の分取

松江市学園1丁目（13Mt01G）と菅田町（13Mt02G）の2カ所でジオスライサーを用いて柱状に地層を採取した（図1）。13Mt01G コアは、東経 133°4.08'、北緯 35°28.72' において2013年2月6日に採取された。13Mt02G コアは、東経 133°3.80'、北緯 35°28.82' において2013年8月21日に採取された。

ジオスライサーで掘削した柱状試料は初生的な記載を行った後、土色計（コニカミノルタ製：SPAD-503）で色調（明度、彩度）を1cm間隔で計測した（図2）。その後、25cmの軟X線写真撮影用ケース、2.3cmのキューブを差し込み、前者は軟X線写真撮影用試料に、後者は帯磁率測定用試料とした。残りの試料は、深度1cm間隔で採取した。1cm間隔の試料は、凍結乾燥機で乾燥させ、CNS元素分析及び蛍光X線主要元素分析などを行った。

## 2. 分析方法

含水率・帯磁率：含水率は、1cm間隔で分取されたCNS元素分析用試料を用い、凍結乾燥器で10日以上乾燥させ、その前後の質量差から求めた。帯磁率は2.3cmのキューブで採取された帯磁率測定用試料を用い、帯磁率測定システム（Bartington製、MS2）で測定した。測定は、山田ほか（1998）にしたがって行っている。

CNS元素分析：1cm間隔に分取されたCNS元素分析用試料は、凍結乾燥器で10日以上乾燥させ、

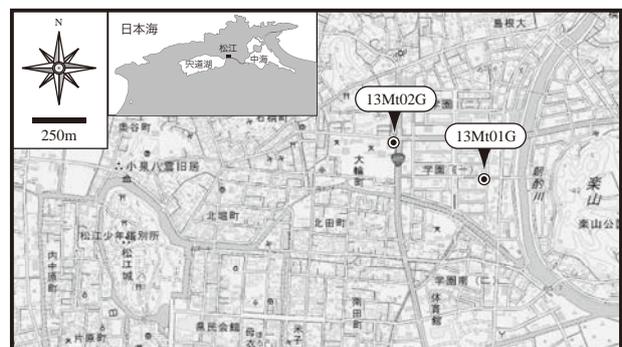


図1 コアの採取地点（●）

### ジオスライサー用コア処理チャート

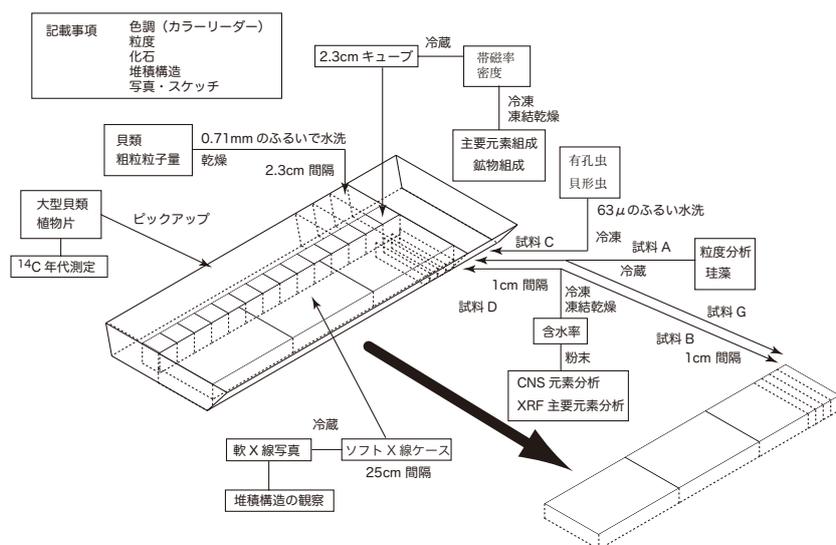


図2 ジオスライサーコアの試料分割チャート

全有機炭素 (Total Organic Carbon、以下 TOC と呼ぶ) 濃度、全窒素 (Total Nitrogen、以下 TN と呼ぶ) 濃度及び全イオウ (Total Sulfur、以下 TS と呼ぶ) 濃度を測定した。また、TOC 濃度、TN 濃度及び TS 濃度から C/N 比、C/S 比を算出した。標準試料には BBOT (2,5-Bis- (5-tert-butyl-benzoxazol-2-yl)-thiophen) を用い、最初の 5 試料で検量線を作成し、それに基づいて TOC 濃度、TN 濃度及び TS 濃度を定量した。また、10 試料おきに BBOT を測定し、補正を行っている。

蛍光 X 線主要元素分析：CNS 元素分析と同じ粉末試料を用いて試料ペレットを作成した。この試料ペレットを島根大学汽水域研究センター内のエネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 (堀場製作所製、MESA-500W) により、主要元素の含有率を測定した。測定は、真空状態で行い、ターゲットは Rh 管を用いている。管電圧は、15 (軽元素)、50 (重元素) kV で、分析時間はそれぞれ 250 秒である。分析データは、堀場製作所製分析プログラム MESA-500W を用い、検量線法によって、10 元素 (Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、MgO、TiO<sub>2</sub>、MnO、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、Na<sub>2</sub>O、SiO<sub>2</sub>、K<sub>2</sub>O、CaO、P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> 含有率) の酸化物としての含有率を定量した。

### 3. コアの記載

13Mt01G コアは、主として塊状の泥質堆積物で構成されており、コア長は 172cm である (図 3)。コアトップから深度 5cm は、灰オリーブ色 (5Y 4/2) を呈した淘汰の悪い細粒～中粒砂及び礫を含む泥質細粒砂である。深度 5～70cm は塊状の泥質堆積物であるが、下部の泥質堆積物は暗オリーブ灰色 (5GY 3/1) の粗粒砂を含んでいる。また、深度 40～50cm では褐色 (2.5Y 3/1) を示し、植物根の痕跡が見られる (図版 1-a)。深度 70～150cm では、主に暗オリーブ灰色 (5GY 3/1) のやや粗いシルトで構成され、深度 119～123cm では植物片を含むシルト質極細粒砂を挟んでいる。深度 70cm 付近の上位との境界は、やや乱されており、それより下位では生物擾乱が見られる (図版 1-b)。また、深度 85cm 前後、140cm 前後では巣穴化石が観察された。最下部の層準 (深度 150cm 以深) は、暗オリーブ灰色 (5GY 3/1、2.5GY 3/1) の塊状と弱いラミナを伴う泥質堆積物で構成されており、ラミナを伴う泥質堆積物では灰色のラミナが見られる (図版 1-c)。

13Mt02G コアは、主として塊状の泥質堆積物からなるが、いくつかの層準で弱いラミナを伴う泥質堆積物が見られる (図 4)。コア長は、165cm である。表層から深度 25cm は、暗オリーブ灰色 (5GY 3/1) の極細粒砂を含む泥質堆積物や砂質泥で構成されているが、黒緑色 (5G 2/1) を示す暗い層準も

瑪瑙乳鉢を用いて粉末にした。粉末にした堆積物試料は、約 10mg を銀製固体用コンテナにとり、1N 塩酸を適量加えて炭酸塩炭素を除去した後、110°C に熱したホットプレート上で 4 時間静置し、試料を蒸発固化させ、封入した。それをさらに錫製固体用コンテナで封入し、島根大学汽水域研究センター内の CNS 元素分析計 (Thermo ELECTRON CORPORATION 製、Flash EA 1112) により堆積物試料の

# 13Mt01G

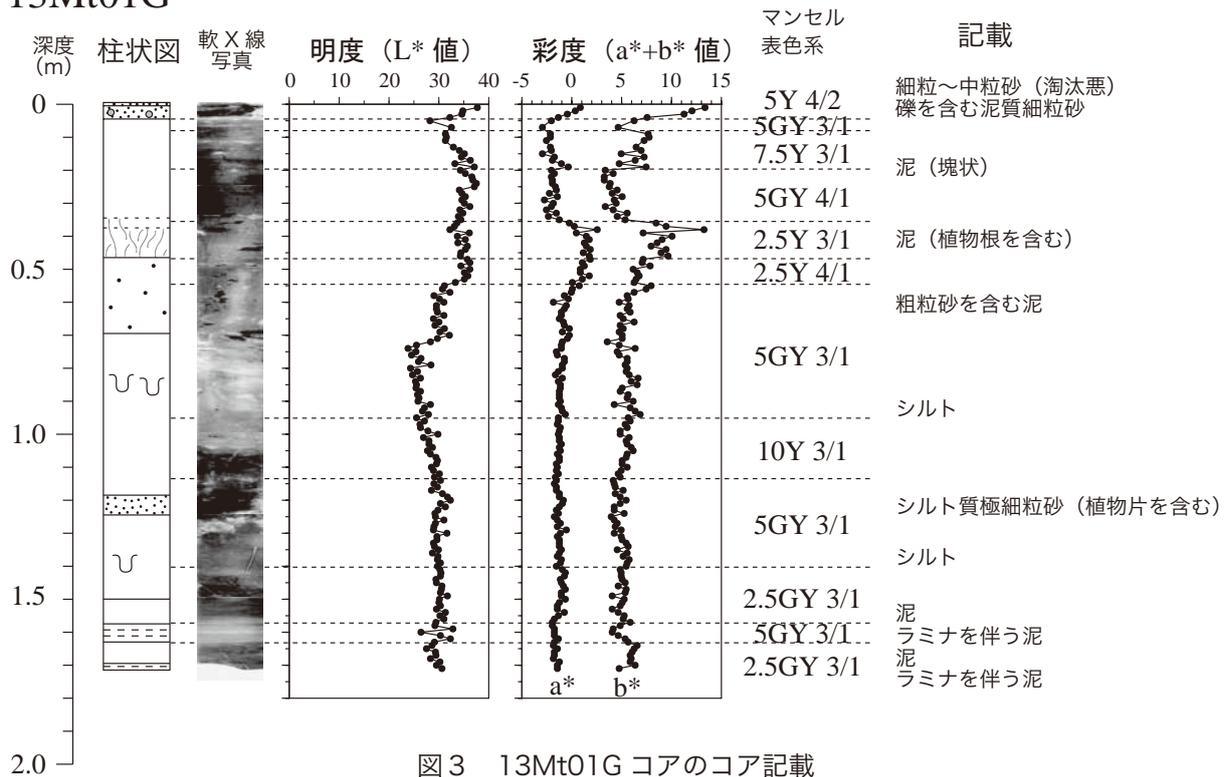


図3 13Mt01G コアのコア記載

# 13Mt02G

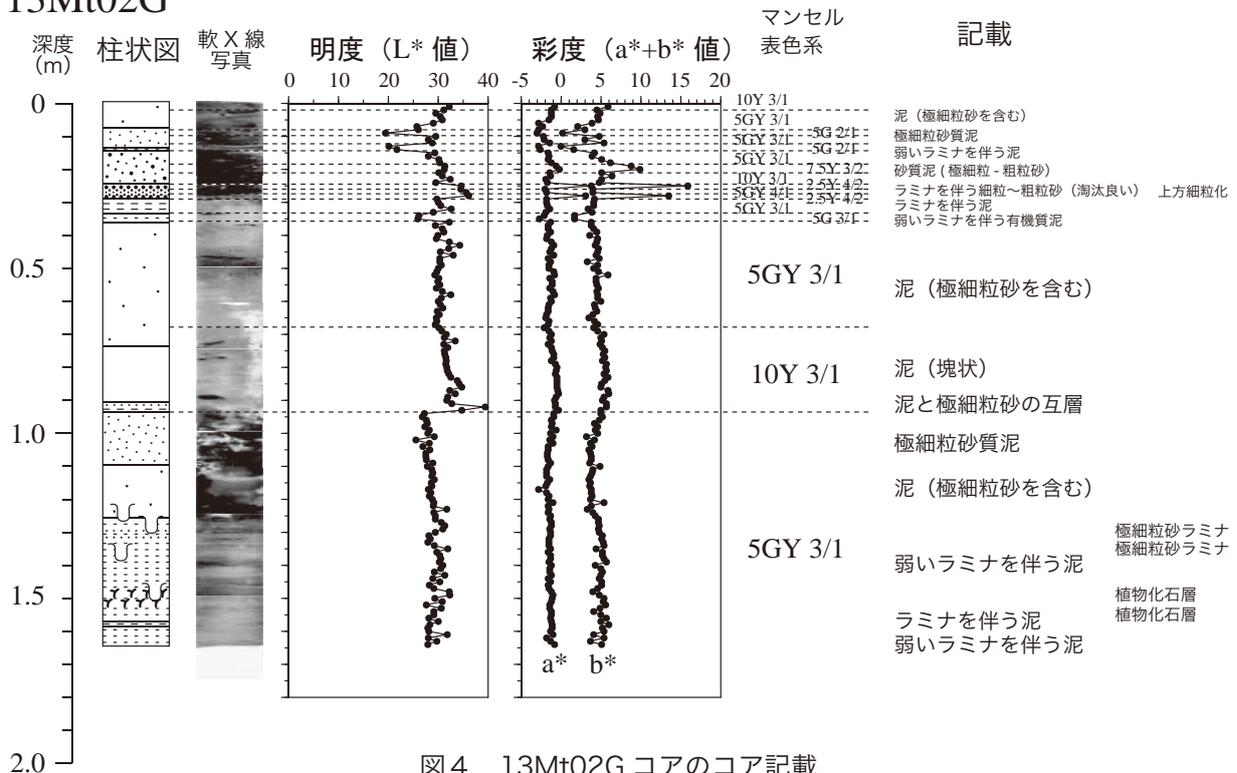


図4 13Mt02G コアのコア記載

見られる。深度25～29cmは、暗オリーブ灰色(5GY 4/1)のルーズで淘汰の良い細粒～粗粒砂からなり、ラミナを伴い上方細粒化が認められる(図版1-d)。その砂層の上下境界付近は酸化され、暗灰黄色(2.5Y 4/2)を示す。また、この砂層は下位の層を削り込んでいるのが観察された。深度30～90cmは、主に暗オリーブ灰色(5GY 3/1)とオリーブ黒色(10Y 3/1)を呈する塊状で極細粒砂を含む泥質堆積物

である。上部 3cm は暗オリーブ灰色 (5GY 3/1) のラミナを伴う泥で、その下位 2 cm は暗緑灰色 (5G 3/1) を呈した暗い色調の泥が見られる (図版1-e)。暗い色調の泥は、数時間で周囲の泥質堆積物と同じ色に変化する。深度 90 ~ 125cm は、暗オリーブ灰色 (5GY 3/1) の塊状の極細粒砂質泥及び極細粒砂を含む泥質堆積物からなる。上位の層準との関係は不明瞭であるが、色調は明瞭に変わっている (図版1-f)。深度 120cm 付近では、底生有孔虫 *Haplophragmoides canariensis* の産出が確認された (図版1-i)。深度 125cm 以深では暗オリーブ灰色 (5GY 3/1) のラミナを伴う泥質堆積物からなる。深度 130cm 前後では、巣穴化石が観察された (図版1-h)。また、深度 150cm 付近の層準では植物片を多く含むラミナが見られた (図版1-g)。

#### 4. 分析結果

13Mt01G コアおよび 13Mt02G コアでは、分取された試料について各種の分析が行われているが、ここでは色調計測、含水率測定、帯磁率測定、CNS 元素分析、蛍光 X 線主要元素分析結果について報告する。

##### (1) 色調計測結果

色調は、明度 (L\* 値) と彩度 (a\* 値、b\* 値) の三軸の数値として表される。明度の L\* 値は、0 が黒を示し、100 が白を示す。したがって、L\* 値が低いと、暗い色合いを示している。一方、彩度の a\* 値、b\* 値は、マンセル表色系の色相環を座標として表したものであり、a\* 値は赤色 (+) と緑色 (-) の軸を示し、b\* 値は黄色 (+) と青色 (-) の軸を示す。この L\*a\*b\* 表色系は、コアなどの堆積物の色調の特徴を示す計測値としてよく使われている (小森ほか、2000 など)。

13Mt01G コアにおいて、深度 118cm 以深では L\* 値は 30 前後を示している (図 3)。深度 118cm から 75cm までは、上位に向かって 24 程度まで減少する。深度 70cm 付近で再び 30 に増加する。また、深度 55cm 付近でさらに 35 まで増加する。それより上位では多少変動はあるものの 35 前後で推移している。a\* 値、b\* 値は、それぞれ -1.5、5 前後を示している。深度 55 ~ 35cm 及び 5cm より上位の層準は、共にやや高い値を示している。

13Mt02G コアの L\* 値は、深度 93cm 付近で下位の層の 28 前後から上位の層の 30 前後まで増加している (図 4)。a\* 値、b\* 値は、全層準でそれぞれ -1.5、5 前後を示している。深度 9cm と深度 13cm は、L\* 値が 20 前後と低く、b\* 値も 0 前後と低くなっている。深度 20cm 付近では、b\* 値が逆に高くなっている。深度 25 ~ 30cm のルーズで淘汰の良い細粒 ~ 粗粒砂層では、L\* 値が 35 前後と高い値を示している。その上下では、酸化の影響を受けて、a\* 値、b\* 値が共に高くなっている。深度 34 ~ 35cm は、L\* 値が 25 前後と暗い値を示し、a\* 値、b\* 値も共に低い値を示している。

##### (2) 含水率、帯磁率の測定結果

堆積物の物性は、比較的容易に求められる含水率、帯磁率などである程度理解することが可能である。

13Mt01G コアのコアトップから深度 5cm は、含水率が 30% 以下と低く、帯磁率は  $50 \times 10^{-5}$  SI 以上と高い値を示している (図 5)。深度 5 ~ 70cm は、含水率が 30% 前後である。帯磁率は緩やかに増減しながら下位に向かって  $20$  から  $9 \times 10^{-5}$  SI まで減少する傾向にある。深度 70 ~ 85cm では、帯磁率が  $5 \sim 7 \times 10^{-5}$  SI と低い値を示し、その間含水率は 30% から 50% に増加している。深度 85 ~ 123cm の帯磁率は  $10 \sim 15 \times 10^{-5}$  SI と比較的高い値を示している。一方、含水率は深度 85 ~ 110cm の間に、下位に向かって 50 から 25% まで減少し、110 ~ 123cm の間は 25% 前後を示している。それ以深の帯磁率は、 $9 \times 10^{-5}$  SI 前後で推移しているが、深度 156 ~ 154cm のラミナを伴う泥質堆積物では  $5 \times 10^{-5}$  SI

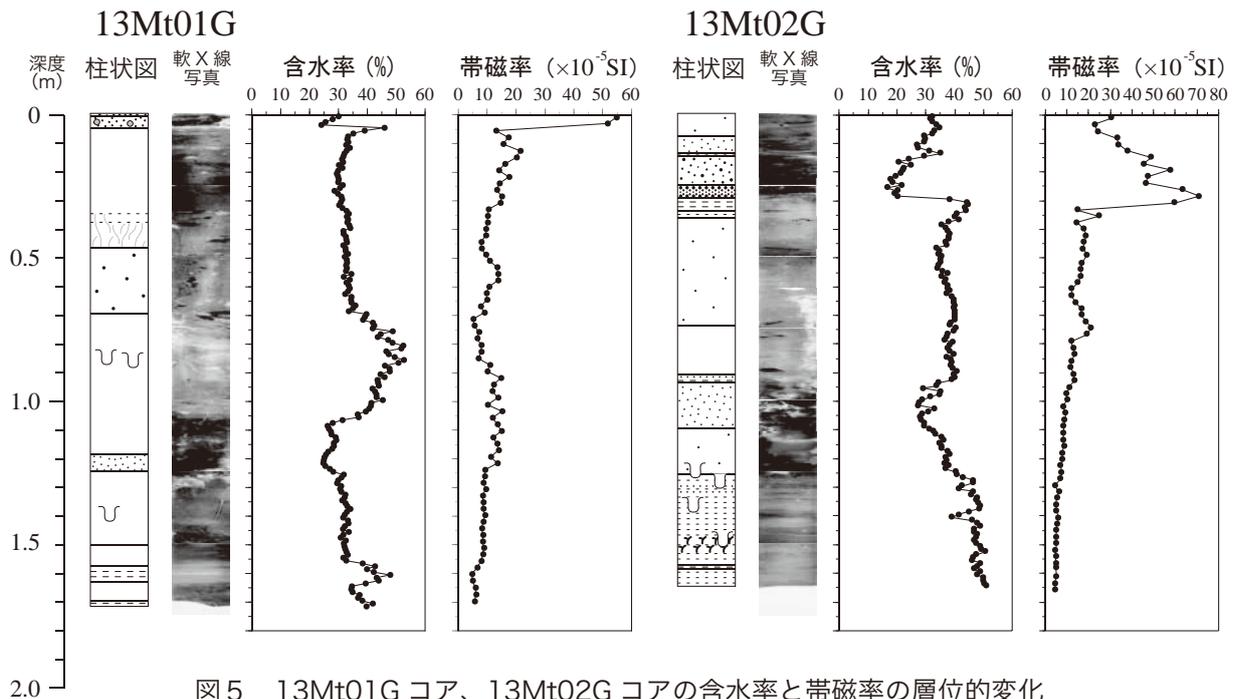


図5 13Mt01G コア、13Mt02G コアの含水率と帯磁率の層的变化

前後と低い値を示している。含水率も同様に 30%前後で推移しているが、ラミナを伴う泥質堆積物では 40% 以上と高い値を示す。

13Mt02G コアの含水率は、コアトップから深度 29cm まで減少傾向にある (図 5)。しかし、深度 15cm 付近の弱いラミナを伴う泥の層では、35%と比較的高い。深度 25 ~ 29cm のルーズな砂層では 20%以下ともっとも低い値を示している。一方、その層準の帯磁率は、20 から  $70 \times 10^{-5} \text{SI}$  へと増加する傾向にある。深度 29 ~ 93cm の層準は、含水率がおおむね 40%前後で推移するが、その上部は 35%前後のやや低い値を示している。その層準の帯磁率は、19 から  $13 \times 10^{-5} \text{SI}$  まで増減を繰り返しながら減少傾向にある。深度 93 ~ 110cm の極細粒砂質泥の層準は、含水率が 30%前後を示し、それ以深では増加傾向にある。深度 125cm 以深のラミナを伴う泥質堆積物では増加傾向は緩やかになるが、コアボトムでは 50%達する。帯磁率は、深度 93cm 以深でも減少し続け、コアボトムでは  $5 \times 10^{-5} \text{SI}$  を示す。

### (3) CNS 元素分析結果

有機炭素 (TOC) 濃度は、おもに有機物 (生物) の生産性、有機物の分解、堆積速度などに関連して変化することが知られている (Muler and Suess, 1979; Sampei et al., 1994 など)。C/N 比は、有機物の種類によって窒素の比率が異なることから有機物の起源を反映している。一般にプランクトン起源の有機物では 6 前後、陸源高等植物起源の有機物では 15 以上を示すといわれている (Muler, 1977; 中井ほか, 1982 など)。なお、C/N 比は、無機窒素の影響もあるため、TOC 濃度が 0.7% 以下は議論しないものとする。全イオウ (TS) 濃度は、海水中に多く含まれる硫酸イオンが還元されて固定されたイオウの割合を示している。したがって、通常、淡水成堆積物にはほとんど含まれず、低い TS 濃度を示す (Berner, 1984)。一方、貧酸素環境を示す汽水湖の堆積物などは、高い TS 濃度を示している (Sampei et al., 1997)。

13Mt01G コアにおけるコアトップから深度 5cm の TOC 濃度は、0.7%前後と低い値を示す (図 6)。深度 5 ~ 69cm は緩やかな減少と増加を示しながら、1 ~ 2%で推移している。深度 69 ~ 107cm は、2%以上を示し、深度 80cm では 6.6%に達する。深度 107 ~ 156cm の層準は、1%前後を示すが、それ以深では 2%前後の値を示す。全窒素 (TN) 濃度は、0.05 ~ 0.5%の範囲であるが、TOC 濃度の変化

### 13Mt01G

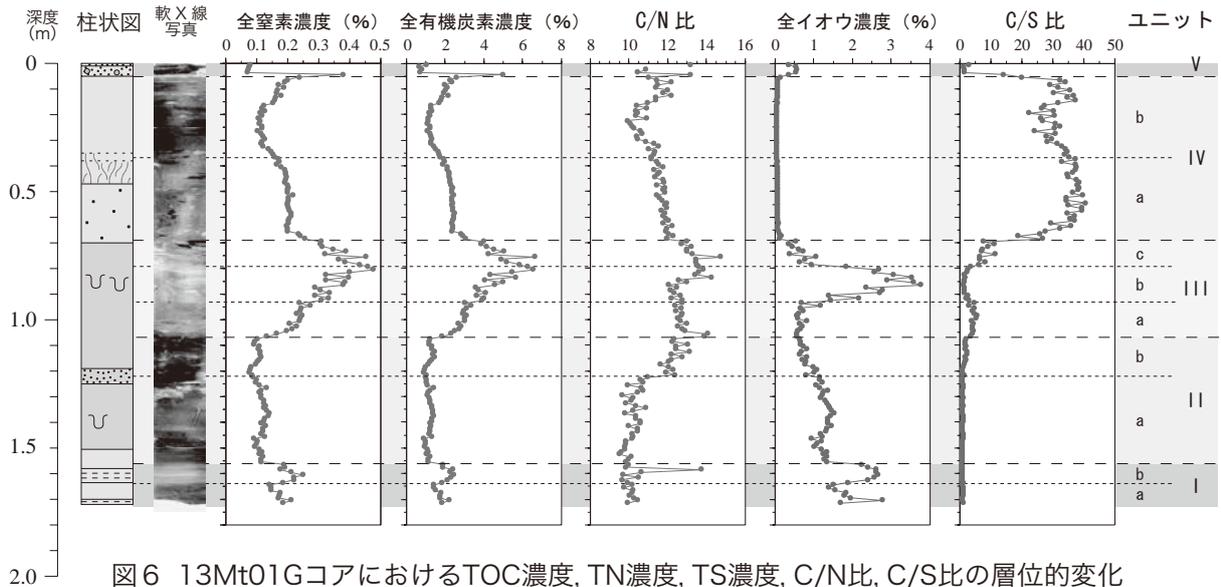


図6 13Mt01GコアにおけるTOC濃度, TN濃度, TS濃度, C/N比, C/S比の層位的変化

と同調的である。C/N比は、コアトップから深度69cmまでは11～12、深度69～83cmは14前後、深度83～122cmの層準では11～12、深度122cm以深では10前後を示した。全イオウ (TS) 濃度は、コアトップから深度5cmで0.5%前後であった。深度5～69cmは、0.1%以下と低い値を示すが、上部(深度5～37cm)ではC/S比が30前後を示すのに対し、下部(深度37～69cm)では35前後を示す。深度69cm以深では0.5%以上で、特に深度79～93cmでは、約4%に達する。また、深度156～164cmでは、約3%の高い値を示し、それ以深では1.5%前後を示している。これらの値の特徴に基づいて下位からI～Vのユニットとそれぞれ2～3のサブユニットに区分した。

13Mt02G コアの TOC 濃度は、コアトップから深度29cmまで段階的に減少している(図7)。コアトップから深度7cmまでは、1.6～2.3%の範囲、深度7～12cmは0.9～1.3%の範囲、深度15～25cmは0.4～0.7%の範囲、深度25～29cmは0.1%以下で推移している。深度12～15cmの弱いラミナを伴う暗い色調の泥は、2%に近い値を示した。深度29～93cmでは、TOC濃度は2.5%から1.8%まで下位に向かって緩やかに減少する。深度93～111cmでは、1.5%から0.7%まで急速に減

### 3Mt02G

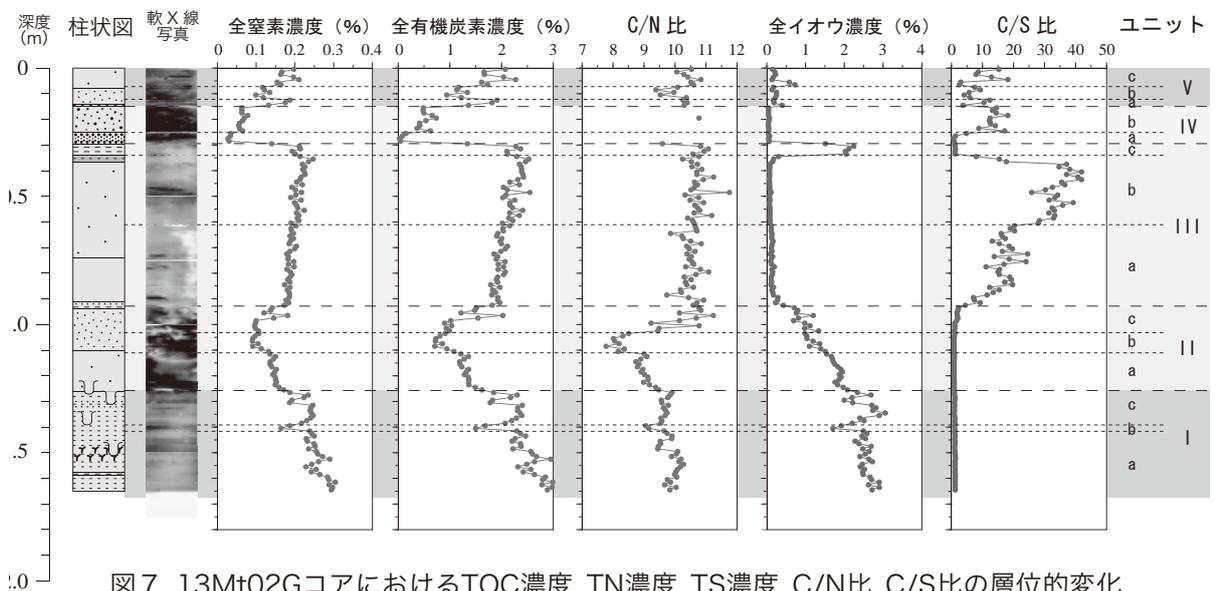


図7 13Mt02GコアにおけるTOC濃度, TN濃度, TS濃度, C/N比, C/S比の層位的変化

少している。深度 111～127cm では、1% とやや高い値を示す。深度 127cm 以深は、2.2% から 3.0% まで緩やかに増加する傾向にある。その中で深度 139～141cm では、1.5% 前後と低い値を示している。TN 濃度は、0.03～0.3% の範囲であるが、TOC 濃度の変化と同調的である。C/N 比は、コアトップから深度 103cm までは 10～11 の範囲で推移している。深度 103～111cm では、8 前後で推移している。深度 111～127cm では、9 前後で下位に向かって増加する傾向にある。深度 127cm からコアボトムの層準では 10～11 の範囲で推移しているが、深度 139～141cm ではやや低い値を示している。TS 濃度は、コアトップから深度 15cm までが 0.15% 前後である。深度 15～29cm では、0.05% 以下と極めて低い値を示す。深度 29～34cm の層準では 2% 以上と高い値を示すが、その下位の深度 34～92cm の層準では 0.15% 以下と低い値を示す。特にその上部（深度 34～61cm）は、0.06% 前後と低く、逆に C/S 比は 30～40 と高い値を示す。一方、下部（深度 61～92cm）は、0.12% 前後とわずかに高く、C/S 比は 10～20 と低い値を示している。深度 92～127cm では、TS 濃度は 0.4% から 2.3% まで増加する。深度 127cm からコアボトムの層準では 2.5% 前後で推移しているが、深度 139～141cm では 1.7% と低い値を示している。これらの値の特徴に基づいて下位から I～V のユニットとそれぞれ 2～3 のサブユニットに区分した。

#### (4) 蛍光 X 線主要元素分析結果

XRF 主要元素分析は、主に無機碎屑粒子の特徴、酸化還元状態、海成／淡水成の判定などに使われる。ここでは 10 の主要元素の含有率の層位的変化について報告する。

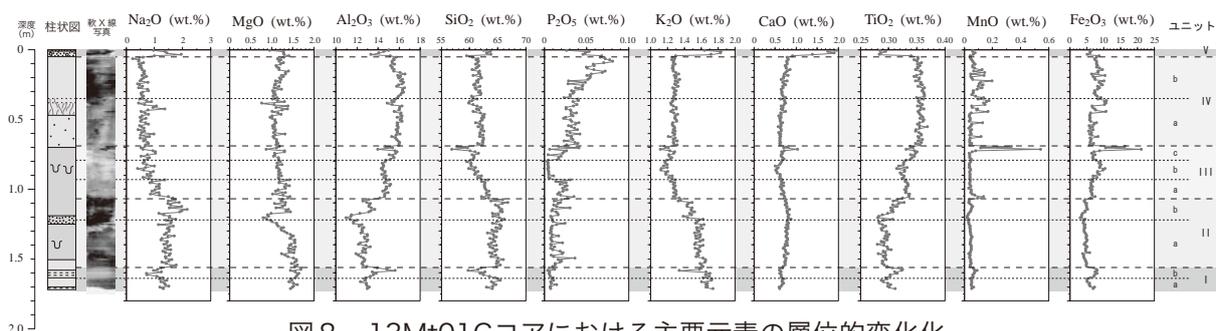


図8 13Mt01Gコアにおける主要元素の層位的変化

13Mt01G コアの  $\text{Al}_2\text{O}_3$  含有率は、11～16wt% の範囲で変化する（図8）。コアトップから深度 5cm の層準では、13～15wt% である。深度 5～79cm の層準は 16wt% 前後、深度 79～107cm は 14wt% 前後で推移している。深度 107～122cm は、14 から 11wt% に減少する傾向にある。深度 122cm 以深では 12wt% 前後で推移しているが、深度 146～164cm では、16wt% と高い値を示している。MgO 含有率は 0.7～1.5wt% の範囲であるが、 $\text{Al}_2\text{O}_3$  含有率の変化と同調的である。しかし、深度 120cm 付近を境界にしたコア上部より下部の方が高い値を示している。 $\text{TiO}_2$  含有率は 0.27～0.35wt% の範囲で変化しているが、これも  $\text{Al}_2\text{O}_3$  含有率の変化と同調的である。MnO、 $\text{Fe}_2\text{O}_3$  含有率も  $\text{Al}_2\text{O}_3$  含有率の変化とほぼ同調的であるが、いくつかの層準で高い値を示している。特に深度 70cm 付近では著しく高い。 $\text{Na}_2\text{O}$ 、 $\text{SiO}_2$  含有率は、それぞれ 0.5～2.5wt%、57～65wt% の範囲であるが、 $\text{Al}_2\text{O}_3$  含有率の変化と逆相関的に変化する。 $\text{K}_2\text{O}$ 、 $\text{CaO}$  含有率は、それぞれ 1.1～1.8wt%、0.5～2.0wt% の範囲で変化し、 $\text{SiO}_2$  含有率の変化とほぼ同調的である。一方、 $\text{P}_2\text{O}_5$  含有率は、独立して変化している。コアトップから深度 5cm は、0.05wt% 前後と比較的高い値で、深度 5～16cm の層準では、0.07wt% 前後と高い値で推移する。深度 16～79cm では、0.04wt% 前後で推移している。深度 79～93cm では、0.01wt% 以下と非常に低い値を示す。深度 93～103cm では、0.02wt% 前後とやや高い値を示してい

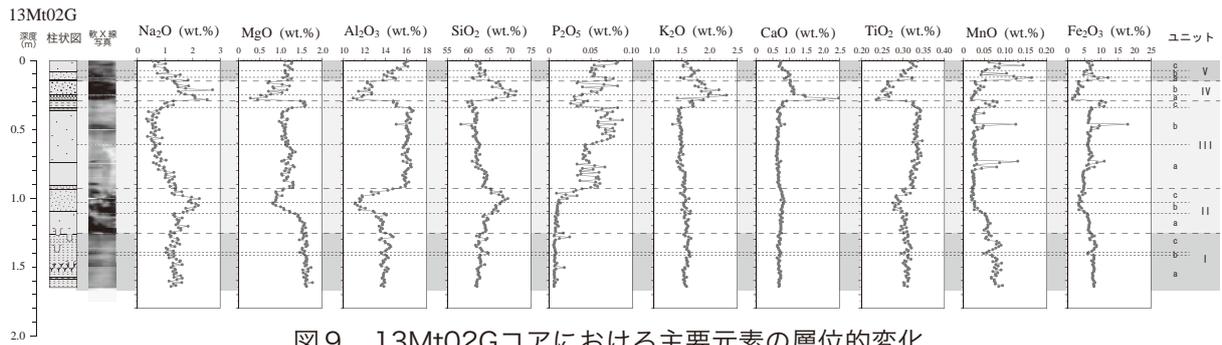


図9 13Mt02Gコアにおける主要元素の層的变化

る。それ以深は 0.01wt% 前後で推移している。

13Mt02G コアの  $Al_2O_3$  含有率は、10～16wt% の範囲で変化する（図9）。コアトップから深度 29cm では、16wt% から 10wt% まで下位方向に減少する。深度 29～34cm は 15wt% 前後、深度 34～92cm の層準は 16wt% 前後と高い値で推移している。深度 92～111cm は、11wt% 前後と低い値を示す。深度 111cm 以深では 13wt% 前後で推移している。MgO 含有率は 0.5～1.5wt% の範囲であるが、 $Al_2O_3$  含有率の変化と同調的である。しかし、深度 34～92cm の層準より深度 34～92cm および深度 111cm 以深の方が高い値を示している。TiO<sub>2</sub> 含有率は 0.22～0.35wt% の範囲で変化しているが、これも  $Al_2O_3$  含有率の変化と同調的である。CaO 含有率は 0.5～2.5wt% の範囲で変化し、 $Al_2O_3$  含有率の変化とほぼ同調的である。しかし、深度 29～34cm で著しく高い値を示し、また、深度 92～111cm で見られる  $Al_2O_3$  含有率の低い値を示す層準が認められない。MnO、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub> 含有率も  $Al_2O_3$  含有率の変化とほぼ同調的である。しかし、いくつかの密度の高い層準（深度 47cm など）で高い値を示している。Na<sub>2</sub>O、SiO<sub>2</sub> 含有率は、それぞれ 0.5～2.5wt%、60～70wt% の範囲であるが、 $Al_2O_3$  含有率の変化と逆相関的に変化する。K<sub>2</sub>O 含有率は、1.5～2.0wt% の範囲で変化し、深度 34cm 以深は 1.5 wt% 前後で推移している。一方、P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> 含有率は、独立して変化している。コアトップから深度 25cm は、0.06wt% 前後と比較的高い値で、深度 25～34cm の層準では、0.03wt% 前後と低い値で推移する。深度 34～61cm は、0.07wt% 前後、深度 61～92cm では、0.05wt% 前後と相対的に高い値を示す。深度 92cm 以深では、0.01wt% 以下と低い値を示している。

#### (5) AMS<sup>14</sup>C 年代測定

13Mt01G コアおよび 13Mt02G コアでは、AMS<sup>14</sup>C 年代測定をそれぞれ 1 試料ずつ行った。年代測定用試料は、コアから任意にピックアップした植物片を用いた。年代測定は、(株)地球科学研究所に依頼して行い、<sup>13</sup>C 補正の年代値を INTCAL13 暦年較正データセット (Reimer et al., 2009) による暦年較正プログラム「CALIB 7.0」を用いて暦年代値に変換した (表1)。

13Mt01G コアの <sup>14</sup>C 年代は、深度 88.5cm の植物片試料を用いて測定し、2920 yr BP という年代値が得られた。暦較正年代は 3065 cal yr BP であった。13Mt02G コアの <sup>14</sup>C 年代は、深度 86.5cm の植物片試料を用いて測定し、70 yr BP という年代値が得られた。この年代は、1690 年以降を示している。

表1 年代測定結果一覧

Lab.No.	Sample No.	Core Measured Depth (cm)	C <sup>14</sup> Age	std.	C <sup>13</sup> /C <sup>12</sup> Conventional			Cal BP	Intercept of C <sup>14</sup> Age		Material	Location		Sampling date	
					Ratio	C <sup>14</sup> Age	std.		(Cal AD)			Latitude	Longitude		
Beta-365766	13Mt01-88	88.5	2950	30	-27.1	2920	30	IntCal13	3065	BC	1115	(1211-1020)	Plant material	35° 28.72 E 133° 4.08 N	2013/2/6
Beta-365765	13Mt02-86	86.5	90	30	-26.0	70	30	IntCal13	-	AD	-	(1690-1730)	Plant material	35° 28.82 E 133° 3.80 N	2013/8/21
												(1810-1920)			
															(Post 1950)

## 5. 考察

これらの分析結果から、13Mt01G コアおよび 13Mt02G コアの古環境変遷史を検討し、過去の水域の特徴について考察を行なう。

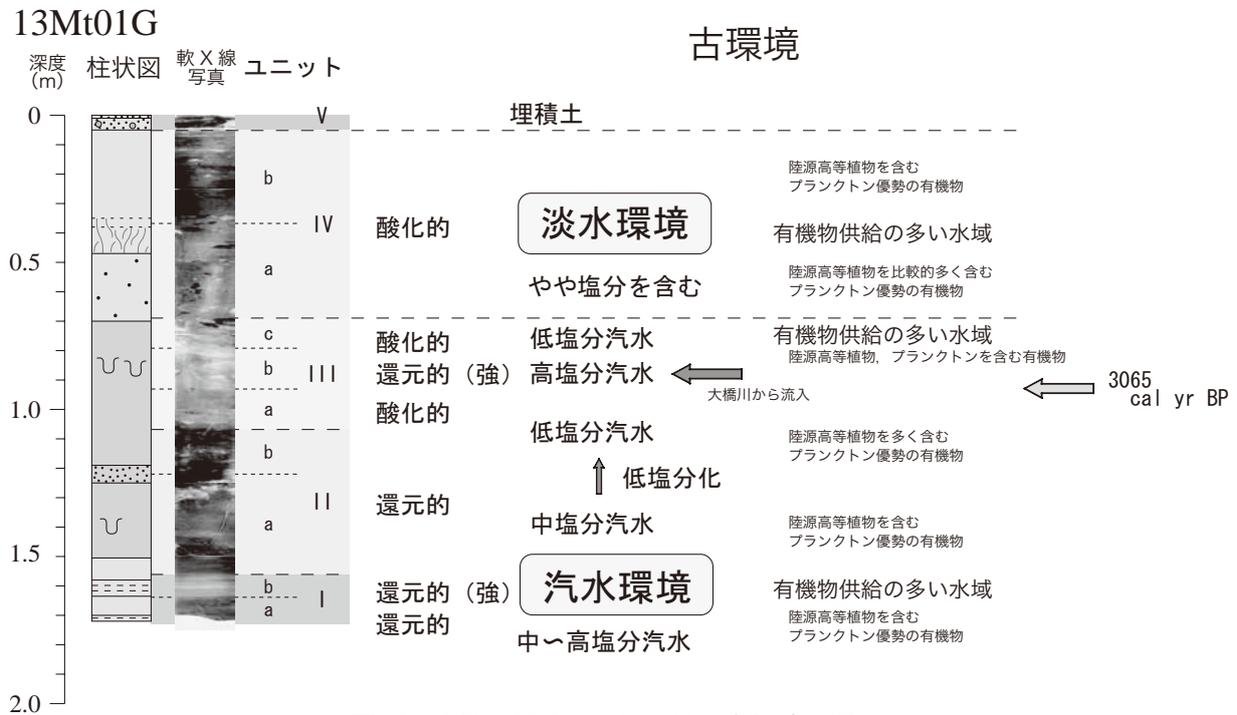


図10 13Mt01Gコアにおける古環境変遷史

### (1) 13Mt01G コアにおける古環境変遷史

01G ユニット I (深度 172 ~ 156cm) は、TS 濃度が高いことから海水または汽水環境を示す(図 10)。また、C/S 比、 $P_2O_5$  含有率が低いことから、還元的な環境を示している。TOC 濃度も高いことから、有機物の供給の多い水域であることが推定される。有機物の起源は、C/N 比が 10 前後を示すことから、陸源高等植物起源の有機物を含むプランクトン起源の優勢の有機物だと思われる。サブユニット Ib は、TS 濃度が高く、ラミナが見られることから、サブユニット Ia より強い還元的環境を示すものと思われる。サブユニット Ib の深度 159cm で見られる灰色のラミナは、C/N 比の著しく高く、洪水を示す堆積物と思われる。

01G ユニット II (深度 107 ~ 172cm) は、TS 濃度が比較的高いことから海水または汽水環境を示す。C/S 比、 $P_2O_5$  含有率が低いことから、還元的な環境を示している。そのような中で TS 濃度が 01G ユニット I よりやや低いことから、中塩分汽水程度の水質環境を示しているものと思われる。01G サブユニット IIb は、01G サブユニット IIa よりさらに低く、低塩分化を示唆しているものと思われる。サブユニット IIa の C/N 比は、10 前後を示すことから、陸源高等植物起源の有機物を含むプランクトン起源の優勢の有機物だと思われる。一方、01G サブユニット IIb の C/N 比は、12 前後を示し、プランクトン起源の優勢の有機物であるが、陸源高等植物起源の有機物を多く含むものと思われる。

01G ユニット III (深度 69 ~ 107cm) は、TOC 濃度が高いことで特徴づけられ、有機物の供給の多い水域であることが推定される。C/N 比は、12 前後を示し、プランクトン起源の優勢の有機物であるが、陸源高等植物起源の有機物を多く含むものと思われる。しかし、01G サブユニット IIIc 付近の C/N 比は、13 ~ 14 とさらに高く、プランクトン起源と陸源高等植物起源の両方を含む有機物であると推定される。

TS 濃度は、比較的高いことから海水または汽水環境を示す。01G サブユニット IIIa は、TS 濃度が相対的に低く、C/S 比、 $P_2O_5$  含有率がやや高いことから、低塩分汽水で酸化的な環境を示すものと思われる。一方で、01G サブユニット IIIb は、TS 濃度が極めて高く、C/S 比、 $P_2O_5$  含有率が低いことから、高塩分汽水で還元的な環境を示しているものと思われる。これは一時的に大橋川から高塩分汽水が流入したものである。サブユニット IIIc は、01G サブユニット IIIa と近い環境を示しているが、さらに酸化的か、低塩分が進行しているものと思われる。

01G ユニット IV (深度 5 ~ 69cm) は、TS 濃度が低く、C/S 比、 $P_2O_5$  含有率が高いことから淡水で酸化的な環境を示しているものと思われる。サブユニット IVa ではわずかながら TS 濃度が高いことから、やや塩分を含むような水質環境を示していたものと思われる。また、TOC 濃度も高いことから、有機物の供給の多い水域であることが推定されるが、01G サブユニット IVb の下部では、TOC 濃度がやや低く、有機物の供給は多くない。有機物の起源は、C/N 比が 11 前後を示すことから、陸源高等植物起源の有機物を比較的多く含むプランクトン起源の優勢の有機物だと思われる。01G サブユニット IVb の下部では、C/N 比が 10 前後を示し、プランクトン起源の有機物がより優勢であることを示している。

01G ユニット V (深度 0 ~ 5cm) は、産状から埋積土と考えている。

### 13Mt02G

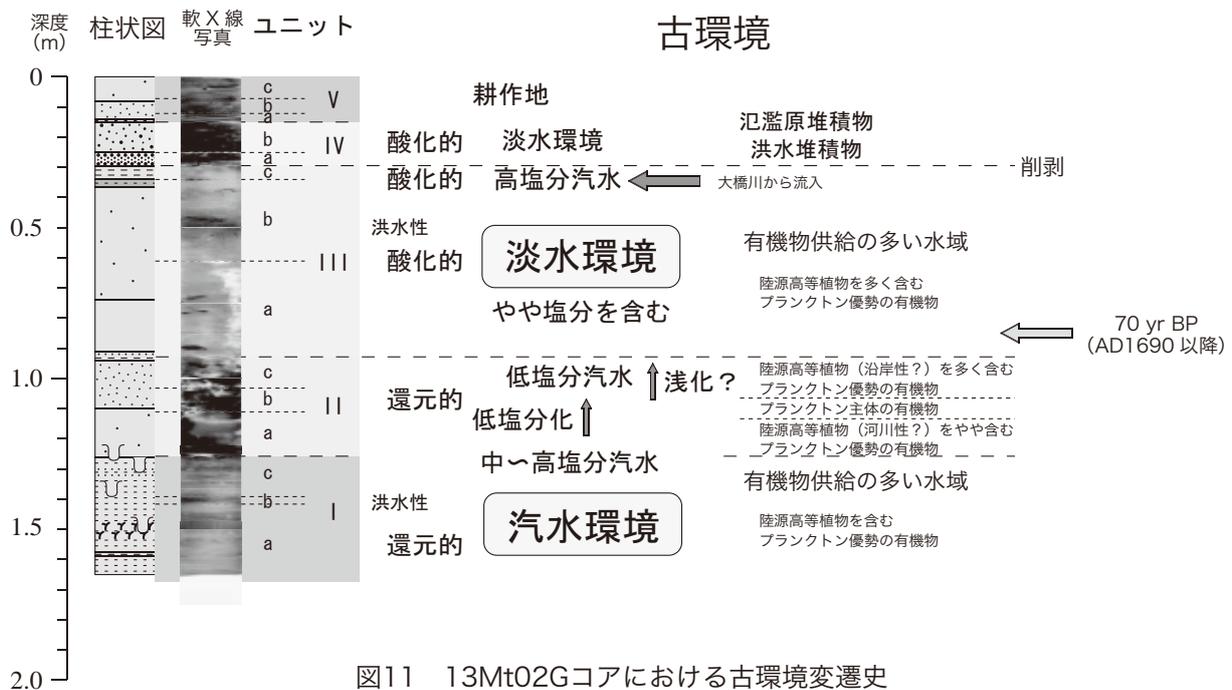


図11 13Mt02Gコアにおける古環境変遷史

#### (2) 13Mt02G コアにおける古環境変遷史

02G ユニット I (深度 165 ~ 127cm) は、TS 濃度が高いことから海水または汽水環境を示す(図 11)。また、C/S 比、 $P_2O_5$  含有率が低いことから、還元的な環境を示している。TOC 濃度も高いことから、有機物の供給の多い水域であることが推定される。有機物の起源は、C/N 比が 9 ~ 10 を示すことから、陸源高等植物起源の有機物を含むプランクトン起源の優勢の有機物だと思われる。02G サブユニット Ib はその中でも TOC、TN、TS 濃度のいずれもが低いことから、洪水による無機碎屑物の供給によって希釈されたものと思われる。

02G ユニット II (深度 127 ~ 92cm) は、TS 濃度が高いことから海水または汽水環境を示す。C/S 比、 $P_2O_5$  含有率が低いことから、還元的な環境を示している。そのような中で TS 濃度が減少傾向にある

ことから、水質環境が低塩分を示唆しているものと思われる。また、02G サブユニット IIa からは底生有孔虫の *Haplophragmoides canariensis* の産出が確認されている。この有孔虫種は、山陰地方では、中海、大橋川、宍道湖から遺骸個体が認められている (Nomura and Seto, 1992; 野村・遠藤, 1998; 瀬戸ほか, 2000)。Takata et al. (2009) では、大橋川の中流域で *H. canariensis* の生体群集の存在を明らかにし、中程度の TOC 濃度 (1.28-4.36%) でシルト～細粒砂の底質に生息していることを示唆している。大橋川の中流域は、中塩分程度の汽水を示すが、宍道湖からの低塩分汽水や中海からの高塩分汽水の影響も受けており、幅広い塩分環境の影響下にある (藤井ほか, 2006 など)。出雲平野のコアからも同じような産状を示す *H. canariensis* が認められており、同様な解釈がなされている (瀬戸ほか, 2012)。02G ユニット I とこのユニットは、汽水環境を示し、低塩分化の過程で *H. canariensis* が生息できる環境に変化したものと思われる。02G サブユニット IIb の C/N 比は、8 前後を示すことから、プランクトン起源の有機物が主体である。一方、下位の 02G サブユニット IIa は、やや陸源高等植物起源の有機物を含んでいるようである。上位の 02G サブユニット IIc はさらに C/N 比が高いことから、陸源高等植物起源の有機物をより多く含んでいると思われる。これらのことは、河川からの陸源高等植物起源の有機物の供給が少なくなった後に、水域の浅化に伴い沿岸から陸源高等植物起源の有機物の供給を受けたのかもしれない。

02G ユニット III (深度 92～29cm) は、TS 濃度が低いことから淡水で酸化的な環境を示しているものと思われる。02G サブユニット IIIa ではわずかながら TS 濃度が高いことから、やや塩分を含むような水質環境を示していたものと思われる。一方、02G サブユニット IIIc は、TS 濃度が高いことから海水または汽水環境を示す。また、 $P_2O_5$  含有率がそれほど低くないことから、酸化的な環境を示している。酸化的な環境で TS 濃度が高いことから、高塩分汽水の水質環境を示しているだろう。おそらく、一時的に大橋川から高塩分汽水が流入したものと思われる。また、TOC 濃度も高いことから、有機物の供給の多い水域であることが推定される。有機物の起源は、C/N 比が 10～11 を示すことから、陸源高等植物起源の有機物を比較的多く含むプランクトン起源の優勢の有機物だと思われる。C/N 比が 11 を越える層準は、軟 X 線写真 (図版 2) により相対的に密度が高いことから小規模な洪水を示しているものかもしれない。

02G ユニット IV (深度 29～15cm) は、TS 濃度が低いことから淡水で酸化的な環境を示しているものと思われる。02G サブユニット IVa は、ルーズな砂質堆積物で上方細粒化も見られ、下位の地層も削剥されていることから、河川の洪水によって形成されたものと思われる。その上位の 02G サブユニット IVb は、TOC 濃度もやや高いことから、洪水による氾濫原堆積物だと思われる。

02G ユニット V (深度 15～0cm) は、TOC 濃度、 $P_2O_5$  含有率、MnO 含有率などが高い値を、TS 濃度もやや高い値を示し、C/N 比が相対的に低い値を示すことから、耕作土と考えている。

### (3) 3Mt01G コアと 13Mt02G コアの対比

13Mt01G コアと 13Mt02G コアの分析結果と古環境変遷史から対比を試みた (図 12)。01G ユニット I～III と 02G ユニット I～II は、ともに汽水環境を示す。01G ユニット III は、13Mt02G コアに見られない特徴を示しているが、01G ユニット I と 02G ユニット I、01G ユニット II と 02G ユニット II は分析値および推定された環境が類似している。そのため、それらのユニットは対比できるものと考えられる。一方、13Mt02G コアの 01G ユニット III 相当層は、上位の地層が堆積するときに削剥されたものと考えられる。01G ユニット III では、3065 cal yr BP の年代値が得られている。当時の宍道湖は、斐伊川が出雲平野側に向いていたため、宍道湖は汽水環境を示していたと考えられている (高安ほ

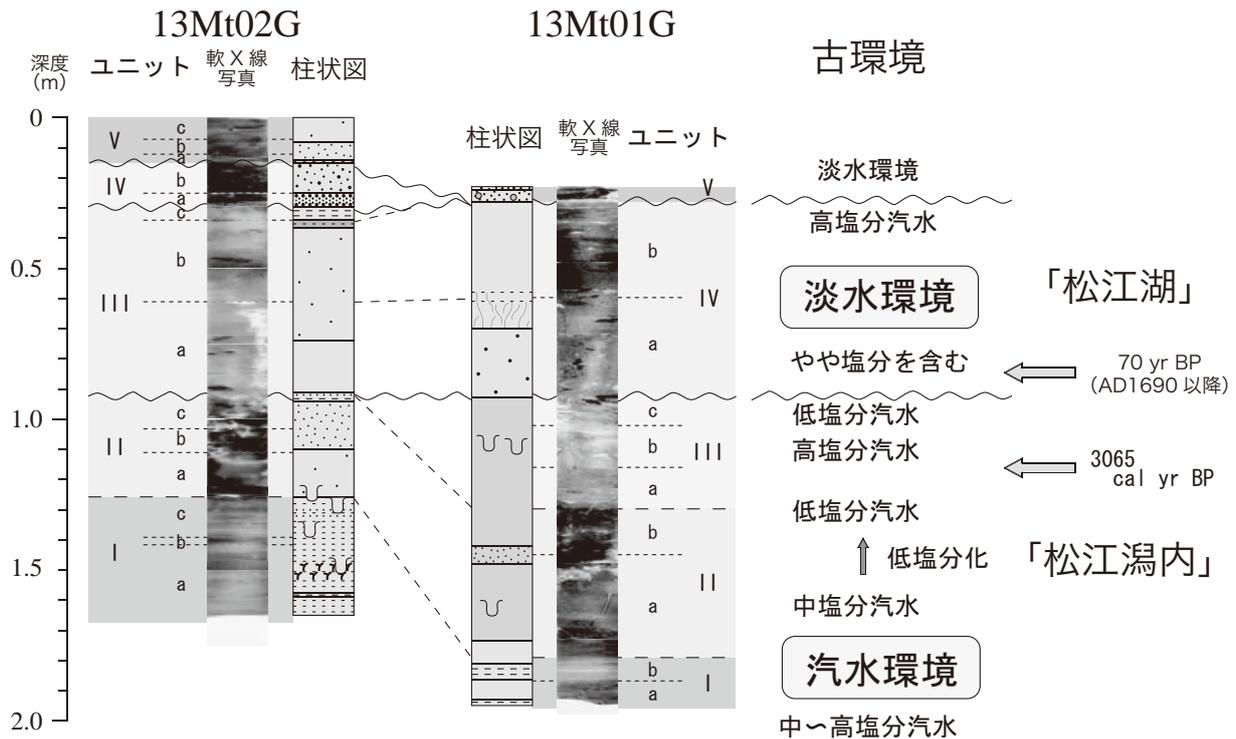


図12 13Mt01Gコアと13Mt02Gコアの対比と古環境

か、2000；瀬戸ほか、2006 など）。松江平野北部でも、宍道湖の水質環境を反映した水域であったことが推定される。

01G ユニット IV と 02G ユニット III は、ともに淡水環境を示す。これらのユニットは分析値および推定された環境が類似しており、対比されるものと思われる。02G サブユニット IIIc 及び 02G ユニット IV 相当層は、13Mt01G コアでは見られない。01G ユニット V が埋積する前に削剥されたものと思われる。02G サブユニット IIIa の  $^{14}\text{C}$  年代は、70 yr BP という年代値が得られた。この年代は、1690 年以降を示している。当時は、斐伊川東流イベント（瀬戸ほか、2006）後であるから、宍道湖は淡水に近かったと推定されている（田村ほか、1996；瀬戸ほか、2006）。しかし、02G サブユニット IIIc では、比較的塩分の高い水塊が流入している。これは、大橋川までは比較的高塩分の水塊が流入していたことが示唆される。

#### (4) 松江平野北部の発達史と湖沼の環境

松江平野北部は、約 3000 年前までは汽水湖であった。この水域は、プランクトン起源の有機物を多く含むことから、比較的汚濁の進んだ富栄養環境を示す比較的浅い中～高塩分汽水湖であったと推定される。有機物に陸源高等植物を含んでいることから、河川の影響があったことが示唆される。河川の規模から考えると、現在の朝酌川の影響が大きかったものと思われる。渡辺・瀬戸（2014）によれば、さらに南の松江平野中部でも同様な環境が推定され、その標高は東に向かって深くなる傾向を示している。そのため、この汽水湖は、南東に向いた形状を示していた可能性を指摘することができる。

16 世紀以降に見られる淡水域は、プランクトン起源の有機物を多く含むことから、富栄養化した浅い淡水湖であったと推定される。有機物に陸源高等植物を含んでいることから、約 3000 年前までの汽水湖と同様、現在の朝酌川の影響があったものと思われる。

この 2 つの水域の間には、2500 年以上の時間の間隙がある。01G ユニット III 相当層が削剥によっ

て消滅していることから、その間の堆積物が浸食されている可能性もあるが、2500年間の一般的な堆積速度から推定される堆積量を考えると、その可能性は低いものと思われる。これらの堆積物の標高も考慮して、埋積によって陸化したと考える方が妥当である。その埋積による浅化の過程で、01G ユニット II 及び 02G ユニット II で見られるような低塩分が起り、ついには陸化したのだろう。

16世紀以降に見られる淡水域は、宍道湖の淡水化以降にあたるので、斐伊川東流による水位の上昇によって形成された可能性が考えられる。しかし、松江平野中部にその年代に相当する堆積物が確認されていない（渡辺・瀬戸、2014）。おそらく、朝酌川の自然堤防の発達により、閉鎖され、そこに朝酌川の水が流入したものと考えている。その後、おそらく人為的な改変によって、大橋川からの高塩分汽水の流入があったものと考えている。最後は、朝酌川の洪水によって埋積されたものと思われる。

林（1991）では、松江平野に見られる一連の水域を「古松江湖」と呼んでいる。しかし、松江平野北部の湖沼の特徴や形成過程を考慮すると、それと区別した方が良いと考える。ここでは、約3000年前までの汽水湖を「松江瀉内」、16世紀以降に見られる淡水域を「松江湖」と呼ぶことを提唱したい。しかし、年代測定および対比が不十分であることから、新しいコアの解析も含め、今後さらに検討を行う必要があるだろう。

## まとめ

松江市学園1丁目（13Mt01G）と菅田町（13Mt02G）の2カ所でジオスライサーを用いてコアを採取し、コアの記載、地球化学分析（CNS 元素分析、XRF 主要元素分析）を行い、古環境変遷史を考察した。古環境解析の結果、汽水環境から淡水環境に変化することが明らかとなり、その2つの環境の間には、2500年以上の時間の間隙があることが明らかとなった。約3000年前までの汽水域は、南東に向いた形状を示した富栄養化した浅い汽水湖、「松江瀉内」と呼ぶことを提唱した。16世紀以降に見られる淡水域は、松江平野北部に見られる富栄養化した浅い淡水湖で「松江湖」と呼ぶことを提唱した。しかし、年代測定および対比が不十分であることから、新しいコアの解析も含め、今後さらに検討を行う必要があることを指摘した。

〔謝辞〕 本研究を進めるにあたり、島根大学ミュージアムの會下和宏准教授には附属中学の試料採取に便宜を図っていただいた。コアの分割については、池田洋子氏をはじめ、島根大学の学生諸氏にお世話になった。帯磁率測定、軟X線写真撮影、粉末試料の作成などについては、船来桂子氏（島根大学汽水域研究センター）に大変お世話をいただいた。また、松江市教育委員会松江市史編纂室の諸氏には無形の援助を頂いている。本研究まとめるに当たり、これらの方々に深く感謝の意を示します。

# 13Mt01G



a: 植物根のある層準  
(深度 40cm 付近)



b: 色調の変わる層準  
(深度 70cm 付近)

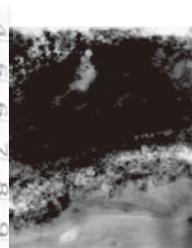


c: ラミナの層準  
(深度 160cm 付近)

# 13Mt02G



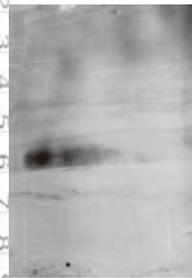
d: ルーズな砂 (深度 24~31cm)



軟 X 線写真



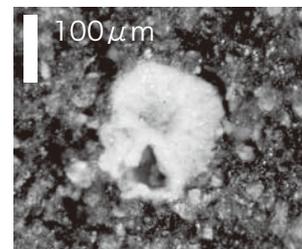
e: 弱いラミナのある黒色の層 (深度 31~40cm)



軟 X 線写真



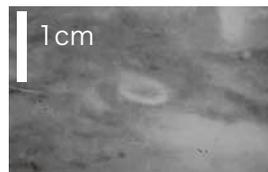
f: 色調の変わる層準  
(深度 84~103cm)



i: 有孔虫化石  
(*Haplophragmoides canariensis*)  
(深度 120cm 付近)



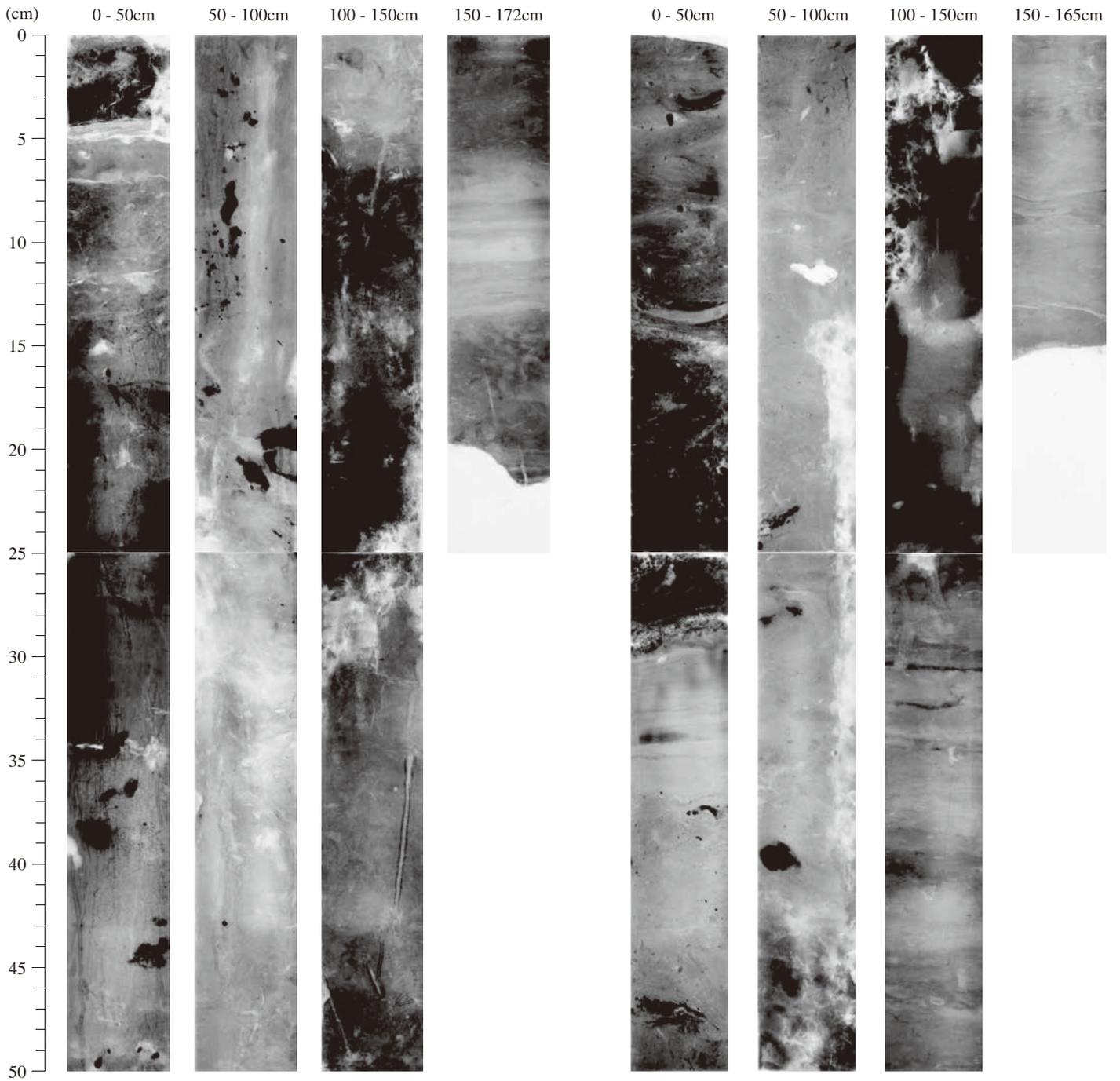
g: 植物化石密集層 (深度 147~155cm)



h: 生痕化石 (巣穴)  
(深度 147cm 付近)

13Mt01G core 軟 X 線写真

13Mt02G core 軟 X 線写真



## 引用文献

- Berner, R. A. (1984) Sedimentary pyrite formation: An update. *Geochemica et Cosmochemica acta*, 48, 605-615.
- 藤井智康・森脇晋平・奥田節夫 (2006) 大橋川を遡上する貧酸素水塊の実状と宍道湖に及ぼす影響. *LAGUNA (汽水域研究)*, 13, 1-7.
- 林 正久 (1991) 松江周辺の沖積平野の地形発達史. *地理科学*, 46 (2), 55-74.
- 小森次郎・遠藤邦彦・長谷川史彦・田村 聖 (2000) 東京世田谷区北部の淀橋台地西端における第四紀後期層序. *日本大学文理学部自然科学研究所研究紀要*, 35, 115-124.
- Muler, P. J. (1977) C/N ratios in Pacific deep-sea sediments ; Effect of inorganic ammonium and organic nitrogen compounds sorbed by clays. *Geochemica et Cosmochemica acta*, 41, 765-776.
- Muler, P. J. and Suess, E. (1979) Productivity, sedimentation rate and sedimentary organic matter in the oceans-I. Organic carbon preservation. *Deep-Sea Res.*, 26, 1347-1362.
- 中井信之・太田友子・藤澤寛・吉田正夫 (1982) 堆積物コアの炭素同位体比, C/N 比および FeS<sub>2</sub> 含有量からみた名古屋港周辺の古気候, 古海水準変動. *第四紀研究*, 21, 169-177.
- Nomura, R. and Seto, K. (1992) Benthic foraminifera from brackish lake Nakanoumi, San-in district, Southwestern Honshu, Japan. *Centenary of Japanese Micropaleontology*, 227-240.
- 野村律夫・遠藤公史 (1998) 汽水域における人的改造と有孔虫群集の変化—その 5 *Ammonia* event の提唱と 2005 年の宍道湖—. *LAGUNA (汽水域研究)*, 5, 15-26.
- Reimer, P. J., Baillie, M. G. L., Bard E., Bayliss, A., Beck J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Burr, G. S., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hajdas, I., Heaton, T. J., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., McCormac, F. G., Manning, S. W., Reimer, R. W., Richards, D. A., Southon, J. R., Talamo, S., Turney, C. S. M., van der Plicht, J., Weyhenmeyer, C. E. (2009) IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0–50,000 years cal BP. *Radiocarbon*, 51 (4) , 1111-1150.
- Sampei, Y., Yomura, H., Otsuka, M., Oshida, K and Suzuki, N. (1994) Decomposition of organic matter and the organic carbon content of sediments in Lake Shinji, Southwest Japan. *EARTH SCIENCE*, 48, 4, 317-332.
- Sampei, Y., Matsumoto, E., Kamei, T. and Tokuoka, T. (1997) Sulfur and organic carbon relationship in sediments from coastal brackish lakes in the Shimane peninsula district, southwest Japan. *Geochem. J.*, 31, 245–262.
- 瀬戸浩二・真先修・田中邦昌・高安克己 (2000) 宍道湖における底生有孔虫群集. *島根大学地球資源環境学研究報告*, 19, 65-76.
- 瀬戸浩二・中武誠・佐藤高晴・香月興太 (2006) 斐伊川の東流イベントとそれが及ぼす堆積環境への影響. *第四紀研究*, 45, 375-390.
- 瀬戸浩二・岡崎裕子・酒井哲弥・高田裕行・山田和芳・渡邊正巳 (2012) 第 4 章 出雲平野南西部の形成過程 —神戸川河口域の古環境変遷史. *出雲風土記の研究*, 45-59.
- Takata, H., Dettman, D. L., Seto, K., Kurata, K., Hiratsuka, J. and Kim, Boo-Keun (2009) Novel habitat preference of *Ammonia* “*beccarii*” forma 1 in a macrobenthic community on hard substrates in the Ohashi River, southwest Japan. *Journal of Foraminiferal Research*, 39, 87-96.
- 高安克己・田中秀典・佐藤慎一 (2000) 宍道湖コア SJ96 に見られるヌマコダキガイ密集層の古環境的意味 -

- サンフランシスコ湾の例との比較から -. 島根大学地球資源環境学研究報告, 19, 37-45.
- 田村嘉之・丹後雅憲・井内美郎・徳岡隆夫 (1996) 宍道湖における 17 世紀初頭の汽水から淡水への環境変化—コアの CT 画像解析と堆積, C・N・S 元素分析による検討—. LAGUNA (汽水域研究), 3, 9-56.
- 山田和芳・斎藤耕志・福澤仁之 (1998) 汽水湖底堆積物の採取・分析方法とその最近の進歩. LAGUNA (汽水域研究), 5, 63-73.
- 渡辺正巳・瀬戸浩二 (2012) 松江平野の古環境 (1) - 県道城山北公園線発掘調査に関連して (1) -. 松江城研究, 1 : 49-59.
- 渡辺正巳・瀬戸浩二 (2013) 松江平野の古環境 (2) - 県道城山北公園線 (大手前通り) 発掘調査に関連して (2) -. 松江城研究, 2 : 35-44.
- 渡辺正巳・瀬戸浩二 (2014) 松江平野の古環境 (3) - 県道城山北公園線 (大手前通り) 発掘調査に関連して (3) -. 松江市史研究, 5, 87-93.

(せと こうじ 島根大学汽水域研究センター准教授)

(わたなべ まさみ 島根大学汽水域研究センター・文化財調査コンサルタント株式会社)

(やまだ かずよし ふじのくに地球環境史ミュージアム)

(たかやす かつみ 島根大学 名誉教授)



# 松江の中世石塔訪問記

狭川真一

平成 26 (2014) 年 7 月、松江市からの依頼で、松江市およびその関連地域の中世石塔について現地訪問をさせていただく機会を得た。本稿はその折に実見した主要な石塔に関して、簡単に所見をまとめたものである。各地点で長い時間を割いて調査したものではないので、あくまでも訪問時のメモを頼りに記述した覚書程度であることをお断りしておく。さらに、数値的な情報は獲得していないので記載していない。また本稿は、先行研究のすべてを踏まえて記述したものではないこともご了解願いたい。

なお、本稿中に言う来待石は凝灰質砂岩、白粉石（白来待石）は白色凝灰岩である（松江石造物研究会 2014）。

## ①正林寺石塔群 松江市大庭町（図 1～5）

寺の裏手、山側に北島国造家五輪塔群と称する一群がある。既報告（近藤 1968）にしたがって五輪塔群のうち向かって左から 1 号塔～ 4 号塔と仮称する<sup>(1)</sup>。なお、2 号塔は時期的に異なるものであるほか、各塔の間には五輪塔や宝篋印塔の残欠があるが、今回は大型で白粉石製の 3 基についてのみ記述する。

まず 1 号塔は、火輪以上を失い、地輪も層状に破損していて、正面に「ア」とみられる梵字があるが、90 度転倒して据えられている。したがって現状の地輪幅は正しい数値を示さない。また、梵字の上辺と地輪上辺との間が他の塔にくらべると広く開いている。水輪は、正面に梵字「バン」が大きく記載される。背面の大半は欠損していて内部が良く見えており、水輪上面から穿たれた大きな奉籠孔<sup>ほうろうこう</sup>が確認できる。なお、風化して判断が難しいが、水輪上面の奉籠孔口縁部分は突帯状に立ち上がりを作るようである。なお、この水輪欠損部分は、当墓所入口右手に置かれる残欠が該当するだろう。また、水輪の背面に凭れるように空風輪が



図1 正林寺石塔群



図2 正林寺石塔群1号塔

半裁状態でおかれている。

次に3号は、空風輪欠失。地輪は完全に近い姿で、正面に梵字「ア」を大きく刻む。上面の水垂勾配はやや強めである。水輪は縦に割れているが、正面に大きく梵字「バ」を刻む。火輪は正面に梵字「ラン」を大きく配するが、空点が欠落しているため、当初の高さはもう少し高いと判断できる。軒口は厚めで、軒反は緩やかに反り上がって真反りに近いものである。本塔は、大きさから見て一具のように見えるが、梵字の配置に問題がある。

4号塔は、空風輪に別物を転用している。地輪は正面に梵字「アン」（莊嚴点なし）を配し、上面の水垂勾配はやや強めである。水輪は破損しており、内部に奉籠孔の存在が確認できる。正面に梵字「バン」を大きく配する。火輪は上面を大きく欠損しているようで、梵字の上部に余裕がなさすぎる。その梵字は「ラ」と判断しておく。軒口は厚めで、3号塔に比べると軒反は直線部分が目立つ。この塔の背後にも空風輪の残欠がある。

さて、3基の塔は梵字の配列から当初の組み合わせでないことは明らかであるが、いずれも同じような規模の部材であり、梵字が1面のみに記載されるという特徴も共通するので、3基の中で組合せが入れ替わる程度と考えて差し支えない。残念ながら全貌を把握できないままだが、地輪は「ア」が2点、「アン」が1点、水輪は「バン」が2点、「バ」が1点、火輪は「ラン」「ラ」各1点である。空風輪は未確認。これから推定される梵字の配列は、本塔が五輪塔であることを踏まえると、大日法身真言（ア・バン・ラン・カン・ケン）、五大種子発心門（ア・バ・ラ・カ・キャ）、五大種子涅槃門（アン・バン・ラン・カン・ケン）の3基となる。すべて一面のみの記載であり、各塔それぞれ異なった真言を配することと、全体が揃うことで意味を成した可能性がある。つまり、順番に製作されたとみるより、同時に製作された可能性を視野に入れておきたい。

五輪塔の年代はその形状的な特徴のほか、梵字が面に対して大きい文字であること、大日法身真言塔を含んでいること、水輪に奉籠孔があることなどを踏まえると、概ね13世紀後半～14世紀前半頃のものだと判断しておきたい。北島国造家一族の墓であるか否かは即断できないが、当該地域に根を張った領主階層の一族墓と理解できよう。

なお、1号塔の隣（向かって右側）に六角形の脚付台座に宝珠が乗ったような資料がある。台座なら、コーナー部分に脚部が作られるべきと思うが、この資料は逆にコーナー部分が切り取られている。上部の宝珠は方形の柄を作り出して差し込んでおり、これでほぼ本来の形態を維持していると考えたい。おそらく、六角堂の頂部に乗る石造露盤かと思われる。詳細な調査を待ちたい。



図3 正林寺石塔群3号塔



図4 正林寺石塔群4号塔



図5 六角堂の頂部に乗る石造露盤か

### ②狩山八幡宮伝佐世伊豆守墓 雲南市大東町下佐世 (図6・7)

神社の奥に2基の白粉石製大型五輪塔が祀られる。向かって右側は大きな塔で、各輪に雄大な梵字を配する。それぞれ、五大種子涅槃門・大日報身真言・大日心身真言と金剛界五仏を配置するが、おそらく地輪の梵字の一字を書き間違っているとみられ、五大種子涅槃門は大日法身真言の誤記であろう。火輪は層状の破損が目立つが、軒上辺が真反りに近く、下辺は左右に近いところで反り上がる。

左側の塔はやや小型で空風輪を失い別の水輪が重ねてある。火輪は上半部を欠損しているため高さが低く見える。梵字は右塔と同じく4面に配され、三種悉地真言(大日法身真言・大日報身真言・大日心身真言)と金剛界五仏であろう。水輪には上面から奉籠孔が穿たれ、火輪の裏面を少し彫り込んで蓋としている。火輪の軒反は真反り風で、軒裏面も大きく反り上げている。

年代的には、正林寺塔群に近いが火輪の軒反が直線化するのが目立つためやや下ると考え、14世紀前半頃を考えておきたい。正林寺塔のように同時造営ではないと思われるが、近接した時期に作られたとみられ、当該地域の領主階層の墓塔であろう。



図6 狩山八幡宮伝佐世伊豆守墓 (向かって右側)

### ③伝大野次郎左衛門墓 松江市宍道町西来待 (図8)

県立わかたけ学園東側に所在する3m余りの巨大な来待石製の五輪塔。地輪は立方体に近く、水輪の形状は球形に近い。火輪はやや背が高く、軒口上辺の反りはやや強めの真反りで左右端ではさらに強く立ち上がる。下辺はほぼ直線を呈しているが、左右端に至って少し反りを持たせる。下辺の直線部分が長いものは新しく思えるが、先の狩山八幡宮塔でも類似した状況を呈しているため、これをもって新しい要素とする必要はなさそうである。空風輪は風化が著しいが、残存する部分を見る限り、空輪は宝珠形を呈しているようである。

これらの各輪各面には梵字が彫られており、いずれも面に対して大きなもので、配置される真言は、三種悉地真言と金剛界五仏である。狩山八幡宮塔にもこの真言の配置が見られたが、同種のもの、平安時代後期と鎌倉時代後期に若干例が知られる。平安時代のもは大分県臼杵市中尾の嘉応二年(1170)銘塔だが、鎌倉時代後期では、高野山源空塔が正和四年(1315)の紀年がある。この他、大分県御霊神社塔や熊本県満願寺塔などにも見受けられ、この時期に限られた範囲で受容された真言であることがわかる(狭川2002)。この点を踏まえると、本塔もそのあたりまで遡るかと思われるが、全体の形状はやはり後発的な要素を多く持っていることから、上記の年代よりも少々下らせて捉え、14世紀後半を前後する時期の所産と考えておく。それでも、来待石製の石塔では最古級に属することになるだろう。



図7 狩山八幡宮伝佐世伊豆守墓 (向かって左側)

課題はこのような巨大な塔を建立する目的である。畿内では鎌倉時代中期あたりから、結縁による造塔や道路や橋の供養に建立される石塔に大きなものが見られ、鎌倉時代後期では律宗系の高僧の墓所に用いられることもあるが、それら以外では事例を見出すのは難しい。立地もおそらく当初に近い位置と

思われるので、その点を踏まえて再検討を要するものである。

また、来待石製品に関して戦国期以降、近世にその生産の中心があることが知られており（樋口 2004）、この石材利用の出現期が注意される。本塔と次の岩屋寺の一部の五輪塔は 14 世紀後半頃に想定できるので、ここに来待石製品の製作年代の一点が存在することになる。しかし、これ以降、16 世紀に至るまでにはまだ製品の所在は確認されておらず、大きな課題と言える。

さらに不思議なことは、近世に作られた来待石製品は悉く風化が進行して劣化が著しいものが多いのに対して、それよりさらに 200 年余り古いと考えられるこれらの塔が、多少の劣化はあるものの形状を留めている事実をどう考えればよいのであろうか。

いくつか思いつくが、たとえば 14 世紀後半には今より良質（硬質）の来待石が産出したが、近世の受容拡大で硬質な部分は取り尽したことで、和泉



図8 伝大野次郎左衛門墓塔

砂岩のような軟質な石材の製品が流行し、量産されたことが要因、あるいは根本的に岩脈の異なる地点から採取されたか、転石を加工した可能性も指摘できよう。なお、転石利用はこの地域の古墳時代の石棺材に来待石が利用されている点で、すでに指摘されている（宍道町教委ほか 1995）とのことである。

#### ④岩屋寺石塔群 松江市宍道町上来待（図 9～12）

現本堂左手から山に入っていくと薬師堂に到着する。高さ 10m はあろうかという切通し下半部が大きく抉れていて、そこが岩窟状になり、奥に方形の龕（中央窟）がある。今はその前に薬師堂（梁間 4 間、桁行 2 間）が建っているが、中央窟周辺には梁や柱を立てた形跡があるので、本来はこの彫り込みが龕の本体でそれに覆堂を密着して建てたことがうかがえる。

さて石塔だが、岩窟に向かって左手の各所に残欠が多数確認できる。この石塔群はすでに詳細な報告が行われている（岩屋寺石造物調査団 2008）ので、以下には筆者が注意したことに限定して記述する。

まず岩窟に向かって左側にある小さな龕内（1 号窟）には、戦国期頃の五輪塔や宝篋印塔が安置される。宝篋印塔の基礎には「文禄」の銘が読めるが、来待石製で脆弱であり、下面から風化が進んでいるので、せめて下からの水分上昇を食い止めるべきである。

また、隣接する五輪塔は表面に調整時の痕跡が明瞭に観察できる。空風輪表面、火輪屋根勾配部分や軒口、水輪表面などに細かなノミ状の工具痕が多数観察できる（図 9～11）。他の同型の石塔との比較が必要であるが、このような状態で完成品として認められるのか否かである。一般的に見受ける同時



図9 空風輪のノミ状工具痕  
(岩屋寺石塔群1号窟内五輪塔)



図10 火輪のノミ状工具痕  
(岩屋寺石塔群1号窟内五輪塔)



図11 水輪のノミ状工具痕  
(岩屋寺石塔群1号窟内五輪塔)

期の完成品には、風化を考慮しても表面に調整痕は見いだせない。そうすると、この場所で石塔を加工、調整していたのではないかという推測も出てくる。そういう視点で詳細な調査が必要かと思う。

さて、この窟のある地点を左奥へ進むと大きな切り立った石壁が見える。先の資料が未成品なら、ここが石切り場だった可能性も推定できよう。壁面には人為的に削り込んだとみられる横方向の筋が見えているので、石切り時の痕跡が辛うじて残っている可能性があるだろう。後述する石窟のある地点とこの切り立った石壁の間は、上部から崩落した土砂で埋まったような地形になっており、発掘してその土砂を取り除くと、未成品の残欠が残存しているかも知れない。想像はどんどん膨らんでくる。

さらにその奥に進むと、近年崩落したような箇所があり、中央中ほどに石窟（石龕）風のもの存在した痕跡がある。そこにも石塔が集められており（F群）、その中に小形ながら梵字を大きく刻む来待石製の五輪塔残欠がある。先の報告でF1-3、F2-1、F2-2として紹介されるもので、現在は散在しているものの、空風輪の形はまだ球体を維持しており、表面の梵字は「ウン?」「ケン」を彫る（F2-1）。火輪は軒口がやや外傾するものの上辺は強めの真反り風となり、梵字は「ラ」を浅めの薬研彫りとする（F2-2）。水輪は球体をよく維持しており、梵字は薬研彫で「ビ」が刻まれる（F1-3）。地輪は確認できていないが、これらを一具とすると、大日報身真言（ア・ビ・ラ・ウン・ケン）の塔となる（図12に復原）。この真言を採用するものは少なく、中世後期や近世には見かけない。塔各部の形状に加えて、梵字の種類、梵字の大きさや彫り方を踏まえると、小形ながら14世紀後期前後に考えたい。

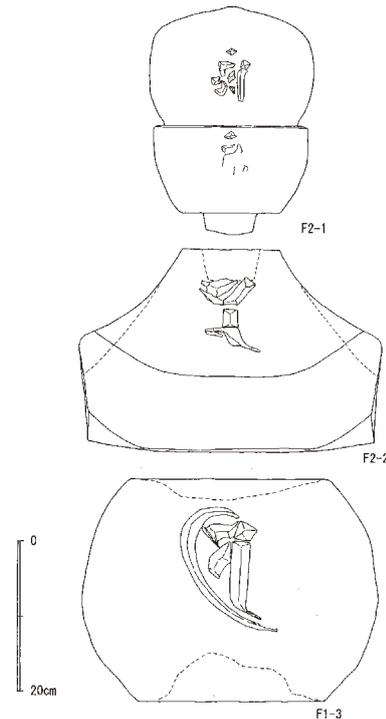


図12 五輪塔組合せ復元図(S=1/10)  
(岩屋寺石塔群F群内五輪塔)

以上、筆者が気になった石塔を概観した。来待石や白粉石を用いた石塔は、鎌倉時代から南北朝時代まで遡ることは先に示したとおりであり、今後の資料探索でより詳細なことが語られるであろう。また、石塔製作地についても検討する余地が残されている。未成品の発見や、状態の良い石塔の表面観察データの蓄積が待たれる。さらに、石材に関する問題は、その産地を同定する根拠と合わせて大きな課題である。

さて、石塔群として把握できる正林寺石塔群と狩山八幡宮石塔群は、いずれも在地武士層の一族墓所を形成していたと思われるもので、正林寺のものは13世紀後半頃まで遡る可能性が高い。全国的にみ

ると武士の墓所に石塔が採用されはじめるのは13世紀後半頃で、神奈川県称名寺の北条氏墓所（五輪塔と宝篋印塔）や栃木県樺崎寺跡の足利氏墓所（五輪塔）、滋賀県京極氏墓所（宝篋印塔）等が初期のものであり、いち早く中央の墓制が導入されていることが分かる。これらの墓所は、しばらくの間継続して石塔が営まれており、近在では鳥取県倉吉市大日寺の一群が、幅広い年代にまたがり継続的に造営されている事例である。

しかし、正林寺石塔群や狩山八幡宮石塔群は、現状でそれほどの継続性は認められないので、単純に同列に扱うのは危険かも知れないが、成立年代を考えるとやはり地域の武士層が造立者と考えられよう。ちなみに短期間の造営で終わっているものに熊本県西安寺五輪塔群（相良氏三代／13世紀中頃～14世紀初頭）、同県満願寺五輪塔群（九州北条氏三代／14世紀前半）などがあり、近在では鳥取県大山町赤坂の大五輪塔に大型塔数基分の残欠があり、鳥取県北栄町上種五輪塔も同大の塔が2基並び、周囲は段状に造成されて、石列が観察されるような環境にある。

銘を持たない石塔の主を特定するのは難しいが、石塔群の盛衰を把握することは、その地域での勢力の有り方を考える上で参考になるはずである。中世史研究と融合すれば、より雄弁に歴史を語ってくれるものと思う。

今回はきわめて雑駁な記述に終わったが、重要な石塔も多く、将来もし機会があれば、実測図作成を含めた詳細な調査を行いたいと願う。

なお、文末になったが、現地調査では岡崎雄二郎氏、西尾克己氏、木下誠氏に大変お世話になった。また、鳥取県の資料は中森祥氏、濱野浩美氏、佐伯純也氏からご教示を得た。感謝申し上げます。

## 注

- (1) 近藤報告と現状では1号塔の地輪の向きが異なっており、再整理された可能性が高い。そのため本稿と所見が異なる部分がある。

## 引用・参考文献

- 岩屋寺石造物調査団 2008 「岩屋寺石造物調査報告」『来待ストーン研究』9 来待ストーンミュージアム  
近藤正 1968 「正林寺の五輪石塔群」『島根県文化財調査報告書』第5集、島根県教育委員会  
宍道町教育委員会、出雲考古学研究会編 1995 『石と人』（宍道町ふるさと文庫8）宍道町教育委員会  
樋口英行 2004 『白粉石・来待石の宝篋印塔、五輪塔』（宍道町ふるさと文庫19）宍道町菟古館  
松江石造物研究会 2014 「龍海山三明院佛谷寺に所在する石造物群について」『伯耆文化研究』第15号、伯耆文化研究会  
狭川真一 2002 「五輪塔の成立とその背景」『元興寺文化財研究所研究報告2001』（財）元興寺文化財研究所

（さがわ しんいち 公益財団法人元興寺文化財研究所研究部長）

# 松江市史編纂日誌

松江市史編纂における主な活動状況【平成 25 年度】（後期：10 月 1 日から）

平成 25 年

期 日	内 容	備 考
10月4日	松江市史編纂委員会	〔議題〕①事業報告について ②松江市史編集状況について ③事業計画について
10月4日	松江市史部会長会議	〔議題〕①執筆終了後の部会運営・経費の支出について ②松江市史講座の調整について など
10月5日	松江城関連調査	松江歴史館所蔵資料（和田委員）
10月5日	石造物調査	中世石造物所在確認（東出雲町）
10月11日	自然環境部会	〔議題〕通史編の原稿の検討 など
10月13日	絵図・地図部会	〔議題〕史料編の全体校正の確認 など
10月19日	松江市史講座	〔第 1 部〕出雲国府の実像（佐藤信委員（原始古代史部会）） 〔第 2 部〕外海漁業と八束郡の漁業組合（伊藤康宏委員（近現代史部会））
10月19日	近現代史部会	〔議題〕史料編・通史編の検討 など
10月19,20日	近世史部会	〔議題〕史料編Ⅲ・Ⅳの検討、通史編の検討 など
10月20日	古代専門部会	〔議題〕通史編の原稿の検討 など
10月28,29日	近現代史料調査	川辺地区文書調査
10月29～31日	松江城下町出土陶磁器編年にかかる指導会	
11月1日	近世・近現代史料調査	島根町誌編纂関係史料調査
11月4日	民俗部会	〔議題〕別編「民俗」に向けての中間発表会 など
11月5,11,12日	近現代史料調査	本庄公民館文書調査
11月6,7日	近世史料調査	島根県立図書館所蔵史料（岸本委員）
11月9,10日	石造物調査	仏谷寺（美保関町）所在石造物実測調査
11月10日	近世史小部会	御用留史料選定
11月11日	民俗（建物）調査	奥原家住宅調査
11月13,14日	近世史料調査	福井県内・京都府内史料（岸本委員）
11月16日	松江市史講座	〔第 1 部〕戦国時代の松江地域（長谷川委員（中世史部会）） 〔第 2 部〕白潟町屋の商人と町人地の変容（大矢委員（絵図・地図部会））
11月24日	考古専門部会	〔議題〕通史編の原稿の検討 など
11月25～29日	三谷権大夫家文書整理	
12月1日	松江市史部会長会議	〔議題〕①『松江市史』本文中の数字表記について ②松江市史出版計画の一部見直しについて など
12月1日	自然環境部会	〔議題〕通史編の原稿の検討 など
12月7日	松江市史講座	〔第 1 部〕出雲地方の地震（西田良平先生） 〔第 2 部〕松江市近郊の民具（浅沼委員（民俗部会））
12月9,10,16,17日	近現代史料調査	本庄公民館文書調査
12月18日	松江城部会 文献・歴史地理・建築グループ会	〔議題〕文献検討会
12月21,22日	中世史部会	〔議題〕史料編Ⅱの校正、通史編の全体構成の検討 など

平成 26 年

期 日	内 容	備 考
1月11日	考古専門部会	〔議題〕通史編の原稿の検討 など
1月13日	古代専門部会	〔議題〕通史編の原稿の検討 など
1月19日	松江市史講座	〔第 1 部〕出雲の人制・部民制（平石委員（原始古代史部会）） 〔第 2 部〕科学が明かす松江平野の歴史（渡邊委員（松江城部会））
1月23,24,30,31日	近現代史料調査	本庄公民館文書調査

期 日	内 容	備 考
1月22日	近世史料調査	御用留からの史料選定(東谷委員)
1月31日	松江城部会城郭史グループ会	西尾部会長と先山委員・松尾委員との協議
2月1日	松江城部会土木史グループ会	[議題] 次回の松江城部会に向けた協議
2月3,4日	松江城関連調査	地盤遺産シンポジウム参加(河原委員)
2月6日	自然環境部会	[議題] 通史編の原稿の検討 など
2月7日	考古専門部会	通史編の原稿読合せ
2月7～9日	松江城出土遺物検討会	
2月8日	松江城部会	[議題] ①各グループ・編纂室の調査状況等の報告 ②別編の執筆項目と執筆スケジュールの再検討 など
2月8日	松江市史講座	[第1部] 古代出雲の交通(勝部委員(原始古代史部会)) [第2部] 松江城下『おぼえ日記』にみる町人の「家」と男・女・子ども (沢山委員(近世史部会))
2月9日	近世史料調査	島根県立図書館所蔵史料(沢山委員)
2月17～19日	近世史料調査	御用留からの史料選定(東谷委員)
2月18日	古代専門部会	通史編の原稿読合せ
2月20日	『松江市史』発行(第5弾)	「史料編11 絵図・地図」
2月20,21日	近現代史料調査	本庄公民館文書調査
2月21,22日	松江城関連調査	静岡県磐田市中世府中調査(西尾委員)
2月27日 ～3月3日	近世史料調査	島根県立図書館所蔵史料ほか(常松委員)
3月8日	松江市史講座	[第1部] 「武者の世」のはじまりと出雲国(西田委員(中世史部会)) [第2部] 近現代の松江市の人口の推移とその特徴(廣嶋清志先生)
3月9日	松江市史部会長会議	[議題] ①松江市の組織機構の変更、市史編纂体制の変更について ②松江市史編纂状況、各部会からの状況報告 ③来年度予算について ④通史編等編集に伴う文章表記、節・項表記等の検討 ⑤松江市史編集委員会の議題、日程調整について など
3月9日	自然環境部会	[議題] 通史編の原稿の検討、史料編の検討 など
3月10日	古代専門部会	通史編の原稿読合せ
3月14,15日	松江城関連調査	中世府中調査〔鳥取県鳥取市・兵庫県豊岡市〕(西尾委員)
3月15～17日	松江城関連調査	武家屋敷及び近代建築物調査〔宮城県奥州市ほか〕(足立委員)
3月19日	松江城部会 文献・歴史地理・建築グループ会	[議題] 文献検討会
3月20日	『松江市歴史叢書7』『松江市史研究5号』発行	
3月20日	『松江市内寺社史料調査目録』発行	
3月21日	松江城調査報告会	
3月21,22日	古代専門部会	通史編執筆作業(佐藤信委員)
3月21,22日	近世史部会	[議題] 史料編Ⅲ・Ⅳの検討、通史編の検討 など
3月21～23日	松江城関連調査	城下町松江の水運・物流に関する調査〔新潟県出雲崎町ほか〕(大矢委員)
3月24,25日	松江城関連調査	松江城関連文献史料調査〔国立公文書・防衛省防衛研究所〕
3月26日	近現代史部会	[議題] 史料編・通史編の検討 など
3月28日	『松江市史』発行(第6弾)	「史料編4 中世Ⅱ」

松江市史編纂における主な活動状況【平成26年度】(前期：9月30日まで)

平成26年

期 日	内 容	備 考
4月1日	市史編纂コラム(ホームページ)掲載 (第32回)	[タイトル] 再考・まぼろしの松江城博覧会
4月18日	松江城伝来資料検討会	

期 日	内 容	備 考
4月19日	松江市史講座	〔第1部〕出雲地域における産物の特徴について(鳥谷委員(近世史部会)) 〔第2部〕近世城下町の変遷と松江城下町(松尾委員(松江城部会))
4月24日	尾道市視察対応	
4月26日	中世史関連調査	和泉府中(西尾委員)
4月26日	近世史小部会	郡村関係史料選定
5月5日	松江城関連調査	亀嵩城(西尾委員・岡崎委員)
5月10日	松江市史講座	〔第1部〕知行国制度と出雲(西田委員(中世史部会)) 〔第2部〕松江城下町の空間設計と武家地・町人地の空間について (安高委員(絵図・地図部会))
5月11,12日	中世史部会	〔議題〕通史編の内容検討 など
5月15日	市史編纂コラム(ホームページ)掲載 (第33回)	〔タイトル〕松江藩御台所を取材した明治の新聞記事
5月16日	松江城下町遺跡検討会	
5月31日,6月1日	近世史部会	〔議題〕史料編Ⅲ・Ⅳの検討、通史編の検討 など
6月1日	松江市史編集委員会	〔議題〕①編纂体制、出版計画 ②平成25年度事業報告、平成26年度事業計画 ③各部会の報告 ④通史編(中世史)についての検討 ⑤松江市史編纂基本計画の実施状況と今後の課題
6月1日	中世史部会	〔議題〕通史編の執筆構成・内容の検討 など
6月1日	近現代史部会	〔議題〕史料編・通史編の検討 など
6月2日	自然環境部会	〔議題〕通史編の原稿調整 など
6月2日	松江城関連調査	松江城伝来資料調査(松江城天守、松江歴史館)
6月10日	市史編纂コラム(ホームページ)掲載 (第34回)	〔タイトル〕国内最古の警察署建築(初代松江警察署)発見のとき
6月16日	松江城関連調査	松江歴史館(和田委員)
6月25日	古代史部会	〔議題〕通史編の編集検討 など
6月23日	近現代史料調査	玉湯町・宍道町
6月21日	松江市史講座	〔第1部〕「模範村」とその時代(竹永委員(近現代史部会)) 〔第2部〕石が語る出雲国(澤田委員(自然環境部会))
6月21,22日	石造物調査	清水寺(安来市)
7月3日	市史編纂コラム(ホームページ)掲載 (第35回)	〔タイトル〕堀尾氏と三つの姓
7月4,5日	中世史関連調査	出雲府中(西尾委員)
7月5日	民俗部会	〔議題〕別編「民俗」の内容検討 など
7月5~7日	近世史料調査	(東谷委員・鳥谷委員・多久田委員)
7月9日	松江市史部会長会議	〔議題〕①各部会からの報告 ②来年度の市史講座 講座の枠組みについて ③松江市史編纂委員会の議題について ④来年度事業の見込みについて ⑤市史編集委員会での提言を受けた史料集発刊について など
7月12,13日	近世史料調査	(東谷委員)
7月14日	松江城部会文献・歴史地理・ 建築グループ会	〔議題〕文献検討会
7月16日	松江城部会城郭史グループ会	〔議題〕別編「松江城」の検討
7月19日	松江市史講座	〔第1部〕朝山日乗(原委員(中世史部会)) 〔第2部〕お墓にみる縄文時代から弥生時代への移行 (山田委員(考古専門部会))
7月20日	考古専門部会	〔議題〕通史編の原稿の検討 など
7月28,29日	近世史料調査	廻船関係:福山市・広島市(大矢委員)
7月29~31日	石造物調査	市内を中心とする中世石造物(狭川氏・西尾委員・岡崎委員)

期 日	内 容	備 考
8月1日	『松江市ふるさと文庫』16発行	「松江城再発見」
8月4日	近現代史料調査	山陰合同銀行史料
8月4日	松江城関連調査	松江城伝来資料調査
8月5日	近現代史料調査	忌部公民館史料
8月16日	松江城部会土木史グループ会	〔議題〕別編「松江城」の検討
8月18～22日	三谷権大夫家文書整理	
8月20～22日	近世史料調査	(東谷委員・常松委員)
8月21日	近世史部会郡村関係小部会	〔議題〕史料編「近世IV」へ掲載する郡村関係史料の選定 (小林委員・東谷委員・常松委員・多久田委員)
8月21日	市史編纂コラム(ホームページ)掲載 (第36回)	〔タイトル〕松江城下での不思議な話
8月21日	史料調査	諸喰神社史料
8月23日	松江市史講座	城下町形成期の景観復元(基調報告、パネルディスカッション(松江城部会))
8月24日	松江城部会	〔議題〕別編「松江城」の検討
8月25日	松江城関連調査	松江城関連瓦調査
9月4,5日	三谷権大夫家文書整理	青木先生による史料管理方法の指導
9月11,12日	近現代史料調査	山陰合同銀行史料
9月19日	市史編纂コラム(ホームページ)掲載 (第37回)	〔タイトル〕 松江藩凶年時にみる藩の通達そして捨子・身元不明者・乞食の実相
9月20日	松江市史講座	〔第1部〕中世出雲における政治拠点の変遷(川岡委員(中世史部会)) 〔第2部〕9世紀の災害と対外意識と出雲・山陰(大日方委員(古代専門部会))
9月21日	中世史部会	〔議題〕通史編の内容調整 など
9月24,25日	近現代史料調査	朝酌公民館史料
9月27,28日	古代専門部会	〔議題〕通史編の編集検討 など





松江市歴史叢書 8  
松江市史研究 6号

2015年（平成27）3月31日発行

編集 松江市歴史まちづくり部  
まちづくり文化財課史料編纂室  
発行 松江市  
〒690-8540 島根県松江市末次町86番地

印刷 島根コンピューター印刷株式会社  
〒690-0044 島根県松江市浜乃木2丁目10番52号

# Historical Library of Matsue City 8

March 2015

## MATSUE SHISHI KENKYU No.6 Research of Matsue City's History

The residents and the spatial composition of merchant residential area of Matsue - Kitahorimachi-Shinbashi in the Middle of 19th century-the study of old map - ..... OYA Yukio・WATANABE Rie	(1)
Excavational investigation in historic sites Matsue Castle (1) - outside kuruwa(ninomaru shitanodan) - .....	OKAZAKI Yuziro (13)
On the extensions, maintenance and construction of the Osaki suburban residence(Osaki-shimoyashiki) ..... WADA Yoshihiro・ATAKA Naoki	(37)
Roof-tiles of Matsue Castle - active craftsman and castle construction in Sanin Region - .....	NORIOKA Minoru (57)
About Izumo Fuchu and related remains.....	NISHIO Katsumi・HIROE Koji (81)
The history of plain development and paleoenvironmental change in the North part of Matsue Plain, Southwest Japan ..... SETO Koji・WATANABE Masami YAMADA Kazuyoshi・TAKAYASU Katsumi	(99)
A tour report on the Medieval Period stone stupas in Matsue area. ....	SAGAWA shinichi (117)
Matsue City Historiographic Journal .....	Historical Sources Compilation Room (123)

松江市  
Matsue City

Suetsugu, Matsue-city, Shimane-pre, Japan

ISBN978-4-904911-27-3  
C3321 ¥1500E

松江市教育委員会  
定価(本体1500円【税別】)



9784904911273



1923321015005